山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第16集

一の沢西遺跡
村上遺跡
後呂遺跡
浜井場遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1986.3

山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

4号住居址出土土器

一の沢西遺跡
村　上　遺　跡
後　呂　遺　跡
浜井場遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

１９８６．３

山　梨　県　教　育　委　員　会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

序

本報告書は、1983・84両年度に実施した笛吹川農業水利事業国営幹線管水路敷設工事に伴う事前発掘調査の結果をまとめたもので、対象遺跡は、一の沢西遺跡（東八代郡境川村小黒坂一の沢）以下4遺跡であります。

これらの遺跡の所在地は、境川村・中道町・豊富村の3町村で、いずれも甲府盆地の南東辺、曽根丘陵上に位置しております。曽根丘陵といえば、本県古墳文化の発祥の地で、古墳の密集地帯として知られておりますが、この地における人類の足跡は遠く先土器時代に始まり、縄文時代にはかなり濃厚に遺跡が集中する地域となっております。

現に本報告書の主要部分をなす一の沢西遺跡は、一部に弥生土器や古墳関係も含まれますが、大部分は縄文時代前期から後期に至る遺構であり、11軒の住居址と113基に及ぶ土拡とが確認され、また多数の土器が出土いたしました。その中には、県内では過去にほとんど調査例を見ない中期の井戸尻Ⅲ式期の環状あるいは馬蹄形集落の一部と推定される住居址群や、後期の類例の少ない敷石住居址などが検出され、また井戸尻Ⅲ式土器が多量に出土するなど、顕著な成果を挙げることができました。他の3遺跡についても、それぞれ成果があり、従前の調査結果を補完するのに役立ちました。本報告書が、多くの方々に研究の資料としてご活用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜わった関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1986年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所　長　磯　貝　正　義

一の沢西遺跡

例　　言

1. 本報告書は、昭和58年度の笛吹川農業水利事業国営幹線管水路敷設工事に伴って発掘調査された東八代郡境川村一の沢西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、農林水産省関東農政局の委託と文化庁の国庫補助金を受けて、山梨県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターで行い、長沢宏昌、中山誠二が担当した。
4. 本報告書は、第Ⅱ章、第Ⅲ章第2節・第3節を中山が執筆、それ以外は長沢が執筆し、編集は長沢が行った。
5. 写真撮影は、遺構を長沢、中山、塚原明生（日本写真家協会々員）が行い、遺物は塚原が行った。また、展開写真は小川忠博氏によるものである。
6. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 出土品整理参加者

   塚原明生、宝福寿美江、遠藤映子、石田文次郎、山本治代、渡辺薫、羽中田恵子、丸山孝子、坂本穂波、広瀬千江美、高野俊彦
8. 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表する次第である。

橋本澄朗・上野修一（栃木県立博物館）

武藤雄六・小林公明（井戸尻考古館）

笠井　学

奈良泰史（都留市教育委員会）

雨宮正樹（高根町教育委員会）

櫛原功一（大泉村教育委員会）

宮沢公雄

境川村教育委員会　（順不同、敬称略）

目　　次

第 Ⅰ 章　調 査 状 況 …… 1
第 1 節　調査に至る経過 …… 1
第 2 節　調査組織 …… 1
第 Ⅱ 章　遺 跡 概 況 …… 2
第 1 節　位　　置 …… 2
第 2 節　地理的・歴史的環境 …… 2
第 Ⅲ 章　遺 構 と 遺 物 …… 5
第 1 節　縄文時代 …… 6
1.　住居址と出土土器 …… 6
2.　土坑と出土土器 …… 40
3.　単独埋甕 …… 86
4.　土製品 …… 86
5.　石　器 …… 91
6.　グリッド出土土器 …… 104
第 2 節　弥生時代 …… 109
第 3 節　古墳時代 …… 109
第 Ⅳ 章　ま　と　め …… 111
第 1 節　集落について …… 111
第 2 節　井戸尻Ⅲ式土器について …… 113
第 3 節　石錘について …… 119
参 考 文 献 …… 124

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図
第 2 図　遺跡全体図
第 3 図　グリット概略図
第 4 図　1号住居址
第 5 図　1号住居址炉
第 6 図　1号住居址出土土器　その1
第 7 図　1号住居址出土土器　その2
第 8 図　2号住居址
第 9 図　2号住居址炉
第 10 図　2号住居址遺物出土状況
第 11 図　2号住居址出土土器
第 12 図　3号住居址
第 13 図　3号住居址炉
第 14 図　3号住居址出土土器
第 15 図　4号住居址
第 16 図　4号住居址出土土器　その1
第 17 図　4号住居址出土土器　その2
第 18 図　4号住居址出土土器　その3
第 19 図　4号住居址出土土器　その4
第 20 図　4号住居址出土土器　その5
第 21 図　4号住居址出土土器　その6
第 22 図　4号住居址出土土器　その7
第 23 図　5号住居址
第 24 図　5号住居址炉
第 25 図　5号住居址出土土器
第 26 図　6号住居址
第 27 図　6号住居址出土土器
第 28 図　7号住居址
第 29 図　7号住居址炉
第 30 図　7号住居址出土土器
第 31 図　8号住居址
第 32 図　8号住居址炉
第 33 図　8号住居址出土土器
第 34 図　9号住居址
第 35 図　9号住居址炉
第 36 図　9号住居址出土土器
第 37 図　10号・12号住居址
第 38 図　10号住居址炉
第 39 図　12号住居址炉
第 40 図　10号・12号住居址出土土器 その1
第 41 図　10号・12号住居址出土土器 その2
第 42 図　11号住居址
第 43 図　11号住居址炉
第 44 図　11号住居址出土土器　その1
第 45 図　11号住居址出土土器　その2
第 46 図　56号土坑
第 47 図　56号土坑出土土器　その1
第 48 図　56号土坑出土土器　その2
第 49 図　46号土坑
第 50 図　93号・94号土坑
第 51 図　46号・93号土坑出土土器
第 52 図　40号土坑
第 53 図　76号土坑
第 54 図　42号土坑
第 55 図　30号・35号～38号・41号・42号・46号・65号土坑位置関係図
第 56 図　37号・65号土坑
第 57 図　48号土坑
第 58 図　40号・42号・65号・76号土坑出土土器
第 59 図　37号・48号土坑出土土器
第 60 図　77号土坑
第 61 図　77号土坑出土土器
第 62 図　1号～5号・12号土坑
第 63 図　6号・7号・20号土坑
第 64 図　8号土坑

第 65 図　9 号・10号土坑
第 66 図　11号土坑
第 67 図　13号・14号土坑
第 68 図　21号土坑
第 69 図　22号土坑
第 70 図　25号～28号土坑
第 71 図　29号土坑
第 72 図　31号・43号・44号土坑
第 73 図　32号土坑
第 74 図　33号・99号・ 102 号土坑
第 75 図　34号・55号・83号・84号土坑
第 76 図　39号・45号・86号～88号・91号土坑
第 77 図　47号・48号土坑
第 78 図　49号土坑
第 79 図　50号～54号土坑
第 80 図　57号～59号土坑
第 81 図　61号・62号土坑
第 82 図　63号・64号土坑
第 83 図　66号土坑
第 84 図　67号・80号土坑
第 85 図　68号～70号土坑
第 86 図　72号・73号・78号土坑
第 87 図　74号・81号土坑
第 88 図　75号土坑
第 89 図　79号土坑
第 90 図　82号土坑
第 91 図　85号・56号土坑
第 92 図　90号土坑
第 93 図　95号・96号土坑
第 94 図　97号土坑
第 95 図　98号土坑
第 96 図　100 号・ 101 号土坑
第 97 図　103 号～ 105 号土坑
第 98 図　106 号～ 108 号土坑
第 99 図　1 号集石・ 2 号集石・ 5 号集石・76号・89号土坑
第 100 図　3 号集石土坑
第 101 図　4 号集石土坑
第 102 図　その他の土坑出土土器　その 1
第 103 図　その他の土坑出土土器　その 2
第 104 図　その他の土坑出土土器　その 3
第 105 図　その他の土坑出土土器　その 4
第 106 図　その他の土坑出土土器　その 5
第 107 図　その他の土坑出土土器　その 6
第 108 図　単独埋甕
第 109 図　単独埋甕土器
第 110 図　土製品　その 1
第 111 図　土製品　その 2
第 112 図　打製石斧　その 1
第 113 図　打製石斧　その 2
第 114 図　打製石斧　その 3
第 115 図　打製石斧　その 4
第 116 図　磨製石斧
第 117 図　磨石・凹石・敲石　その 1
第 118 図　磨石・凹石・敲石　その 2
第 119 図　磨石・凹石・敲石　その 3
第 120 図　石皿・多孔石
第 121 図　石鏃・石錐・石匙
第 122 図　石匙
第 123 図　石錘・浮子
第 124 図　グリッド出土土器
第 125 図　繊維土器
第 126 図　弥生土器
第 127 図　古墳
第 128 図　古墳出土須恵器
第 129 図　各時期における遺構位置図
第 130 図　一の沢西遺跡周辺遺物分布状況
第 131 図　形態分類模式図
第 132 図　井戸尻Ⅲ式土器細分試案図
第 133 図　山梨県内各遺跡出土石錘
第 134 図　石錘出土遺跡分布図
第 135 図　石錘測定位置図

図版目次

巻頭図版　4号住居址出土土器

図版1　遺跡全景、作業風景

図版2　1号住居址、同炉

図版3　2号住居址

図版4　2号住居址炉、3号住居址

図版5　3号住居址打製石斧出土状態、4号住居址遺物出土状態

図版6　4号住居址遺物出土状態、5号住居址

図版7　5号住居址立石、5号住居址遺物出土状態

図版8　6号住居址、7号住居址・77号土坑

図版9　7号住居址炉、8号住居址

図版10　9号住居址、同炉

図版11　10号・12号住居址、11号住居址

図版12　11号住居址遺物出土状態、56号土坑遺物出土状態

図版13　56号土坑遺物出土状態、同上（下層）

図版14　42号土坑、藤内・井戸尻期土坑集中区（37号・65号・42号土坑他）

図版15　48号土坑遺物出土状態、76号土坑遺物出土状態

図版16　76号土坑遺物出土状態（下層）、古墳

図版17　1号住居址出土土器、4号住居址出土土器

図版18　4号住居址出土土器、同上

図版19　4号住居址出土土器、同上

図版20　4号住居址出土土器、同上

図版21　4号住居址出土土器　同上

図版22　4号住居址出土土器、5号住居址出土土器

図版23　5号住居址出土土器、6号住居址出土土器

図版24　7号住居址炉体土器、9号住居址炉体土器

図版25　11号住居址出土土器、同上

図版26　11号住居址出土土器、40号土坑出土土器

図版27　76号土坑出土土器、42号土坑出土土器

図版28　93号土坑出土土器、48号土坑出土土器

図版29　56号土坑出土土器、同上

図版30　56号土坑出土土器、同上

図版31　37号土坑出土土器、同上

図版32　65号土坑出土土器（上面）、同上（側面）

図版33　77号土坑出土土器、単独埋甕
図版34　土偶（４号住居址、41号土坑、５号住居址）、土製品（ミニチュア、土器片錘他）
図版35　土製円板、磨製石斧
図版36　打製石斧、同上
図版37　磨石・凹石、同上
図版38　石匙、石錘・浮子、石鏃・石錐・石匙
図版39　石皿・多孔石（３号住居址、38号土坑、40号土坑、７号住居址）
図版40　展開写真１（40号土坑、.11号住居址）
図版41　展開写真２（42号土坑、４号住居址）
図版42　展開写真３（４号住居址）
図版43　展開写真４（56号土坑）
図版44　展開写真５（56号土坑、37号土坑）

第Ⅰ章　調査状況

第１節　調査に至る経過

昭和58年２月　　昭和57年度調査分（北一の沢遺跡）からの続き部分の分布調査を行い、本調査部分を確認した。

昭和58年９月12日　農林水産省、県文化課、県埋蔵文化財センター、境川村教育委員会の間で、発掘調査の打ち合わせを行う。

昭和58年９月28日　文化庁に発掘通知を提出する。

昭和58年10月３日　発掘調査を開始する。

昭和58年12月20日　発掘調査を終了する。

なお、調査終了後、石和警察署へ遺物発見通知を提出する。

第２節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　長沢宏昌（県文化財主事）

中山誠二（　　〃　　）

調　査　員　塚原明生（日本写真家協会々員）

日向千恵

新津重子

補助調査員　塚原佳津子

作　業　員　石田文次郎、雨宮しげ子、滝沢一繁、橘田マチ子、相川幸江、角田美代子、橘田かみ江、田中富江、角田あやの、小田切絹子、小林久代、渡辺鈴子、宇佐美清子、竜沢とし江、宮川かな子、渡辺礼子、斉藤多喜子、斉藤つね子、初鹿博、羽中田恵子、竜沢房子、石原益子、竜沢縫子、初鹿花子、飯田美代子、宮川誠子、丸山孝子、宇佐美けい、坂本穂波、広瀬千江美、江川勝子、宮川好子、宮川とみの、高野俊彦、石川龍子、遠藤映子

第II章　遺跡概況

第1節　位　　置

山梨県東八代郡境川村小黒坂字一の沢に所在する。

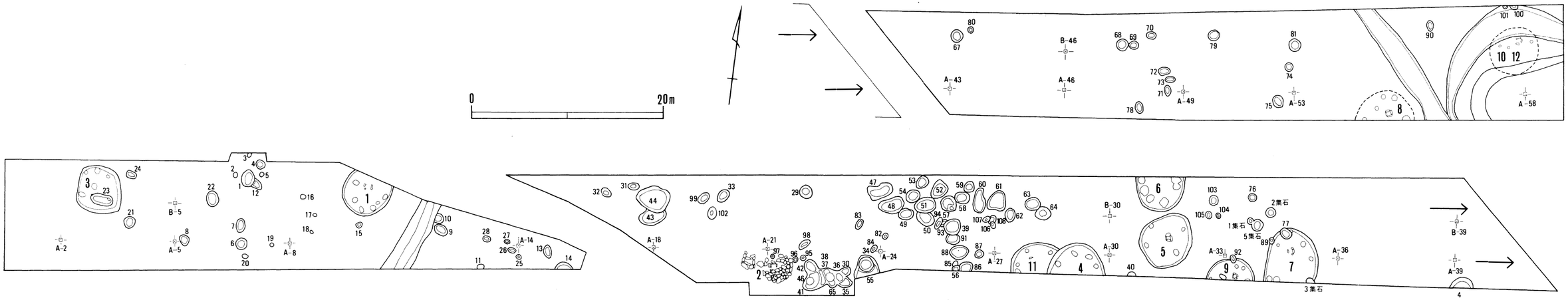
第2節　地理的・歴史的環境

本遺跡は、御坂山系に含まれる名所山、春日山の山裾と曽根丘陵との接点に位置し、標高は410ｍ～430ｍを測る。遺跡は、山裾尾根部より北西方向へ向かって下る緩斜面に位置し、尾根の東方には狐川が北流する。

本遺跡周辺地域では、北一の沢遺跡、立石北遺跡、立石南遺跡などの縄文時代の遺跡が多く知られている他、狐川流域に沿って展開する後期群集墳が存在する。『境川村誌』によれば、同村内には前期、後期を含めて57基の古墳が確認されているが、その内の約3割の17基が同河川沿いに分布する。

本遺跡及び北一の沢遺跡の調査では、過去に墳丘を削平された古墳が新たに発見されていることから、付近にはさらに多くの古墳が存在したものと推定される。群集墳出現の背景には、鉄器の普及や灌漑技術の発達等に支えられた生産力の向上と中・小首長層の拡大があったと考えられる。北一の沢遺跡及び今回の調査では該期の住居址は確認されなかったが、周辺地域に古墳築造を可能とした集落が広がっているものと推測される。

第1図　遺跡位置図



第２図　遺跡全体図

第Ⅲ章　遺構と遺物

前年度発掘調査部分（北一の沢遺跡）では、井戸尻（1軒）曽利Ⅰ（3）曽利Ⅱ（2）曽利Ⅲ以降（3）不明（1）の住居址と、後期古墳4基が調査された。また、58年2月段階の本遺跡での本調査に先立つ分布調査でも、縄文時代中期、とくに井戸尻式期、曽利式期の土器片が濃密に分布しており、北一の沢遺跡と同様、縄文中期の集落が予想された。

工事は、北西方向に張り出した尾根を横切るようなかたちで行われ、尾根の頂きから西側の緩やかな傾斜面が調査の対象域となった。尾根の頂きから谷部までは約250ｍを測る。この部分は、調査幅約10ｍで全面調査、谷部はトレンチ調査とした。

表土下は、調査区両端は直ぐに黄褐色土層となり、中央部には浅い谷が形成され、その部分に黒色土が堆積していた。遺構は両端では容易に確認されたが、中央部ではこの黒色土中から掘り込まれていたため、一部の遺構については床面ちかくになって確認されることになった。

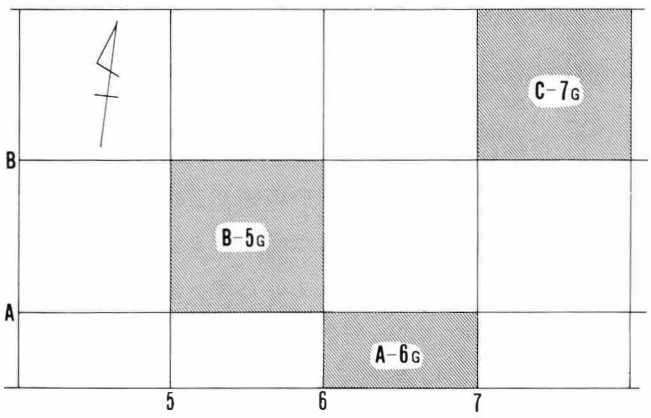
調査は、10ｍの調査幅を南北方向へ、南から4ｍごとにＡ（2ｍ）、Ｂ（4ｍ）、Ｃ（4ｍ）区と定め、さらに西から東へ4ｍごとに区切り、グリッドを設定し、全面調査を行った。

調査の結果、縄文時代前期の住居址1軒、中期の住居址10軒、後期の住居址1軒と113基の土坑（前期～後期）、古墳1基が確認された。また、弥生土器もわずか1片ながら出土している。

縄文時代中期では、井戸尻Ⅲ式期の住居址が5軒存在し、それが東西に分かれ、その間に該期の土坑群が存在する。1号住居址と4・5・6・9号住居址との間は70ｍ、この間に土坑群（37・46・48・56号土坑からは完形の井戸尻Ⅲ式土器出土）が確認され、過去、県内ではほとんど調査例のない該期の環状あるいは馬蹄形集落と考えられる。また、出土した土器は完形、半完形のものも多く、資料的にもそれまでの空白を埋めるに充分と言える。

後期の住居址は、類例の少ない敷石住居址であり、入口部と、居住部とが間仕切りで区画されたものであった。

古墳は、北一の沢遺跡の調査において4基が確認され、付近にも後期古墳が存在することから、その存在が予想された。調査の結果1基だけが確認されたが、内部主体もすでに破壊されており、周溝から、須恵器小片が3片出土したにすぎない。



第3図　グリッド概略図

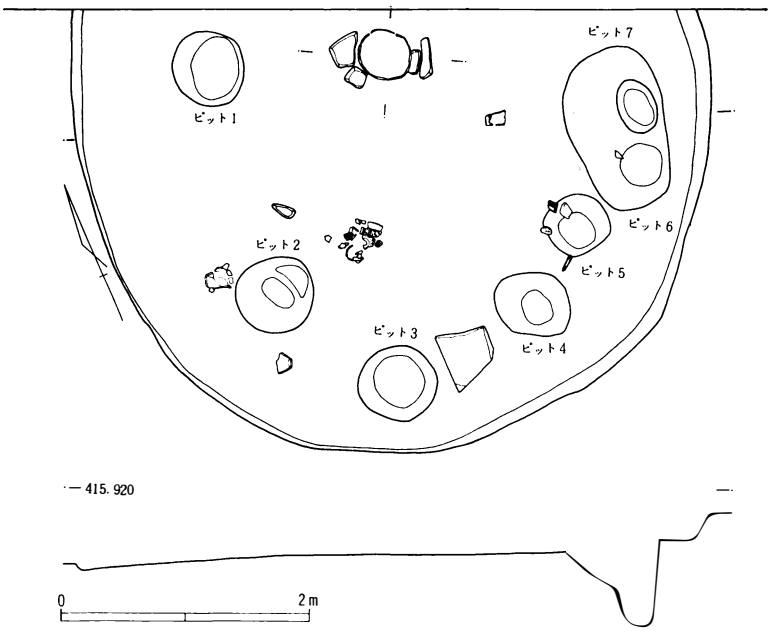
第1節　縄文時代

1.　住居址と出土土器

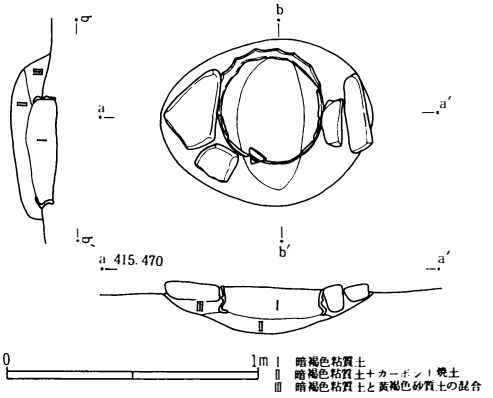
1.　1号住居址

B－9・10、C－9・10グリッド。農道によって北半は破壊されている。楕円形を呈する住居址で、長辺推定5.7 m程度、短辺5.1 mを測る。掘り込みは浅く、かつ傾斜面に位置するため東壁は20cmを測るが、西壁は5cm程度の残存であった。

住居の主軸は径の長軸と同一と思われ、ほぼ南北を向く。炉の真南には40cm程の台形状を呈する平石が置かれており、入口部と思われる。住居内には、ピットが7基確認されたが、このうち、1（深さ70cm）、2（同80cm）、6（同40cm）、7（同60cm）が柱穴と思われる。ただ1・6・7は、そのまわりに大きな掘り込みがみられ、あるいは、造り変えによるものであるかもしれない。また、3（深さ40cm）、4（同30cm）のピットは平石の両側にみられるもので、何らかの施設のためのピットであった可能性もある。なお、ピット5は深さ20cmと浅い。床は炉付近以外軟弱である。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、焼土・カーボン粒子を含んでいた。



第4図　1号住居址



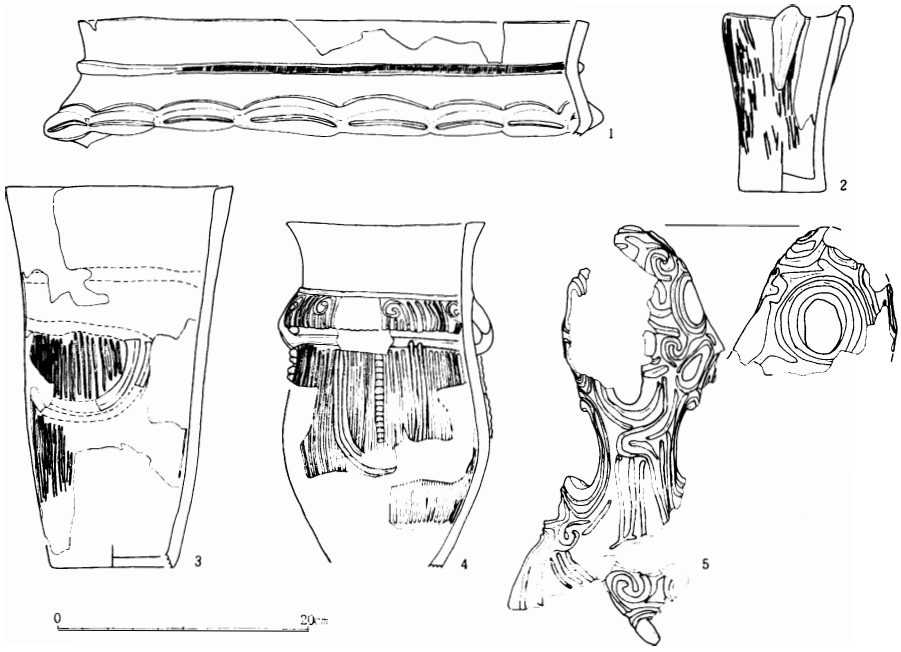
第5図　1号住居址炉

炉は、口径約40cmの土器口縁部を用いた石囲埋甕炉である。80cm×70cmの楕円形の掘り方をもち、深さ20cmを測る。石囲いには4個の礫を用いているが、2個づつほぼ東西に配したもので、南北方向には石は置かれなかったようである。内部には、焼土層は形成されておらず、焼土、カーボン粒子が混ざる程度であった。

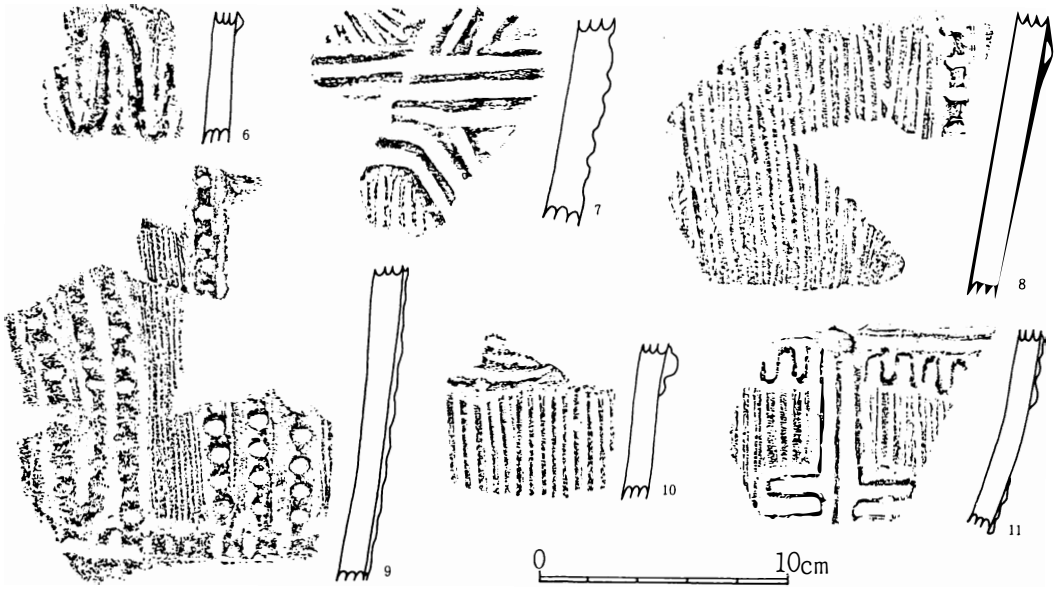
遺物は、土器の他、石器数点が出土しているが、土器以外の遺物については、すべての遺構についてまとめて後述することとする。

土器

1.　炉体土器である。浅鉢と思われる。口径40.7 cm、現存高9.1 cmを測る。肩部の屈曲部以



第６図　１号住居址出土土器　その１



第７図　１号住居址出土土器　その２

下を欠損している。施文は丁寧に行われ、磨きも良好である。褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。　2.　床面直上出土。深鉢。口径 9.7 ㎝、器高15㎝、底径 7.6 ㎝を測る。赤褐色を呈するが、内面は黒変している。胎土には雲母が目立ち、焼成は良好である。　3.　床面直上出土。深鉢。口径18㎝、器高 30.2 ㎝、底径 9.6 ㎝を測る。外面には剝離が激しい。赤褐色を呈し、砂粒を多く含む。焼成は良好である。　4.　覆土出土。深鉢。底部欠損。口径 15.8

cm、現存高 27.2 cm。肩部の傘状隆帯は 2 ヶ所が把手状をなす。外面赤褐色、内面黒色を呈する。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。　5. 覆土出土。深鉢把手。現存高 33.4 cm。渦巻文は、沈線施文後、浮き上がった隆帯部分をさらに丸く仕上げる、半肉彫施文によるものである。褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好である。　6 ～11. いずれも沈線を地文とし、隆帯、隆線を貼付したもので、覆土から出土している。8・9は同一個体と思われる。胎土には砂粒が多く、雲母が目立つ。いずれも焼成は良好である。

2.　2号住居址

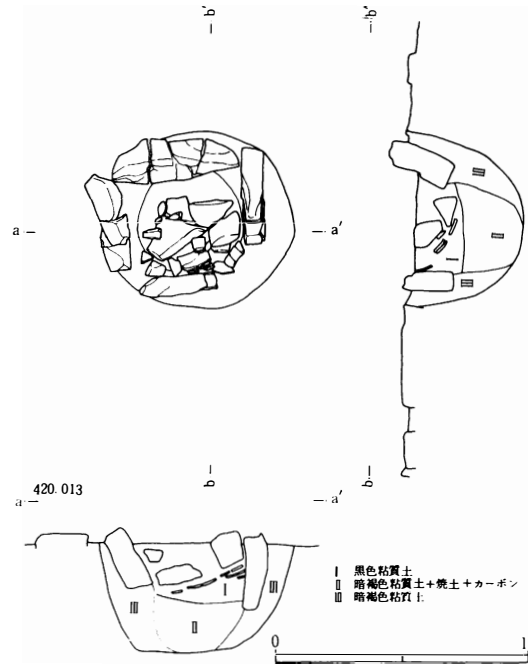
A －20・21、B －20・21グリッド。本住居址は、極めて浅い部分に構築されており、表土下30cmで床面にあたるため、北側が耕作によってすでに破壊されていた。六角形を呈する居住部と、方形の入口部をもつ柄鏡形敷石住居址である。主軸は北西－南東で入口部は北西を向く。居住部は、ほぼ中央に石囲炉があり、六角形の一辺 1.8 m 程度と推定される。また入口部との境界には、幅50cmの板石を立てている。入口部は 1.8 m × 1.4 m の方形を呈するが、両長辺には石を敷き、長辺を結ぶ部分には、板石をハの字状に置いている。ハの字内部には石が敷かれていなかったと思われる。敷石には石英閃緑岩の板石を用い、最も大きいもので90cm × 50cmを測る。

第 8 図　2 号住居址

敷石縁辺や内部には小礫を用い辺が直線をなすように、また敷石間の充填にあてている。居住部のところどころに敷石のみられない空白部があるが、小ピットなどは存在せず、これも本来は敷石があったと思われる。掘り込みによる壁はみられず、平地住居と考えられる。

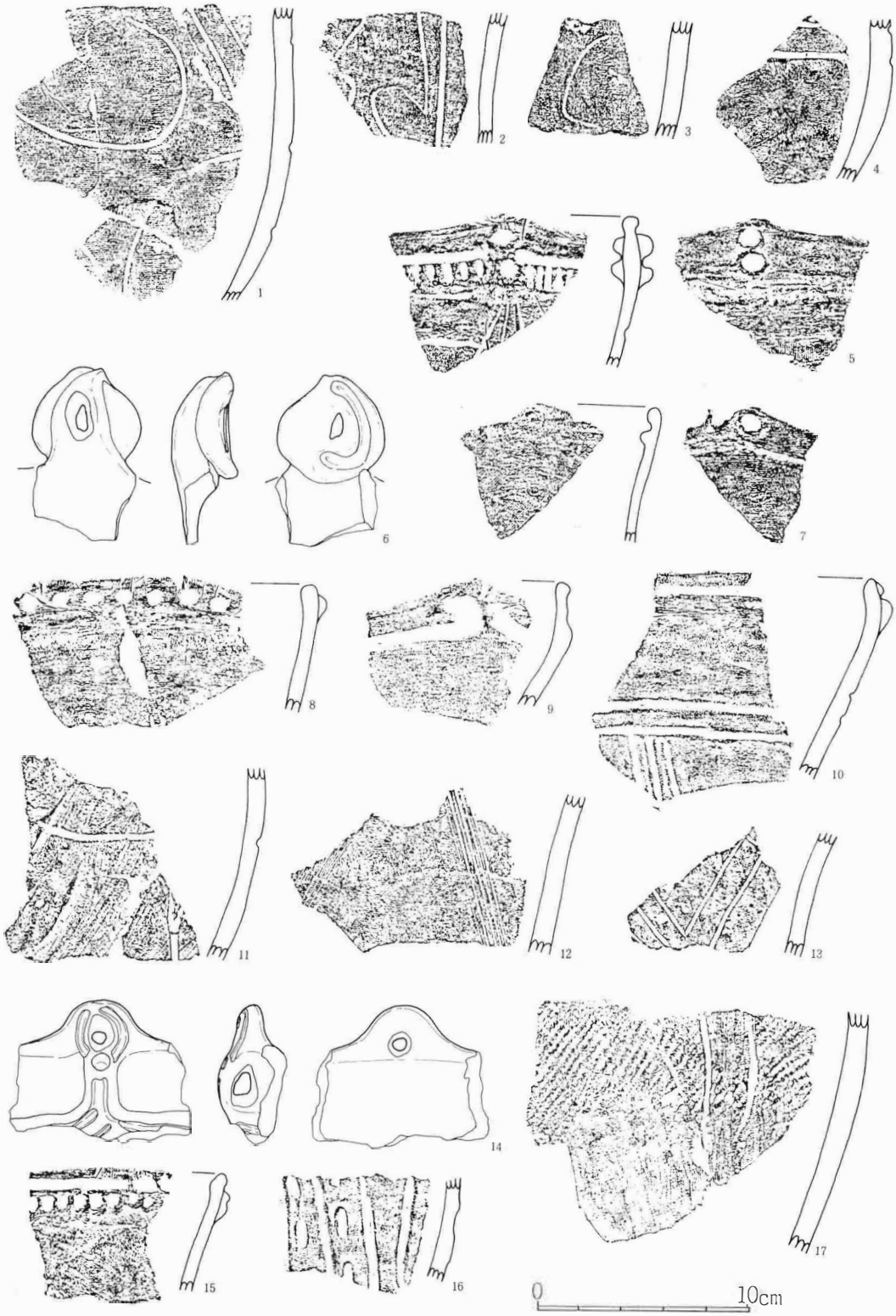
居住部で柱穴の確認をすべく敷石を取りはずした後、縁辺部を含めて精査したが柱穴、ピット等は全く確認されなかった。また、入口部に埋甕も存在しなかった。

炉は、50㎝程度の平石4枚を組み合わせた石囲炉で、火熱によるものか、激しいヒビ割れ、剥離などが認められる。掘り方は径75㎝の円形で深さ約45㎝を測る。内部には、土器片が存在し、一部の内面部分に剥離がみられ



第9図　2号住居址炉

第10図　2号住居址遺物出土状況



第11図　2号住居址出土土器

ることから土器敷き石囲炉であったと考えられる。しかし、石、土器などに剝離が激しいわりには、焼土層が形成されておらず、焼土粒子、カーボンが暗褐色土に混ざる程度であった。

遺物は、土器小破片を中心に総数180点ほどと少ない。第10図に示したごとく居住部を中心に出土している。このうち、敷石面直上で確認されたものも認められるが、敷石面上10㎝のものがほとんどである。復元できるものはなく炉内の土器片も接合はしたものの、口縁、底部は存在しなかった。

土器

1～4. 炉内出土。同一個体である。褐色を呈し、長石・石英など砂粒を多く含む。焼成は良好である。外面は磨きが丁寧に行われているが、内面は前述したように一部剝離している。以下の土器については、敷石面からの浮き具合、特徴等を記すことにする。いずれも焼成は良好で胎土に砂粒が目立つ。 5. 床面直上出土。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成も良好である。 6. 敷石面より4㎝浮いて出土。本資料は胎土が極めて精選されている。7. 敷石の隙間に落ち込む状態で出土しており、敷石上面よりも下位である。 8. ほぼ敷石上面から出土。 9. 4㎝浮いて出土。 10. 3㎝浮いて出土。 11. 敷石外から出土。敷石上面より10㎝浮いた状態である。 12. 2㎝浮いて出土。 13. 2㎝浮いて出土。 15～17. 出土位置不明。

3. 3号住居址

C－2・3グリッド。比較的傾斜のきつい調査区西端で、確認、調査された。不正円形（台形にちかい）を呈する住居址で、南側には23号土坑が掘り込まれている。主軸はほぼ南北である。南北方向4.7 m、東西方向の短辺3.2 m、長辺4.7 mを測る。本住居址の掘り込みは深く、確認面からの壁高は最も高い東壁で約60㎝、最も低い西壁で20㎝を測る。床面は軟弱であった。覆土は大きく上下二層に分けられるが、主体は暗褐色粘質土で、黄褐色砂質土ブロックが下層には多い。また、焼土、カーボン粒子は極くわずかであった。柱穴は4本で50㎝～70㎝の深さがある。他に、住居北側中央に径60㎝程度の皿状のピットと、南東コーナーに径1m程度の皿状のピットが認められた。

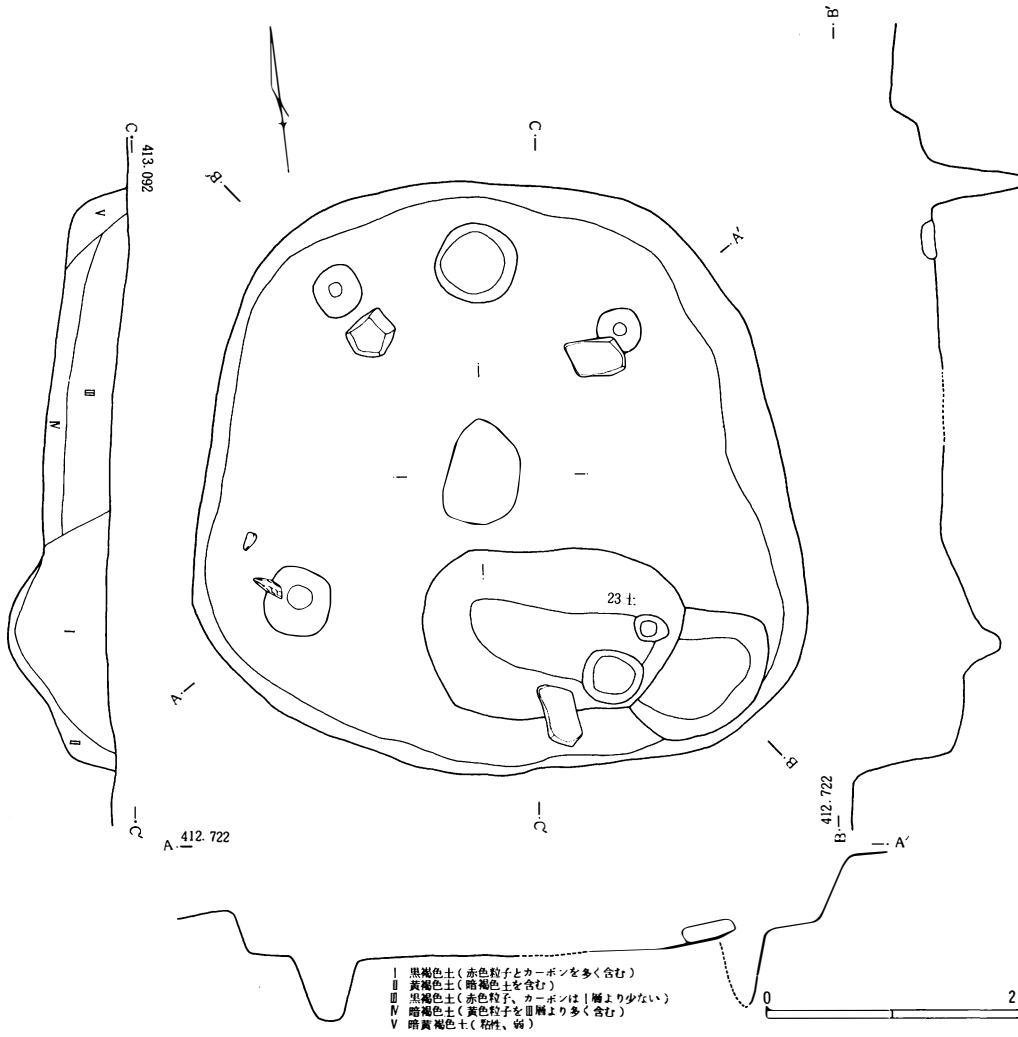
住居中央に地床炉が存在する。70㎝×60㎝の楕円形に20㎝程度掘り凹めたもので、焼土の推積は極くわずかであった。

遺物は床面からは23号土坑に落ちこむような状況で石皿が、また、北東の柱穴脇に石皿が、南西の柱穴に接して超大型の打製石斧が出土しただけで、後述する土器はすべて覆土から出土したものであるが、中期の土器はほとんど含まれておらず、板状石皿等の出土を考慮すれば、前期末（諸磯b式～c式期）の遺構としてよいであろう。なお、大型の打製石斧の基部は北西の柱穴内より出土し、接合している。

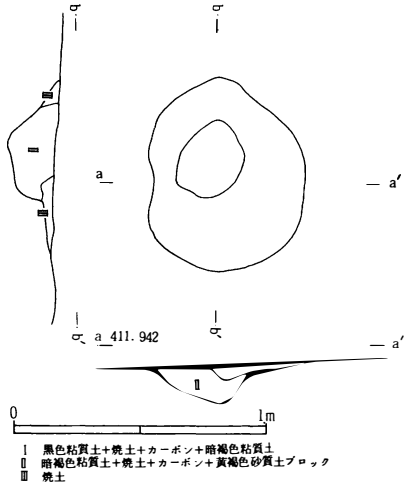
土器

土器は少量の出土であるが、前述の判断から前期末のものだけを示すこととし、中期は割愛した。

1・3～7. 縄文地文で、竹管による沈線文を施したものである。いずれも砂粒を含んでお



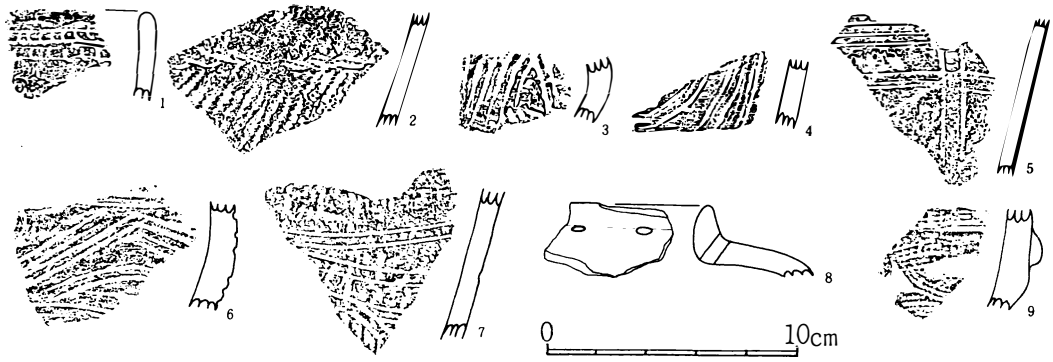
第12図　3号住居址



第13図　3号住居址炉

り、焼成は良好である。　2.　結節縄文を施したもので、砂粒が多い。　8.　有孔土器。胎土は極めて精選されているが、赤色顔料は認められない。焼成は良好である。

9.　竹管の背面利用による連続押し引き文を施したものある。砂粒が多く、焼成は良好である。



第14図　3号住居址出土土器

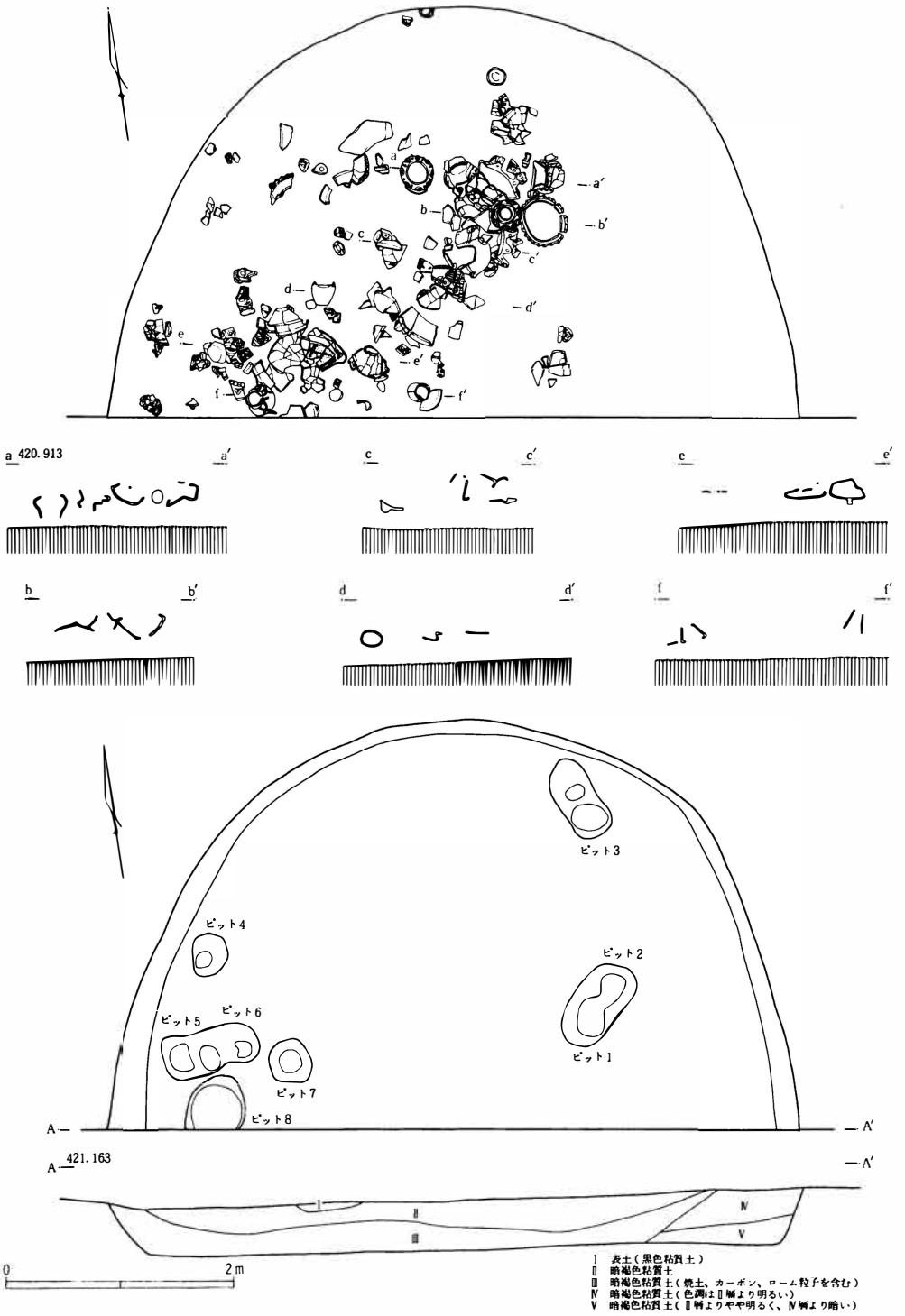
4.　4号住居址

A－28・29、B－28・29グリッド。調査区の制約から、北側半分だけの調査であった。本住居址の覆土からは、ほぼ同一レベルからおびただしい数の土器が出土している。円ないし楕円形を呈する住居址で、確認部分の最大幅6.1 mを測る。本住居址も比較的深く掘り込まれており、壁高は、東側50㎝、北側30㎝、西側50㎝を測る。床は極めて軟弱であり、中央部に一部焼土、カーボン粒子が飛散し、踏み固められた部分が確認されたにすぎない。なお、炉はこのちかくと思われるが、調査部分には存在しなかった。ピットは8基が確認されたが、西側に集中してみられる5基のうち何基かは、11号住居址に伴うものと考えられる。本住居址の柱穴は、壁との位置関係、深さなどから、ピット3、ピット4が相当すると思われる。覆土は、暗褐色粘質土の単一層であるが、大きく上下二層に分けられ、下層には、焼土、カーボン粒子がみられた。

遺物は、前述したように土器を中心に非常に多く出土しているが、床面直上から出土したのは大型の土偶1点であり、他は床面より10㎝～15㎝浮いた状態で出土している。

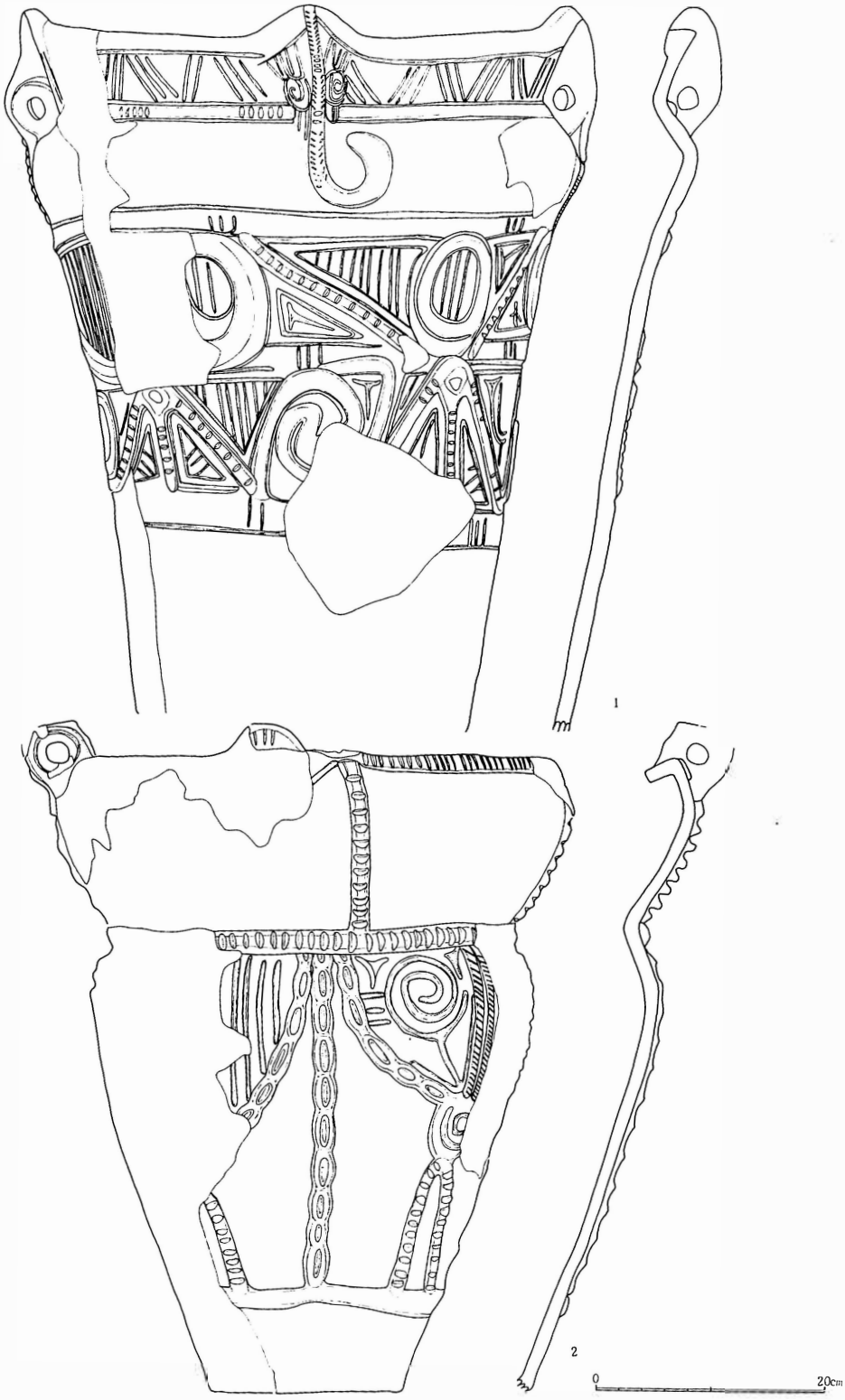
土器

1.　胴部が直線的な大型の深鉢である。口縁に4単位（2対）の突起をもち、1対は中空把手状をなし、端部は隆帯となって逆J字状に収束する。もう1対はミミズク把手様に双孔を穿ち、隆帯は真直ぐ垂下し、胴部中帯文へ連なる。胴部には中位文様帯が形成され、沈線、隆帯による区画がなされている。なお区画内は条線で充たされる。口径47.5㎝、胴部最大径49㎝、現存高64㎝。褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。　2.　胴部に膨らみをもつ大型の深鉢。口縁部に2個突起が現存するが、おそらく、4単位の突起が存在したと思われる。口径42㎝、頸部径36㎝、現存高59㎝を測る。各突起部から隆帯が垂下し、頸部の隆帯に連なる。頸部隆帯と胴下半の隆帯によって中部文様帯が形成され、中帯内はやはり隆帯による区画がなされるが、この区画は人体文モチーフとも考えられる。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。焼成は良好である。　3.　屈折底と4単位の大型塔状把手をもつ深鉢である。口径21.2㎝、最大径36.4㎝、最小径12.7㎝、器高34.5㎝、底径8.6㎝を測る。塔状把手は中空で、基本的に四角形を呈じ、先端に小円筒形突起を有するものである。各把手は双孔を有する。文

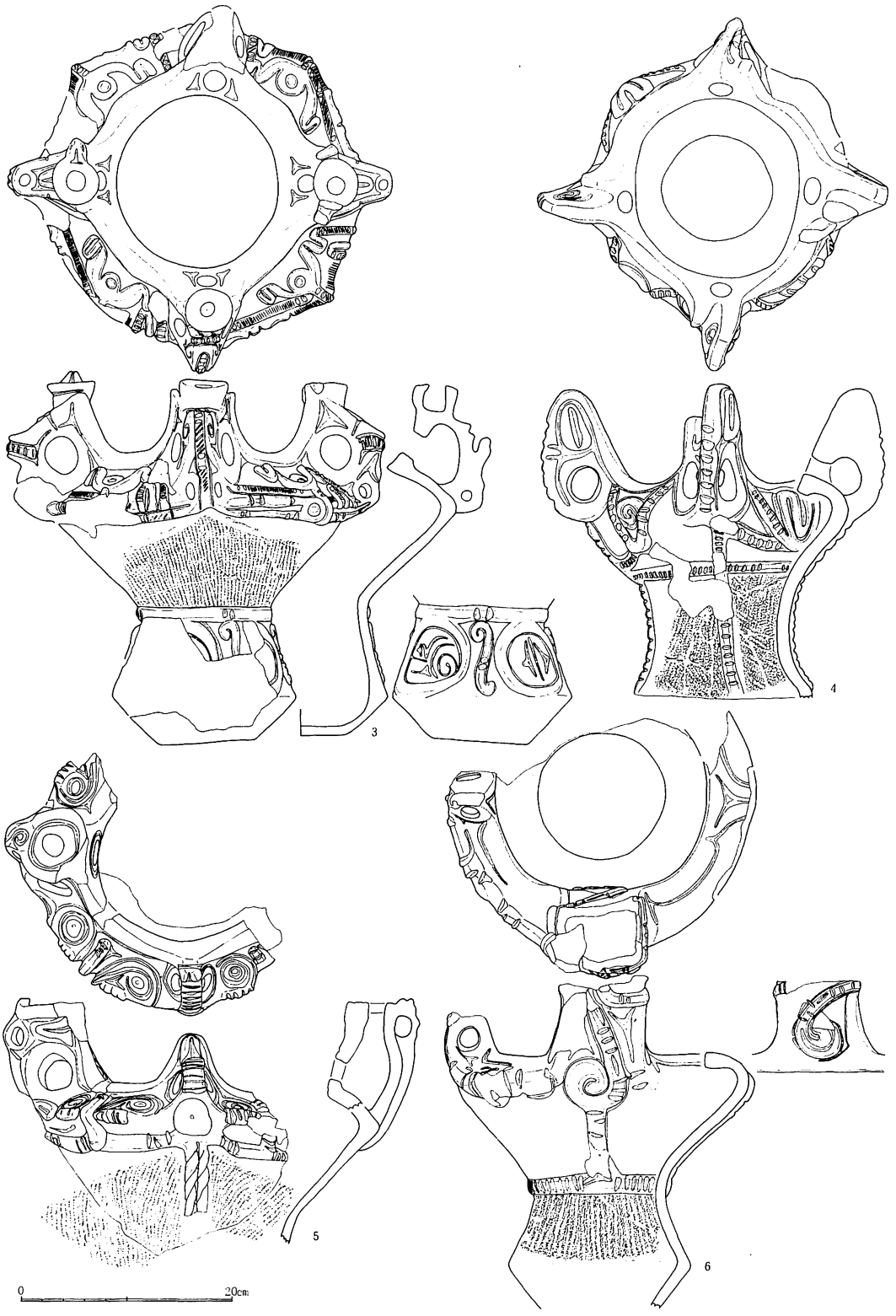


第15図　4号住居址

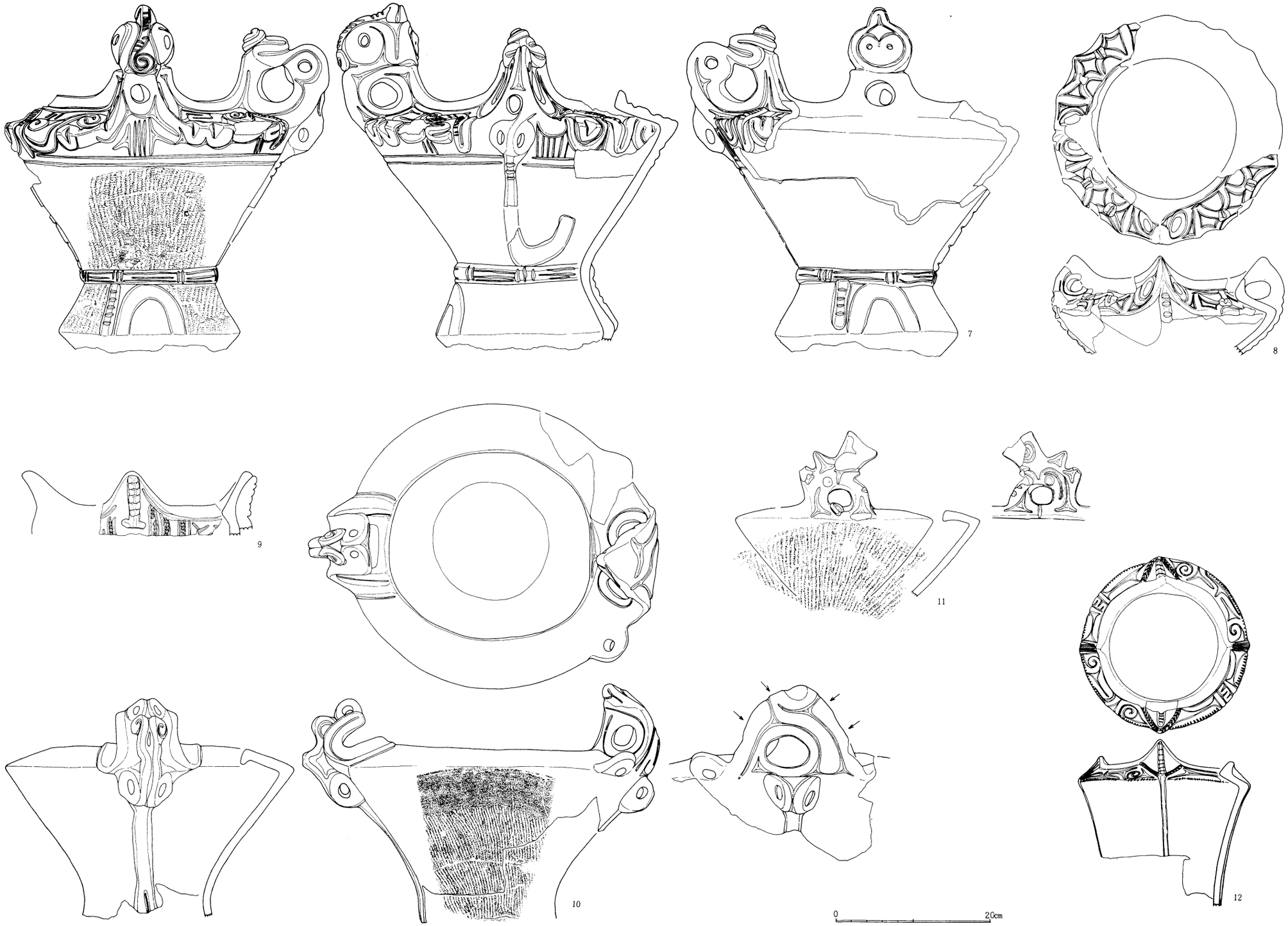
様は口縁部及び胴部屈曲部と底部屈折部との間に分かれ、その間には縄文が施される。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。　4.　3と同様の深鉢であるが、中空把手



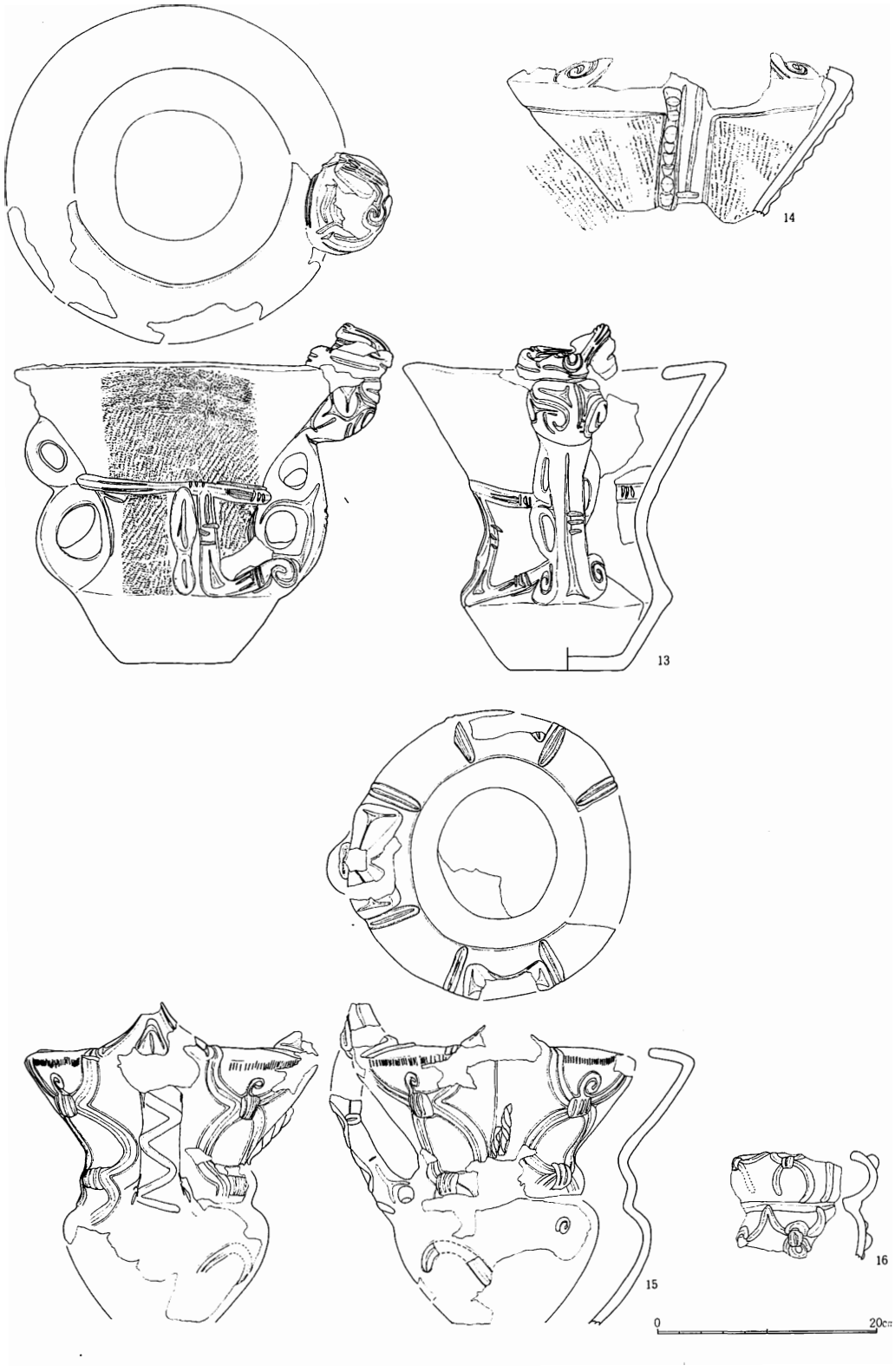
第16図　4号住居址出土土器　その1



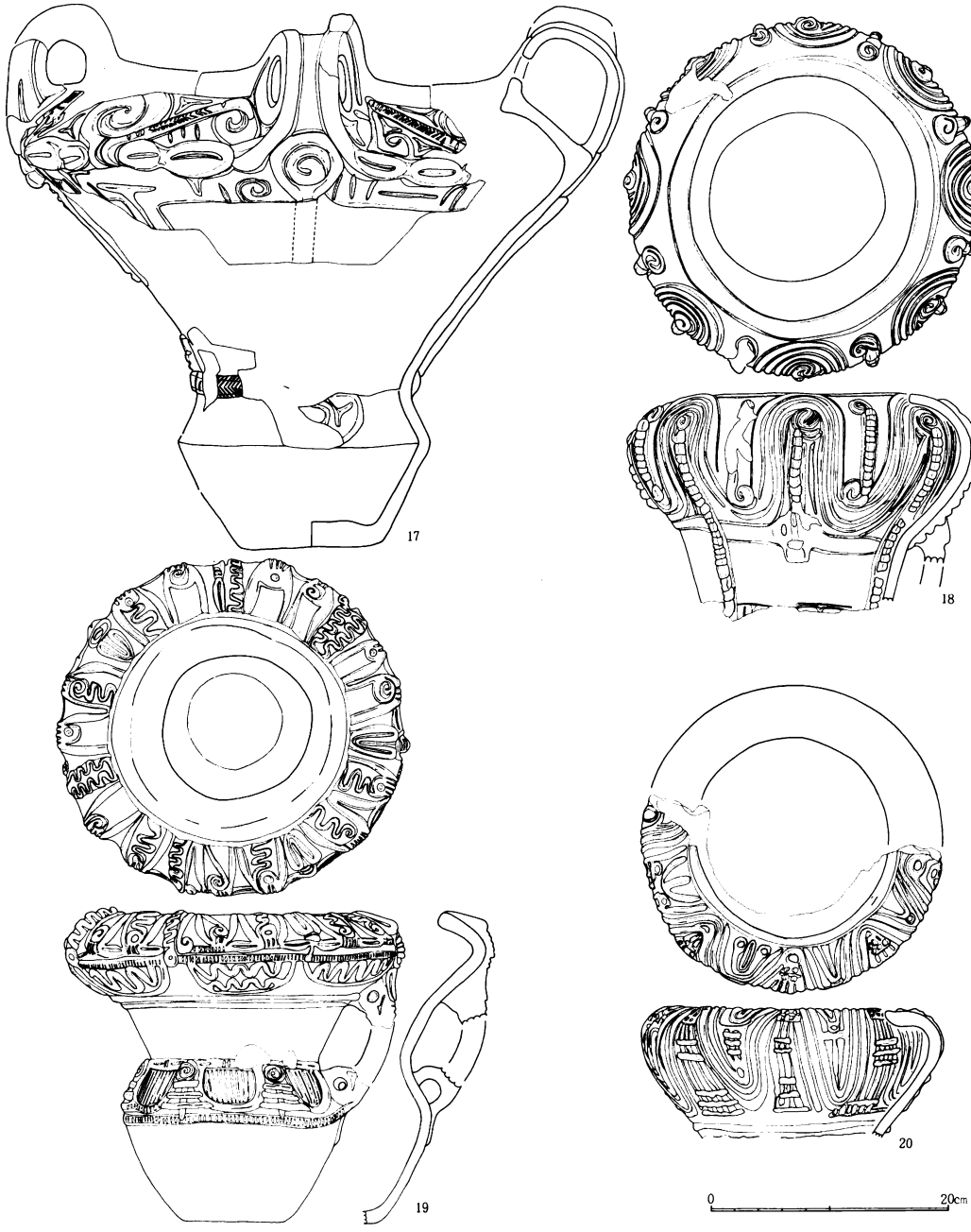
第17図　4号住居址出土土器　その2



第18図　4号住居址出土土器　その3

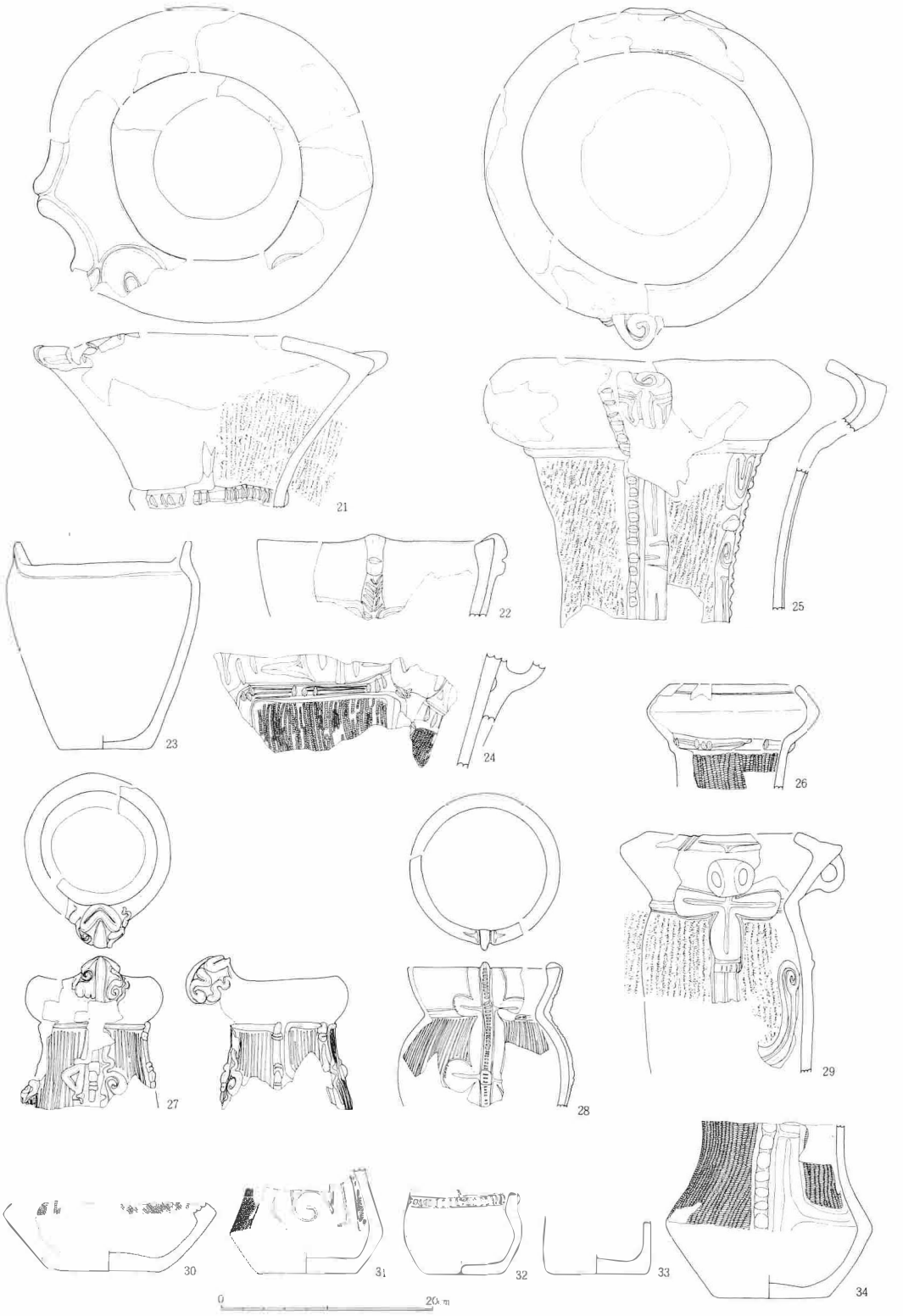


第19図　4号住居址出土土器　その4

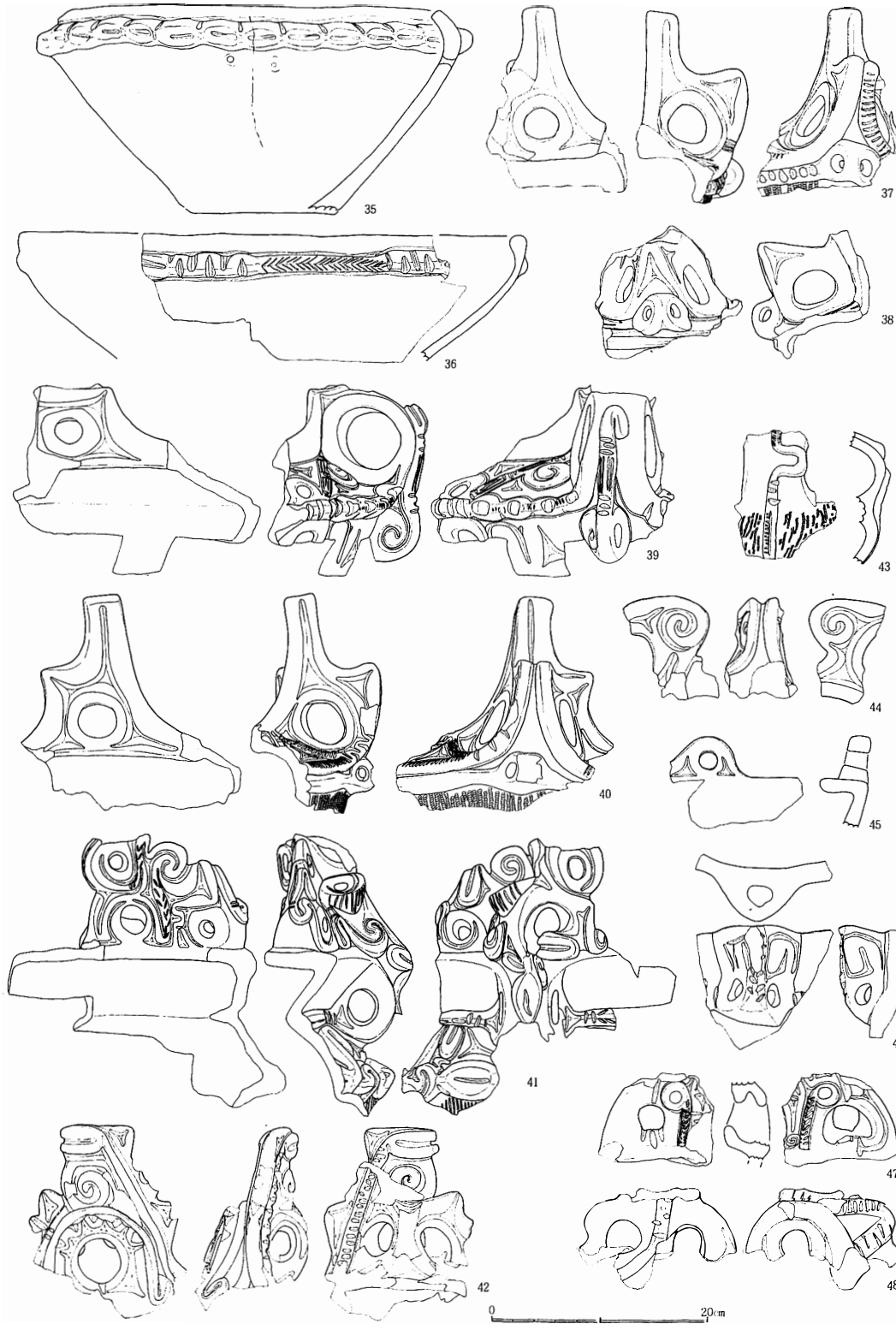


第20図　4号住居址出土土器　その5

は、丸みをおびている。また、胴部屈曲部が、3に比べ明瞭でなく、胴部と底部を分ける最小径部の隆帯も存在しない。胴下半を欠損しているが、文様構成も3と同一と思われる。また、上部と下部を結ぶ縄文帯には把手から垂下する隆帯が存在する。口径20.6㎝、最大径32.2㎝、最小径13.7㎝、現存高30㎝を測る。色調、胎土、焼成は3に類似するが雲母が目立つ。　5.3と同様の深鉢である。ただ、中空大把手は1対で、もう1対は突起となる。また、突起から



第21図　4号住居址出土土器　その6



第22図　4号住居址出土土器　その7

は胴下半に隆帯が垂下する。推定口径 20.9 ㎝、把手部（最大径） 38.7 ㎝を測る。色調、胎土、焼成は 3 に類似する。　6.　3 と同様の深鉢である。把手の構成は 3 ～ 5 と同様で現存する把手は大小各 1 個であり、大把手の対面については不明であるが、少なくとも小把手の対面には把手は存在しない。また、隆帯は大把手と小把手対面からは垂下するが、小把手からは垂下していない。一方、縄文は、 3 ～ 5 と違い、胴下半に施され、口縁部文様帯と胴最小径部までの間は、 2 本または 3 本の前述した隆帯が垂下するだけである。口径 21.4 ㎝、最大径 29.6 ㎝、現存高 31.7 ㎝を測る。褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成は良好である。　7.　3 と同様の深鉢である。現存する把手は 2 個であるが、そのうち 1 つは顔面把手である。顔面把手は、眉と目だけの表現であって簡略化されており、端部から後部にかけては蛇体装飾が施される。もう 1 つの把手は、一種の蛇体頭部の表現と思われる。文様帯構成は 3 と同じであるが、縄文は胴最小径部の上下に施され、また口縁からの隆帯は、蛇体表現の把手とその対面からの 2 本だけである。口径 25.5 ㎝、推定最大径45㎝、現存高 44.5 ㎝を測る。褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、とくに雲母が目立つ。焼成は良好である。また、内面は胴部屈曲部以下が黒変している。　8.　4 単位の小把手をもつ深鉢である。把手は三角形を呈し、双孔を有する。各把手からは、胴部に隆帯が垂下する。口径 20.2 ㎝、最大径 29.6 ㎝を測る。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成は良好である。　9.　4 単位の板状突起をもつ深鉢である。黒褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成も良好である。　10.　2 単位の中空把手を有する深鉢で、胴下半を欠損しているが、 3 、 7 などと同様な器形になると思われる。把手はいずれも中空の獣面把手である。 1 つは、獣あるいは蛇が大きく口を開けているところの表現とも受けとることができる。もう 1 つの把手は、三角形を呈するもので 3 孔を有する。蛙の表現であるかもしれない。また、この把手は、焼成後両側（図中、矢印部分）を磨って三角形に仕上げている。両把手からは、隆帯が垂下する。胴部は、口縁屈曲部下 5 ㎝程までが無文で、以下は縄文となる。なお、本資料は最初から 1 対の把手を付けるべく成形されたようであり、口縁屈曲部の最大径が把手間の40㎝、最小径がそれに直交する部分で36㎝と、いびつに造られている。現存高31㎝を測る。淡褐色を呈し、胎土には砂粒、とくに雲母が目立つ。焼成は良好である。　11.　猪把手を有する深鉢で、胴下半を欠損している。現存する把手は 1 単位であるが、対面口縁部を欠損しており、 1 対になるか不明である。胴上半は縄文を施している。推定口径15㎝、最大径 25.5 ㎝、現存高 21.3 ㎝。内面にはススが付着している。色調、胎土、焼成は 5 に類似。　12.　4 単位の板状突起をもつ深鉢で、 3 ～11と違い、胴部は直に延びる。底部も屈折底にはならないと思われる。施文は極めて丁寧に行われている。やはり内面にススが付着している。口径 14.5 ㎝、最大径 22.3 ㎝、現存高 21.4 ㎝。褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。　13.　トロフィー形（両耳付）深鉢で、把手を 1 対有するが、片方は欠損している。残存する把手は中空で、明らかに蛇体表現である。口縁下に 3 ㎝ほどの無文帯があり、以下の胴部に縄文が施される。また、本資料は、口縁屈曲部が極めて鋭角で、底面に平行するという特徴的な器形であるが、後述する15がこれに類似する。やはり内面にススが付着している。口径 19.5 ㎝、最大径31㎝と推定され、底径10㎝、器高31㎝を測る。赤褐色を呈し、胎土は精選されているが、雲母が目立

つ。焼成は良好である。　14.　3・5に類似する深鉢で、胴部に隆帯が垂下しており、把手が存在したと思われる。色調、胎土、焼成は3に類似。　15.　13に類似した器形をもつ深鉢であるが、胴部の把手は片方だけで、両耳にはならない。把手部分の口縁には三角形状突起がみられ、もう1単位存在し、隆帯が胴部に垂下している。現存する2単位の突起、それぞれの対面部分の胴上半部にも隆帯の剝離痕が認められることから、口縁突起は4単位であったことが窺われる。ただし、把手は1単位のみである。胴上半部は粘土紐の貼り付けで人体文を表現している。口径17.5㎝、最大径26.5㎝、現存高29.8㎝を測る。褐色を呈し、胎土には砂粒、雲母が目立つ。焼成も良好である。なお、内面は黒変している。　16.　人体文モチーフのみられる小型深鉢である。赤褐色を呈し、胎土は精選され、磨きも丁寧である。焼成良好。　17.　3と同様の深鉢である。4単位の中空把手端は丸みをおびる。各把手から胴部に隆帯が垂下している。縄文は施文されない。推定口径33㎝、最大径（把手間）52㎝、底径11.2㎝、器高45.6㎝を測る。色調、胎土は11に類似。焼成良好。　18.　口縁部に褶曲文を持つ深鉢で、15・19に類似した器形となろう。すなわち、口縁は内彎し、胴中央部で（底部以外の）最小径を持つが、底部は屈折底とはならずに丸みをおびる形態である。褶曲間には隆帯が貼付され、このうち、上向き褶曲部からの隆帯は1単位おきに胴部に垂下している。褶曲は8単位である。また1ヶ所にのみ胴下半と連結する把手が付けられている。本資料は胴下半を欠損しているが、極くわずか残存する下半部に施文があり、19同様2段の文様帯が構成されたと思われる。口縁部文様の違いと隆帯の有無を除けば、19に酷似した資料と言える。口径19.2㎝、最大径30㎝、現存高19㎝を測る。褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。焼成は良好。なお内面にはススが付着している。
19.　18と同様の深鉢であり、やはり、胴部把手は1ヶ所だけに付けられている。施文は口縁部文様帯と胴下半文様帯との2段構成である。口縁文様帯のうち、口縁内彎部の文様（19上面図）は、小単位として、大きく蛇体頭部、U字状隆帯、蛇行隆帯の3種に分けられ、蛇体頭部＋2単位のU字状隆帯もしくは蛇行隆帯＋2単位のU字状隆帯の組み合わせ（3小単位）による文様単位が7単位施されている。胴部把手は、小単位である蛇体頭部のうち1つから胴部に延びている。口縁下部文様帯は、上部の3小単位に対応して、孤状隆帯で区画された内部に蛇行隆帯を充填した文様を7単位施文している。胴下半文様帯は、いわゆる櫛形文が主文様となる。この櫛形文は、旧井戸尻Ⅱ式の指標とされた櫛形文とは異なり、独立しておらず、胴上半と下半を区画する隆帯と連結して、楕円区画にちかいものとなっている。なお、この部分は一部欠損しているため、施文が7単位しか確定できない。口径20㎝、底径7.4㎝、器高25.8㎝を測る。暗褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。なお内面胴下半は黒変している。　20.　18と同様、褶曲文の施された深鉢である。小破片であり、把手の有無、文様単位等不明である。口径16㎝、最大幅25.5㎝と推定される。赤褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は良好で、磨きが丁寧である。　21.　17と同様の器形であるが、口縁部の把手の有無は不明。ただ胴上半縄文帯部に隆帯が2単位存在することから、2単位の把手が存在した可能性はある。口径17.5㎝、最大径32㎝程度と推定される。現存高16.5㎝。褐色を呈し、胎土には砂粒が多く、とくに雲母が目立つ。焼成は良好である。　22.　4単位の小突起を有する深鉢破片で、直線的な胴部をもつと

思われる。暗褐色を呈し、胎土には雲母が目立ち、焼成は良好である。　23. 1対の突起を有する深鉢である。小さく内彎する口縁部をもつ。内外面とも整形は雑で表面が荒れている。口径15㎝、底径 8.4 ㎝、器高 19.6 ㎝。色調、胎土、焼成は22に類似。　24. 3・4・7などに類似した器形と思われる。褐色を呈する。胎土、焼成は22に類似。　25. 胴部が外反し、口縁が屈曲する深鉢である。口縁部に1単位の突起が残存するが、口縁上部対面には剥離痕があり、把手が存在したと思われる。胴部は縄文が施されるが、隆帯によって4分割される。口径 23.2 ㎝、現存高25㎝。明褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成良好。　26. 25に類似した器形であるが、口縁屈曲部に稜が明瞭である。やはり胴部に隆帯が垂下している。口径12㎝、最大径16㎝程度と推定される。黒褐色を呈し、砂粒が多い。焼成は良好である。　27. 1単位の獣面把手を有する深鉢である。欠損した胴下半は稜が付かず、丸みをおびる形態であろう。胴部は隆帯が4本垂下し、地文は条線である。推定口径 10.5 ㎝、現存高 14.3 ㎝。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。　28. 十字文の施された胴張りの深鉢である。口縁には小突起が付く。この単位は残存部から推定して、4単位とはならず、2もしくは1単位と思われる。十字文は胴部にも施される。地文は条線である。　29. 屈折する口縁とやや胴張り形態の深鉢で、やはり十字文が施される。十字文から続く隆帯は、U字状に収束する。胴部の地文は縄文である。口径14㎝、現存高 22.5 ㎝。色調、胎土は22に類似。　30. 深鉢底部。屈折上部には縄文が施される。底径 9.5 ㎝。赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。内面屈曲部黒変。　31. 深鉢底部。屈折上部には沈線区画と縄文が施される。底径 9.4 ㎝。暗褐色を呈する。胎土は精選され、焼成も良好である。内面は、火熱によるものか灰色を呈している。　32. 深鉢底部。屈折底とならず丸みをおびる。褐色を呈し、砂粒を多く含む。内面は黒変している。焼成良好。底径 7.2 ㎝。　33. 深鉢底部。底部から直に立ち上がる。底径 9 ㎝。色調、胎土、焼成ともに32に類似。やはり内面が黒変している。　34. 深鉢胴部下半。胴部は口縁から垂下する隆帯で4分割されると思われる。縄文施文。底径 10.4 ㎝、現存高 16.9 ㎝。明褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。内面黒変。外面の磨きは良好であるが、底面は荒れている。

35. 浅鉢。肩部には隆帯が一条巡り、隆帯上には該期にしばしばみられる楕円文が施される。口径34㎝、最大径40.8㎝、現存高19㎝。補修孔1対がみられる。褐色を呈し、胎土には砂粒が目立つ。焼成は良好である。　36. 浅鉢。肩部にはやはり一条の隆帯が巡る。隆帯施文は35とは違うが、これも該期にしばしばみられるものである。口径36㎝程度と推定される。黄褐色を呈し、胎土には砂粒とくに雲母が目立つ。焼成良好。　37～48. 把手・突起及びその破片であるが、個々の説明については省略する。胎土には砂粒が含まれ、とくに36・39・45・46・48などには雲母が目立つ。また、44・47はとくに砂粒が多く、逆に43は胎土が精選されている。37・40は、色調、胎土とも類似し、また把手形態も同様であり、同一個体と思われる。39・42には、蛇体装飾がみられる。

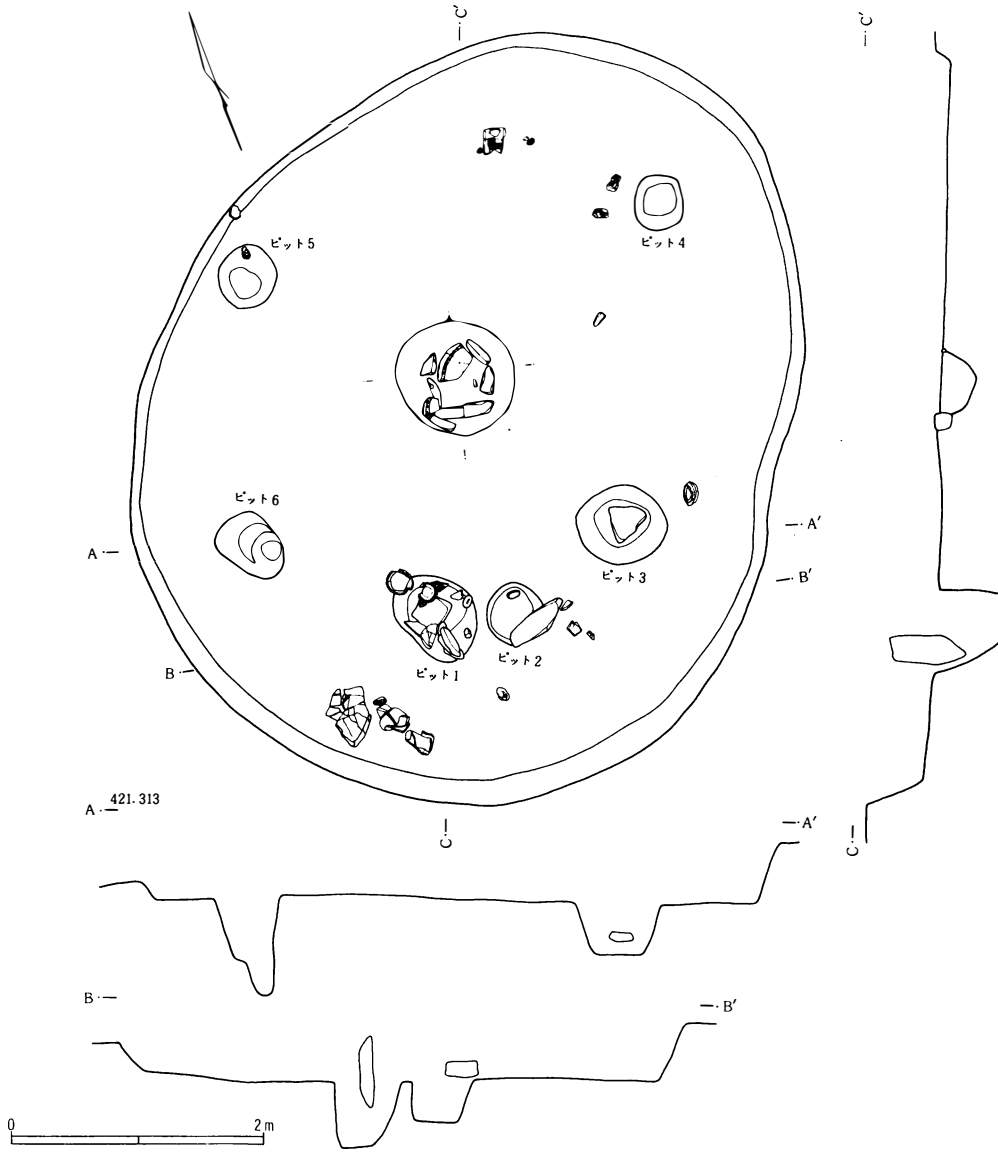
5. 5号住居址

A－31、B－30・31・32グリッド。楕円形を呈する住居址で、主軸は南南西－北北東である。長径 5.8 ㎡、短径 5.5 ㎡、南壁から東壁で30㎝～40㎝、北壁から西壁にかけて10㎝の壁高である。

床は炉付近、住居址北西部分が踏み固められており、他はやや軟弱である。覆土はほぼ暗褐色粘質土の単一層で、黄褐色土ブロック、焼土、カーボン粒子を含んでいる。

本住居址は、入口部に2基の立石を有する。図中のピット1、ピット2がそれで、ピット1の立石は立ったままであった。ピット1は直径55㎝、深さ50㎝の掘り方をもち、60㎝×25㎝の平石を立てていた。ピット2はやや小さく、直径50㎝、深さ30㎝の掘り方をもち、55㎝×25㎝の平石を立てたものであるが、横だおしとなっていた。立石自体には加工は確認されなかった。

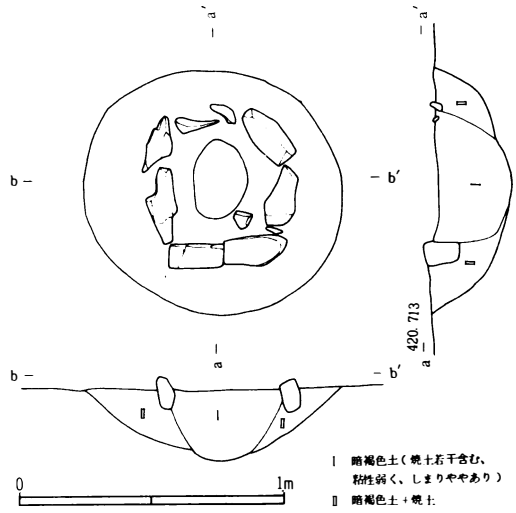
柱穴はピット3～ピット6の4本である。ピット3：直径70㎝、深さ40㎝、ピット4：直径40㎝、深さ50㎝、ピット5：直径45㎝、深さ60㎝、ピット6：直径50㎝、深さ50㎝を測る。ピット6は底部が段状をなし、最深部は80㎝の深さである。つくり変えによるものと思われる。



第23図　5号住居址

炉は、ほぼ中央に位置し、石囲炉である。40㎝×50㎝大の板石3枚を用い、奥側は小礫を用いている。掘り方は、90㎝×90㎝の円形で、深さ25㎝を測る。焼土層は形成されておらず、焼土粒子、カーボンが混ざる程度であった。

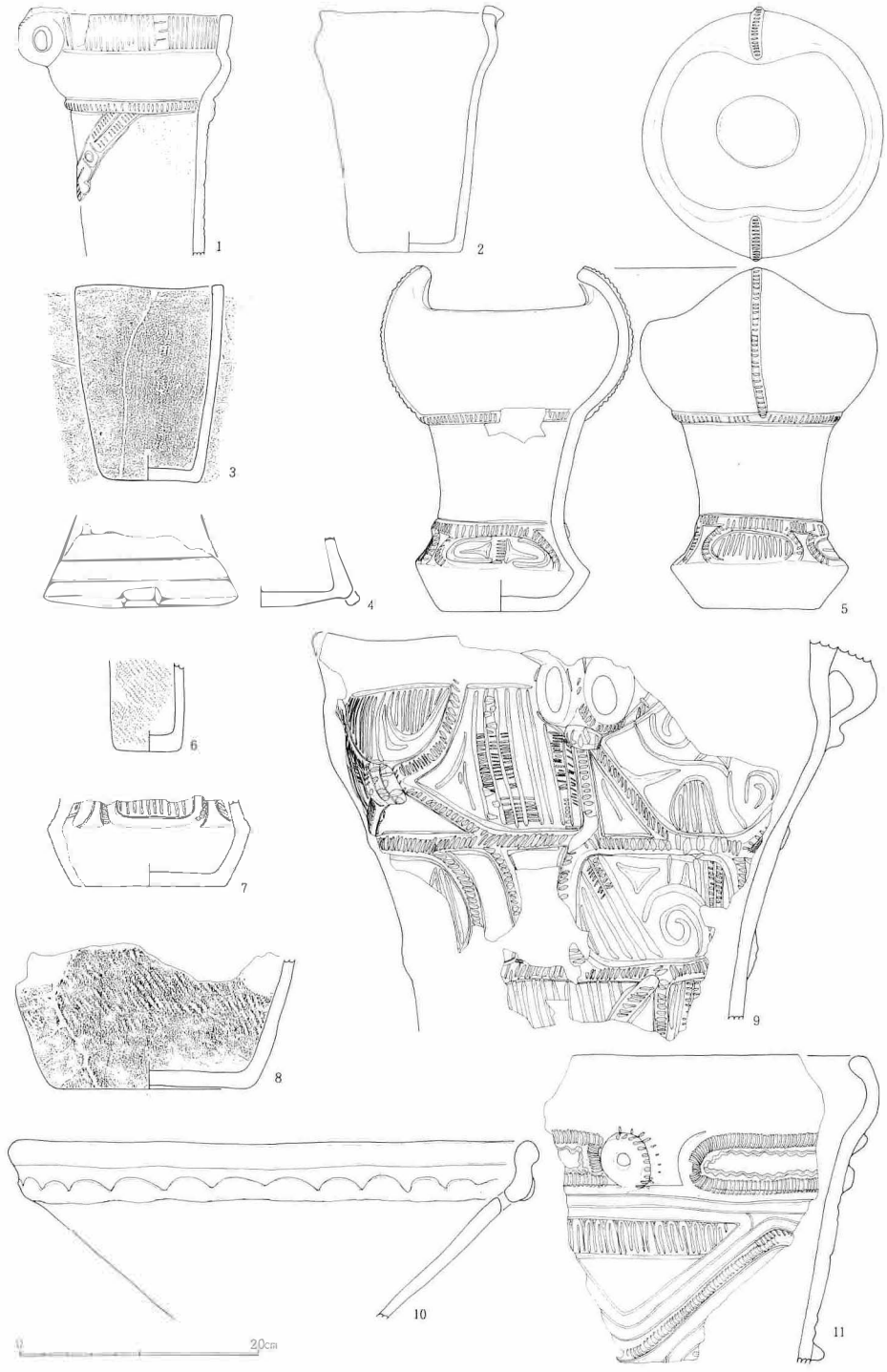
遺物は住居内のほぼ全面から出土しているが、床面直上は極くわずかである。



第24図　5号住居址炉

土器

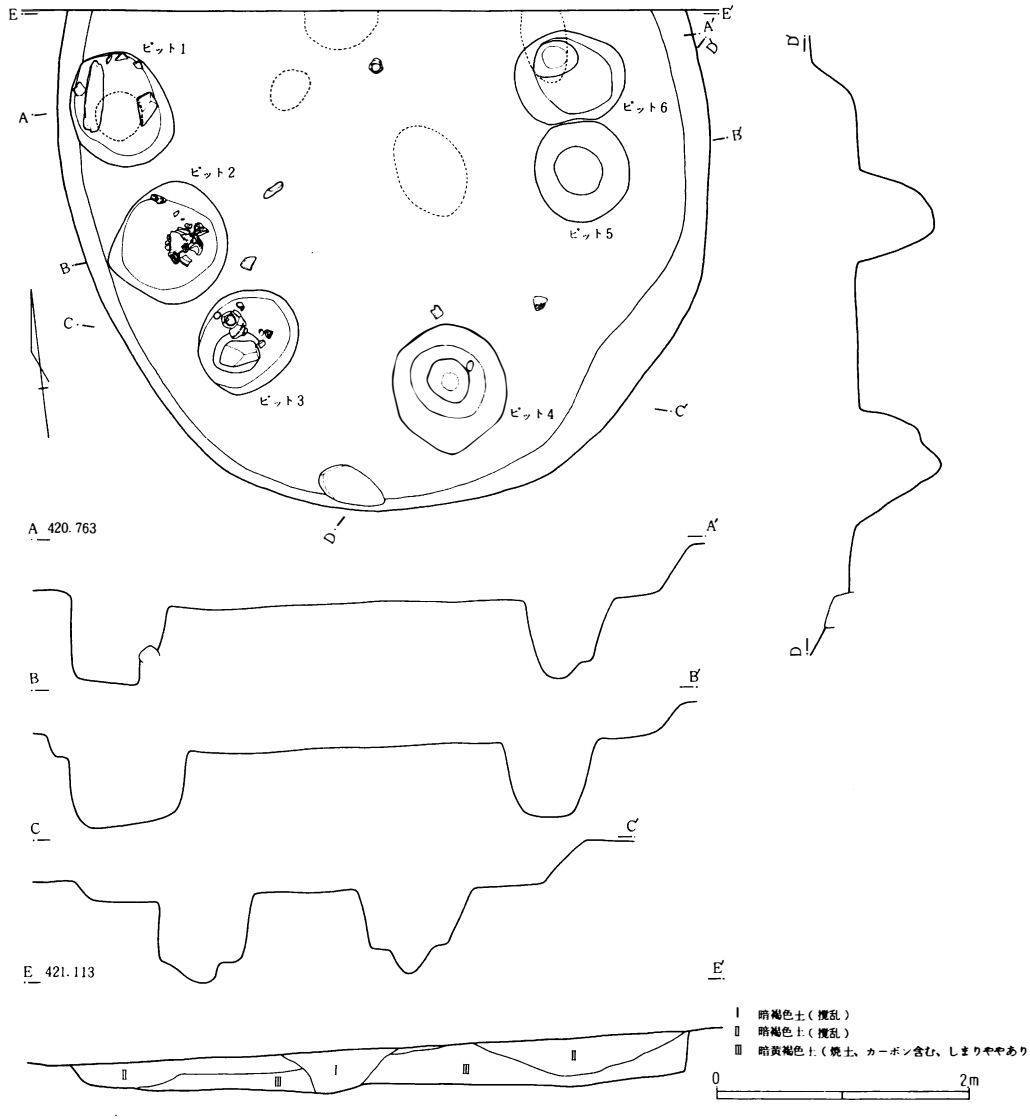
1. 床面直上出土。深鉢。1単位の小把手を有する。口縁部は条線が主文様となる。頸部に隆帯が巡り、胴部にも隆帯が施される。胴部の地文は縄文である。口径15㎝、現存高19.5㎝。褐色を呈し、胎土は砂粒が多い。焼成良好。　2. 覆土出土。深鉢。本資料を含めて3・5・9が南壁に倒れかかるような状態で出土している。口径14㎝、底径8.8㎝、器高19.8㎝を測る。暗褐色を呈し、胎土には雲母が目立つ。焼成良好。　3. 2つに割られて5の内部に入った状態で出土している。深鉢。口径11㎝、底径7.5㎝、器高16.2㎝を測る。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。色調は、外面上半黒褐色、下半褐色を呈し、内面下半及び外面上半にはススが付着し、火熱の痕跡が明瞭である。　4. 覆土出土。上半部を欠損しているが、有孔鍔付土器と思われる。台付であり、台部には4ヶ所の切れ目を有する。底径16.2㎝、現存高6.8㎝。褐色を呈するが、外面にのみ赤色顔料が塗布される。胎土は極めて精選されており、焼成も良好な丁寧なつくりである。　5. 床面直上出土。深鉢。屈折底をもち、口縁は丸みをおび、大きな1対の突起を有する。突起からは頸部に巡る隆帯に連結するように隆帯が垂下する。胴部は無文で、下半屈折部に楕円区画の文様帯が存在する。口径18㎝、最大径21㎝、底径9.8㎝、器高28.8㎝を測る。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成も良好である。　6. 覆土出土。ミニチュア深鉢。全面に縄文が施される。外面には鮮やかな赤色顔料が塗布されている。底径5㎝、現存高7.5㎝。胎土は精選されている。焼成も良好である。　7. 覆土出土。深鉢屈折底。上部には楕円区画文がみられる。褐色を呈し、胎土にわずかに砂粒を含む。焼成良好。　8. 覆土出土。深鉢底部。外面に縄文が施される。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、雲母が目立つ。焼成良好。内面にはススが付着している。底径15.8㎝、現存高12㎝。　9. 5のすぐ横から出土したが床からは10㎝ほど浮いている。大型深鉢。破片であるが、4単位の小把手を有したと思われる。隆帯による区画がなされ、人体文モチーフ、楕円区画文などが施されている。区画内は条線で満たされる部分が多い。最大径46㎝程度と推定される。現存高33㎝。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成良好。　10. 覆土出土。浅鉢。頸部に隆帯が巡り、楕円状の指頭による潰しがみられる。推定口径43㎝、現存高15㎝。黄褐色を呈し、内面は黒色を呈する。胎土には砂粒が多く、焼成は良好である。　11. ピット1内出土。口縁下に楕円区画、胴部に三角形区画がみられる。暗褐色を呈し、胎土に雲母が目立つ。焼成良好。



第25図　5号住居址出土土器

6.　6号住居址

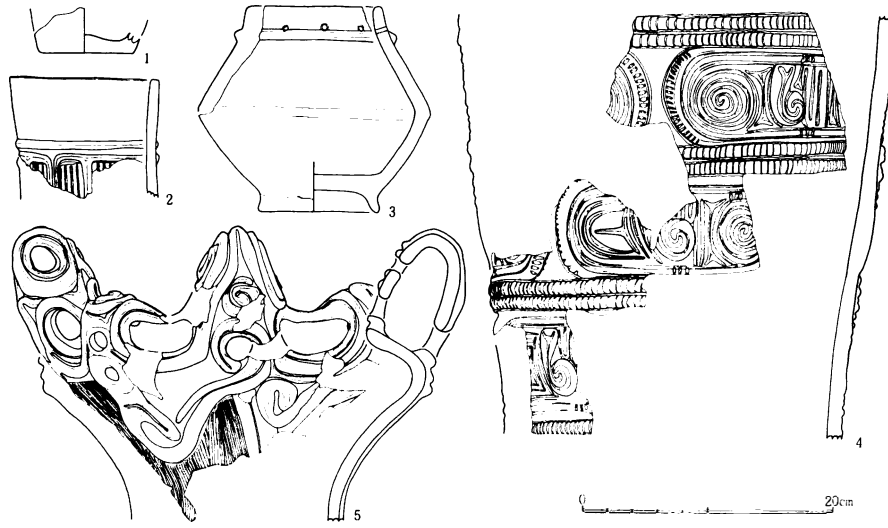
C－30・31グリッド。楕円形を呈する住居址であるが、北側半分は未調査である。主軸は北



第26図　6号住居址

北東－南南西で、短径5.1 mを測る。床面からの壁高は東壁30cm、南壁から西壁20cmを測る。調査域内では、炉は確認されなかった。床面にはところどころに焼土粒子、カーボンが飛散していた（図中、破線部分）。覆土は暗褐色土の単一層でしまっており、焼土、カーボン粒子を含んでいる。

住居入口部には50cm×30cmの平石をもつ。図中のピット1、3～6が柱穴と考えられる。ピット3とピット4が底に段を有することから対応し、ピット1にはピット5・6が対応する。この場合、どちらかは造り変えによるものと考えられる。ピット2は、調査段階では住居内ピットとしていたが、別の土坑の切り込みと思われる。そのため、土器も住居内資料と合わせて紹介することとする。



第27図　6号住居址出土土器

土器

1.　床面直上出土。深鉢底部。底径 7.4 ㎝。 褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成は良好で、内面は黒変している。　2.　覆土出土。深鉢。胴中部に区画文がみられ、区画内は条線で満たされる。推定口径 11.8 ㎝。褐色を呈し、胎土は精選されている。また磨きも丁寧である。焼成良好。　3.　床面直上出土。有孔鍔付土器。算盤玉状の胴部を呈し、台付である。 口径 10.8 ㎝、器高 16.3 ㎝、台部径 9.4 ㎝を測る。 赤褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。内面には赤色顔料が残存し、磨きが非常に丁寧で、表面には光沢がある。推定容量 1.58 ℓ。

4.　ピット 1 出土。深鉢。隆帯によって胴部を分割し、横方向の楕円区画を施す。 現存高 33.5 ㎝。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。施文もはっきりしており丁寧なつくりである。　5.　土坑内出土。深鉢。4 単位の大把手と 4 単位の小突起を有する。 把手間 31.5 ㎝、現存高 23.2 ㎝を測る。渦巻は、半隆起線によって表現される。暗褐色を呈し、胎土に砂粒は少ないが、雲母が目立つ。焼成は良好である。

7.　7号住居址

A－34・35、B－34・35グリッド。住居南側は調査区域外のため未調査。楕円形を呈する住居址で、主軸はほぼ南北である。調査部分南端での幅 4.8 ㎡、最大幅 5.2 ㎡、南北方向の確認長 5.8 ㎡と大型の住居址である。 本住居址は、調査区域内の小さな谷部に掘り込まれたもので、黒色土中への構築であったため、確認に手間どり、10㎝～15㎝の壁を残すのみであった。床は踏み固められた部分が多いが、南半はやや軟弱であった。北側には77号土坑、南東には 2 号集石土坑による攪乱を受けている。柱穴は、炉の後方に 2 基、炉の南側では、調査区との境に 1 基が確認されているが、これに対応すべき柱穴は未確認であった。あるいは、 2 号集石土坑によって破壊されたものであるかもしれない。なお、図中のピット 5 は住居址とは別の土坑である可能性もある。覆土は、暗褐色土の単一層で、焼土、カーボン粒子が混ざり、よくしまっていた。

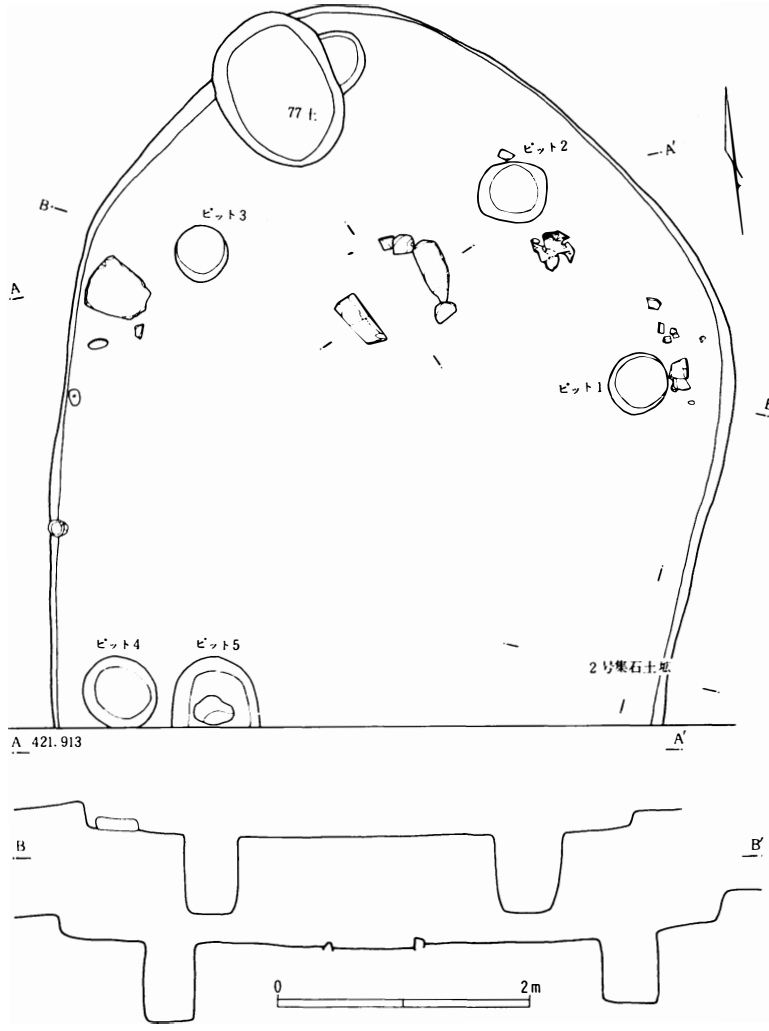
炉は、住居中央北寄りに構築された石囲埋甕炉である。確認された炉石は50㎝大のもの 2 個

で、他は10㎝～20㎝大の小型の石を用いているが、土器周縁をすべておおっている訳ではない。土器は、口縁、底部を欠損した大型の深鉢を用いたものであるが、内部に焼土層は形成されておらず、暗褐色土に混ざる程度であった。

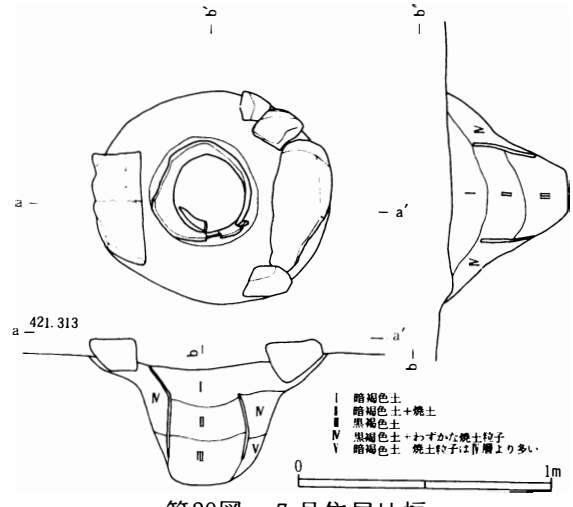
土器

1. 炉体土器である。深鉢。頸部に3条粘土紐を蛇行貼付する。胴部は、U字状に粘土紐を貼付したものを主文様とし、条線で満たしている。炉体土器ではあるが、一般的にみられる火熱による剥離はみられない。推定口径49.3㎝、現存高41.3㎝。褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。

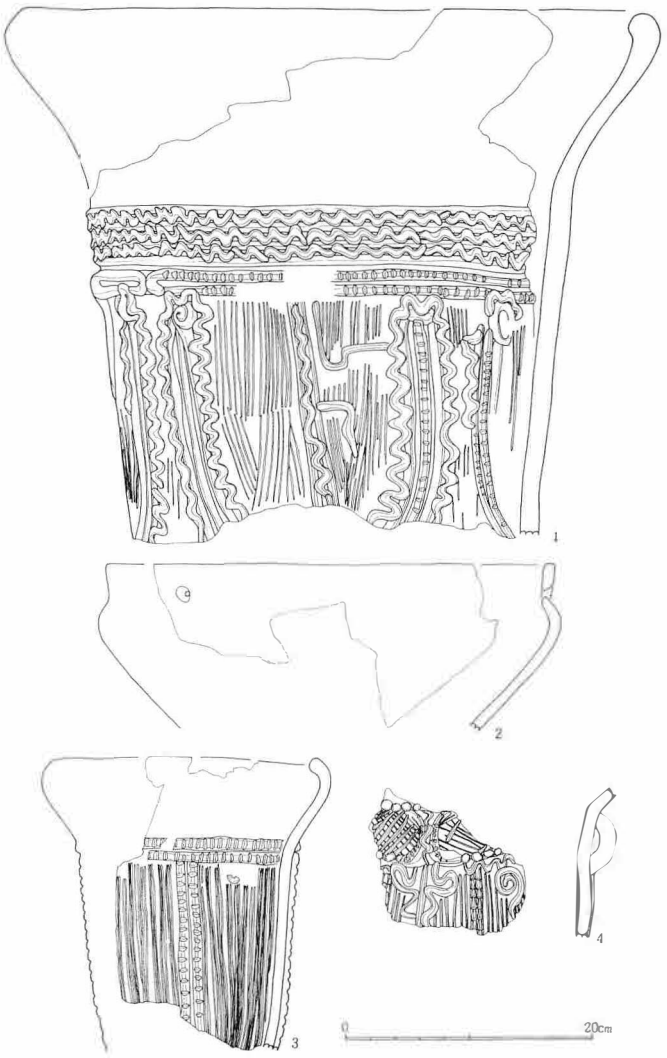
2. 覆土出土。浅鉢。補修孔がみられる。丁寧な磨きが施されている。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。 3. 覆土出土。深鉢。1と同様の器形であるが、頸部の粘土紐は蛇行貼付ではなく、直線で、刻目が施される。また、胴部は同様の隆帯によって4分割され、その間は条線で充たされる。推定口径20.4㎝、現存高23.2㎝。明褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。胴部外面下半にはススが付着している。 4. 覆土出土。深鉢。ブリッジ状の



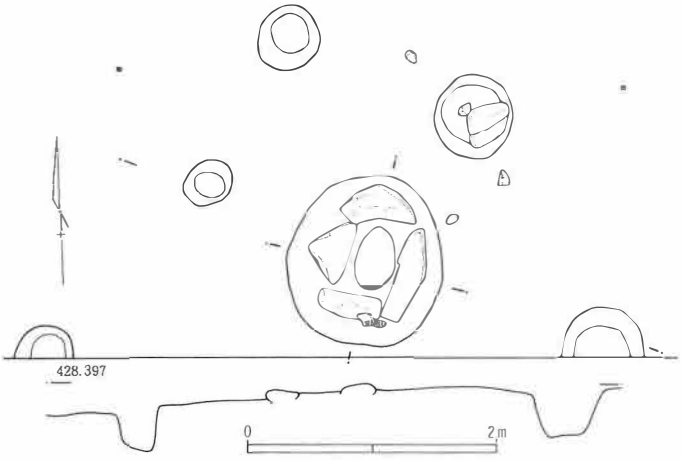
第28図　7号住居址



第29図　7号住居址炉



第30図　7号住居址出土土器



第31図　8号住居址

小把手を有する。黒色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。

8.　8号住居址

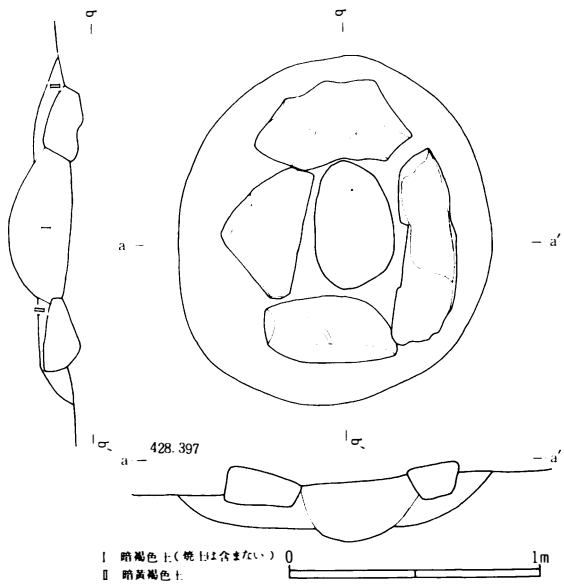
A－54、B－54グリッド。本住居址は非常に浅く掘り込まれており、表土剝ぎ作業中に、現地表面より約15㎝～20㎝下で、炉石が確認された。従って、壁も全く残存せず、また、床面のところどころに攪乱が入っており、残存状況は極めて悪い状態となっていた。床面は、炉石周辺部のみに一部確認されたにすぎず、他部は同一レベルでおさえたにすぎない。炉の周辺にはピットが5基確認された。規模、形状ともほぼ同じで、柱穴と思われる。

炉は50㎝～70㎝の石4個を用いた石囲炉である。掘り方は径120㎝程度、深さ20㎝と大きい割には浅いつくりである。内部には暗褐色土が入っており、焼土、カーボンは全くみられなかった。

遺物も当然極くわずかで、床から出土したものはなく、炉に乗るようなかたちで（やや浮いて）土器片が出土したにすぎない。

土器

1.　覆土出土。炉上部より出土。重弧文の施された深鉢破片。黒褐色を呈し、胎土に



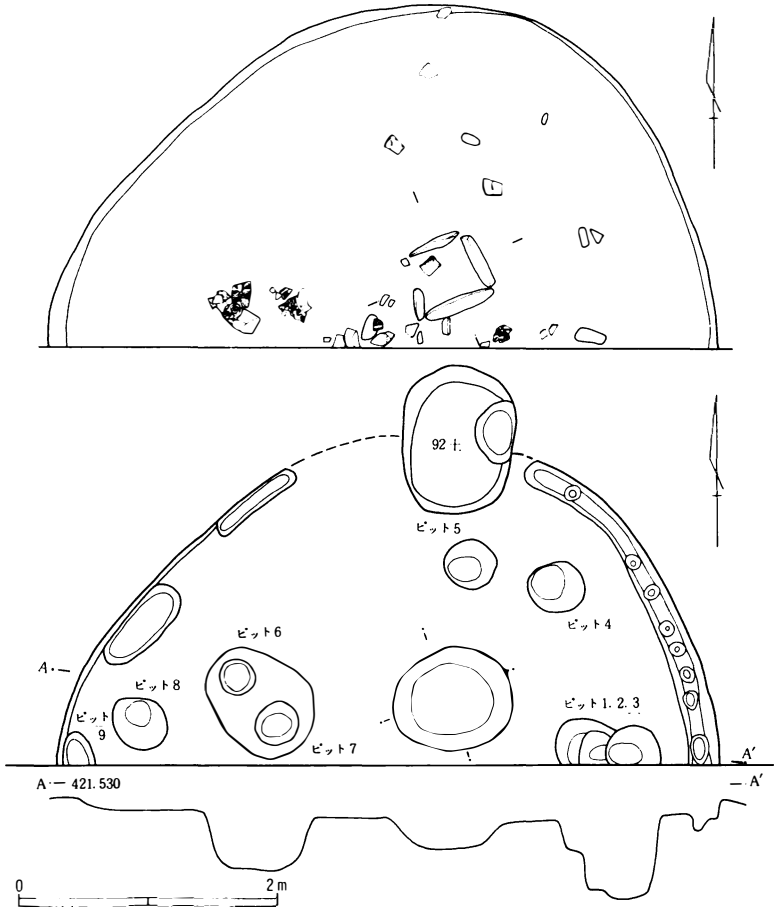
第32図　8号住居址炉

第33図　8号住居址出土土器

は砂粒が多く、雲母が目立つ。焼成は良好である。　2. 覆土出土。1と同一個体である。

9. 9号住居址

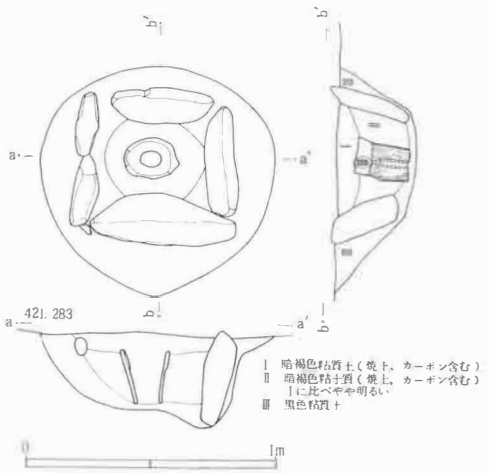
A－32・33グリッド。住居址南半は調査区域外のため未調査。確認された柱穴の位置からは、主軸は北東－南西と思われる。図中のピット1～5、ピット6・8などが柱穴と考えられ、このうち、ピット1～3、ピット4・5、ピット6・8はそれぞれつくり変えによるものと思われる。ピット1～3にピット4あるいはピット5が対応するであろう。このような柱穴位置とすると、主軸方向5m、それに直交する方向4.5m～5m程度の円ないし楕円形住居址と推定される。本住居址も黒褐色



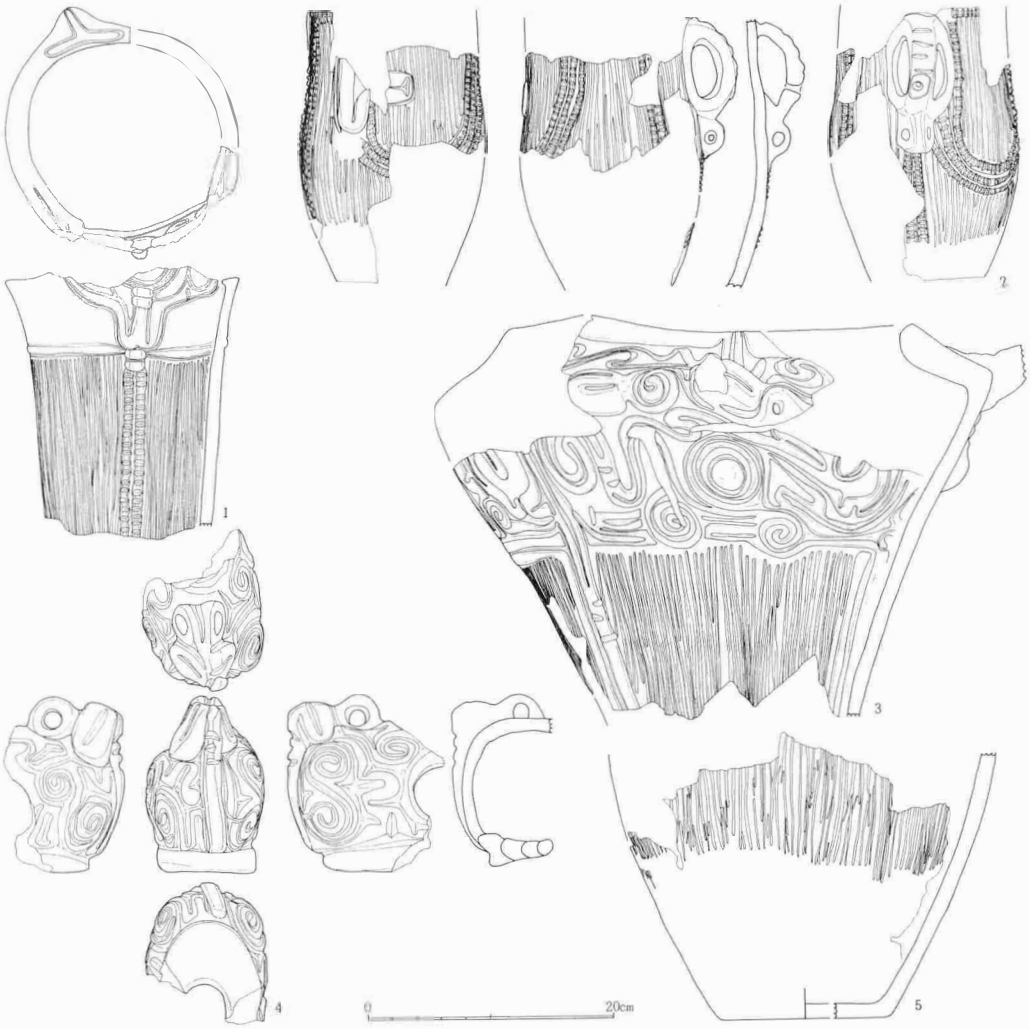
第34図　9号住居址

土中の構築であり、確認された壁高はわずかであったが、調査域境界との断面によれば、30㎝～40㎝程度の掘り込みと考えられる。床は比較的しっかりしていた部分が多い。壁際には、本遺跡で唯一の周溝が一部確認された。周溝は、壁添いを全周するのではなく、部分的に掘り込まれている。また、東側の周溝内には径10㎝～20㎝大の小ピットが8基確認されている。覆土は、暗褐色粘質土を主体とし、壁際には黒色粘質土が三角形状に堆積している。いずれも、焼土粒子、カーボンを含んでいる。

炉は、中央やや奥寄りに構築された石囲埋甕炉であ



第35図　9号住居址炉



第36図　9号住居址出土土器

る。それも、一般的な石囲埋甕炉とはやや様相を異にし、中に埋設された土器は小型で、周辺の石に接することなく、中央部分に立てられていた。火種保存などの特別の用途を考慮する必要があろう。掘り方は、径90㎝の円形、深さ30㎝を測る。炉石は、50㎝～60㎝大の平石を三方に配し、入口部側のみ30㎝大の平石2個を並べて、ほぼ正方形をつくりだしている。なお炉石頂部間は60㎝を測る。内部は暗褐色粘質土を主体とし、焼土粒子、カーボンが混ざる程度であった。土器内部も同様である。

土器

1. 炉体土器である。口縁部の一部と、胴下半を欠損している。深鉢。口縁欠損部には把手あるいは突起が存在したと思われる。対面には小突起がみられ、それぞれから胴部に隆帯が垂下する。従って、胴部は大きく二分割される。なお、頸部には2条の沈線が巡り、上部と下部を区画している。口径18.3㎝、現存高21.2㎝。黄褐色を呈し、胎土は精選されているが、雲母が非常に目立つ。焼成良好。上半部の磨きは丁寧に行われている。また、内面は胴中位以下が黒変し、一部は灰色にちかい色調であり、火熱を物語る。ただ、炉体土器にみられる内外面の剝離は、本資料には全くみられない。 2. 床面直上出土。胴張り深鉢。口縁部及び底部を欠損する。胴部には片面に把手があり、その対面には、十字状隆帯が付く。また、それらからは、刻目の施された隆帯がU字状に延びている。頸部はほとんど残存していないが、同様の刻目隆帯が巡る。現存高21.5㎝。褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。 3. 床面直上出土。深鉢。4号住居址出土資料に類似し、把手と屈折底を有すると思われる。ただ、この種の土器は口縁から口縁屈曲部に文様帯がみられるのが一般的であるが、本資料は、屈曲下にまで及んでいる。胴部には4本の隆帯が垂下しており、それぞれの頂部に把手があったと思われる。口径33㎝、最大径45㎝程度と推定される。現存高31.6㎝。暗赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。 4. 覆土出土。深鉢把手。獣面把手の一種と思われる。56号土坑出土土器の把手に類似する。これは、本住居址の3が同様な器形であり、そのまま3の把手と考えられないこともない。色調、胎土、焼成は3に類似。 5. 覆土出土。推定底径13.4㎝、器高23㎝。暗褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。

10. 10号・12号住居址

C－57・58グリッド。この2軒の住居址は、古墳のマウンドの構築及び、周溝によってほとんど破壊されていた。平面形、規模ともに不明で、炉及びその周辺の床面、ピットを確認したにすぎない。

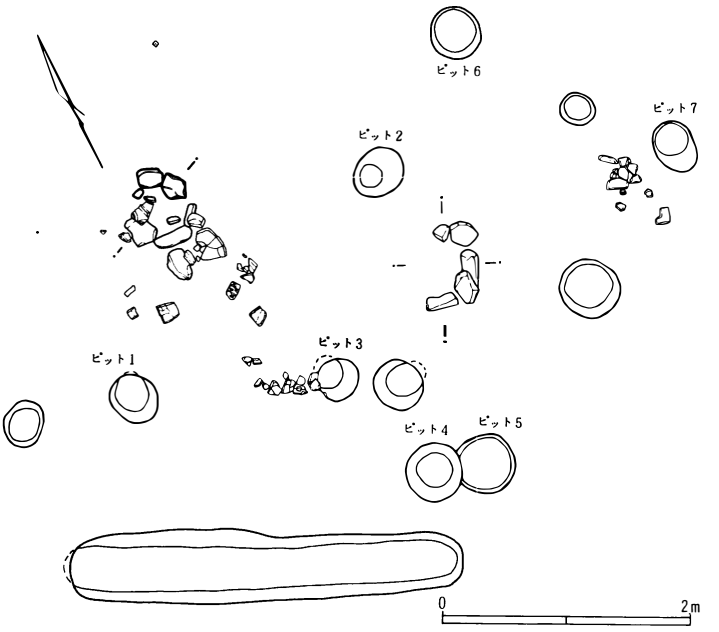
10号住居址は、炉はほぼ完全に残っていた。周辺にピットも確認されているが、その配列から、図中のピット1・2が対応する柱穴と思われ、その場合、主軸は南東－北西となる。ピット3は、入口部施設であった可能性がある。

炉は15㎝～30㎝大の石を用いた石囲炉で、径70㎝、深さ30㎝の掘り方をもつ。内部に焼土粒子、カーボンは全く含んでいなかった。

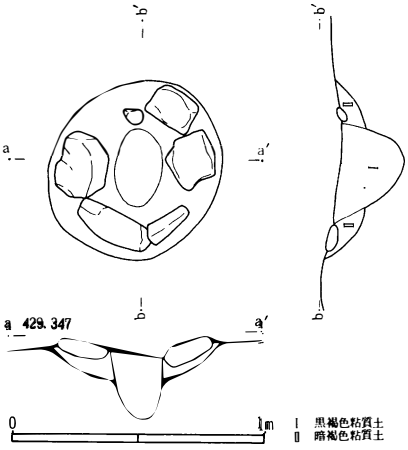
10号住居址が前述の主軸、規模をもつとすれば、12号住居址が炉の一部を欠損していることもうなずける。残りのピットの配列に規則はないが、一つには、ピット4・5（これはつくり

え）、ピット6・7などが柱穴の可能性が考えられる。ただし、この場合、ピット6に7が対応するとして、ピット4あるいは5に対応すべき柱穴がピット3の付近になければならないが、確認されておらず、可能性に留めざるを得ない。この配列でいくと、12号住居址は10号住居址とほぼ直交する主軸で、南西－北東となる。

炉は、やはり、小型の石を用いており、径60㎝、深さ30㎝の掘り方をもつ。内部に焼土粒子は含まないが、カーボンが確認されている。



第37図　10号・12号住居址



第38図　10号住居址炉

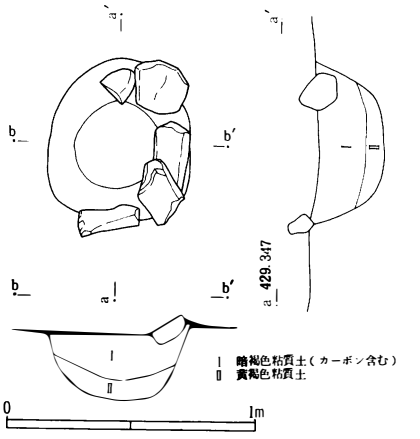
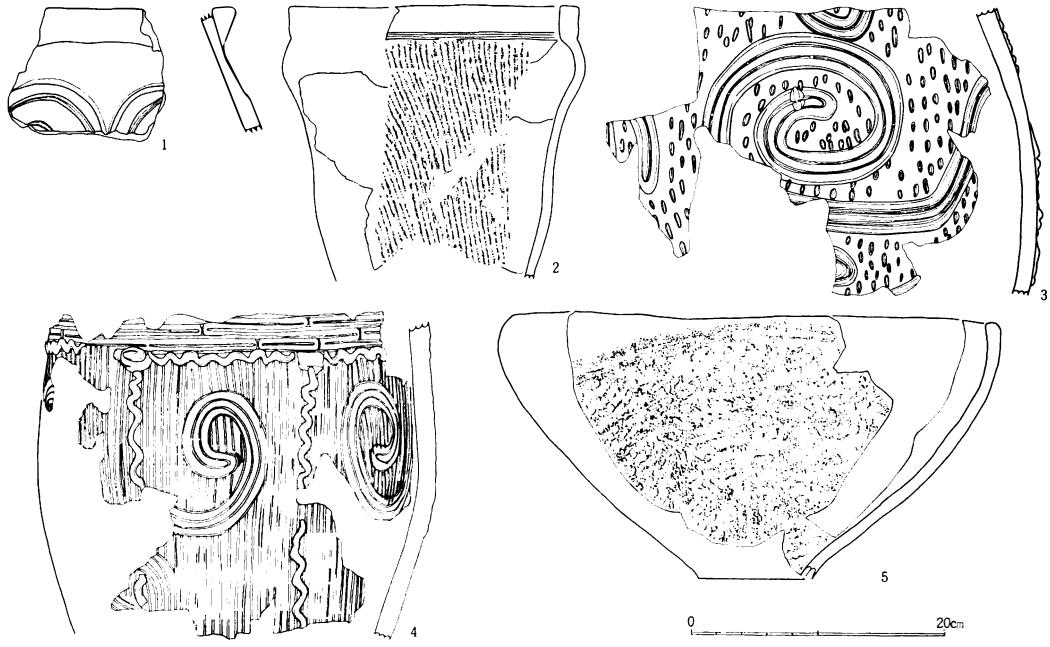


図39図　12号住居址炉

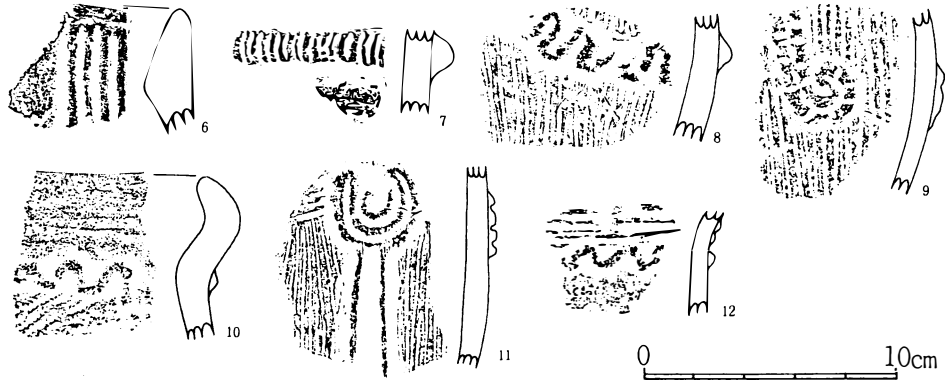
土器

1.　10号住居址の炉石に接して出土しており、10号住居址の出土遺物で、時期の判断可能な唯一の資料である。有孔鍔付土器。口縁部を欠損しているが、欠損部に小孔の痕跡が認められる。内外面とも赤色顔料が塗布されている。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。　2.　10号住居址覆土出土。深鉢。頸部に1条沈線が巡り、以下に縄文を施文する。推定口径23㎝、現存高21.4㎝。褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成良好。　3.　12号住居址覆土出土。深鉢。列点文を地文とし、粘土紐を渦巻状に貼付する。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。

4.　10号住居址覆土出土。深鉢。頸部には粘土紐を直線的に貼付し、さらに内部に1条の沈線を施す。胴部には粘土紐の蛇行貼付を行う。胴部最大径推定31.4㎝、現存高25.2㎝。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。　5.　床面直上出土。浅鉢。全面に荒い線文が施される。口径38㎝、器高21㎝程度と推定される。褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。



第40図　10号・12号住居址出土土器　その１

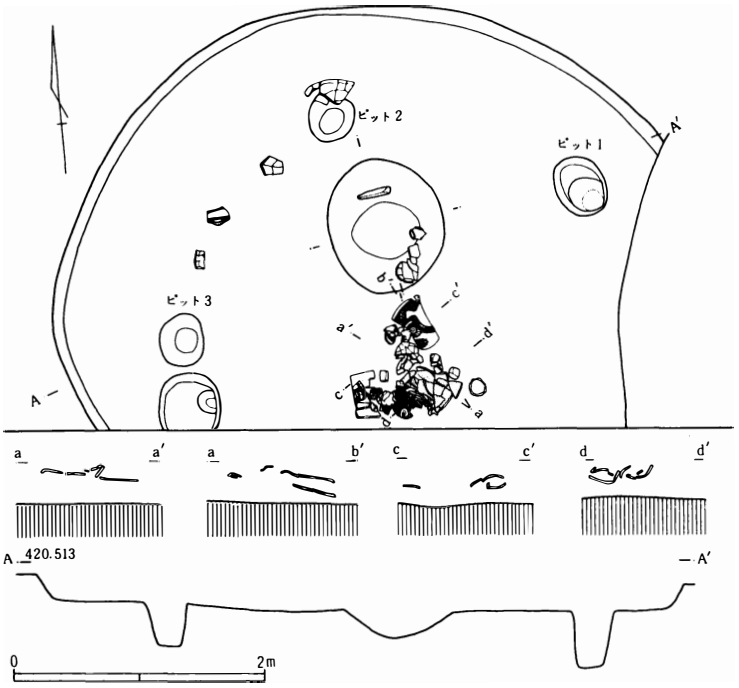


第41図　10号・12号住居址出土土器　その２

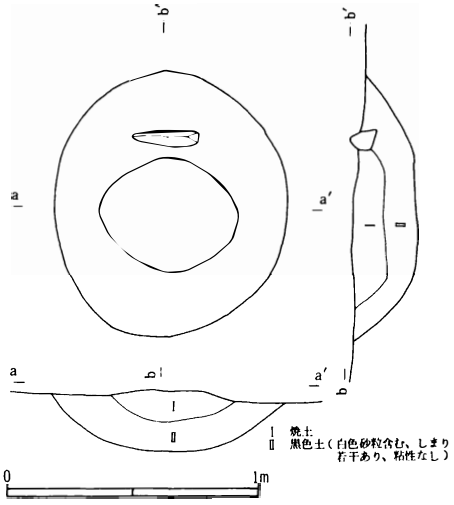
6～12. いずれも10号住居址覆土出土。覆土出土の細片も、井戸尻Ⅲ式～曽利Ⅰ式にかけてのものが多く、代表的なものを第41図に示した。

11. 11号住居址

A－27・28、B－27・28グリッド。一部を４号住居址に切られており、南半は調査区域外である。楕円形を呈する住居址で、短径（主軸と直交方向）は5.3 m程度と推定される。主軸は、南南東－北北西と思われる。床は炉付近も含めて、軟弱な部分がほとんどである。本住居址も確認に手間どり、壁は10cm～20cmを残すのみであった。覆土は暗褐色粘質土の単一層で、上層には焼土、カーボンが多く含まれている。本住居址は５本柱穴と思われ、図中のピット１～３がそれにあたる。また、図示しなかったが、４号住居址中に本住居址の柱穴らしいピットが確認されている。



第42図　11号住居址



第43図　11号住居址炉

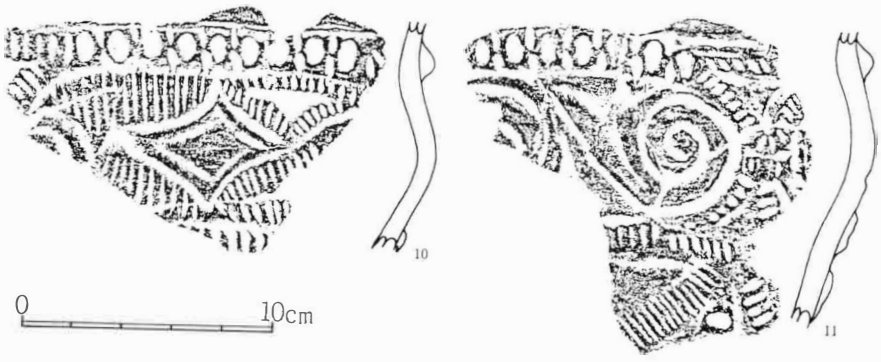
炉は、奥側に20㎝大の石を枕石として用いた地床炉である。100㎝×90㎝の楕円形で、深さ25㎝を測る。焼土層は65㎝×50㎝の範囲に13㎝の深さで形成されていた。

土器

本住居址出土土器はすべて覆土からの出土で、床面直上、炉内出土は一点もない。

1.　深鉢。口縁がやや屈曲する器形で、緩い屈折底となる。1単位の小突起を有する。全面に縄文が施される。口径24.6㎝、器高41.8㎝、底径14.8㎝を測る。褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。内面下半の底部にちかい部分にススが付着している。　2.　深鉢。1単位の突起を有する。口縁下に直線と波状の隆帯で区画した文様帯を形成し、胴中部以下は、やはり隆帯による抽象文帯を形成している。底部は弱い屈折底となる。口径20.5㎝、器高39.5㎝、底径10.7㎝を測る。褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。上半部は非常に丁寧に磨かれているが、下半は雑で、とくに外面は、形成時の指頭痕が無文部に残っている。また内面下半にはススが付着しており、外面上半が黒変している。　3.　深鉢。文様構成は1に酷似する。ただし、胴中部以下の文様帯には、縄文を施し、文様空白部を埋めている。また、器形も類似する。やはり、外面上部の磨きは非常に丁寧である。口径23.5㎝、器高46.4㎝、底径14㎝を測る。内外面のスス付着状況、黒変状況は1と全く同じである。褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。　4.　深鉢。1・2に類似した器形である。いわゆるミミズク把手を有する。口縁下～底部屈折部まで全面が区画文帯となり、図示できなかったが、人体文モチーフがみられる。（図版40参照）口径24.3㎝、器高44.5㎝、底径15.3㎝を測る。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、雲母が目立つ。焼成良好。やはり、内面下半が黒変している。　5.　深

第44図　11号住居址出土土器　その 1



第45図　11号住居址出土土器　その 2

鉢底部。底径 10.3㎝。褐色を呈し、胎土は精選されており、焼成も良好である。　6・7. 浅鉢。いずれも口縁が内彎する。7は口縁内彎部のみ縄文が施されている。磨きは丁寧である。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良好。　8・9. 同一個体である。おそらく、同一土器、同一部位の表裏面の破片と思われる。施文は極めて丁寧で、磨きも良好である。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成良好。

2. 土坑と出土土器

本遺跡では 113 基の土坑、集石土坑が確認、調査された。出土遺物からほとんどが縄文時代と考えられ、中期が最も多いと思われる。以下に完形土器を出土した土坑を中心に、概要を述べることとする。

1. 56号土坑

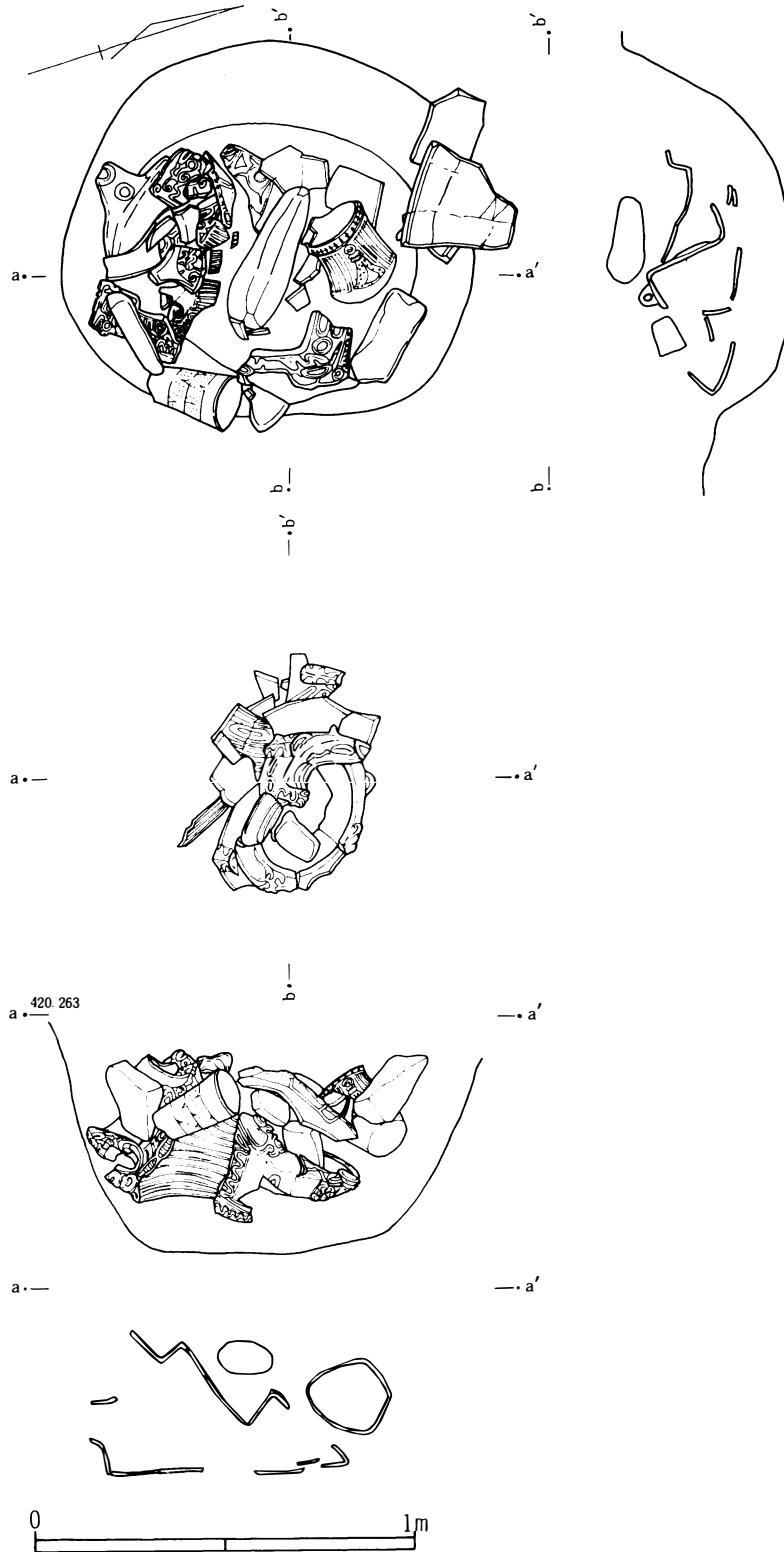
A－26グリッド。掘り込みの平面形は円形（100㎝×110㎝）を呈し、確認面からの深さ60㎝程度と推定される。内部に4個体の土器を埋納したのち、20㎝～30㎝大の石で周縁を囲んだものと思われる。中央にみられる石も土器の上に乗るかたちであり、石囲いに用いられたものであったと考えられる。

土器は、最も大きいものが横倒しとなった状態で潰れ、別個体は、胴下半を下にしており、埋納段階では立てられていた可能性があるが、後述するように、幅60㎝を超えるものが2個体あり、土坑スペースを考えると、すべてを立てることは不可能となる。あるいは割れた土器を埋納したものであるかもしれない。

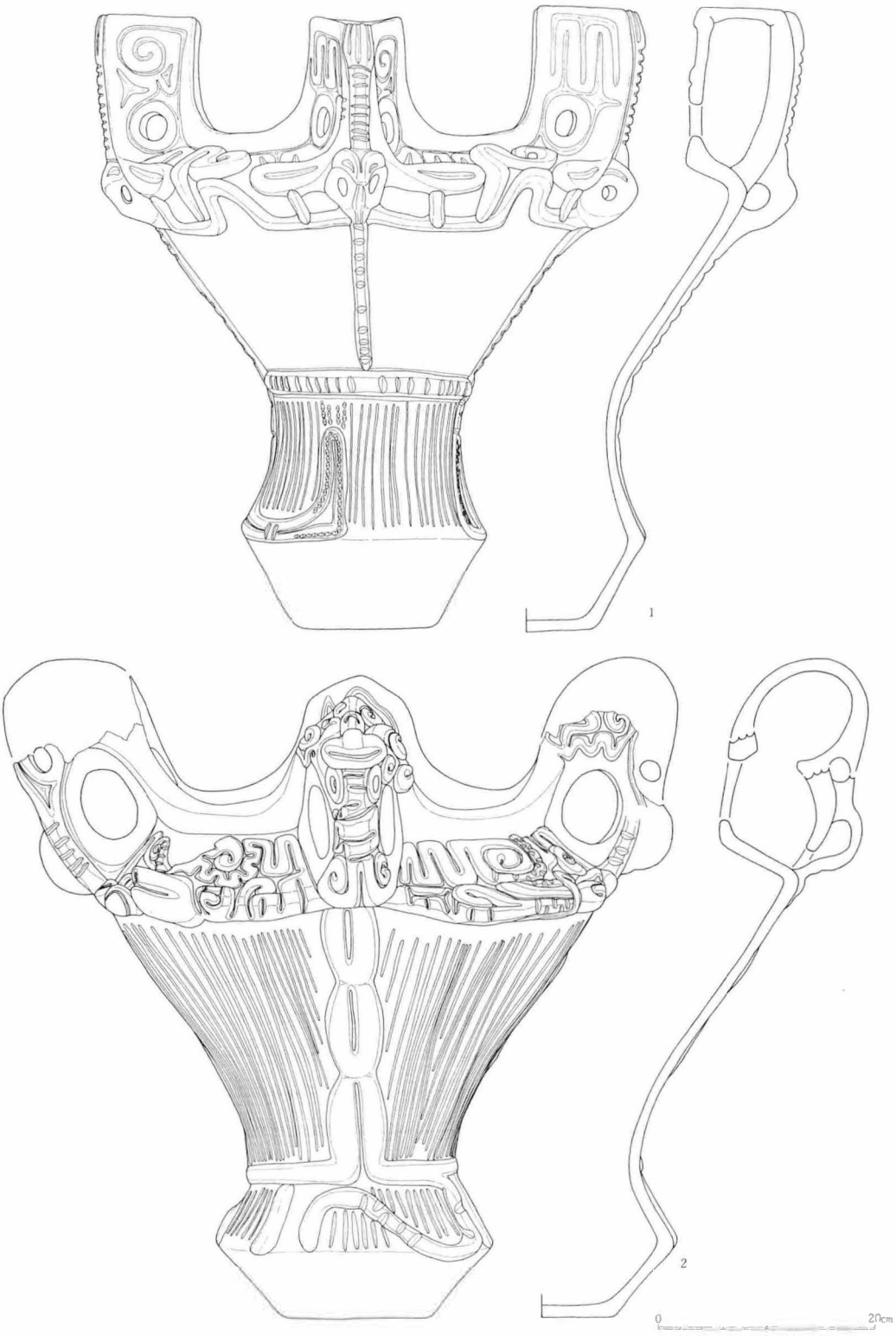
土器（第47図・48図）

1.　4単位の中空把手（塔状把手）を有する屈折底の大型深鉢である。把手部外径(最大径)51㎝、胴屈曲部外径（最小径）17.5㎝、器高56㎝、底径12㎝を測る。最大径と最小径の差が極端に大きい。各把手には蛇体装飾がみられ、それが隆帯となって胴部に垂下し、胴部も4分割される。また、最小径部から底部屈折部にかけても文様帯が形成される。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成も良好であるが、把手部は焼成が不良である。なお、内面底部屈折部以下にススが付着している。　2.　1と同様の器形をもつ大型深鉢である。ただ、全体のバランスは1に比べて悪く、底部が極端に小さい感じを受ける。胴上半部の張り出しが、他の同形態のものに比べて非常に強く、また中空把手自体も巨大で、頭でっかちな印象が強い。口縁屈曲部（肩部）には獣面一対と蛇体装飾一対がみられる。また、1とは違い胴上半の隆帯垂下部は条線で空白部を埋めている、推定最大径63㎝、最小径20㎝、器高59㎝、底径13㎝を測る。明褐色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。やはり底部屈折部以下にススが付着している。　3.　円筒形深鉢。口径13㎝、現存高24㎝。胴部には2本で1単位の沈線が3条巡り、全体としては4段区画となっている。このうち、中間の二段が文様体となり、内部は、三角形状の沈線区画あるいは削り取り区画を異方向に配し、渦巻状沈線とペン先状工具による刺突で埋めている。褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成も良好である。整形はやや雑で、内面に輪積み痕が残り、磨きも丁寧ではない。なお、内面は黒変している。　4.　キャリパー形を呈する深鉢で、底部を欠損している。4単位の中空把手を有するがすべて欠損している。しかし、把

手間に配される4単位の小突起は残存しており、粘土紐貼付による渦巻装飾がみられる。これから延びる粘土紐は中空把手に続いており、中空把手も渦巻文であったと考えられる。また、把手からは、胴部に中空の隆起帯がつづき、基本的に胴部も4分割されることとなる。胴下半は、撚糸文を地文とし、粘土紐の蛇行貼付がみられる。黄褐色を呈し胎土は精選されているが、当地で一般的にみられるものとは質感が違い、文様等からも他地域からの搬入品と考えられる。おそらく、北関東系大木8a式土器の分布圏外縁部で製作され、当地方へ搬入されたものと思われる。また、4単位の大渦巻把手の存在は、次段階で登場する曽利I式大渦巻把手土器との関連を想起させる。井戸尻Ⅲ式土器自体には、



第46図　56号土坑



第47図　56号土坑出土土器　その1

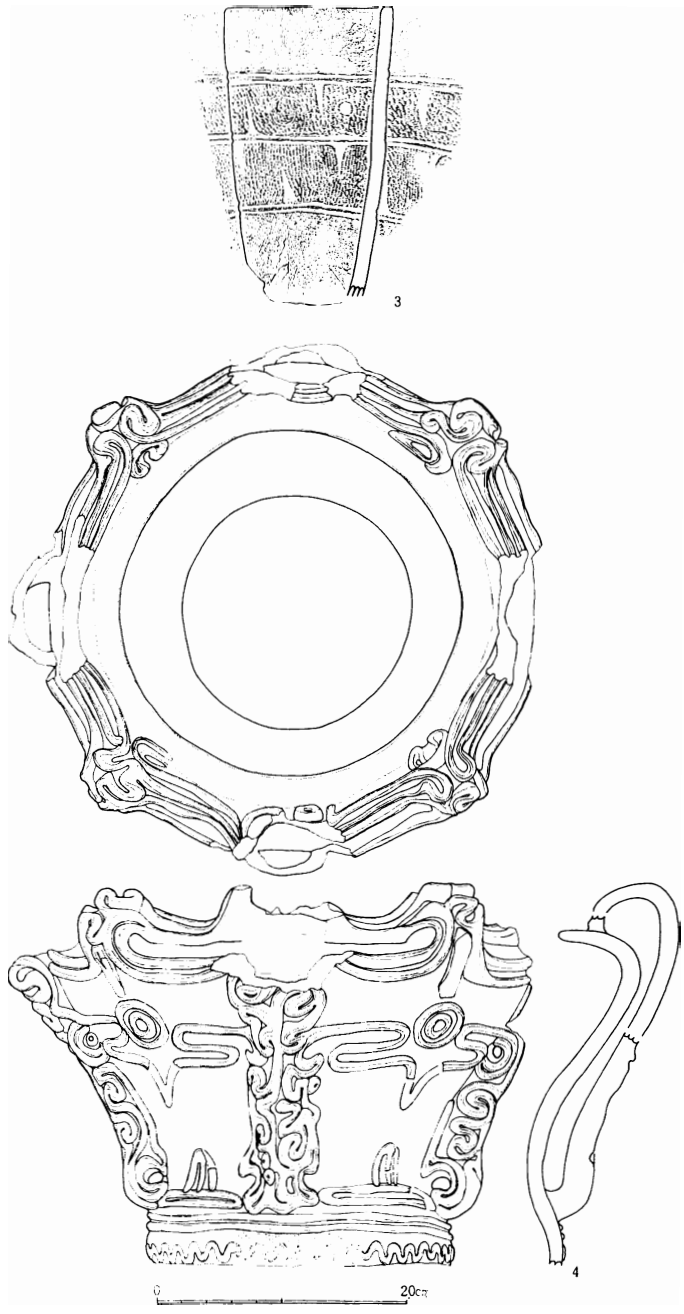
このような大渦巻把手を構成する要素は現在までのところみられないのである。焼成は良好で、外面上半部にはスス状の黒色付着物がみられるが、その一部には光沢があり、あるいは黒色塗料を塗布したものであるかもしれない。

2. 46号土坑

A－22グリッド。井戸尻期の土坑が集中する部分で確認されている。110㎝×100㎝の楕円形を呈し、確認面からの深さ60㎝を測る。遺物は、破片で出土しており、土坑底面より20㎝～50㎝浮いた状態である。

土器（第51図1）

4単位の突起をもつ大型の深鉢で、少なくとも突起の一つは、ブリッジ状の把手となる。施文は、幅広の隆帯が主で、ヘラ等による種々の刻みを施す。この隆帯は胴部下半にまで及んでおり、とくに文様帯は形成されていない。また、頸部には一条の隆帯が巡り、胴部文様も口縁突起に対応して4単位となる。推定口径38㎝、現存高53㎝。褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。なお、内面及び、外面の頸部より上部は丁寧に磨かれているが、外面頸部以下の施文部以外は全く磨きが行われておらず、表面が荒れている。



第48図　56号土坑出土土器　その2

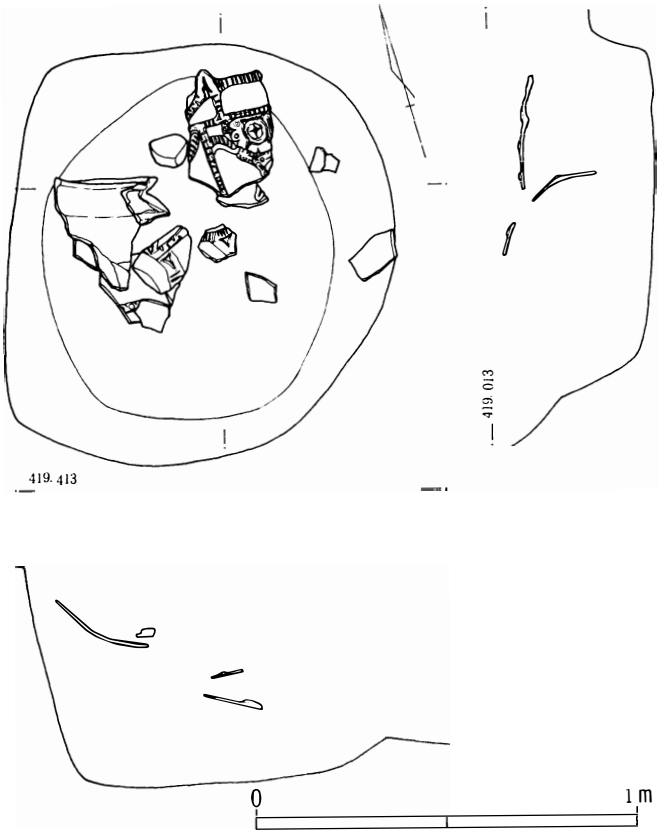
3. 93号・94号土坑

B－25グリッド。93号土坑は、94号土坑に一部切られているが、楕円形を呈し、長径推定110㎝、短径80㎝、確認面からの深さ40㎝を測る。94号土坑は、長楕円形を呈するが、主軸が

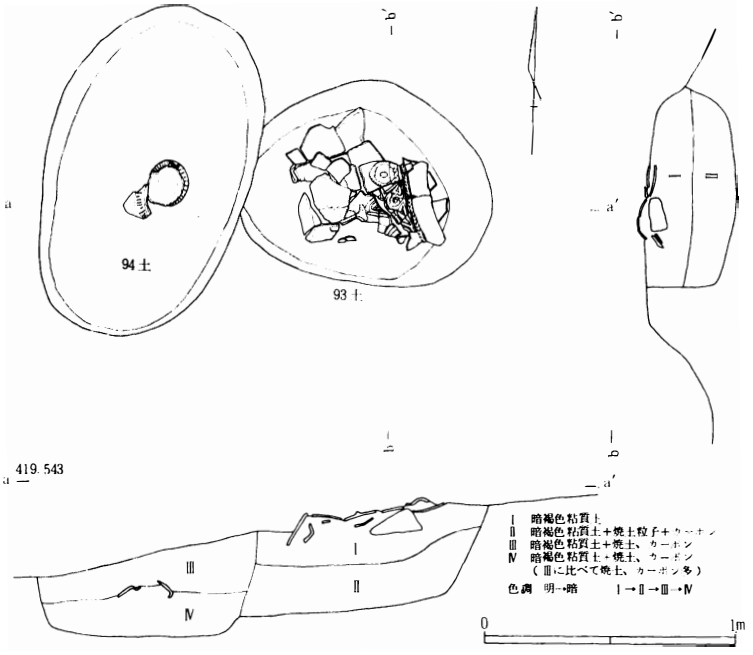
93号土坑とほぼ直交する方向に構築されている。長径140㎝、短径80㎝、確認面からの深さ40㎝を測る。ともに覆土は暗褐色粘質土を主体とし、焼土粒子、カーボンを含み、よくしまっていた。遺物は、覆土からの出土であるが、とくに93号土坑出土土器は土坑上面を覆うようなかたちで、最上面から出土している。

93号土坑出土土器(第51図2)

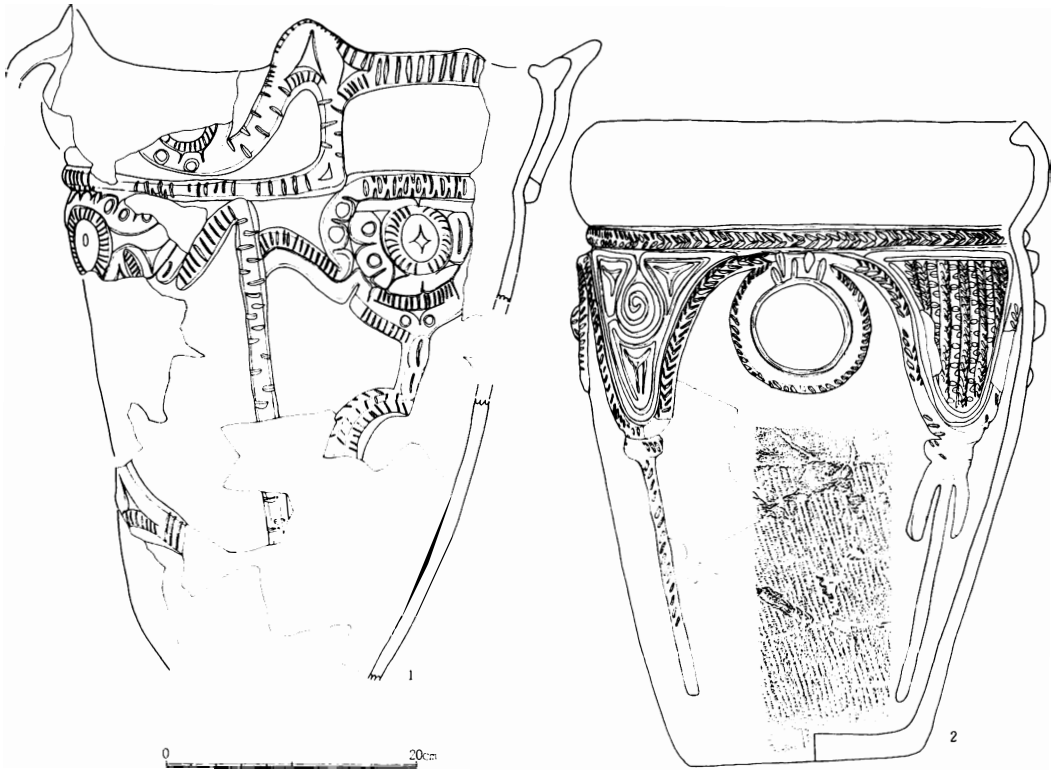
胴張りの大型深鉢である。口縁はやや膨らみをもち、口唇が内部に張り出す。口縁は無文で、把手、突起は付かない。頸部に一条隆帯が巡る。施文は、隆帯による三角形区画とその間の円文、及び三角形頂部から胴下半に垂下する隆帯が中心で、三角形頂部以下は、撚りの細かい縄文が施される。本資料は、整形、施文が丁寧に行われており、とくに口縁部の磨きが丁寧である。口径33.5㎝、最大径38㎝、底径18㎝、器高50.5㎝を測る。胴上半は褐色、胴下半は赤褐色を呈し、火熱の痕跡が明瞭である。胎土は精選されているが、雲母が目立つ。焼成は良好。なお、94号土坑出土土器については後述する。



第49図　46号土坑



第50図　93号・94号土坑



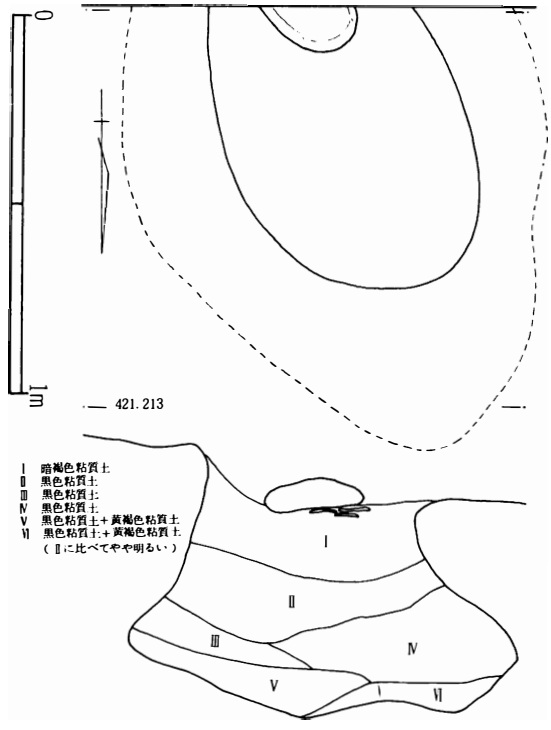
第51図　46号・93号土坑出土土器

4.　40号土坑

A－30グリッド。袋状を呈する土坑で、調査区域外に半分延びると思われる。開口部は楕円形を呈し、短径60㎝を測り、長径は100㎝程度と推定される。土坑底面も不整楕円形を呈し、短径110㎝、長軸は160㎝～170㎝と推定される。確認面からの深さ60㎝を測る。底面には小ピットは確認されていない。覆土は、黒色粘質土を主体とし、底面ちかくでは、黄褐色粘質土がブロックとなって混入していた。

遺物は、石皿と、土器が重なって1点づつ出土しているが、土坑上面に土器を乗せ、さらに石皿で覆ったと思われる。

土器（第58図1）



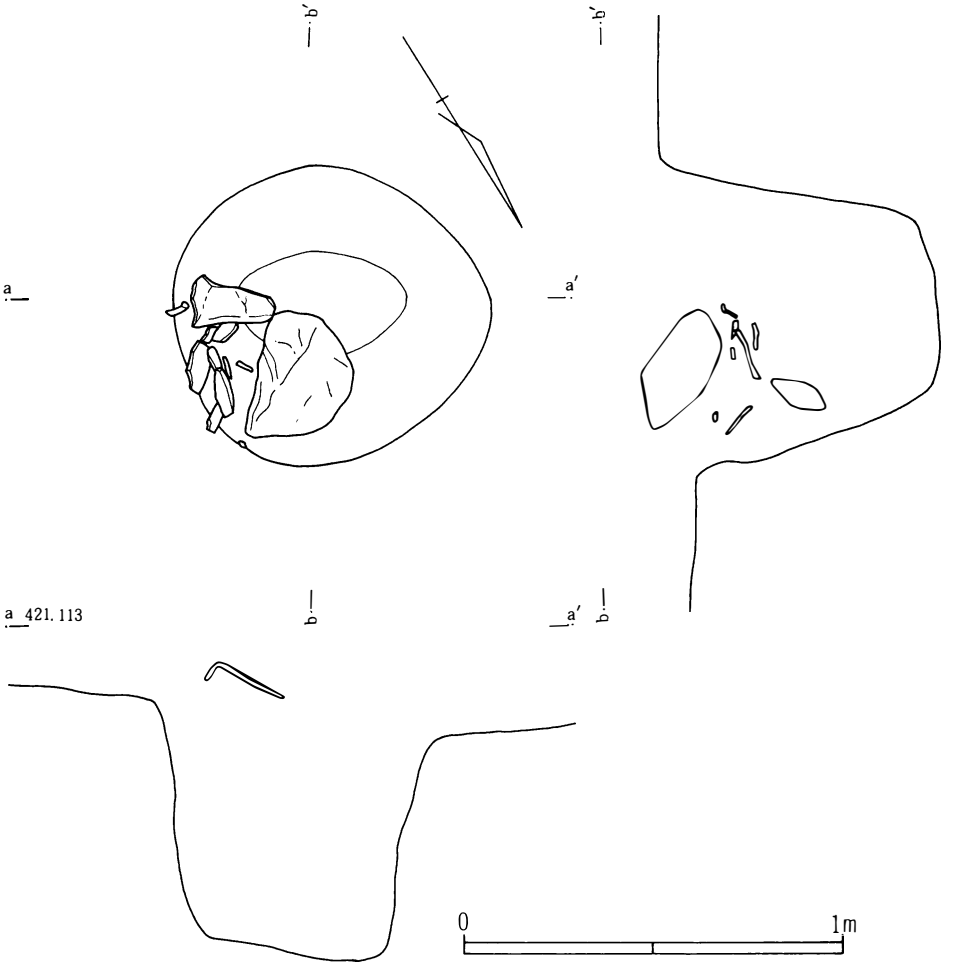
第52図　40号土坑

浅鉢。口縁が内彎し、底部は台状に張り出している。口唇、口縁、底部屈曲部にそれぞれ粘土紐を貼付して隆帯を構成し、隆帯上にはヘラ状工具により、綾杉状の刻みを施している。胴部は半截竹管によって孤線、直線の区画を描き、内部に三角、円文様を施文している。玉抱き三叉文である。本資料は非常に薄いつくりであり、内外面に赤色顔料が塗布されているが、とくに外面の残存状態は良好である。底面は内外面とも顔料が塗布されていなかったと思われるが、底部内面は灰褐色を呈する。胎土は精選されており、焼成も良好である。本資料も、該期の当地方の資料に比べると胎土の粒子が細かいものであり、他地域からの搬入品の可能性がある。口径24㎝、最大径 26.5㎝、底径17㎝、器高 12.3㎝を測る。

5. 76号土坑

C－33グリッド。楕円形を呈し、長径90㎝、短径80㎝、確認面からの深さ70㎝を測る。内部からは、30㎝大の石と土器2個体が出土しており、土器は土坑底面より45㎝～70㎝浮いての出土である。

土器（第58図2・3）



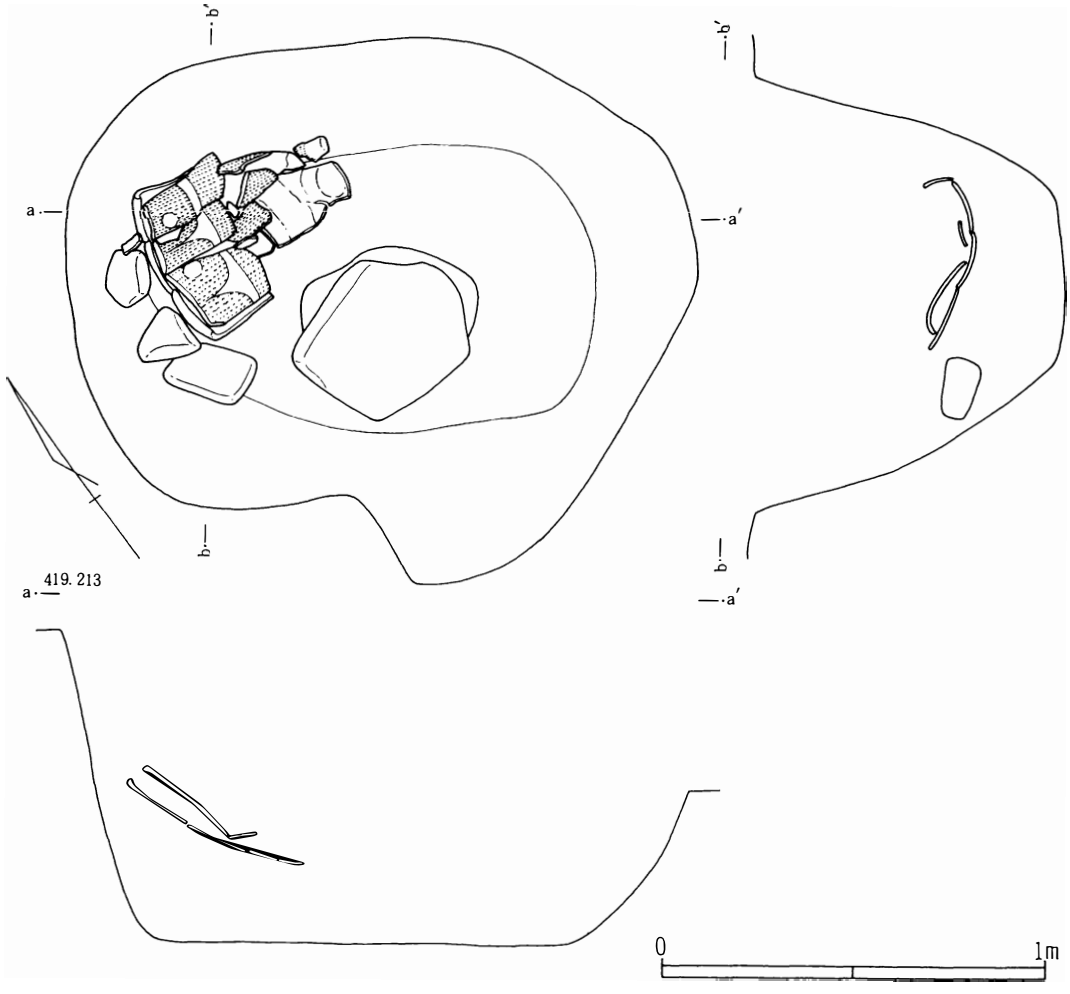
第53図　76号土坑

2.　深鉢、胴上半部欠損、3条の沈線文帯がみられ、その上下は地文が縄文である。底部も欠損しているが、下半のカーブからやや張り出した底部と思われる。推定底径7.5㎝、現存高15.5㎝。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。　3.　4単位の波状口縁をもつ大型の深鉢。胴中位でややくびれ、下半は緩やかな膨らみをもつ。内彎する口縁部と口縁部下8㎝程度の部分まで目の荒い縄文を施す。胴中位以下は磨きがなされるが、下半には、縦方向の削りも行われていたようである。褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成良好。

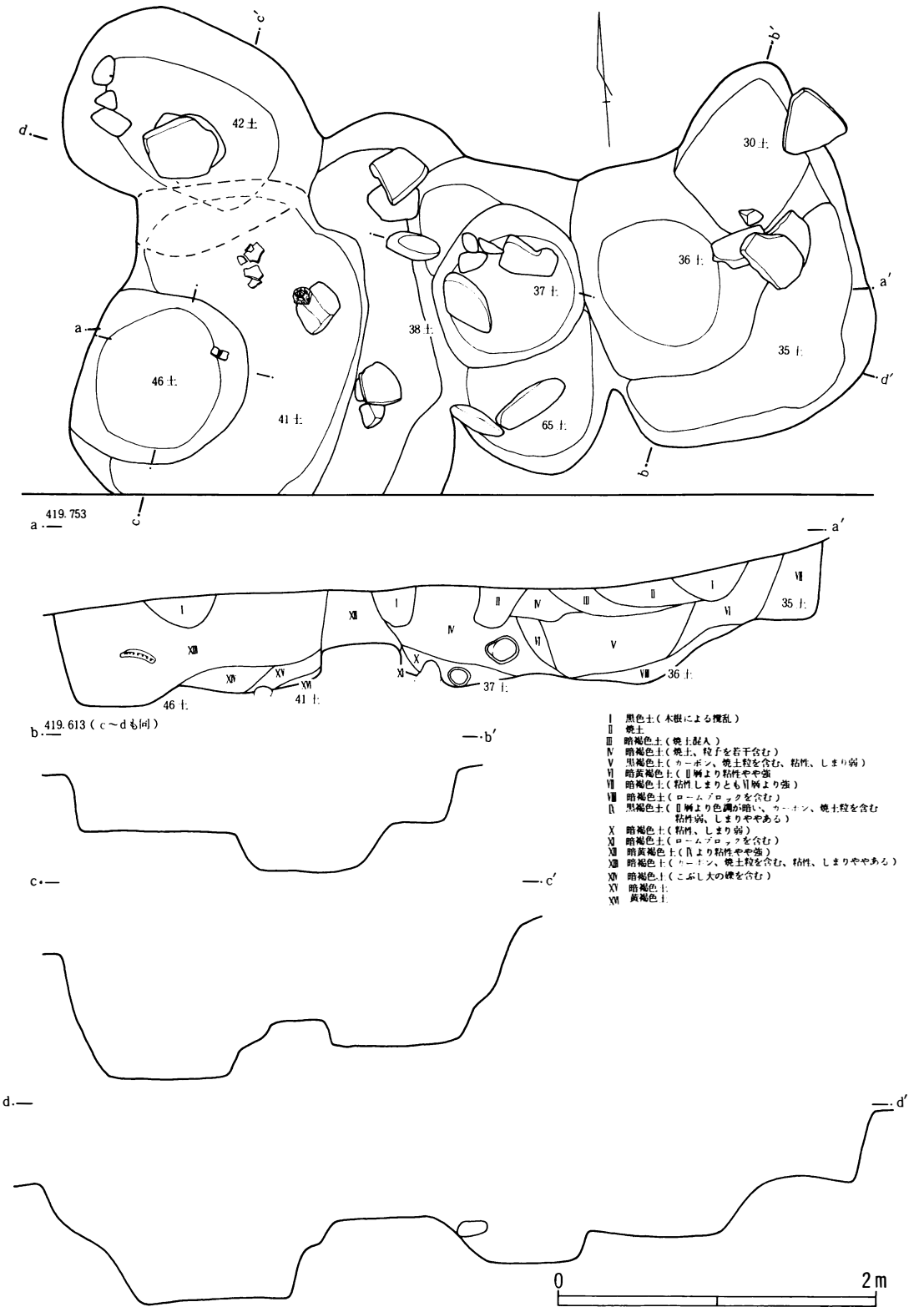
6.　42号土坑

A－22グリッド。41号土坑と切り合うが、その前後関係は不明である。ただ出土土器からは、本土坑が、41号土坑より古い可能性が強い。本土坑を含めたA－22グリッドには井戸尻期を中心に土坑が集中しており、複雑に切り合っている。その位置関係は第55図に示しておく。

さて、本土坑は楕円形を呈し、長径165㎝、短径120㎝、確認面からの深さ80㎝を測る。中央に土坑底面に接するように40㎝大の平石2枚が重ねられ、その脇にほぼ完形の土器1個体が、土坑壁に倒れかかるように潰れていた。また、土器の横には10㎝～20㎝大の石3個が確認され



第54図　42号土坑



第55図　30号・35号～38号・41号・42号・46号・65号土坑位置関係図

ている。

土器（第58図４）

円筒形を呈する大型の深鉢。口縁と胴部に円形の貼り付けがみられ、隆帯によって連結される。それ以外の部分は全面細かい縄文が施されるが、胴上部に２㎝ほどの幅で器面を削り取った無文帯が存在する。この部分からは、さらに上部に向って鋭角に削り取り部分が延び、結果として上部縄文帯に区画をつくることとなっている。口径30.5㎝、底径11.5㎝、器高48.8㎝を測る。上半暗褐色、下半赤褐色を呈する。二次焼成によるものであろう。また、上半にはスス状付着物もみられる。胎土には砂粒を含み、焼成も良好である。

7.　65号土坑

第56図　37号・65号土坑

Ａ－22グリッド。37号土坑が古く、65号土坑が新しいと思われる。この２基の切り合いは断面によっては観察できなかったが、遺物を含めたエレベーションから37号土坑埋没後、浅く65号土坑が掘り込まれたと思われる。

65号土坑は、楕円形を呈すると思われ、長径120㎝、短径110㎝程度と推定され、確認面からの深さ60㎝を測る。覆土は暗褐色粘質土を主体に焼土粒子、カーボンが混入していた。遺物は土坑底面にちかい部分から土器上半部が出土しているが、土器を囲むように40㎝大の円柱状の石２個が置かれていた。確認された石は２個だけであるが、90度の角度で接しており、おそらく、石４個を用いて四隅を囲っていたものと思われる。

土器（第58図５）

深鉢上半部で、底部は屈折底になると思われる。口縁部には、把手１単位と、対面に小突起を有する。この把手は、動物意匠で、イノシシを表現したとの指適もある。本資料は口縁屈曲部に半周だけ該期に一般的な楕円形貼付文がみられるが、対面にはそれが全くない、極めて特異な例である。口径18㎝、最大径31㎝、現存高25㎝。褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。

8.　37号土坑

Ａ－22グリッド。不整円形を呈し、長径100㎝、短径90㎝、確認面からの深さ80㎝を測る。覆土は、暗褐色土を主体とし、上層はよくしまっている。下層は上層に比べ、やや明るく、壁際には黄褐色粘質土がブロック状に混入する。いずれも、焼土粒子、カーボンを含む。

土坑内からは土器２個体のほか、平石数点が出土しているが、とくに土坑底面に接して、20㎝大の平石が確認されている。また、土器２点のうち１点は、ほぼ完形で、底部がほとんど土坑底面に接する状態で出土し、もう１点も、平石上部で潰れており、いずれも立てられていた可能性がある。

土器（第59図１・２）

1.　平石上部で潰れていた大型の深鉢。屈折底を有し、肩部で屈曲し、再び口縁が外反するという特異な器形をもつ。文様帯は肩部と、胴下半とに分かれる。肩部文様帯は、口縁にかけて４単位の獣面把手が中心となり、その間に粘土紐をＵ字状に連続して貼付したものである。把手からは底部の屈折部にかけて隆帯が垂下し、胴部を４分割する。隆帯上には、棒状工具を押しつけての潰しがみられる。胴下半は隆帯を中心に、その間を条線で埋めるものである。整形、磨きとも丁寧に行われている。口径40㎝、最大径47.5㎝、底径14.5㎝、器高53.6㎝を測る。内面及び外面上半は黒褐色を呈し、底部屈折部以下は赤褐色を呈しており、火熱によるものと思われる。胎土には小砂粒を多く含み、焼成も良好である。　2.　４単位の突起を有する屈折底の深鉢である。出土時点では、突起の１つが破損し、胴部にヒビが入っている程度で、ほぼ完形であった。本資料も１と同様に文様体が上下に分かれる。低い隆帯の貼付が施文の主要素であり、ヘラ状工具による沈線施文を合わせた渦巻抽象文、楕円文等を描いている。最小径部には隆帯を１条巡らせ、以下屈折部まで、条線で満たす。口径21㎝、最大径32.5㎝、底径12㎝、器高36㎝を測る。やはり、整形、施文など丁寧なつくりである。茶褐色を呈し、胎土は精選さ

れている。焼成も良好であるが、口縁突起部は焼成不十分であった。

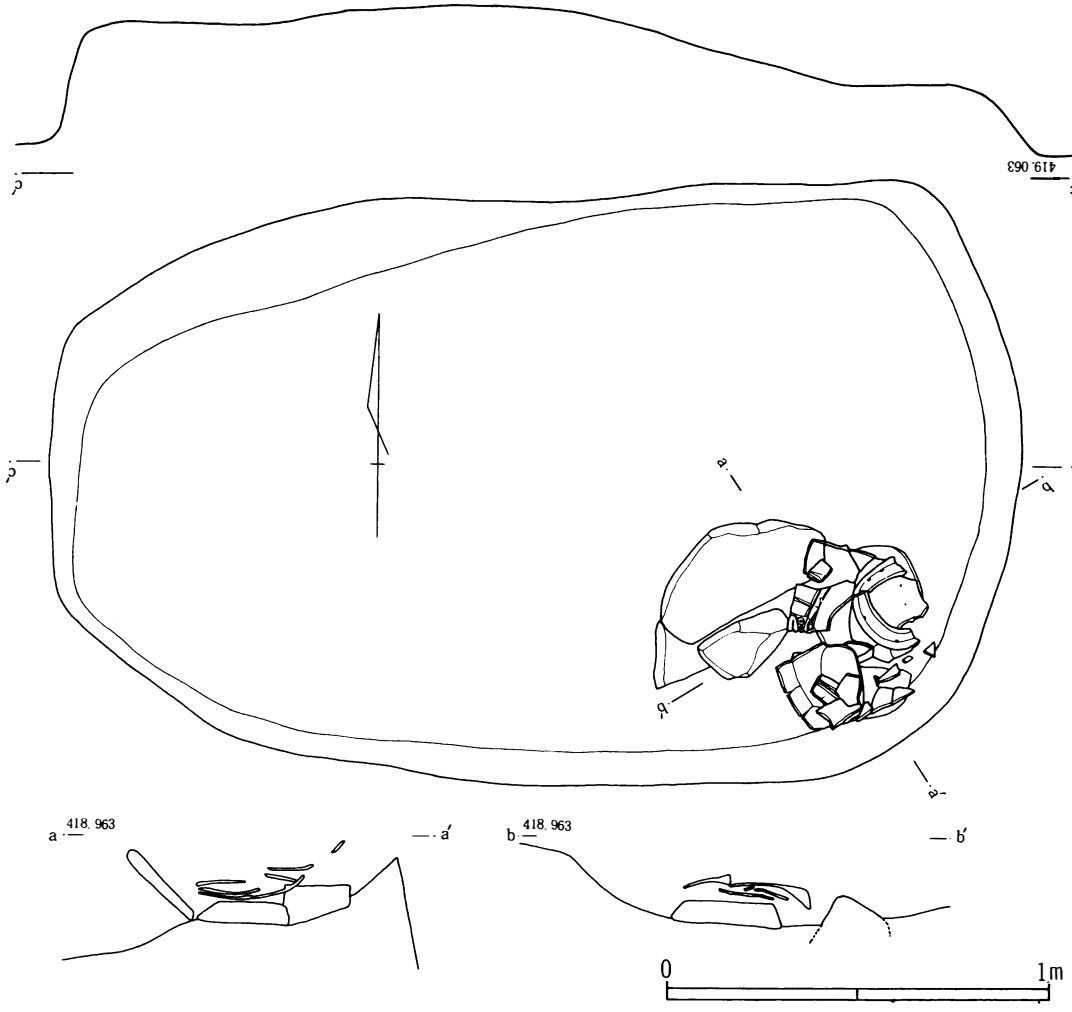
9. 48号土坑

C－44グリッド。長楕円形を呈する土坑で、長径（ほぼ東西）255㎝、短径155㎝、確認面からの深さ30㎝を測る。

遺物は、南東隅に集中している。土坑底面に接して30㎝大の平石が置かれ、その上部に土器1個体が潰れていた。

土器（第57図3）

有孔鍔付土器である。非常にバランスのとれた樽形を呈し、胴部に一対の獣面突起と一対の蛇体突起を有する。そのため、胴部は4分割され、突起間はU字状あるいは直線の沈線で満たされている。これらの施文は丁寧に行われており、剥離も全くみられない。また鍔の貼り付け、穿孔も良好で、小孔に擦痕はみられない。さらに全面の磨きが非常に丁寧であり、部分的に光沢もある。口径15㎝、最大径（突起間）34.5㎝、底径12.2㎝、器高33.2㎝を測る。推定容量11



第57図　48号土坑

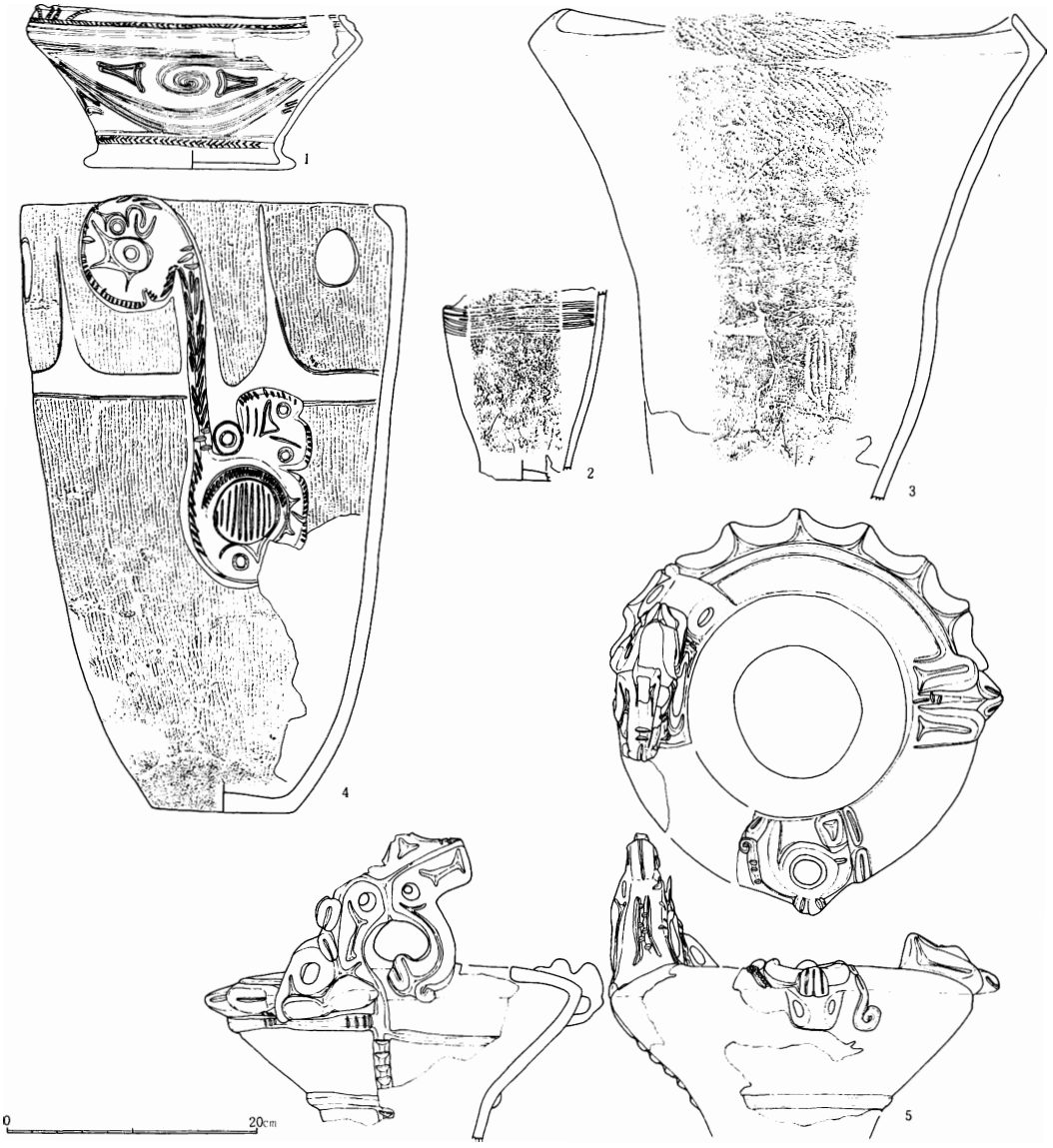
ℓ。外面赤褐色を呈するが、内面は全面黒変している。胎土は精選され、焼成も良好である。なお、この種の土器にみられる赤色顔料は、本資料には塗布されなかったようである。

10. 77号土坑

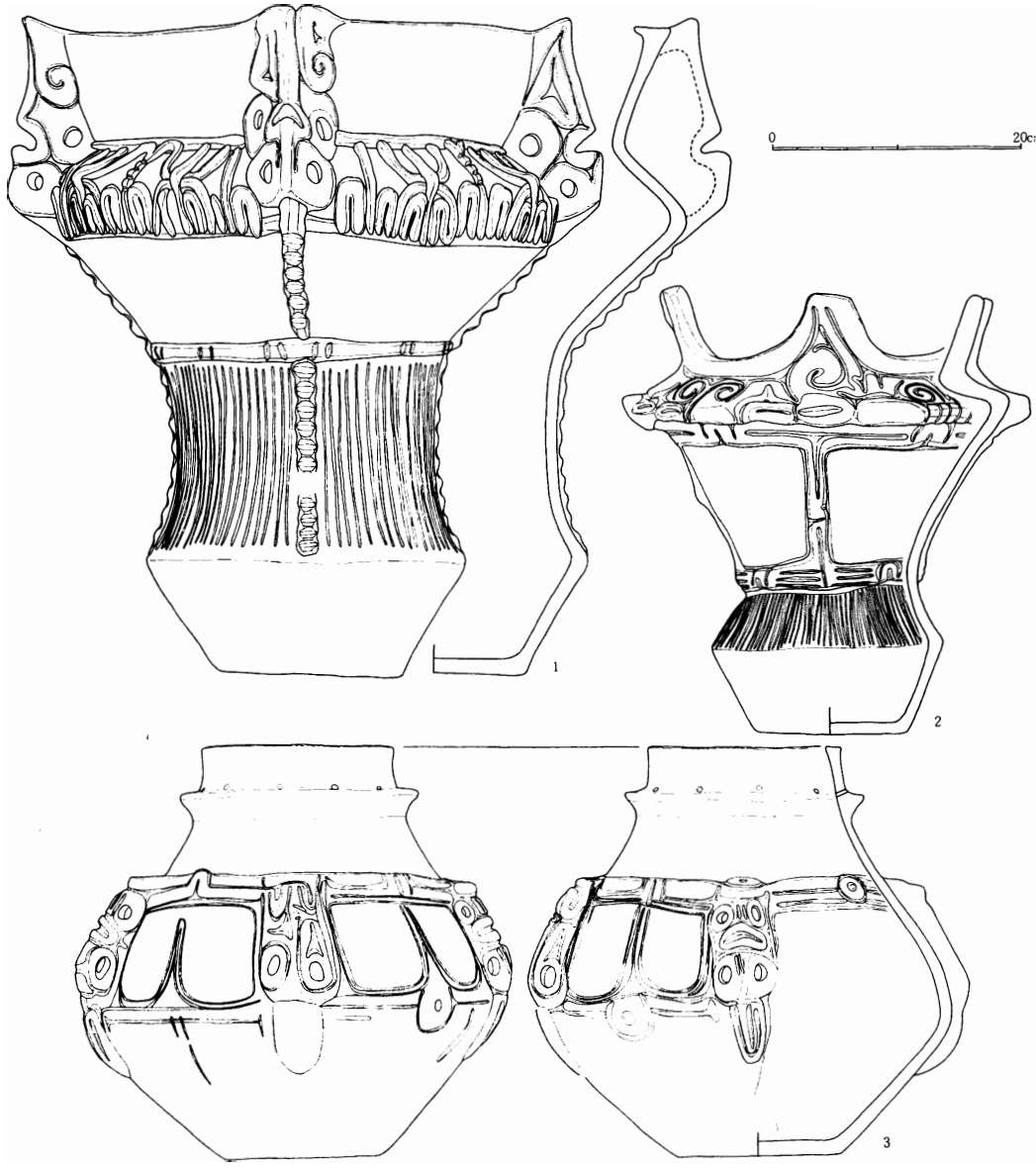
B－34グリッド。7号住居址と切り合うが、切り合い関係は不明。楕円形を呈し、長径130㎝、短径90㎝、確認面からの深さ50㎝を測る。

本土坑内部からは何の遺物も出土していないが、確認面より10㎝浮いて、土坑内にかかる状態で土器1個体が潰れていた。これが、本土坑に伴うものであるとすれば、土坑の端に立てられていた可能性が強い。

土器（第61図）



第58図　40号・42号・65号・76号土坑出土土器



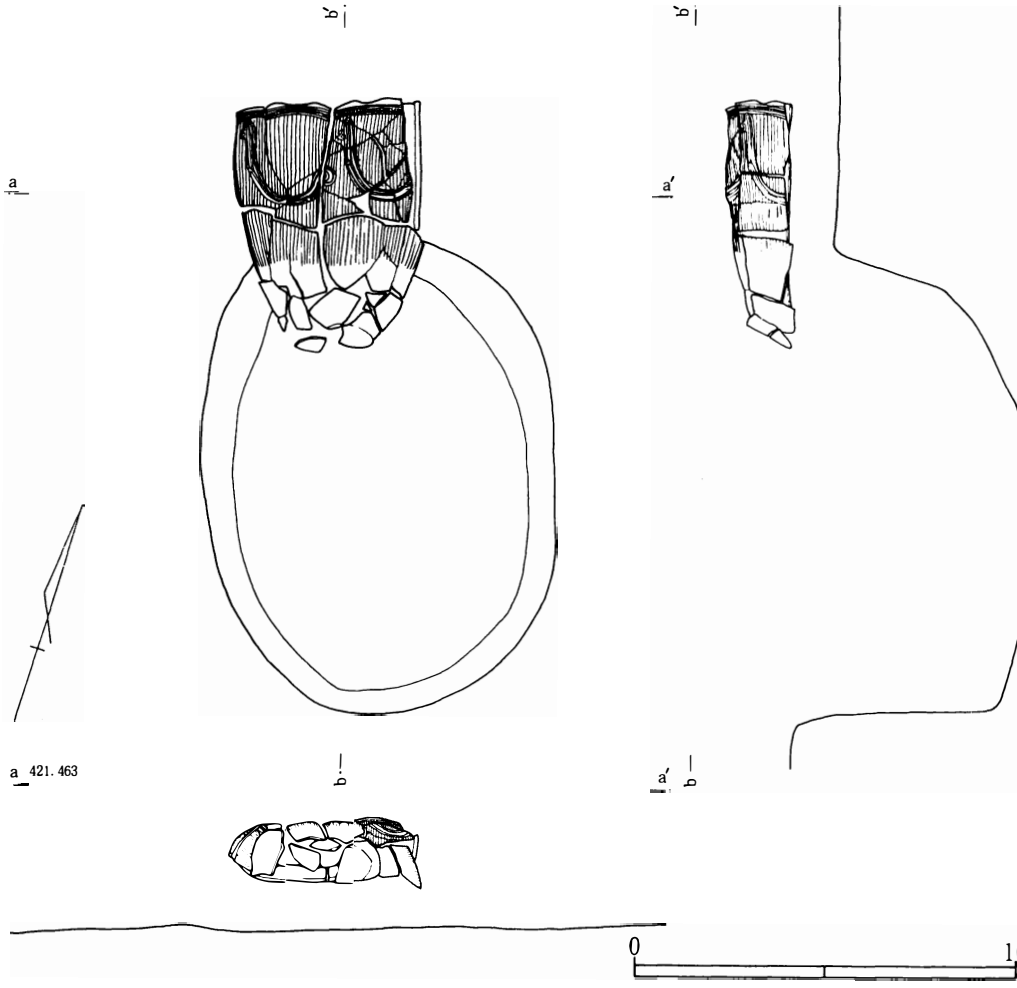
第59図　37号・48号土坑出土土器

口縁部欠損の深鉢。頸部に粘土紐を直線に３条貼付し、中段には半截竹管による連続押し引きを施す。胴部にはやはり粘土紐をＵ字状に３条づつ貼付し、数ヶ所を連結している。また、胴部には最大径部まで細い条線を施している。最大径32㎝、底径14㎝、現存高57㎝。暗褐色を呈するが胴下半は明褐色である。胎土には砂粒を含み、とくに雲母が目立つ。焼成良好。本資料には磨きが全くみられず、内面は整形時のナデがそのままで、外面下半は、ナデも雑である。

11. その他の土坑

○１号～５号・12号土坑

Ｃ－６グリッド。１号土坑：楕円形を呈し、長径180㎝、短径110㎝、深さ40㎝を測る。覆



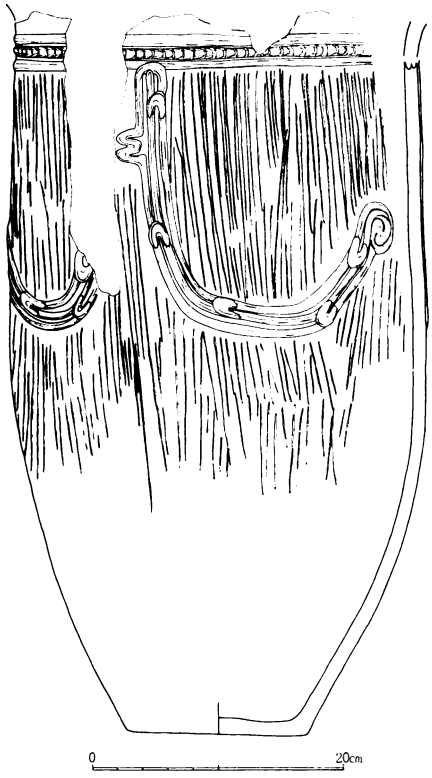
第60図　77号土坑

土は暗褐色土を主体とし、焼土、カーボンが混入するが、最上部には焼土層が形成されていた。内部からは平石、土器片が出土している。なお底面端に小ピット１基を有する。　２号土坑：袋状を呈するが、北関東のいわゆる袋状土坑とちがい、底面に最大径をもたず、中胴部が最大となる。開口部は径40㎝の円形を呈する。底径は30㎝、最大径65㎝、深さ50㎝を測る。　３号土坑：２号土坑と同様の形態で、開口部25㎝、底径20㎝、最大径45㎝、深さ60㎝を測る。　４号土坑：円筒形を呈し、径105㎝、底径80㎝、深さ50㎝を測る。　５号土坑：２号土坑と同様の形態で、開口部径50㎝、底径40㎝、最大径70㎝、深さ50㎝を測る。

○６号・７号・20号土坑

Ａ－６、Ｂ－６グリッド。６号土坑：不整円形を呈し、長径150㎝、短径130㎝、深さ30㎝を測る。遺物は底面より約５㎝浮いての出土である。　７号土坑：楕円形を呈し、長径130㎝、短径100㎝、深さ40㎝を測る。　20号土坑：円形を呈し、直径70㎝、深さ30㎝を測る。

○８号土坑



第61図　77号土坑出土土器

不整円形を呈し、長径120㎝、短径100㎝、深さ40㎝を測る。壁の立ち上がりは緩やかである。

○9号・10号土坑

B－11グリッド。9号土坑：不整円形を呈し、長径140㎝、短径110㎝、深さ60㎝を測る。底面より約10㎝浮いて平石が確認された。　10号土坑：不整円形を呈し、長径推定120㎝程度、短径100㎝、深さ40㎝を測る。底面端に小ピット1基が確認された。

○11号土坑

A－13グリッド。円形を呈する浅い土坑で、径100㎝、深さ10㎝を測る。後述するように、浅鉢、深鉢各1個体が土坑底面に接するように出土している。

○13号・14号土坑

A－14グリッド。13号土坑：不整長円形を呈し、長径120㎝、短径70㎝、深さ80㎝を測る。底面中央部に小ピット1基が確認された。　14号土坑：ほとんどの部分が調査区域外に延び、極く一部の調査であるが、確認部分での径180㎝、深さ20㎝を測る。

○21号土坑

B－3グリッド。楕円形を呈し、長径130㎝、短径110㎝、深さ60㎝を測る。底部はドーム状をなし、平坦部はない。

○22号土坑

C－5グリッド。円形を呈し、径150㎝、深さ50㎝を測る。壁の立ち上がりは緩く、土坑底面は平坦である。

○23号土坑

C－3グリッド。不整楕円形を呈し、長径210㎝、短径130㎝、深さ30㎝を測る。底面は平坦であるが、段がつき、さらに底部端に小ピット1基を有する。

○25号～28号土坑

A－13、B－13グリッド。25号土坑：不整形を呈し、壁の一部は袋状に迫り出す。長径90㎝、短径60㎝、深さ40㎝を測り、底面は平坦である。　26号土坑：楕円形を呈し、長径90㎝、短径70㎝、深さ50㎝を測る。　27号土坑：楕円形を呈し、やはり壁の一部は袋状をなす。長径60㎝、短径50㎝、深さ50㎝を測る。　28号土坑：楕円形を呈し、長径75㎝、短径65㎝、深さ35㎝を測る。

○29号土坑

C－21グリッド。楕円形を呈し、長径145㎝、短径120㎝、深さ60㎝を測る。土坑底面は平坦で、壁もほぼ垂直に立ち上がる。遺物は平石と土器片が土坑ほぼ中央から出土しているが、

底面より15㎝～50㎝浮いている。

○31号・43号・44号土坑

B－18、C－17・18グリッド。31号土坑：不整円形を呈し、長径130㎝、短径90㎝、深さ35㎝を測る。底面は平坦である。　43号土坑：不整円形を呈し、長径180㎝、短径130㎝、深さ15㎝を測る。皿状の浅い土坑である。　44号土坑：不整円形を呈し、長径250㎝、短径200㎝、深さ35㎝を測る。底面は平坦である。最上部で平石が確認されている。

○32号土坑

C－17グリッド。円形を呈し、径100㎝、深さ45㎝を測る。底面は平坦であるが、中央に10㎝程の小ピットを有する。

○33号・99号・102号土坑

C－19グリッド。33号土坑：楕円形を呈し、長径135㎝、短径100㎝、深さ30㎝を測る。99号土坑：楕円形を呈し、長径140㎝、短径100㎝、深さ10㎝と浅い皿状をなす。大型の深鉢底部が出土しているが、底面より15㎝浮いている。　102号土坑：楕円形を呈し、長径125㎝、短径110㎝、深さ30㎝を測り、中央に10㎝浮いて40㎝大の平石が確認されている。

○34号・55号・83号・84号土坑

A－23、B－23・24グリッド。34号土坑：円形を呈し、径170㎝、深さ90㎝を測る。底面は平坦であった。遺物は最上部からの出土である。　55号土坑：34号土坑に切られているが、楕円形を呈すると思われ、短径で250㎝を測る。深さ40㎝。　83号土坑：楕円形を呈し、長径170㎝、短径110㎝、深さ40㎝を測る。底面は平坦である。　84号土坑：楕円形を呈し、長径145㎝、短径110㎝、深さ50㎝を測る。

○39号・45号・86号～88号・91号土坑

A－26、B－25・26グリッド。39号土坑：円形を呈し、径160㎝、深さ30㎝を測る。　45号土坑：楕円形を呈し、長径130㎝、短径95㎝、深さ30㎝を測る。底面は平坦である。　86号土坑：不整円形を呈し、長径160㎝、短径120㎝、深さ20㎝を測る。内部には20㎝～30㎝大の礫が多く確認されているが、ほとんどが底面より10㎝以上浮いている。　87号土坑：円形を呈し、径155㎝、深さ20㎝を測る。遺物は中央部分に集中し、10㎝ほどの深さである。　88号土坑：楕円形を呈し、長径190㎝、短径140㎝、深さ20㎝を測る。底面は平坦で、小ピット3基を有する。また、20㎝～30㎝大の礫が多く、浮いて確認されている。

○47号・48号土坑

C－23・24グリッド。48号土坑については前述した。　47号土坑：不整円形を呈し、規模、形状、主軸方向とも48号土坑に類似。長径260㎝、短径130㎝、深さ30㎝を測る。底面は平坦である。

○49号土坑

B－24グリッド。楕円形を呈し、長径160㎝、短径110㎝、深さ30㎝を測る。内部に10㎝～20㎝大の礫が確認された。

○50号～54号土坑

B－25、C－24・25グリッド。50号土坑：楕円形を呈し、長径180㎝、短径135㎝、深さ95㎝を測る。内部に平石、土器等が確認されているが、最上部からの出土である。　51号土坑：楕円形を呈し、長径220㎝、短径180㎝、深さ30㎝を測る。底面は平坦で、小ピット2基が確認されている。　52号土坑：楕円形を呈し、長径180㎝、短径140㎝、深さ20㎝を測る。最上部に平石が確認されている。　53号土坑：楕円形を呈し、長径160㎝、短径110㎝、深さ20㎝を測る。底面は平坦で、平石3個が上部で確認されている。　54号土坑：円形を呈し、径145㎝、深さ30㎝を測る。底面は平坦である。

○57号～59号土坑

C－25・26グリッド。57号土坑：円形を呈し、径160㎝、深さ40㎝を測るが、内部にさらに径80㎝、深さ20㎝ほどの円形の掘り込みが確認され、その部分の底面ちかくに礫が集中していた。あるいは別の土坑の掘り込みであるかもしれない。　58号土坑：円形を程し、径135㎝、深さ50㎝を測る。底面は平坦で、小ピット1基を有する。　59号土坑：不整円形を呈し、長径110㎝、短径100㎝、深さ70㎝を測る。底面は段状をなす。

○61号・62号土坑

B－27、C－27グリッド。61号土坑：楕円形を呈し、長径220㎝、短径150㎝、深さ60㎝を測る。遺物は底面より約20㎝浮いて出土。　62号土坑：楕円形を呈し、長径120㎝、短径90㎝、深さ70㎝を測る。

○63号・64号土坑

B－28、C－28グリッド。63号土坑：楕円形を呈し、長径135㎝、短径120㎝、深さ50㎝を測る。壁の立ち上がりは垂直にちかい。底面は平坦である。　64号土坑：楕円形を呈し、長径155㎝、短径125㎝、深さ20㎝を測る。

○66号土坑

A－26グリッド。浅く掘り込まれており、掘り方は確認できなかったが、底面は径120㎝程度の円形を呈すると思われる。底面中央から土器が出土している。

○67号・80号土坑

C－33グリッド。67号土坑：不整円形を呈し、長径150㎝、短径130㎝、深さ85㎝を測る。壁は緩やかに立ち上がる。　80号土坑：円形を呈し、径70㎝、深さ40㎝を測る。底面中央に小ピット1基を有する。

○68号～70号土坑

C－47、48グリッド。68号土坑：楕円形を呈し、長径150㎝、短径110㎝、深さ60㎝を測る。69号土坑：楕円形を呈し、長径105㎝、短径75㎝、深さ60㎝を測る。　70号土坑：隅円方形を呈し、長径100㎝、短径85㎝、深さ70㎝を測る。底面は楕円形を呈する。

○71号～73号・78号土坑

A－47・48、B－48グリッド。　71号土坑：不整円形を呈し、長径100㎝、短径65㎝、深さ50㎝を測る。　72号土坑：不整円形を呈し、長径130㎝、短径100㎝、深さ25㎝を測る。　73号土坑：楕円形を呈し、長径95㎝、短径70㎝、深さ30㎝を測る。　78号土坑：楕円形を呈し、

長径100㎝、短径75㎝、深さ55㎝を測る。なお底面は長方形を呈する。

○74号・81号土坑

B－51、C－51グリッド。74号土坑：円形を呈し、径70㎝、深さ30㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。　81号土坑：円形を呈し、径120㎝、深さ100㎝を測る。底面は平坦である。

○75号土坑

A－51グリッド。不整円形を呈し、長径140㎝、短径120㎝、深さ25㎝を測る。底面は平坦で、中央部には礫が浮いて集中していた。

○79号土坑

C－49グリッド。楕円形を呈し、長径120㎝、短径100㎝、深さ75㎝を測る。

○82号土坑

B－24グリッド。楕円形を呈し、長径80㎝、短径60㎝、深さ25㎝を測る。中央に、60㎝大の平石があり、その付近から土器が細片となって出土している。

○85号土坑

A－25グリッド。56号土坑に切られている。掘り込みが浅く、規模は不明であるが、円形を呈すると思われる。下層から土器片が出土している。

○90号土坑

C－55グリッド。楕円形を呈し、長径110㎝、短径80㎝、深さ40㎝を測る。最上部から平石、土器片が出土している。

○95号・96号土坑

A－21グリッド。95号土坑：円形を呈し、径120㎝、深さ20㎝を測る。底面は平坦で、壁も緩やかな立ち上がりの浅い皿状をなす。中央部床面ちかくに礫3個が確認されている。　96号土坑：不整円形を呈し、長径130㎝、短径100㎝、深さ30㎝を測る。

○97号土坑

A－20グリッド。楕円形を呈し、長径145㎝、短径120㎝、深さ30㎝を測る。壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は最上部から出土している。

○98号土坑

B－20・21グリッド。長楕円形を呈し、長径360㎝、短径170㎝、深さ60㎝を測り、中央部に長さ100㎝、深さ20㎝程の掘り込みがある。

○100号・101号土坑

C－57グリッド。100号土坑：不整形で、長径160㎝、短径110㎝、深さ35㎝を測る。中央部に80㎝ほどの平石があり、その付近より土器片が出土している。　101号土坑：楕円形を呈し、長径60㎝、短径30㎝、深さ40㎝を測る。小礫が浮いて出土している。

○103号～105号土坑

C－32グリッド。103号土坑：円形を呈し、径125㎝、深さ50㎝を測る。底面は平坦である。104号土坑：円形を呈し、径55㎝、深さ40㎝を測る。　105号土坑：円形を呈し、径70㎝、

深さ45㎝を測る。やはり底面は平坦である。

○106号～108号土坑

B－26グリッド。106号土坑：楕円形を呈し、長径170㎝、短径120㎝、深さ30㎝を測る。上部で礫3点が確認された。　107号土坑：楕円形を呈し、長径180㎝、短径145㎝、深さ40㎝を測る。やはり上部に礫が集中していた。　108号土坑：楕円形を呈し、長径150㎝、短径130㎝、深さ25㎝を測る。

○1号集石・2号集石・5号集石土坑、76号・89号土坑

B－33・34、C－33・34グリッド。1号集石土坑：楕円形を呈すると思われ、長径140㎝、短径110㎝、深さ10㎝程度と推定される。10㎝～30㎝大の礫が集中するが、上部にのみみられる。　2号集石土坑：円形を呈し、径110㎝、深さ50㎝を測る。礫は10㎝～30㎝大で、密度も濃くない。　5号集石土坑：1号集石を切って構築される。円形を呈し、径120㎝、深さ50㎝を測る。礫は、拳大程度の小型のものが多いが、密集しており、上層部に集中していた。　76号土坑については前述した。　89号土坑：円形を呈し、径70㎝、深さ70㎝を測る。上部に小礫が確認された。

○3号集石土坑

A－35グリッド。楕円形を呈し、長径125㎝、短径110㎝、深さ85㎝を測る。礫は10㎝以下のものがほとんどで、中央上部に集中している。覆土に、焼土粒子、カーボンを含んでいた。

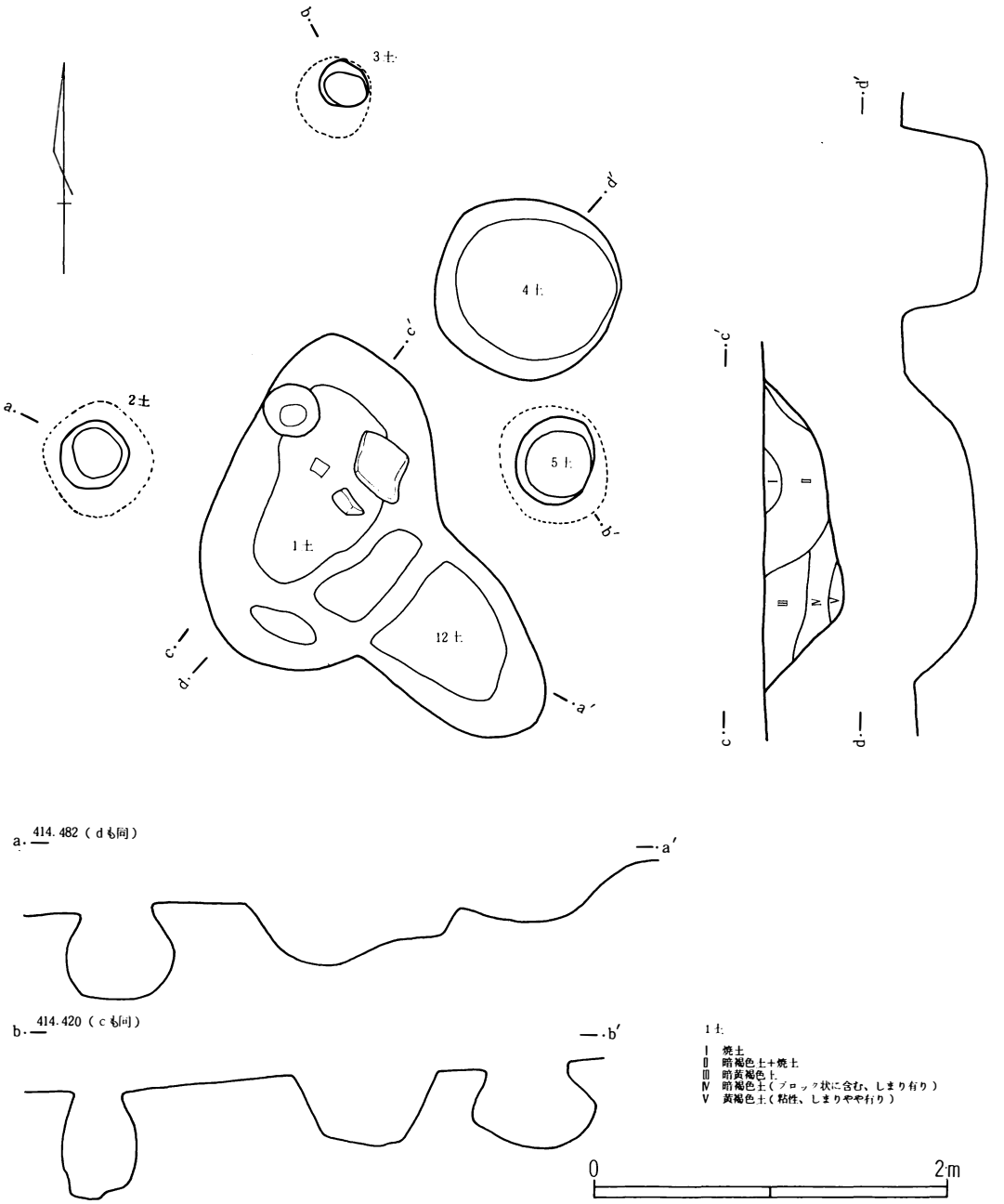
○4号集石土坑

A－39グリッド。半分だけの調査であるが、円形を呈すると思われる。径140㎝、深さ45㎝を測る。礫は10㎝～20㎝大で、あまり密ではなく、中央上部に集中する。

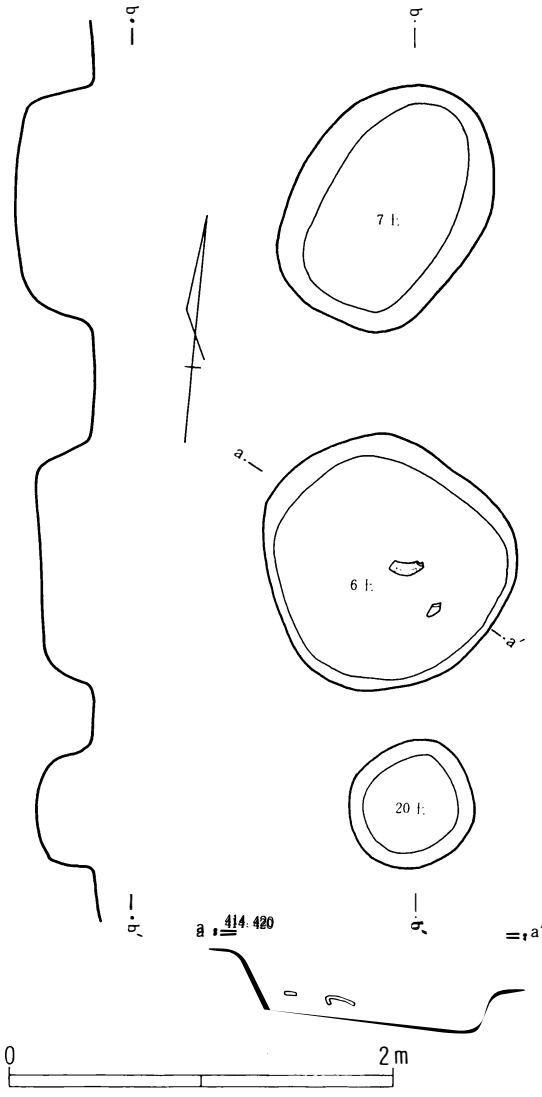
土器（第102図～第107図）

土坑内からは、非常に多くの土器が出土しており、また小破片となったものがほとんどであった。集中して出土したものについては、土坑底面からの出土は希で、上端からの出土が多いという傾向がある。以下に報告するものは、復元実測可能なものについてはできる限り載せることにし、拓本については、単独のものについてはそのまま、復数出土しているものについては、その中で時期的に集中するものと思われるものを選んである。したがって、必ずしもここに挙げた土器が土坑の時期を代表しているとは限らない。また、ここでは施文、使用痕などについて主な資料のみ概観することとし、出土土坑、色調、胎土、焼成等は表1に示すこととする。

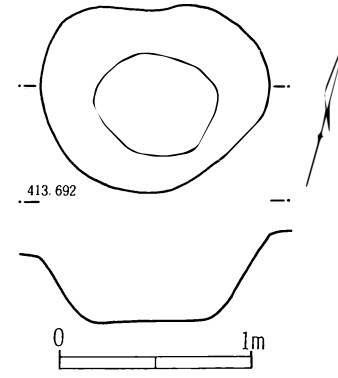
1・2、11号土坑出土。1は口径44.5㎝、器高20㎝の浅鉢である。口縁部に1単位の突起を有し、隆帯が渦巻状に付く。全面縄文が施される。なお、内面の磨きは丁寧に行われている。2は深鉢屈折底で、やはり屈折部までが文様帯となる。低い隆帯による文様帯と縄文で構成される。　3・4、34号土坑出土。3は、底部を欠損するが、4単位の塔状把手を有する深鉢で、把手から隆帯が垂下し、胴部も4分割される。4はやはり中空把手を有し、胴部は縄文帯となる。隆帯の垂下はみられない。また、内面がところどころ剥離している。　6. 41号土坑出土。深鉢。肩部で膨らみをもち、口縁は外反する。肩部以下全縄文。　11. 44号土坑出土。浅鉢。



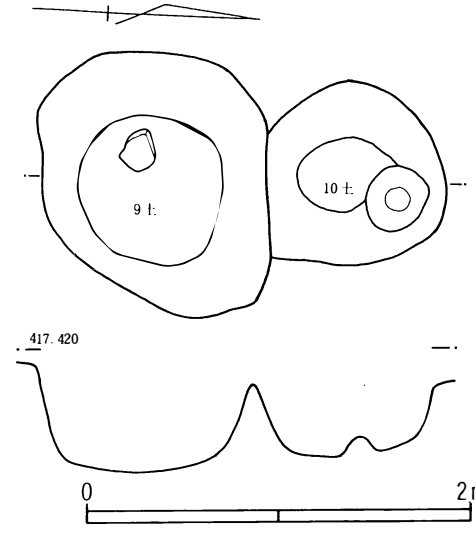
第62図　1号～5号・12号土坑



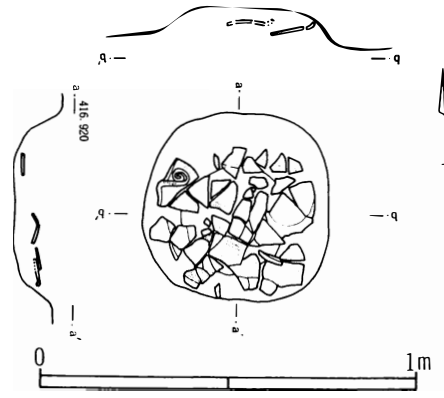
第63図　6号・7号・20号土坑



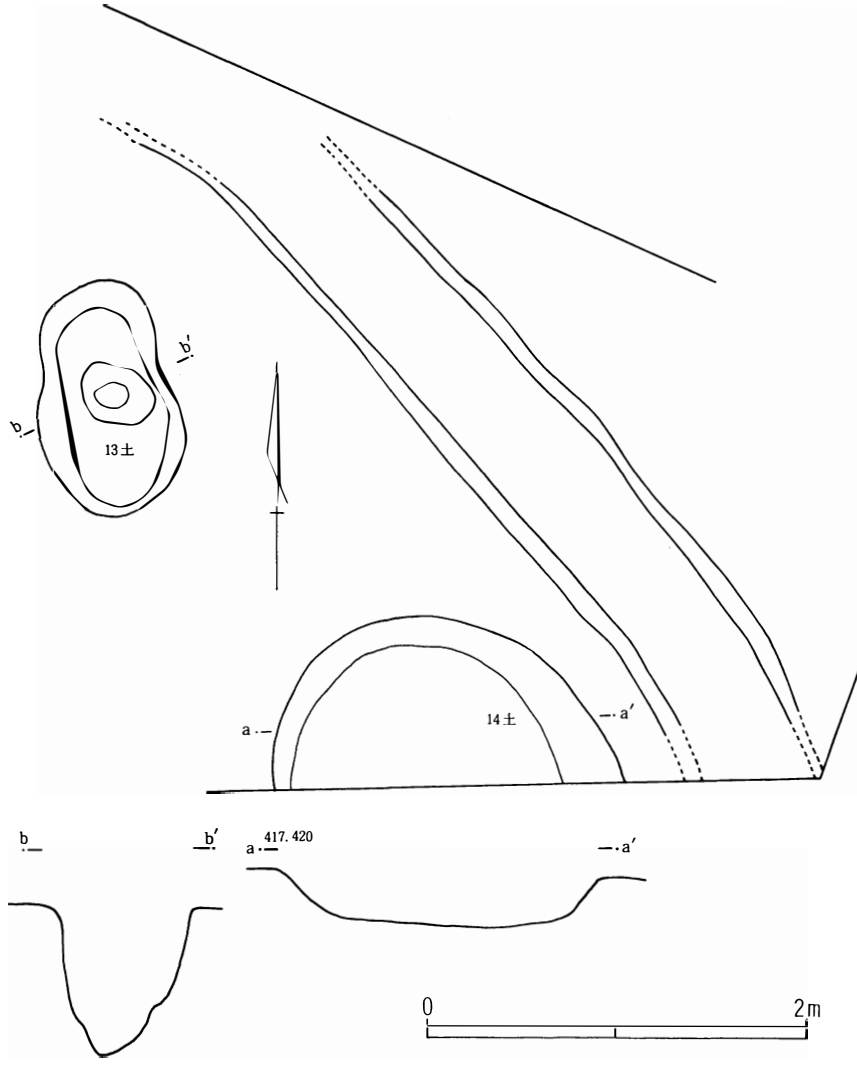
第64図　8号土坑



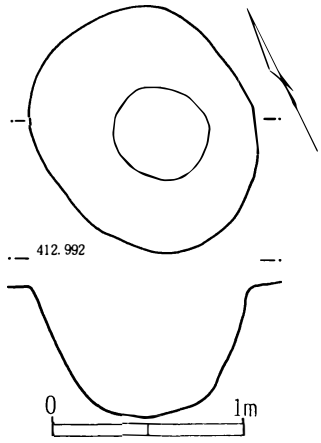
第65図　9号・10号土坑



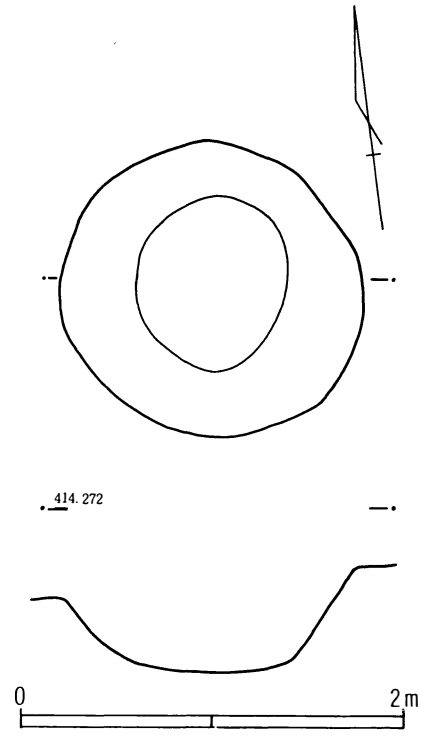
第66図　11号土坑



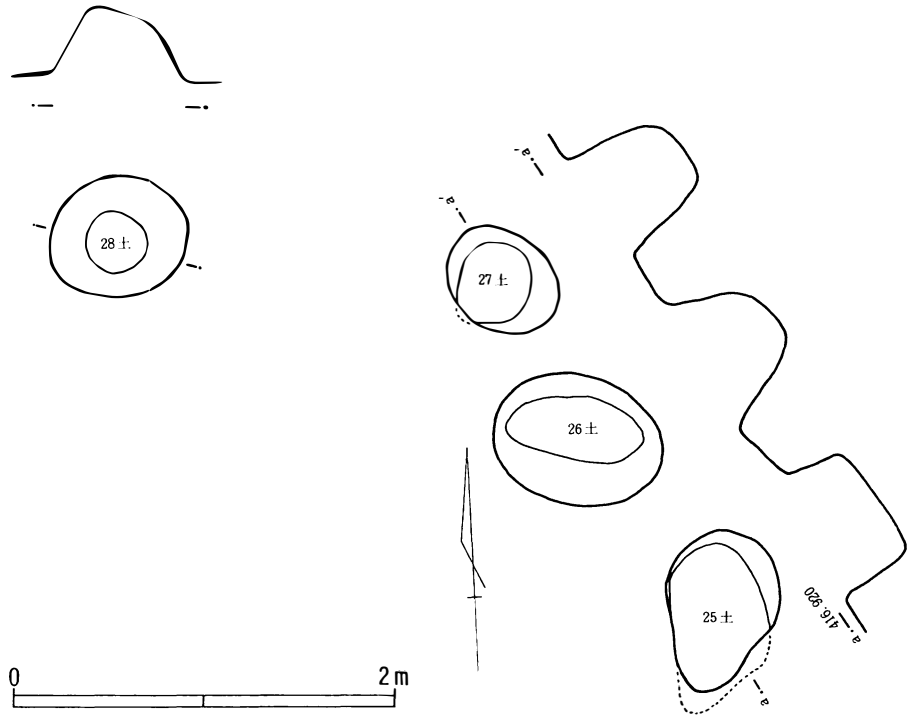
第67図　13号・14号土坑



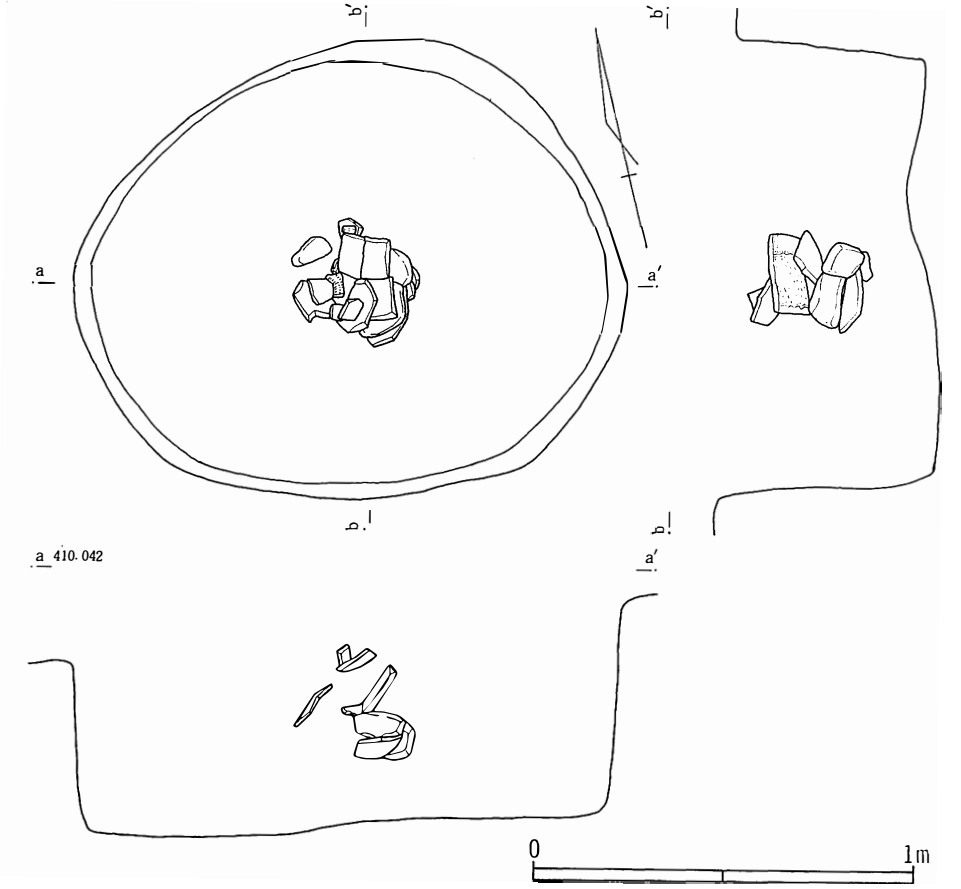
第68図　21号土坑



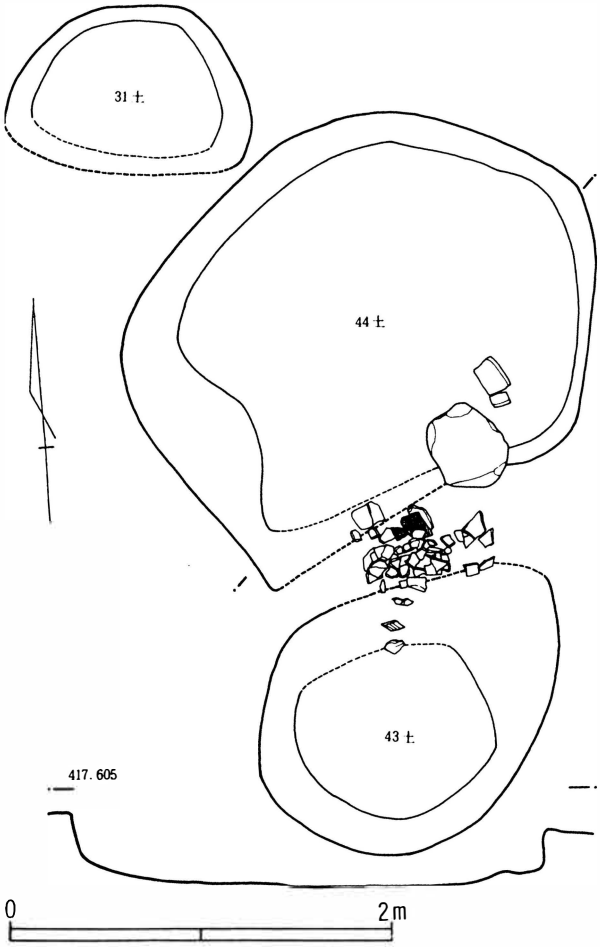
第69図　22号土坑



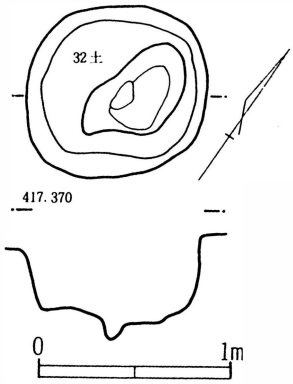
第70図　25号～28号土坑



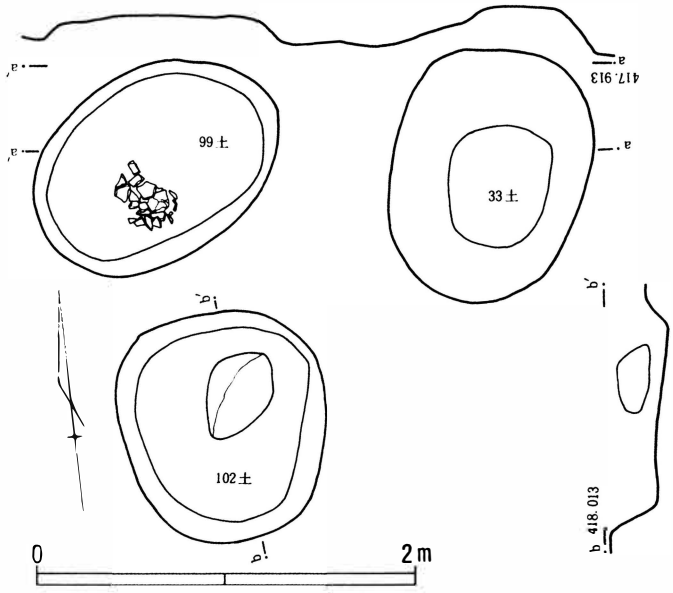
第71図　29号土坑



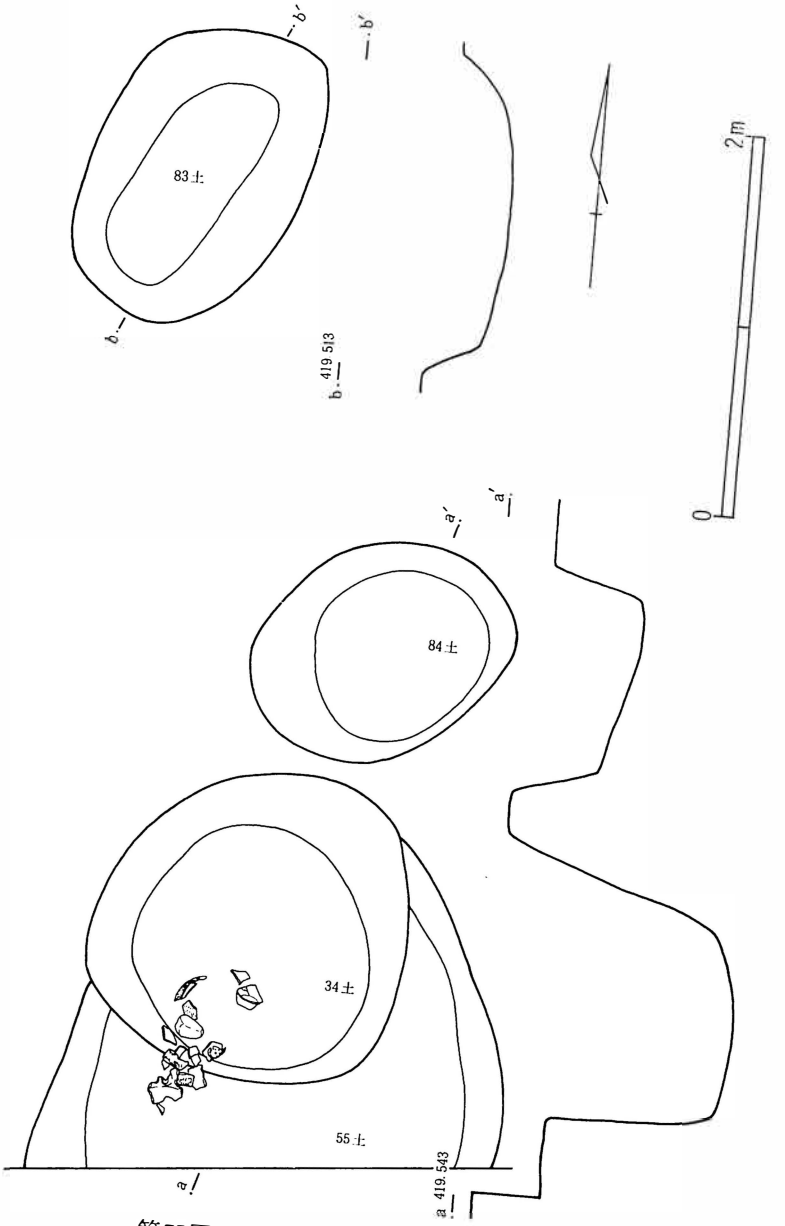
第72図　31号・43号・44号土坑



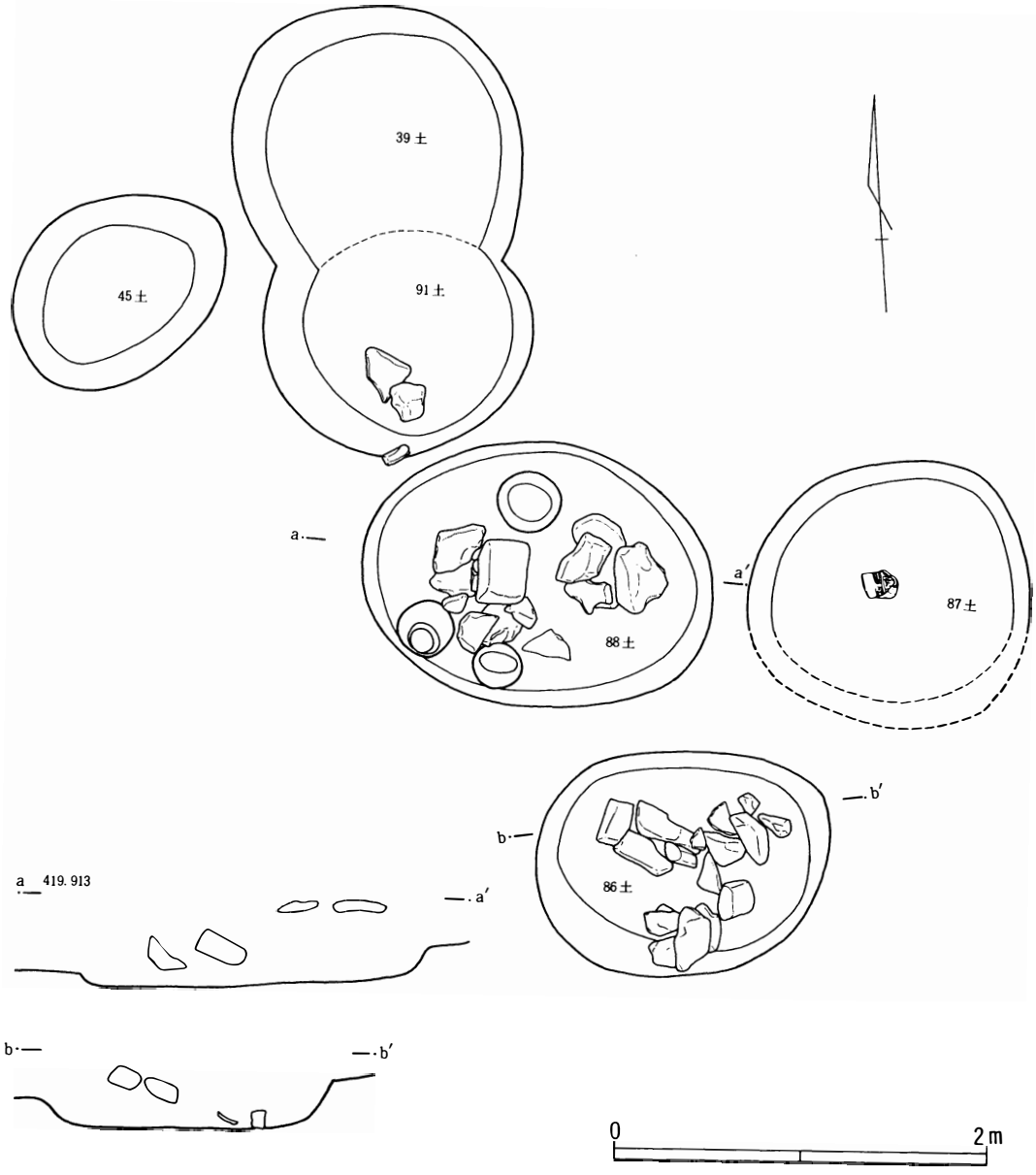
第73図　32号土坑



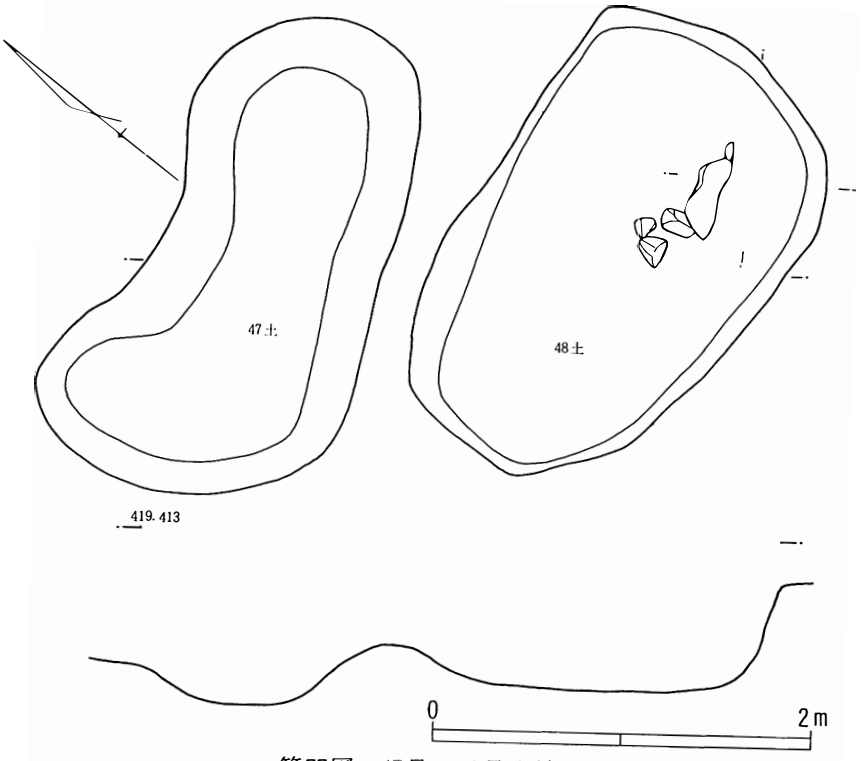
第74図　33号・99号・102号土坑



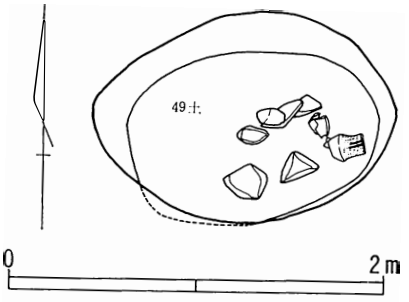
第75図　34号・55号・83号・84号土坑



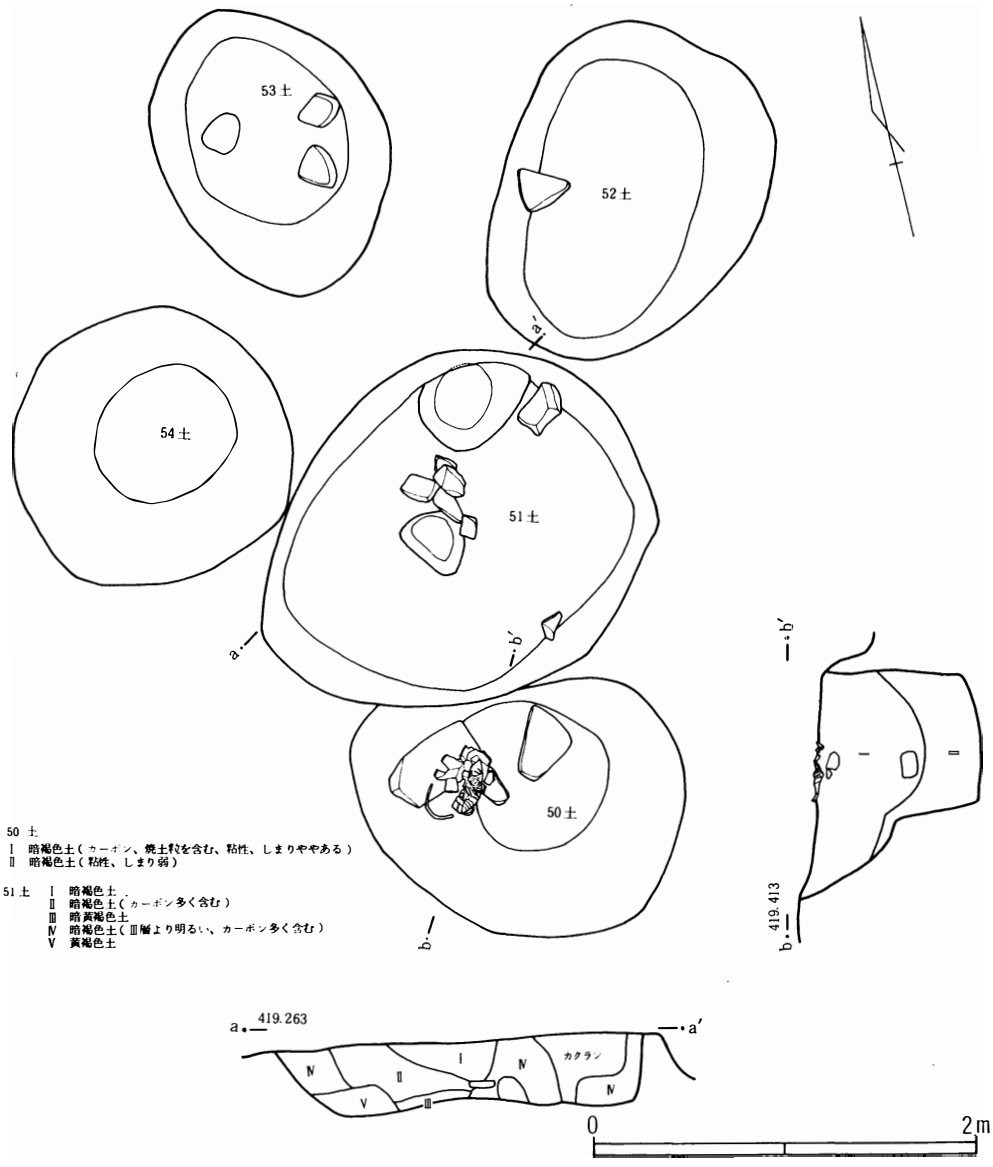
第76図　39号・45号・86号～88号・91号土坑



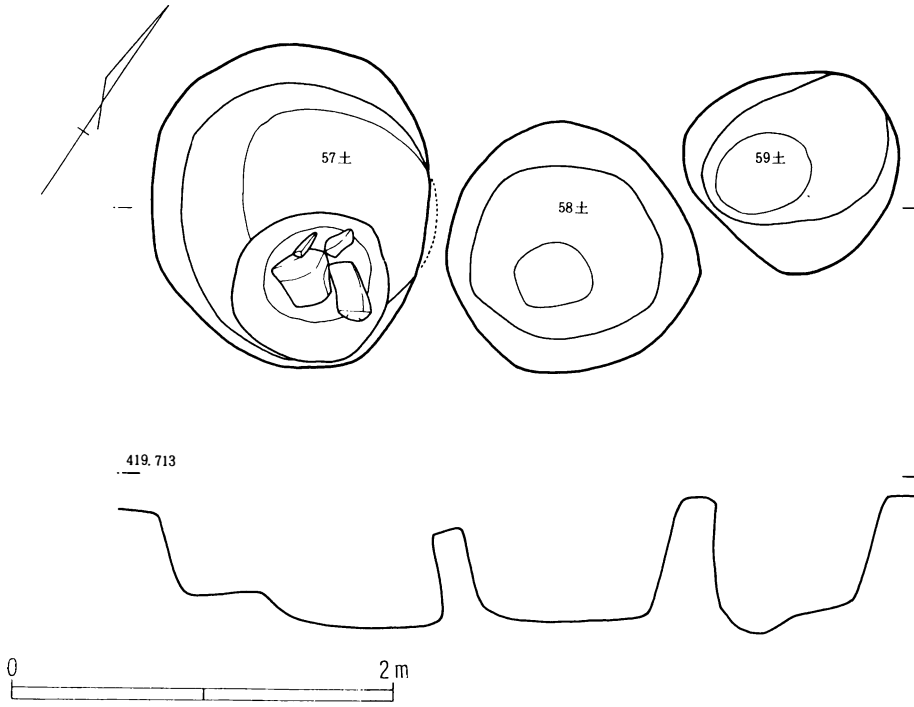
第77図　47号・48号土坑



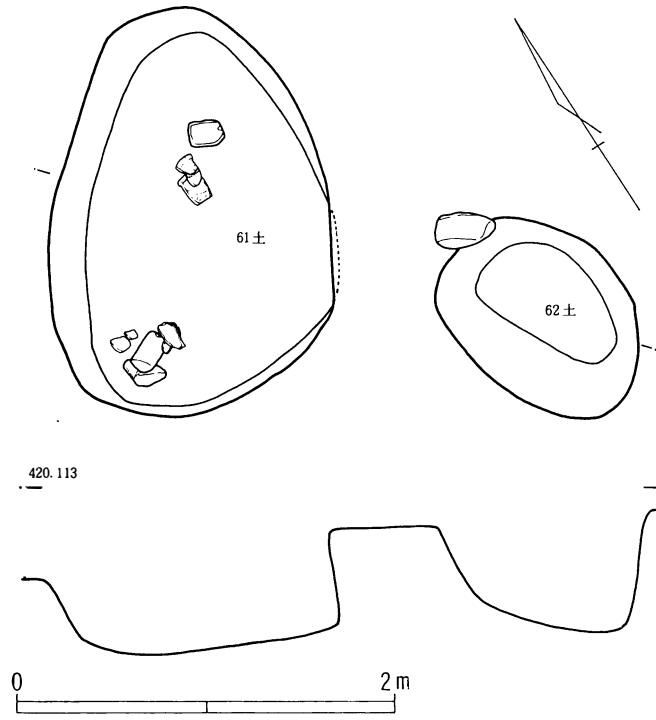
第78図　49号土坑



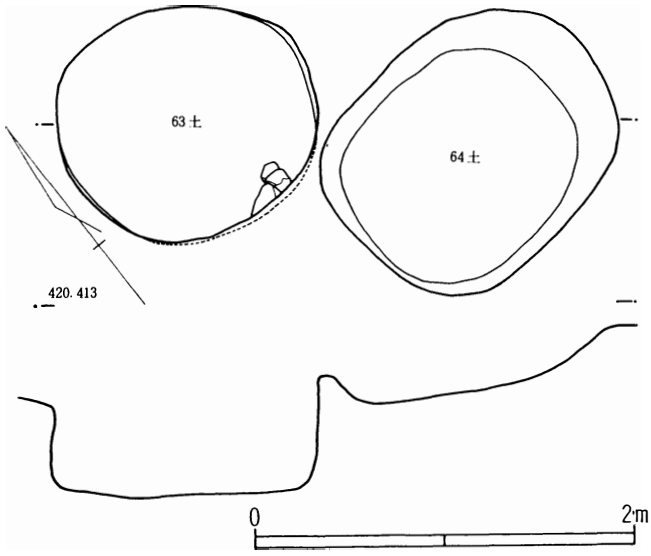
第79図　50号～54号土坑



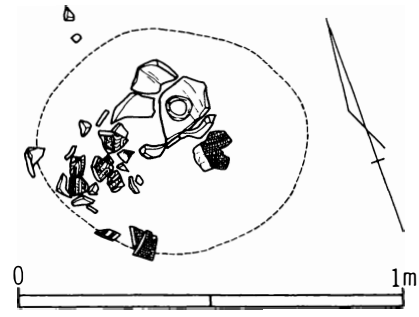
第80図　57号～59号土坑



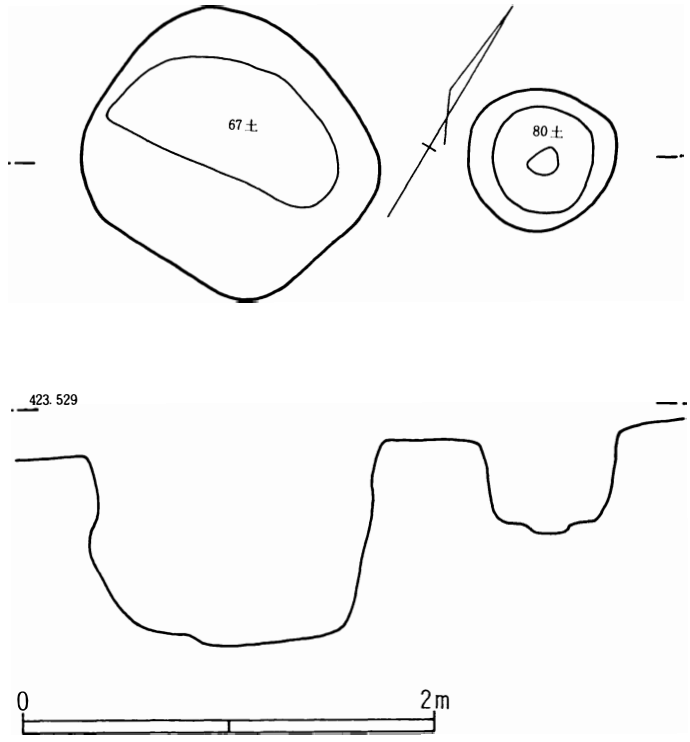
第81図　61号・62号土坑



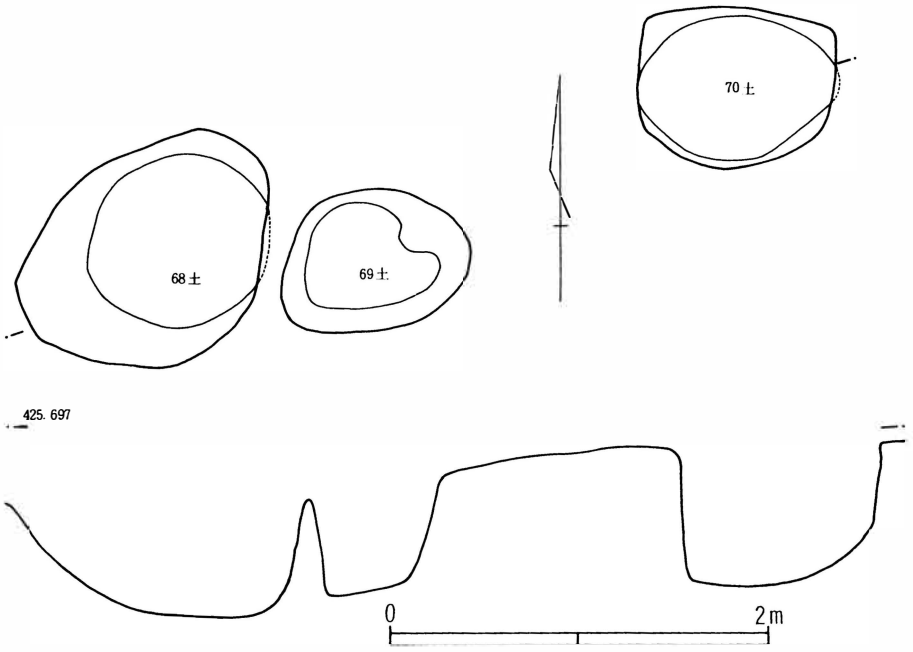
第82図　63号・64号土坑



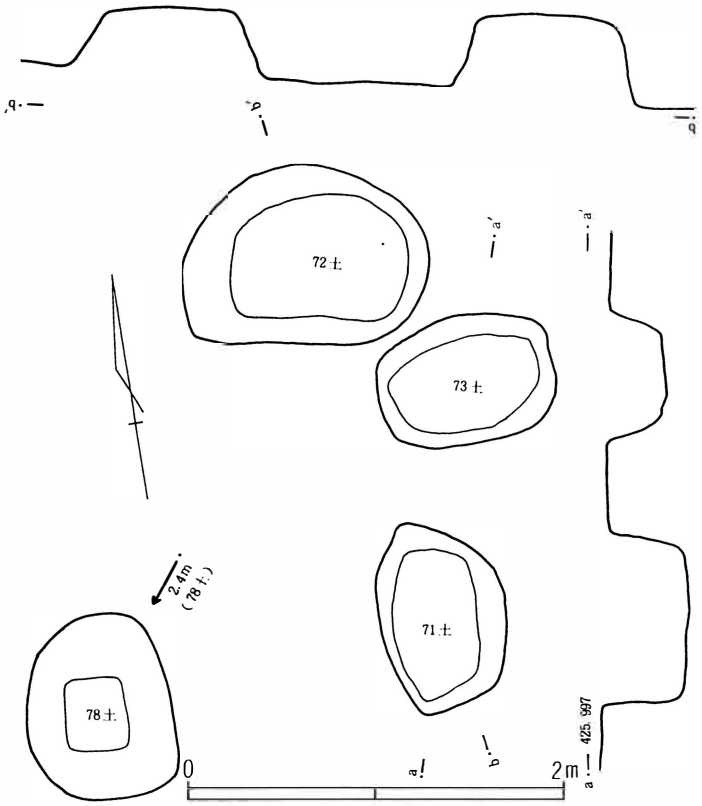
第83図　66号土坑



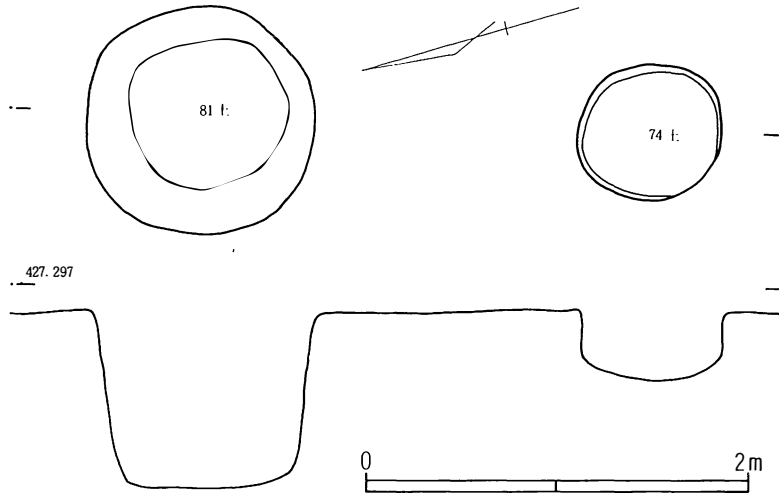
第84図　67号・80号土坑



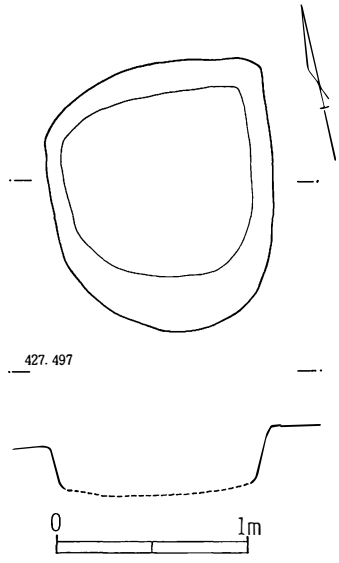
第85図　68号～70号土坑



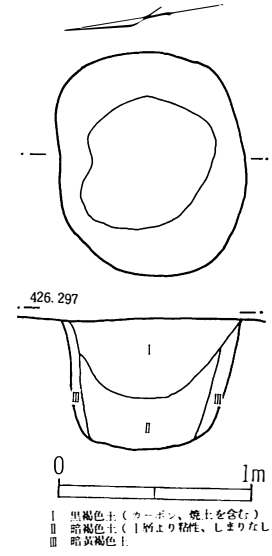
第86号　72号・73号・78号土坑



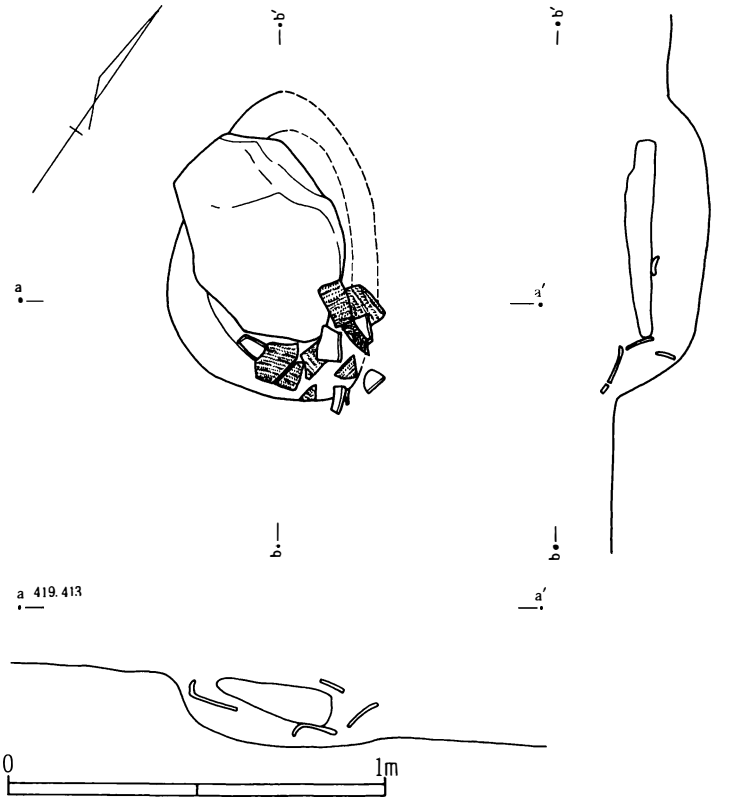
第87図　74号・81号土坑



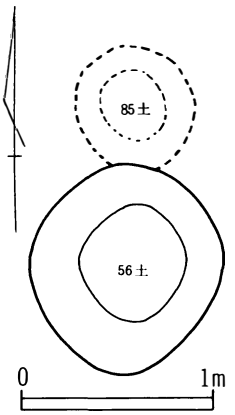
第88図　75号土坑



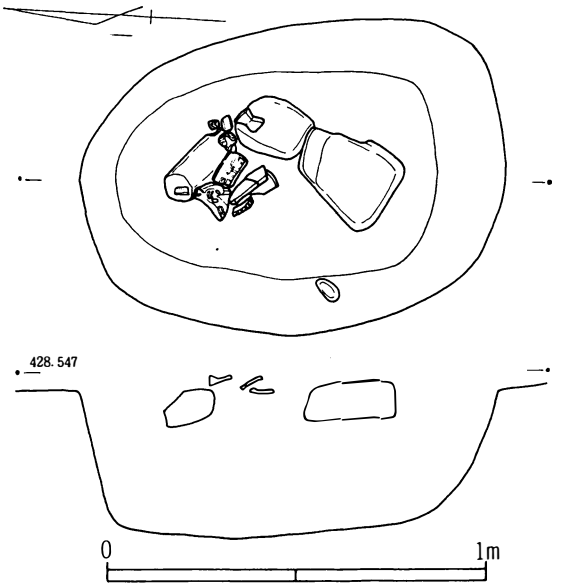
第89図　79号土坑



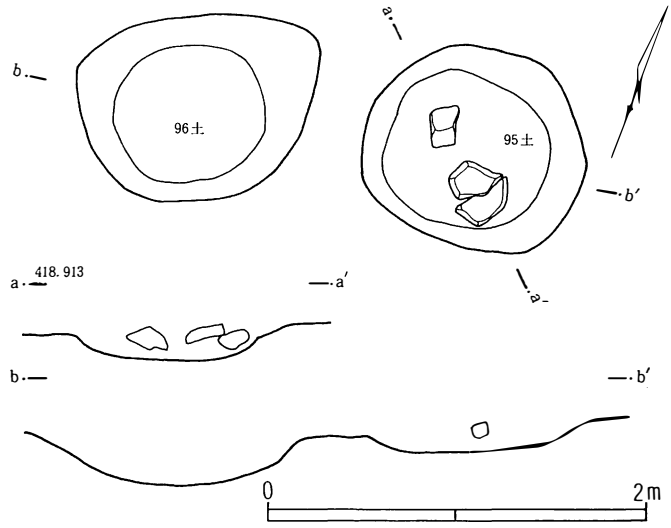
第90図　82号土坑



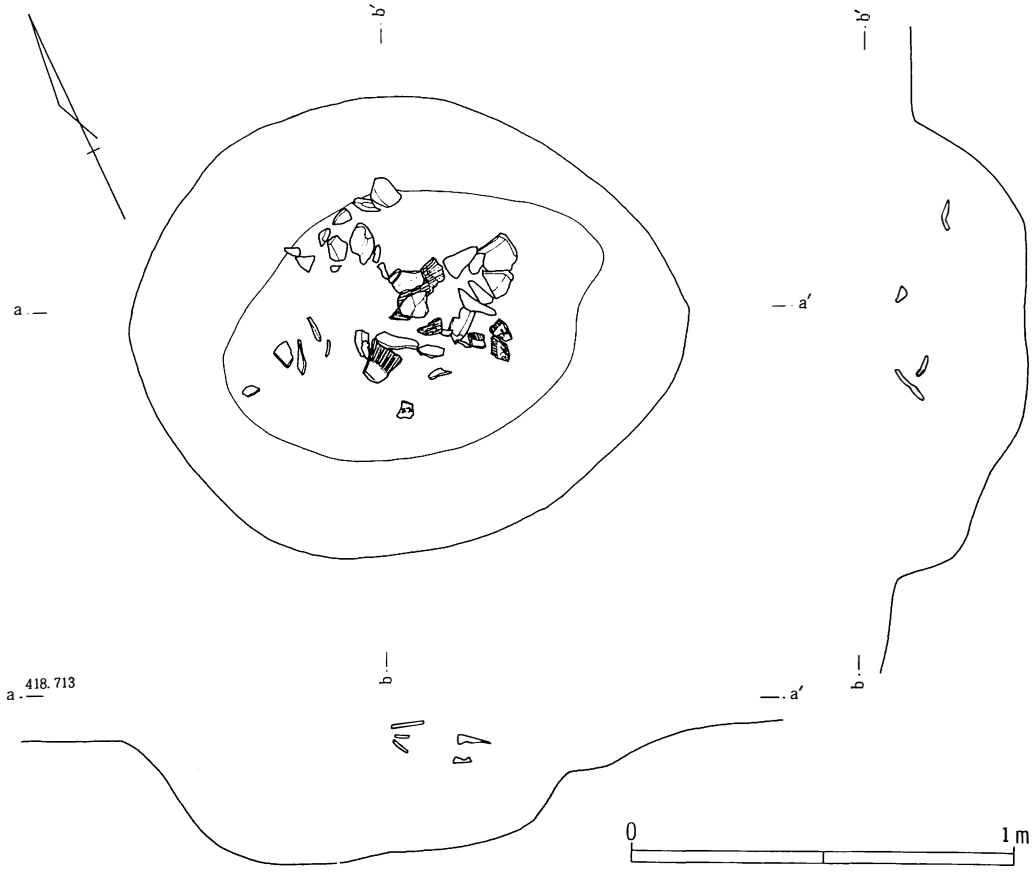
第91図　85号・56号土坑



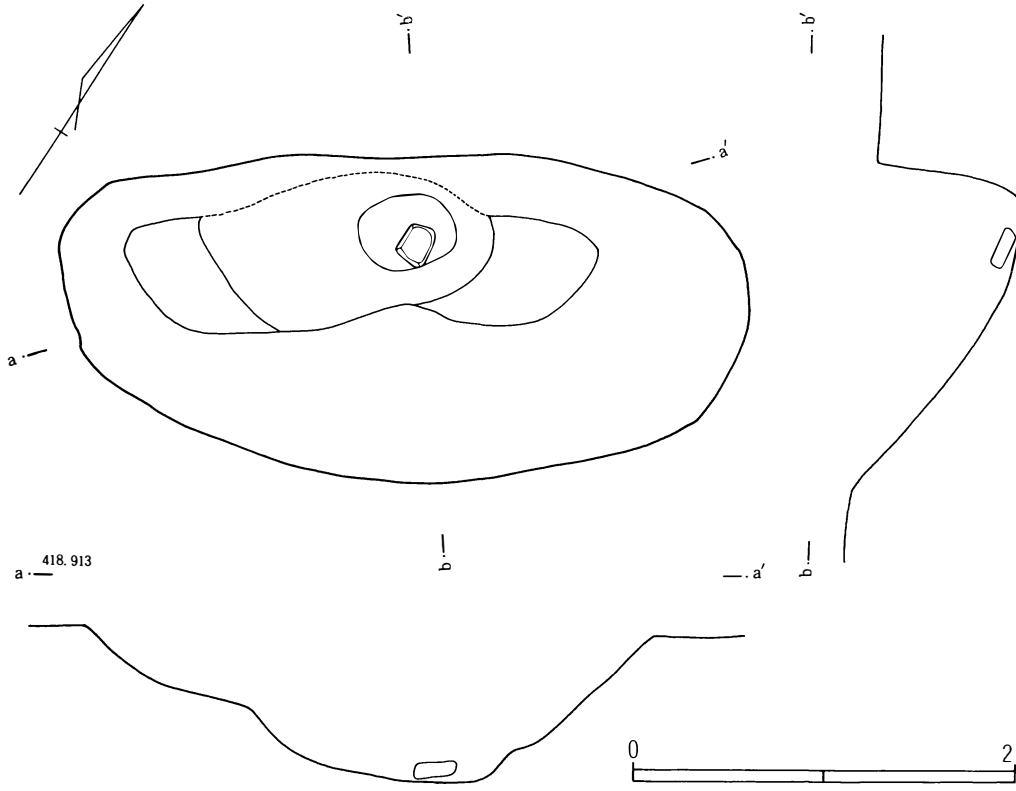
第92図　90号土坑



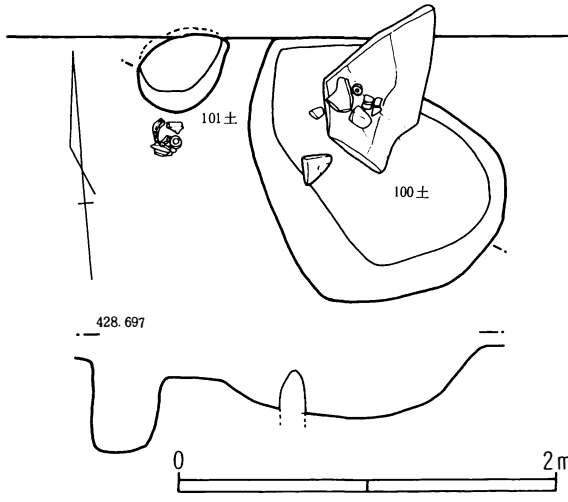
第93図　95号・96号土坑



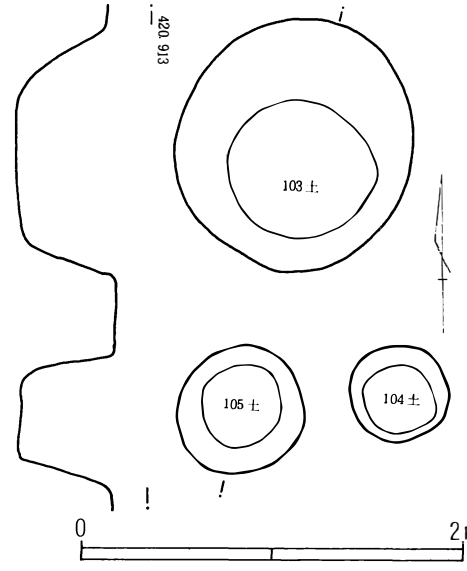
第94図　97号土坑



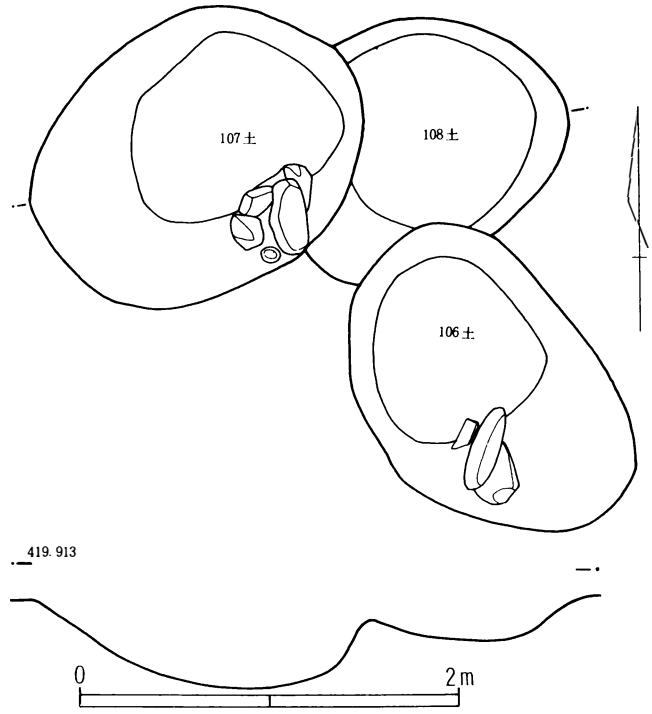
第95図　98号土坑



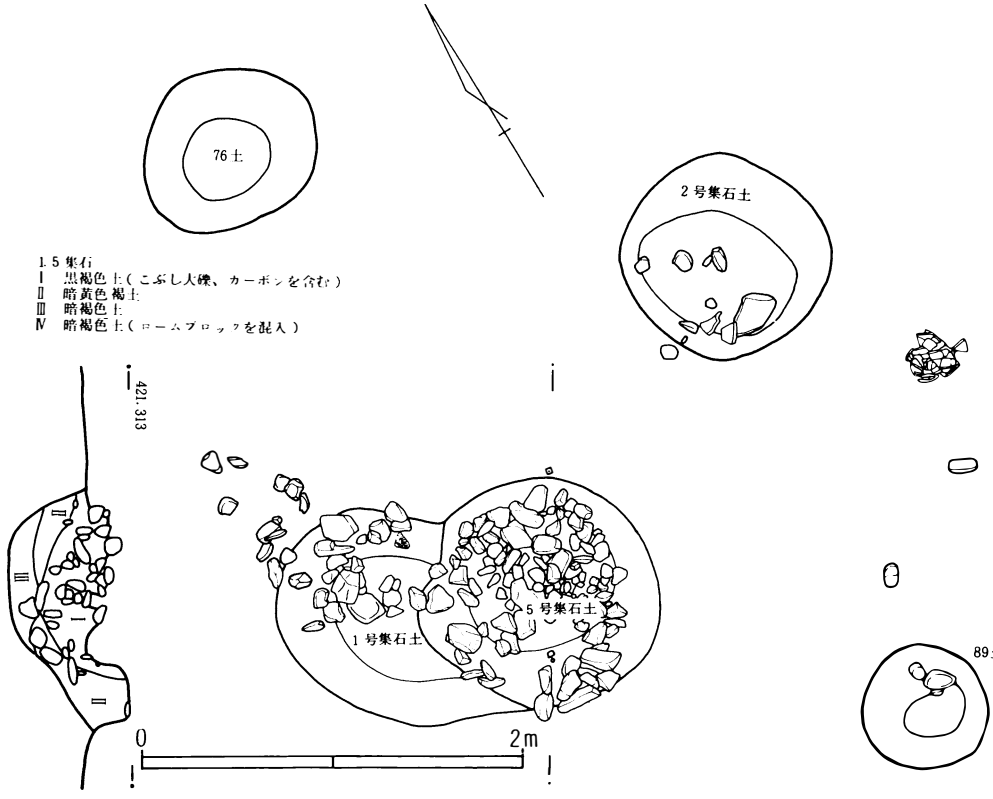
第96図　100号・101号土坑



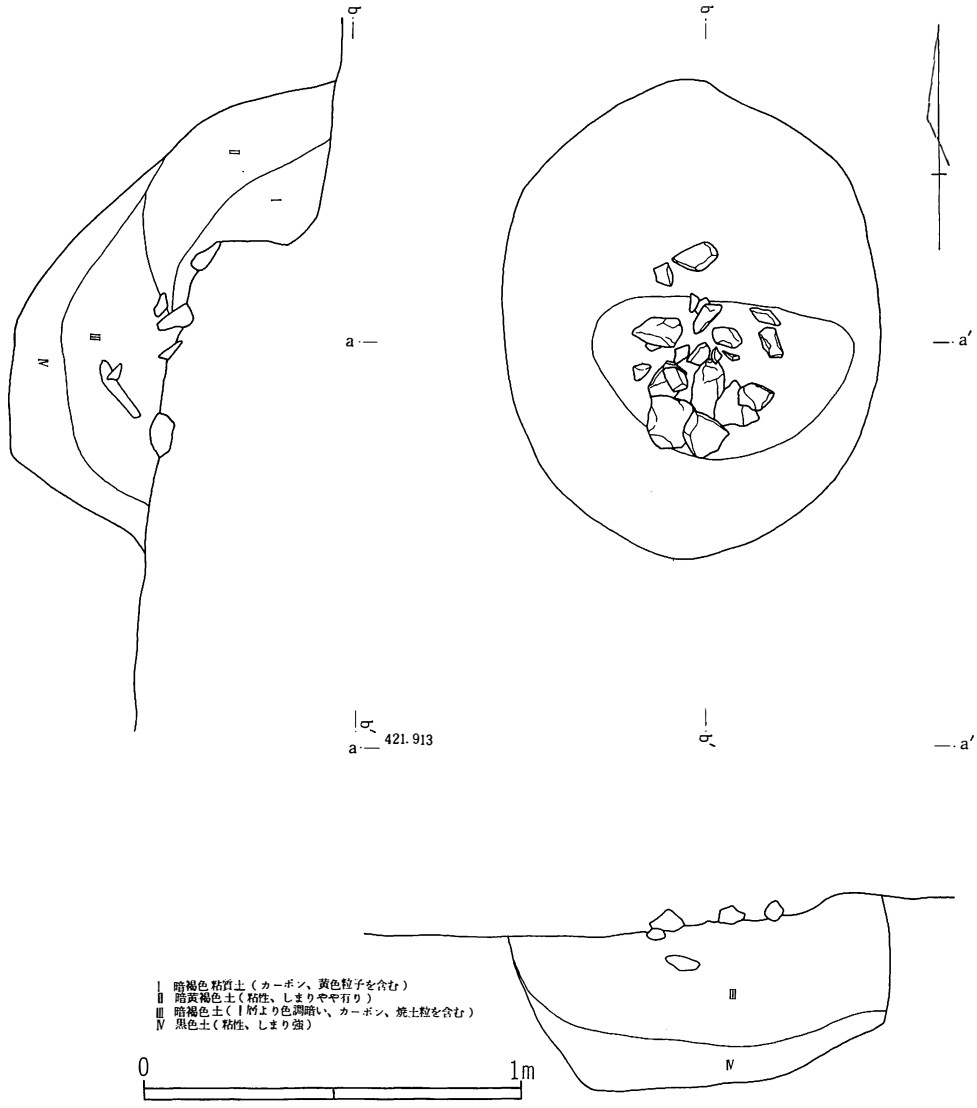
第97図　103号～105号土坑



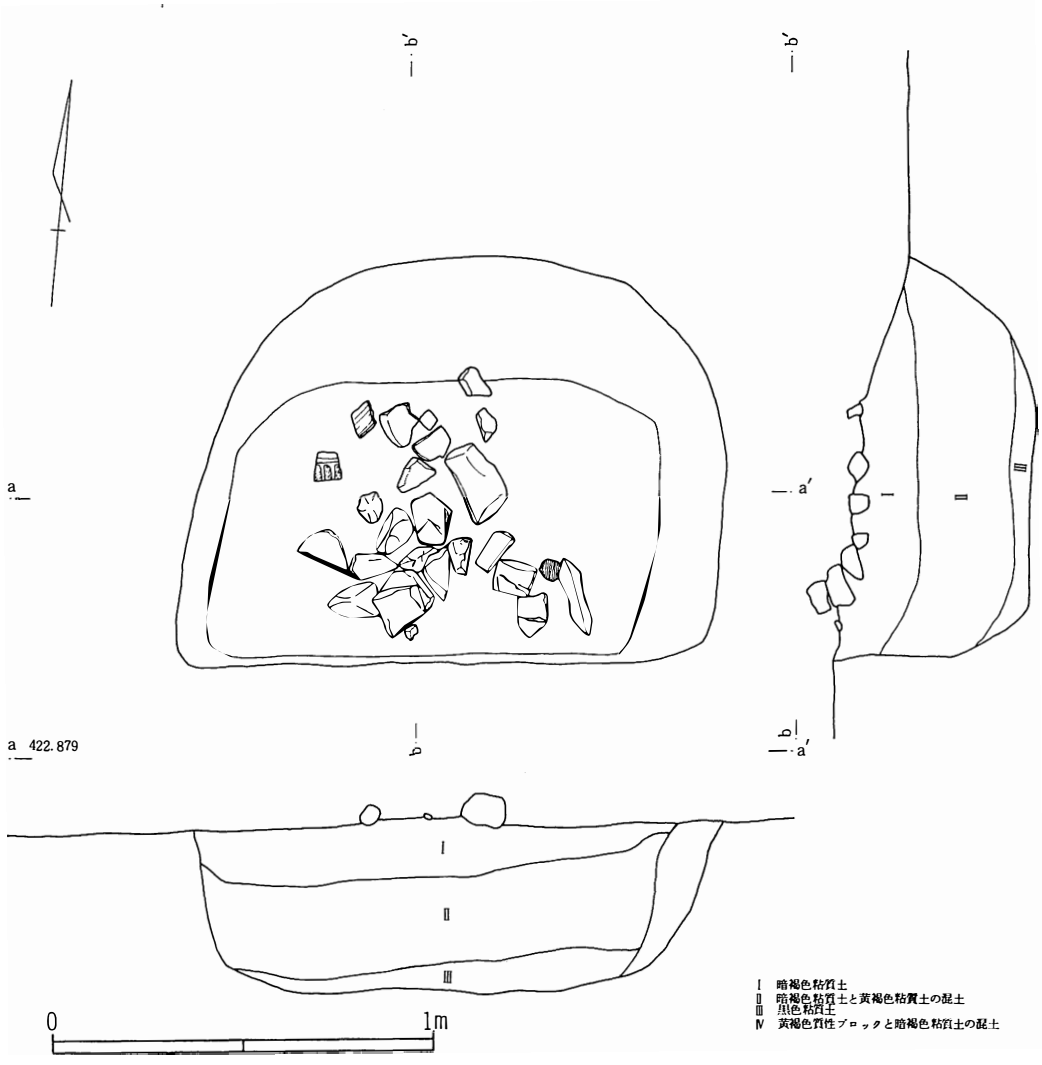
第98図　106号～108号土坑



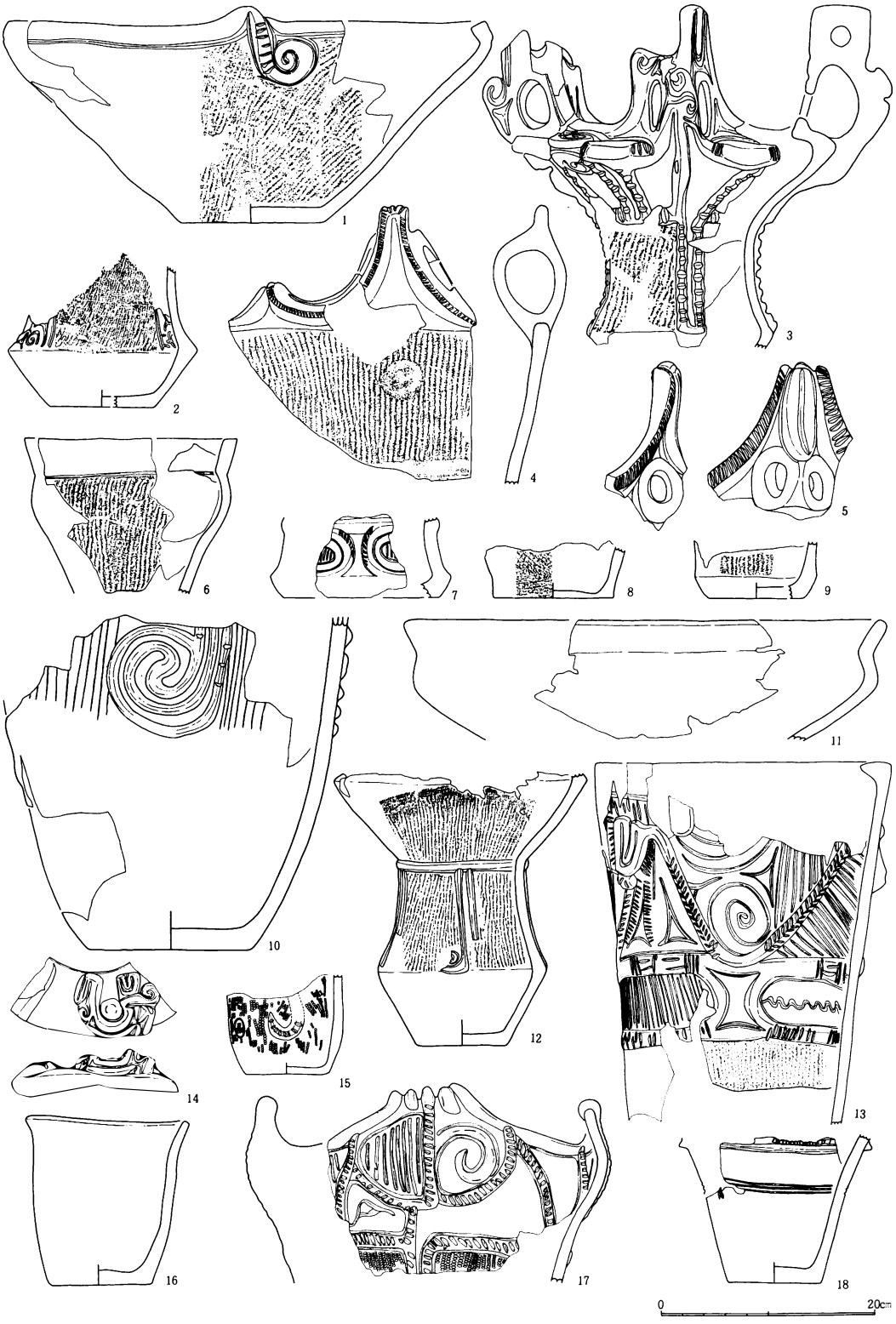
第99図　1号集石・2号集石・5号集石・76号・89号土坑



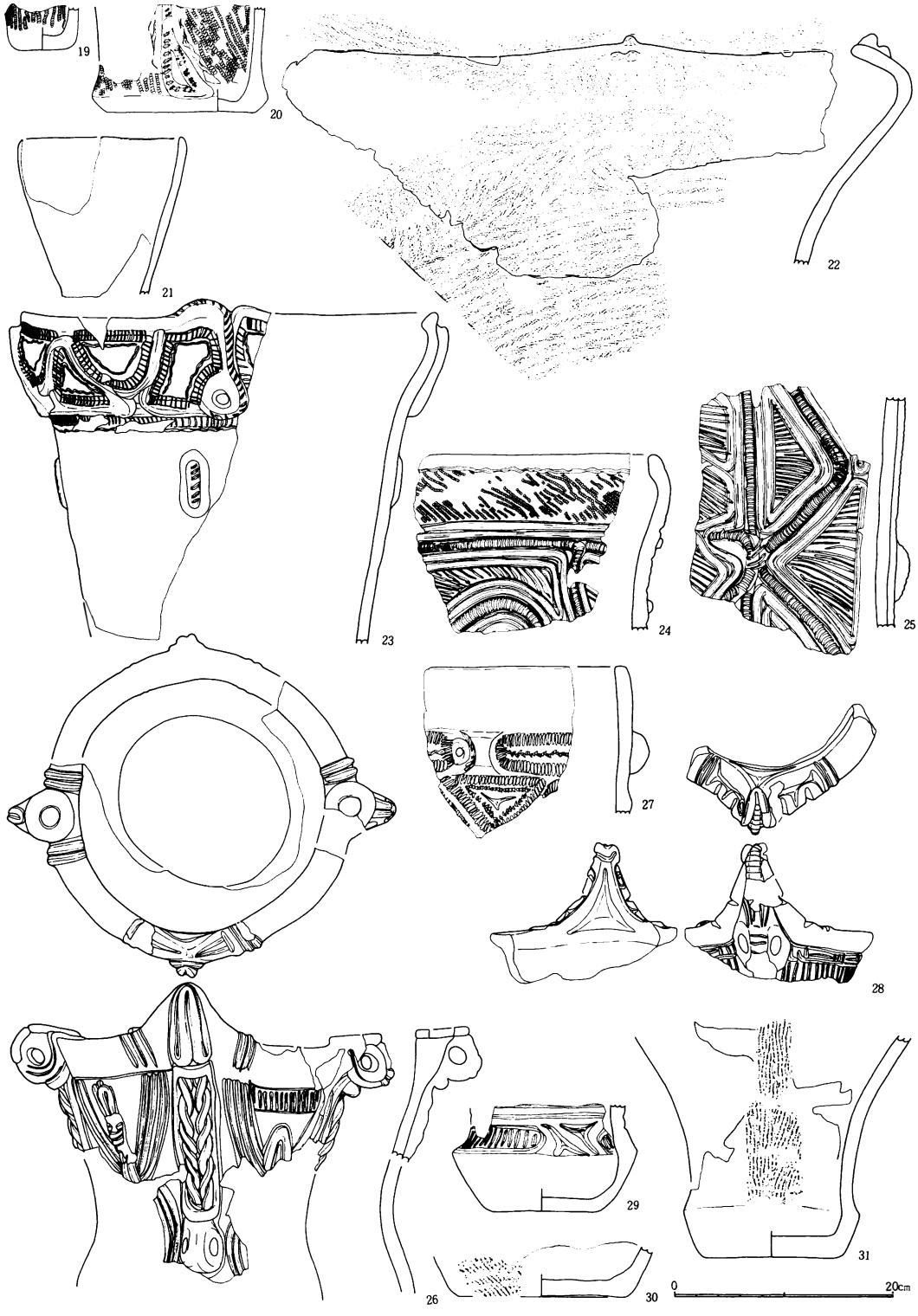
第100図　3号集石土坑



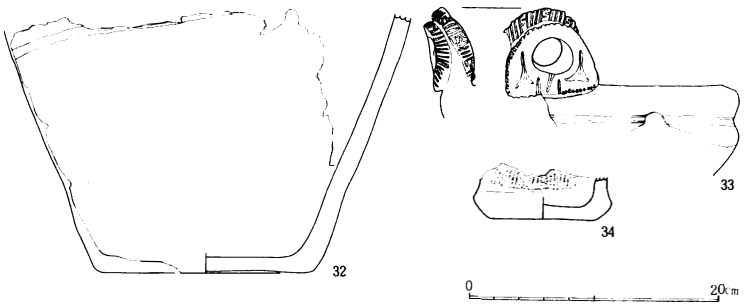
第101図　4号集石土坑



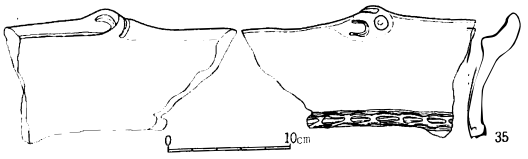
第102図　その他の土坑出土土器　その1



第103図　その他の土坑出土土器　その2

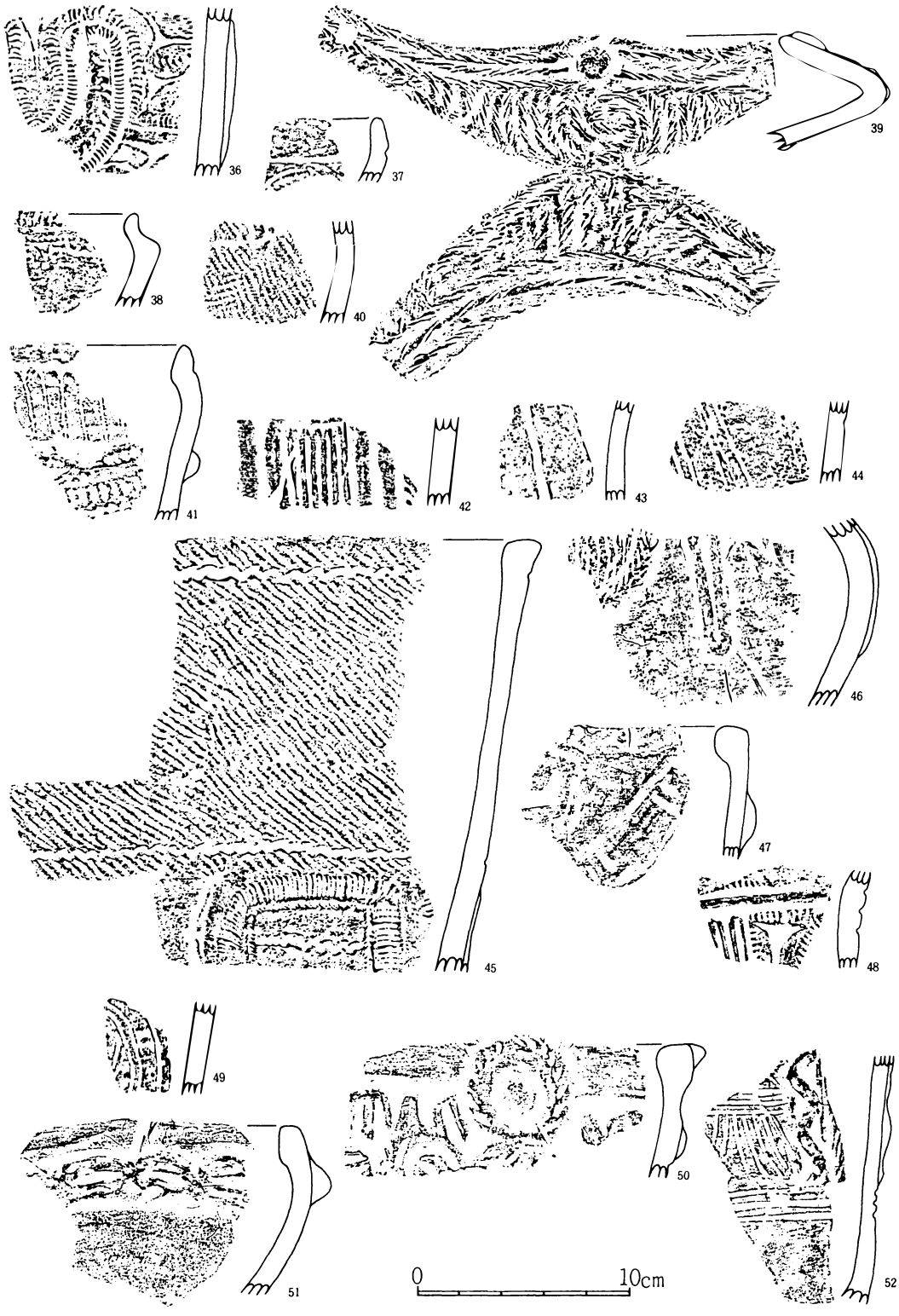


第104図　その他の土坑出土土器　その3

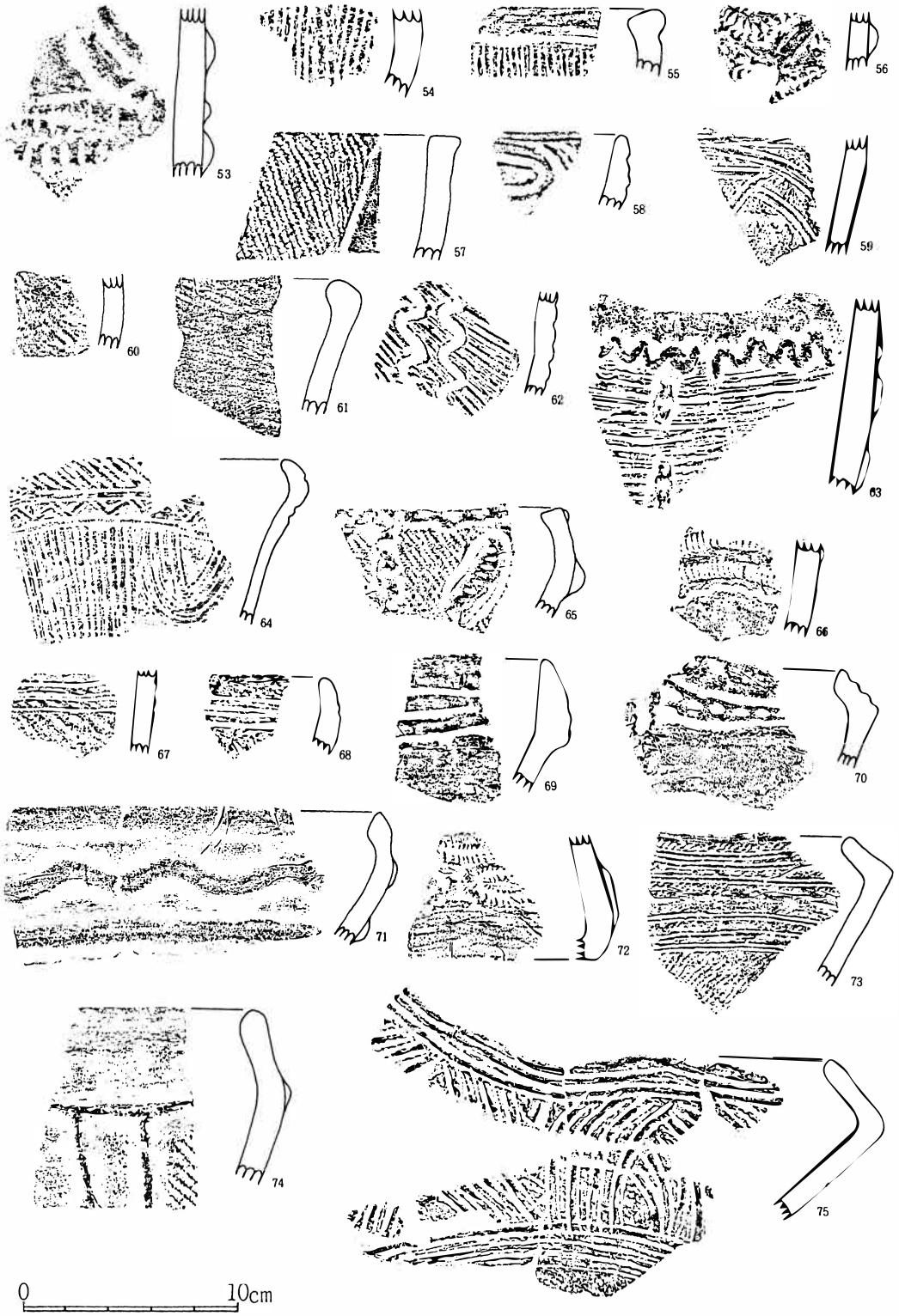


第105図　その他の土坑出土土器　その4

推定口径44㎝。内外面とも非常に丁寧な磨きが施されており、内面に赤色顔料が残存する。12. 47号土坑出土。深鉢。口縁部欠損。胴上半で屈折し（最小径）そこに隆帯が巡り、胴下半に隆帯が垂下、下半を4分割する。縄文施文。現存高25㎝、底径8.5㎝。内面底部屈折部以下にスス状付着物があり、外面下半は赤褐色を呈し、使用が明瞭である。　13. 50号土坑出土。深鉢。円筒形を呈し、口縁から胴下半まで広い文様帯を構成している。文様帯は基本的に3段構成で、上段は隆帯と沈線による抽象文帯、中段は楕円形区画帯、下段は縄文帯となる。口径27㎝、現存高33㎝。　16. 61号土坑出土。深鉢。内面が黒変しており、とくに下半が著しい。口径14.5㎝、底径9.3㎝、器高15.8㎝を測る。　18. 63号土坑出土。深鉢。上部に刻目隆帯が、下半に沈線が施される。胎土等から前期末と思われるが、内外面とも極めて磨きが良好である。現存高13.6㎝。　22. 82号土坑出土。深鉢。波状口縁を有し、口縁頂部に粘土粒の貼り付けがある。隆帯で全面を装るが、ヘラによる綾杉状刻目を異方向に施す。　23. 85号土坑出土。深鉢。口縁に4単位の突起を有する。口縁部は隆帯による三角形区画文で、隆帯端部に連続爪形文を施す。また、胴部には6㎝程の長さの隆帯を4単位配している。推定口径38㎝。　26. 86号土坑。大小の突起を2単位づつ有すると思われる。突起下には粘土紐を組み紐風に貼付し、胴部へ垂下する隆帯としている。また、その隆帯間には細い粘土紐による人体文モチーフが施される。口径22.5㎝、現存高29㎝。　29. 94号土坑出土。深鉢。底部屈折部に沈線による楕円区画、三角形区画が描かれる。内面にはスス状付着物がみられる。また、磨きが丁寧に行われている。底径9.8㎝。　31. 97号土坑出土。深鉢。胴部は縄文帯となる。内面にスス状付着物がみられる。また、底部内面には剝離が著しい。底径11.8㎝、現存高21.6㎝。　35. 2号集石土坑出土。深鉢。波状口縁を呈し、波状頂部には内外面沈線による渦巻施文がみられる。頸部には隆帯が巡る。内外面とも丁寧な磨きが施されている。



第106図　その他の土坑出土土器　その5

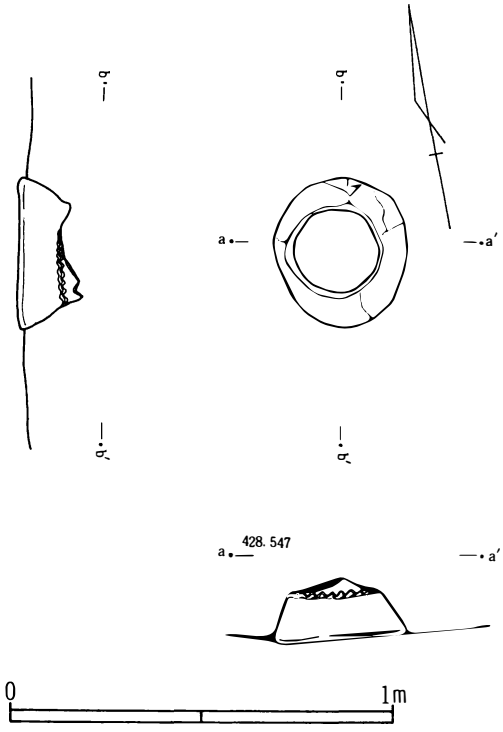


第107図　その他の土坑出土土器　その6

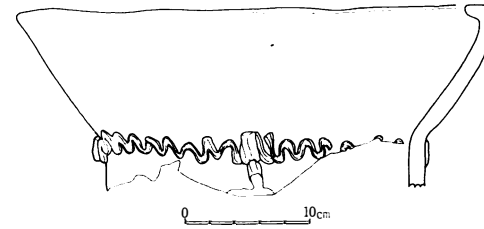
表 1.　その他の土坑出土土器

図・番号	出土土坑	色調	胎土	焼成	図・番号	出土土坑	色調	胎土	焼成
102－5	36	暗褐色	雲母含む精選土	良好	47	35	暗褐色	砂粒多く含む	良好
7	41				48	39	褐色	赤色粒子含む	〃
8	41	茶褐色	精選土	〃	49	45	〃	砂粒含む	〃
9	41	赤褐色	砂粒多く含む	〃	50	46	暗褐色	砂粒・雲母含む	〃
10	44	褐色	〃	〃	51	49	〃	砂粒含む	〃
14	50	黄褐色	〃	〃	52	52	〃	〃	〃
15	51	〃	〃	〃	107－53	53	黄褐色	砂粒多く含む	〃
17	61	外・暗褐色 内・黄褐色	砂粒わずかに含む	〃	54	54	茶褐色	〃	〃
103－19	66	薄茶褐色	〃	〃	55	57	〃	赤色粒子含む	〃
20	77	茶褐色	砂粒多く含む	〃	56	58	暗褐色	砂粒含む	〃
21	82	暗茶褐色	砂粒含む	〃	57	59	〃	砂粒・雲母含む	〃
24	85	暗褐色	雲母多く含む	〃	58	60	茶褐色	砂粒含む	〃
25	85	外・暗褐色 内・褐色	砂粒多く含む	〃	59	64	〃	〃	〃
27	87	茶褐色	雲母多く含む	〃	60	68	〃	〃	〃
28	90	〃	精選土	〃	61	69	〃	〃	〃
30	97	明褐色	砂粒多く含む	〃	62	71	暗褐色	〃	〃
104－32	99	茶褐色	〃	〃	63	75	外・茶褐色 内・暗褐色	〃	〃
33	101	暗茶褐色	〃	〃	64	79	暗褐色	〃	〃
34	108	茶褐色	〃	〃	65	88	暗茶褐色	〃	〃
106－36	1	暗褐色	〃	〃	66	88	茶褐色	〃	〃
37	2	褐色	〃	〃	67	92	〃	砂粒・小石含む	〃
38	3	暗褐色	〃	〃	68	96	赤褐色	砂粒含む	〃
39	6	茶褐色	〃	〃	69	98	褐色	〃	〃
40	9	赤褐色	砂粒・雲母多く含む	〃	70	98	黄褐色	〃	〃
41	10	暗褐色	〃	〃	71	100	赤褐色	〃	〃
42	13	褐色	小石多く含む	〃	72	100	褐色	〃	〃
43	14	赤褐色	〃	〃	73	1集石	暗褐色	〃	〃
44	22	褐色	砂粒・赤色粒子多く含む	〃	107－74	4集石	淡褐色	砂粒多く含む	〃
45	29	黄褐色	砂粒・小石多く含む	〃	75	2・5集石	赤褐色	砂粒・小石含む	〃
46	30	暗褐色	砂粒・雲母多く含む	〃					

3. 単独埋甕



第108図　単独埋甕



第109図　単独埋甕土器

1基だけ存在した。B－56グリッド。古墳周溝内での確認である。周溝構築の際、上半部を欠損したと思われる。また、周溝底面が埋甕の掘り方最下部とほぼ一致していると思われ、掘り方は全く検出されなかった。口縁を下にして、頸部の一部が残存していた。

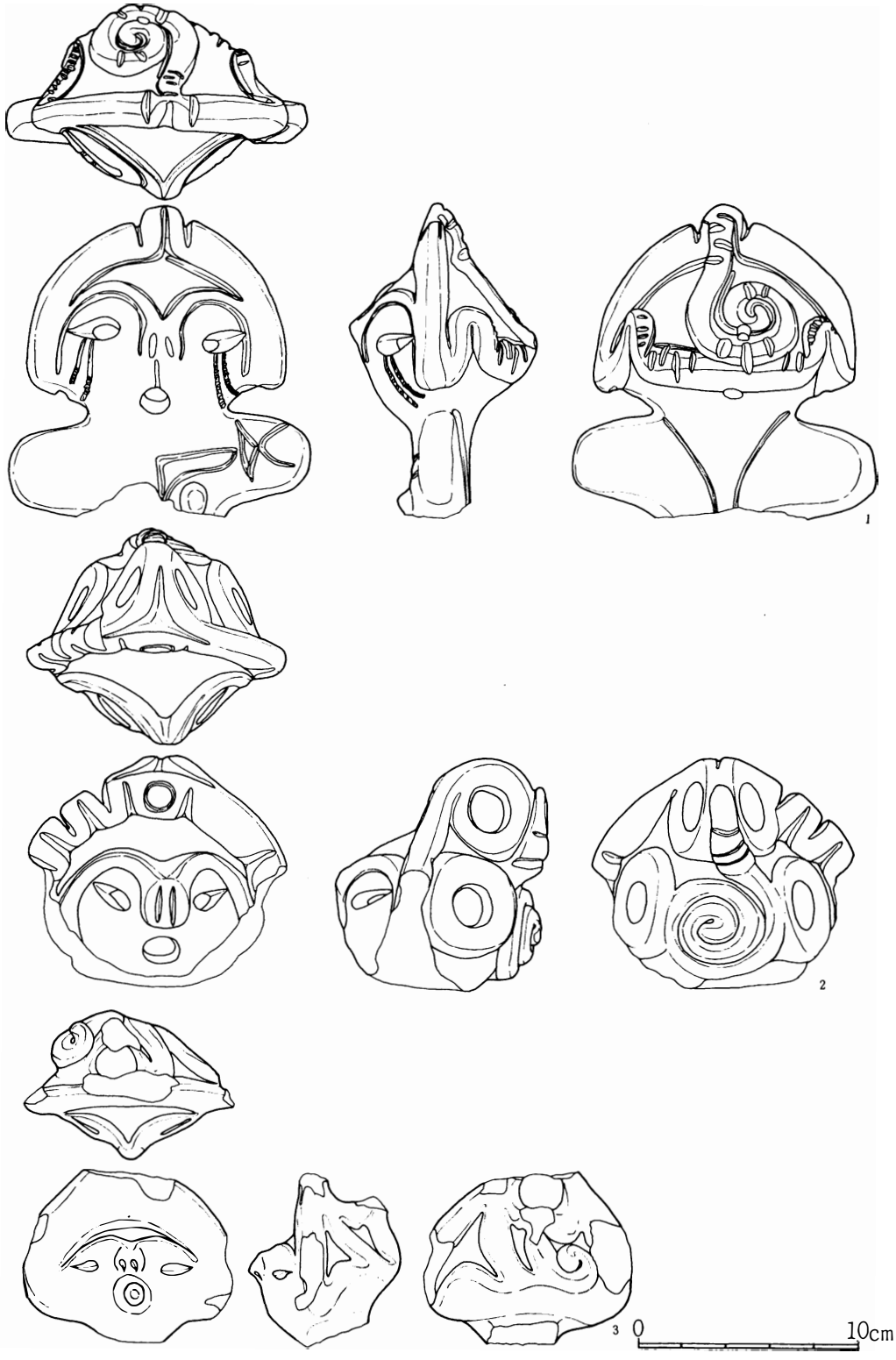
土器は、口唇にかえりをもつ。頸部には粘土紐を一条蛇行貼付する。また、胴部へも同様の粘土紐が垂下していたと思われる。明褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好。磨きは丁寧である。口径37.6㎝、現存高14.8㎝。

4. 土製品

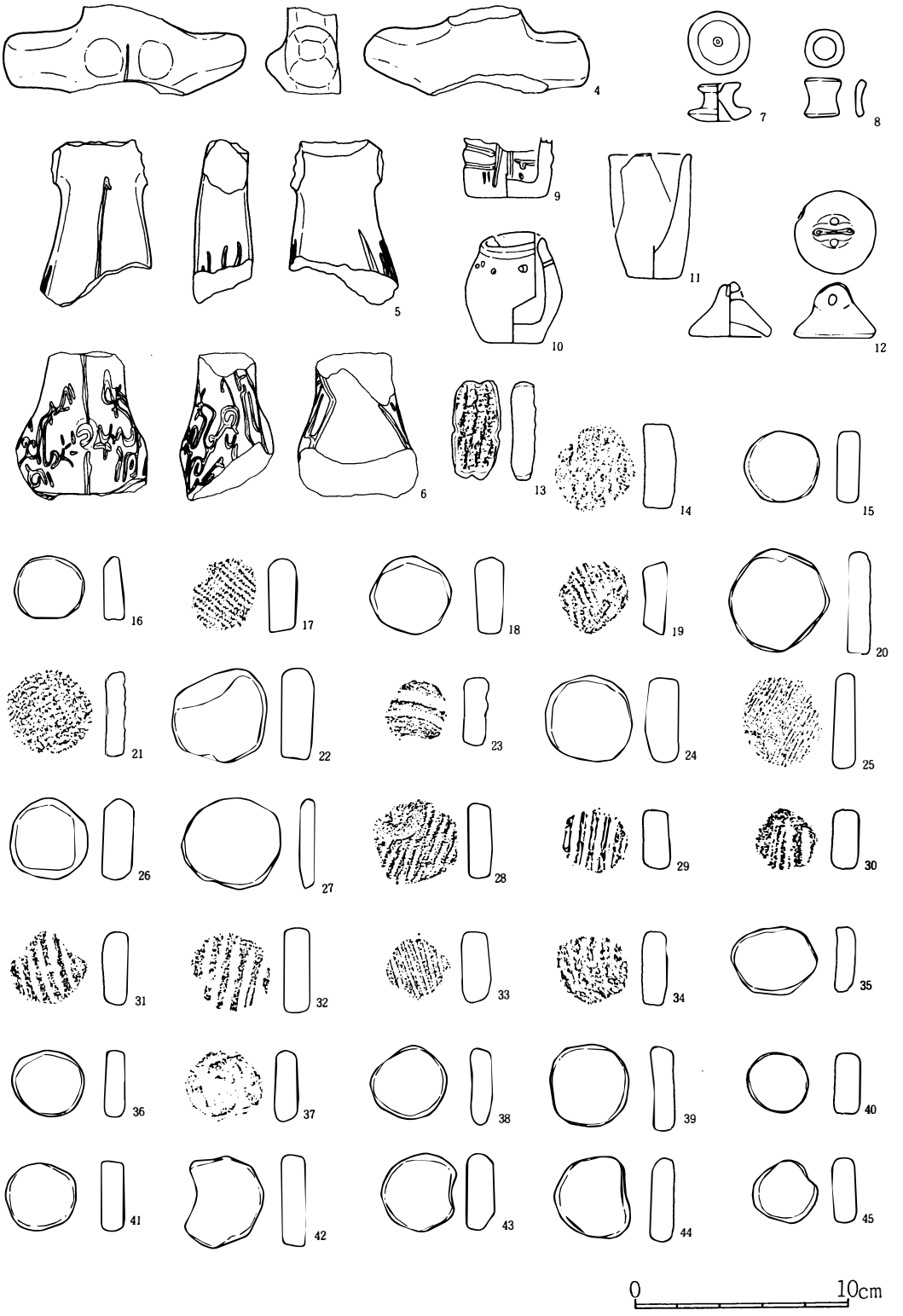
本遺跡からは各種の土製品が出土している。主な資料を第110図、111図に示したが、以下に各々について概観することとする。

○土偶（1～6）

1. 4号住居址床面直上出土。両手間（最大幅）13.6㎝、現存高14.1㎝。胴部以下を欠損しているが、復元高は20㎝をはるかに超える超大型の土偶である。住居床面のほぼ中央に、顔面を下にして出土した。頭部は三角形状を呈し、中空につくられている。顔面は鼻と眉が隆帯で表現され、眼、口は中空部に貫通している。眼から刺青と思われる連続刺突が2条づつ施される。肩部以下では左胸から左腕にのみ沈線による施文がみられるが、右側には全く施されていない。後部は、結髪あるいは蛇体装飾と思われる渦巻状の隆帯が頂部に延びている。また、図示できなかったが、後部中央及び両耳に3㎜ほどの上下の貫通孔がある。両耳の貫通孔を耳飾用とすれば、後部中央は、結髪を止めるヘアピンを意識したものと考えられる。さらに、胸部中央にはやはり上下の貫通孔があり、中空の頭部にまで及んでいる。製作上の木心である。黄褐色を呈し、胎土は精選され、磨き、焼成も良好である。顔面、胸部のところどころに赤色顔料が残存している。　2. 41号土坑出土。顔面の表現は1と同様で、鼻、眉が隆帯で、眼は中空部に貫通している。後部にのみ中空部への貫孔が1対みられ、頭頂部も結髪の表現かもしれ



第 110 図　土製品　その 1



第111図　土製品　その2

ないが、いわゆるミミズク把手状の双孔を有する。また、後部では、やはり隆帯による渦巻がみられ、端部は、双孔に及んでいる。さて、本資料は、両耳部を欠損しており、肩部で収束するか不明であり、かつ、土偶に一般的にみられる木心による貫通孔がみられないことから、土器の顔面把手である可能性も否定できない。もちろん、土偶製作上、木心を使用しないものも多くみられるが、このような大型のものであれば、木心の必要性は大きいと思われる。現存高10.5㎝。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成良好。　3.　5号住居址覆土出土。顔面は眉部のみ段状をなす。本資料は中空ではないため、眼・鼻孔、口は凹みで表現されている。後部には、やはり隆帯が渦巻状をなし、端部は頂部に延びる。さて、頂部は欠損しているが、2と同様、ミミズク把手様の双孔をなすと思われる。本資料にも木心痕はみられない。赤褐色を呈し、胎土は精選されているが、雲母が目立つ。焼成良好。現存高7.9㎝。　4.　4号住居址覆土出土。胸部及び両腕。乳房の中心に正中線がみられる。木心が上下に貫通し、胴部の断面からは、粘土塊を木心に通した後、さらに前後面とも5㎜ほどの厚さに粘土をたし、整形したことが窺える。赤褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成、磨きも良好である。　5.　10号住居址覆土出土。頭部、両腕、足部欠損。正中線はみられるが、乳房は表現されていない。また、両側面には数条の沈線が施されている。上下に木心痕が貫く。赤褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。焼成、磨きは良好である。　6.　古墳周溝内出土。胸部以上、足部欠損。中央に正中線とヘソが表現される。また臀部はハート形を呈すると思われる。さて、腹部には正中線から側部にかけて、沈線によるクランクや渦巻の複合文様が描かれている。刺青であろうか。暗褐色を呈し、胎土には砂粒が非常に多い。焼成は良好であるが、磨きは雑である。

以上6点を示したが他に、4号住居址内で1点、グリッドで2点破片が出土している。

○耳飾（7・8）

7.　7号住居址覆土出土。上面と下面の径が著しく違い、中央は上下面径よりさらに細くなっている。上面、下面それぞれの中央に凹みがみられるが、これは貫通孔ではない。施文は全くみられない。暗褐色を呈し、磨きは丁寧である。胎土に白色粒子が目立ち、焼成も良好である。　8.　グリッド出土。やはり、上下面の径が違うが、それほど著しいものではない。また、中央も上下面より細くなっている。本資料は環状を呈し、器肉は、2㎜～3㎜を測る。施文は全くみられない。赤褐色を呈し、磨きは極めて丁寧である。胎土は精選され、焼成も良好である。なお、内面には、一部に赤色顔料が残存しており、おそらく、全面が赤採されていたと思われる。耳飾はこの2個だけである。

○ミニチュア土器（9～13）

9.　A－28グリッド。深鉢。底径3.9㎝、現存高2.9㎝。沈線による施文がみられる。暗褐色を呈し、胎土は精選されているが、雲母が目立つ。焼成も良好である。底面及び内面はスス状付着物が認められる。なお、本資料は上半部を欠損しているが、割れ口を磨いて、口縁化しているようである。　10.　A－27グリッド。有孔土器。底径2.6㎝、器高4.8㎝。赤褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成も良好である。外面の口縁ちかくには、一部に赤色顔料が残存している。　11.　C－24グリッド。深鉢。底径2.4㎝、器高5.8㎝。暗褐色を呈し、胎土には砂粒を

多く含む。底部ちかくは非常に厚いつくりで、焼成は不良である。 12. 4号住居址覆土出土。蓋。口径3.5㎝、器高2.5㎝。つまみ部は、上面に沈線による施文があり、また、横方向の貫通孔がみられる。明褐色を呈し、胎土には小砂粒が多い。焼成は良好である。ミニチュア土器は、この他、5号住居址覆土、A－21グリッドから各1点、深鉢が出土している。

○土器片錘（13）

C－21グリッド。胎土、縄文等から中期の土器片を利用したと思われる。裏面は土器としての使用によって黒変している。長方形を呈し、各辺は磨きによって、平坦面を構成している。紐かけ用の抉りが、十字方向に4ケ所入っているが、縦方向が約2㎜、横方向が約1㎜の深さである。長辺4.5㎝、短辺2.1㎝、厚さ1.1㎝を測る。重量15.6g。土器片錘はこの1点のみである。

○土製円盤（14～45）

32点を報告するが、この他に、遺構外から9点出土しており、合計41点の出土である。これらはすべて土器片を再利用したもので、周縁を磨いて整形している。これらは、直径2.5㎝～4㎝の範囲に入るものがほとんどである。最初から土製円盤として製作されたものは1点も確認されていない。また、これらはほとんどが、胴部あるいは口縁部のカーブの緩やかな部位の破片が用いられており、反りの強い、底部付近の破片を用いたと思われるものは、18・25・38及び未報告1点を加えた4点だけである。

周辺の磨きについて、とくに丁寧に行われているものは、15・16・23・33・34・36・37・40・43・44があげられる。逆に雑であるものは、14・18・27・29・41・42などがあげられる。これらは中期の土器片と考えられるが、このうち、21は器厚も薄く、施文されている目の荒い縄文や、胎土に雲母、角閃石の比率が高いことなどから、前期末の土器片を利用したものと思われる。また、34の施文は粘土紐を貼付した後、その隆帯部を含めて縄文が施されている。このような手法は中期にはみられず、中期以外の土器片と思われる。ただ、胎土は中期のそれと変らないものである。21は、4号住居址より出土しており、他に前期の土器片も出土しておらず、中期での前期末土器片の再利用と考えられる。34は、85号土坑から単独で出土したもので、時期・性格等不明であるが、中期以外である可能性が高いとしておく。

各々の資料についての胎土、焼成等については割愛するが、以下に出土地点、直径、重量を示しておく。14：1住・4㎝・28.8g、15：2住・3.3㎝・15.8g、16：4住・2.9㎝・12.1g、17：4住・3.4㎝・19.6g、18：4住・3.7㎝・22.1g、19：4住・3.5㎝・14.7g、20：4住・4.9㎝・28.2g、21：4住・3.9㎝・17.3g、22：4住・4.3㎝・32.6g、23：6住・3㎝・13.7g、24：7住・4㎝・30.0g、25：7住・4.3㎝・23.1g、26：7住・3.9㎝・27.3g、27：7住・4.2㎝・16.5g、28：10住・4㎝・23.2g、29：10住・3.1㎝・17.2g、30：10住・2.7㎝・13.7g、31：10住・3.5㎝・17.3g、32：10住・3.6㎝・25.7g、33：10住・2.8㎝・17.3g、34：83土・3.5㎝・15.8g、35：41土・4㎝・13.7g、36：A－20G・3.1㎝・13.5g、37：A－20G・3.6㎝・17.2g、38：A－21G・3.5㎝・19.2g、39：A－28G・3.9㎝・22.0g、40：B－28G・2.9㎝・13.9g、41：B－34G・3.2㎝・15.7g、42：B－43G・4.4㎝・25.3g、43：C－44G・3.7㎝・18.5g、44：古墳周溝内・3.9㎝・18.9g、45：古墳周溝内・3㎝・11.0g。

5　石器

本遺跡からは多くの石器が出土しており、ここでは、住居址、土坑等の遺構から出土したもののはすべて載せることとした。また、出土数の少ない石器は、遺構外からの出土も載せてある。以下に各器種ごとに概観してゆくこととする。

○打製石斧（第112図～第115図）

各住居址から多くの打製石斧が出土しているが、破損品が多く、完形品は少ない。また、床面直上で出土したものは少なく、ほとんどが覆土からの出土である。状態のよいものを選んで示すこととしたが、住居址出土を第112図、第113図に、土坑出土を第114図（3段まで）、その他を第114図、第115図に示した。この他にも、破損品が非常に多くあり、また、粘板岩製のものについては剝離が著しく、整理作業中にもその剝離片は多く見うけられた。それらを含めると、打製石斧の総出土量は膨大な数になると思われる。

さて、本遺跡出土の打製石斧は、短冊形・撥形・分銅形とに分けられる。図に示したもののうち、完形品もしくはほぼ完形であるもの50点についてみると、以下のようになる。

短冊形：基部と、胴部、刃部の幅がほぼ等しいもので、1・5・6・10・11・12・24・25・33・35・36・46・49・60・63・64・66・74。

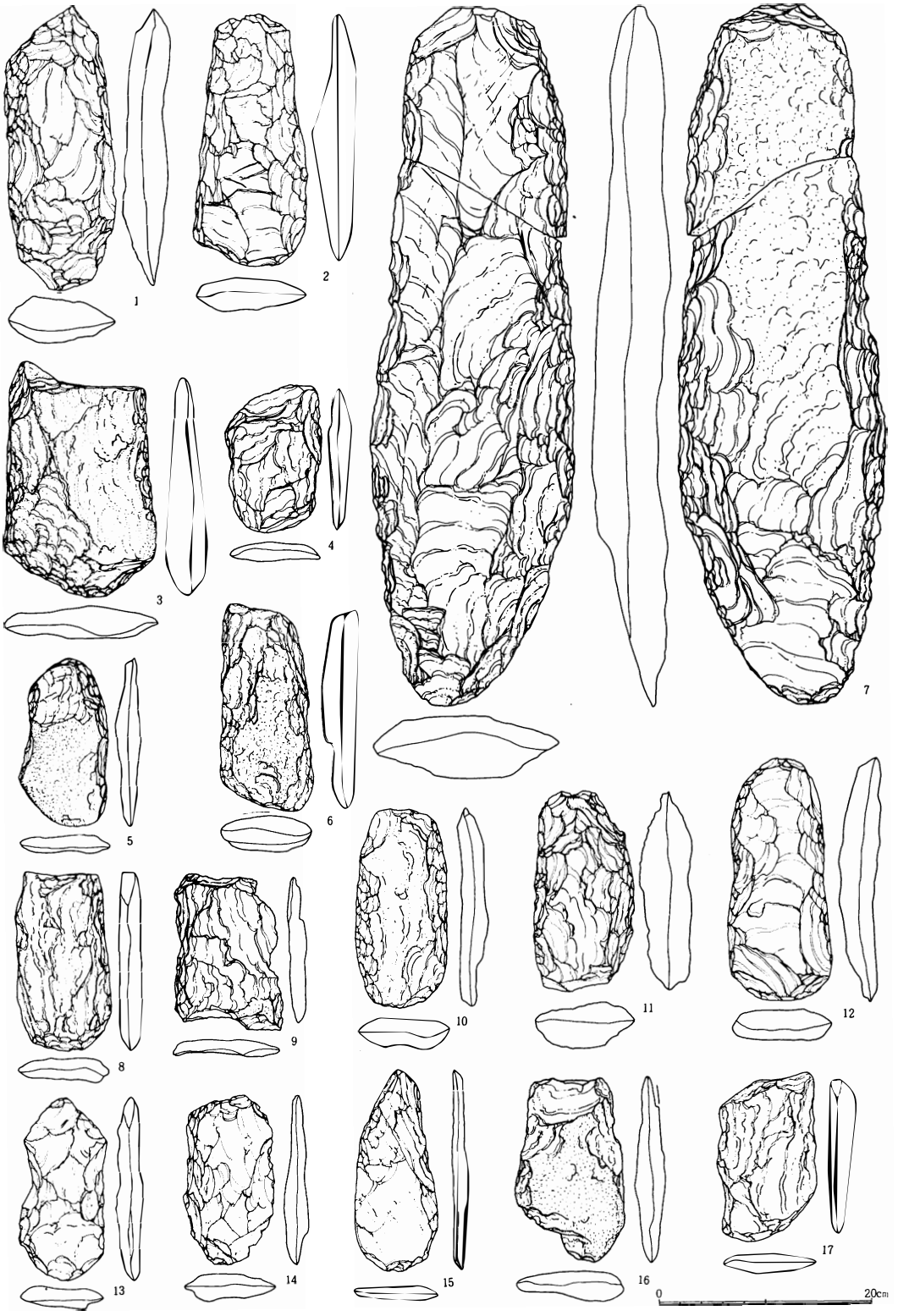
撥形：基部の幅が最もせまく、胴部・刃部と広がっていくもので、2・7・15・27・32・38・40・41・43・44・45・47・48・50・53・56・58・59・61・65・67・68・70・72・73・75。

分胴形：胴部の片側もしくは両側に、抉りを意識的に入れたもので、後期の分胴形などに比べれば、はるかに抉りが弱い。本遺跡の資料では、抉りがなければ、撥形になるものばかりである。13・31・52・55・62・69・71。

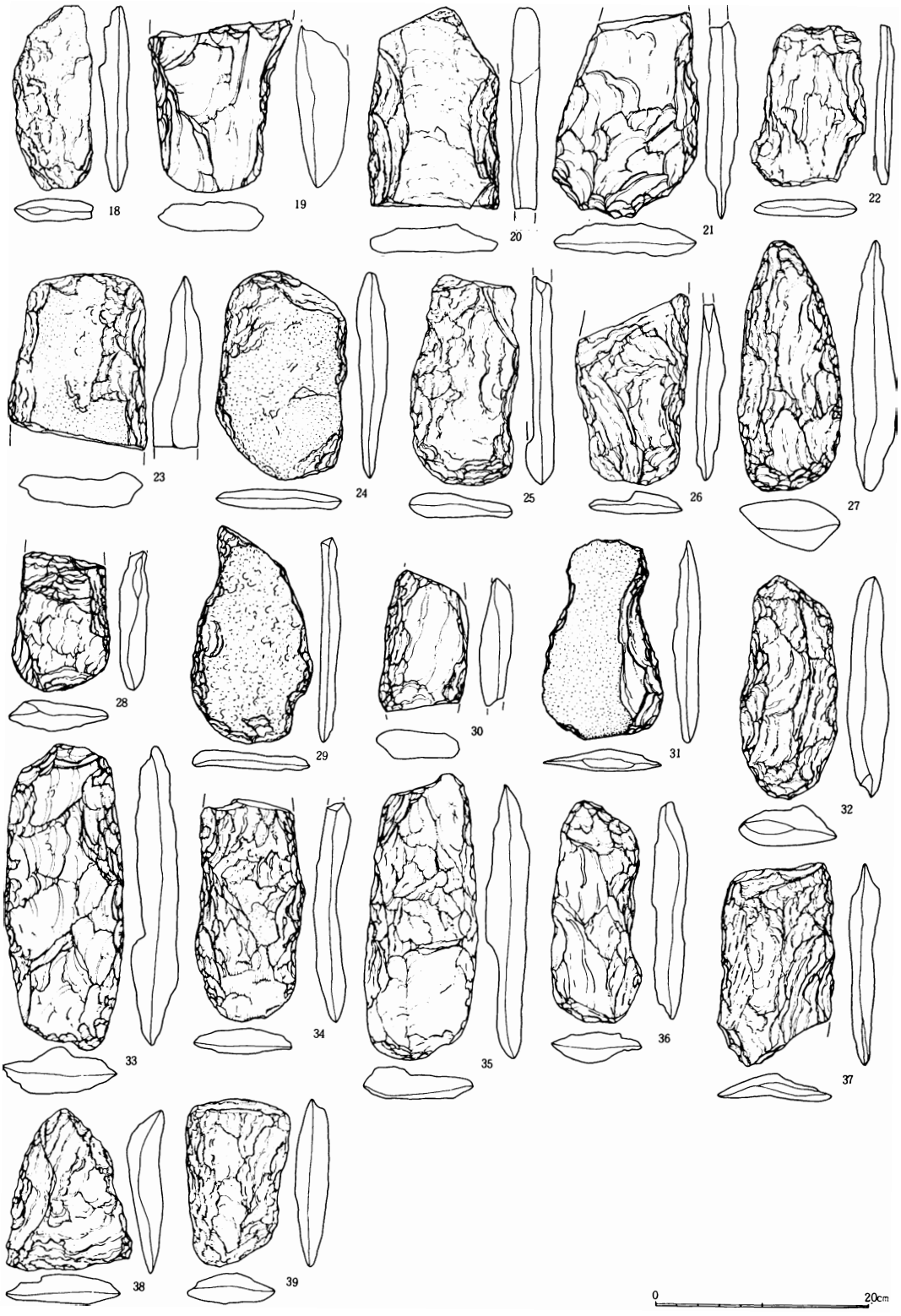
以上のようになるが、個々の資料については表2に示したとおりである。

短冊形と撥形との比較は、後期～晩期に属する石川県御経塚遺跡で行われている。短冊形は長さが9㎝～16㎝、重量が100 g～500 g、刃部幅を基部幅で割った数値が1.0～1.14が多く、撥形は長さ10㎝～18㎝、重量150 g～500 g、刃部と基部とが1 1.15～2.0になると言うことである。これに対し、本遺跡資料は、短冊形は9㎝～14㎝・70 g～140 g・1.1～1.3、撥形は9㎝～12㎝・80 g～170 g・1.4以上というところが最も多く、全体として小型のものが多い。また、撥形では、基部が三角形ないし円形を呈するもの（27・38・41・43・47・48・68・70）が多数存在しており、とくに37・47・48などは全体が三角形状を呈しており、棒の先に着柄しても、充分固定できるか疑問である。掘り棒のような長い柄の先に着けて使用するとは考えにくく、別の用途を考えるべきかもしれない。

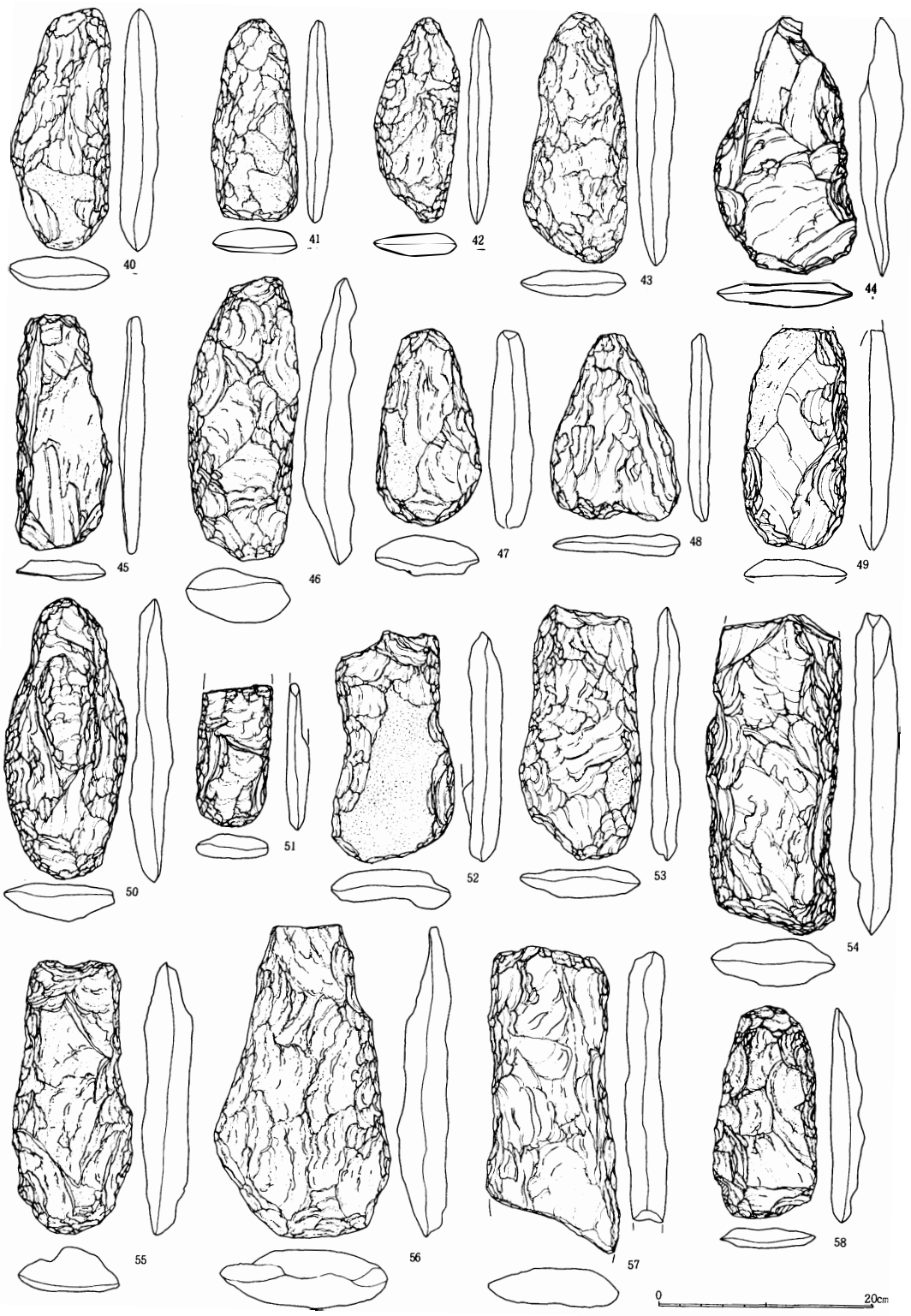
図示したもののうち、欠損品の出土位置、石材を記しておく。3：2住・泥質ホルンフェルス、4：2住・粘板岩ホルンフェルス化、8：4住・粘板岩ホルンフェルス化、9：4住・粘板岩、14：4住・粘板岩、16：4住・粘板岩ホルンフェルス化、17：4住・粘板岩ホルンフェルス化、18：4住・粘板岩ホルンフェルス化、19：4住・泥質ホルンフェルス、20：5住・泥質ホルンフェルス、21：5住・泥質ホルンフェルス、22：5住・粘板岩、23：5住・泥質ホルンフェルス、26：6住・粘板岩ホルンフェルス化、28：6住・粘板岩、29：7住・粘板岩ホルンフェルス化、30



第112図　打製石斧　その1

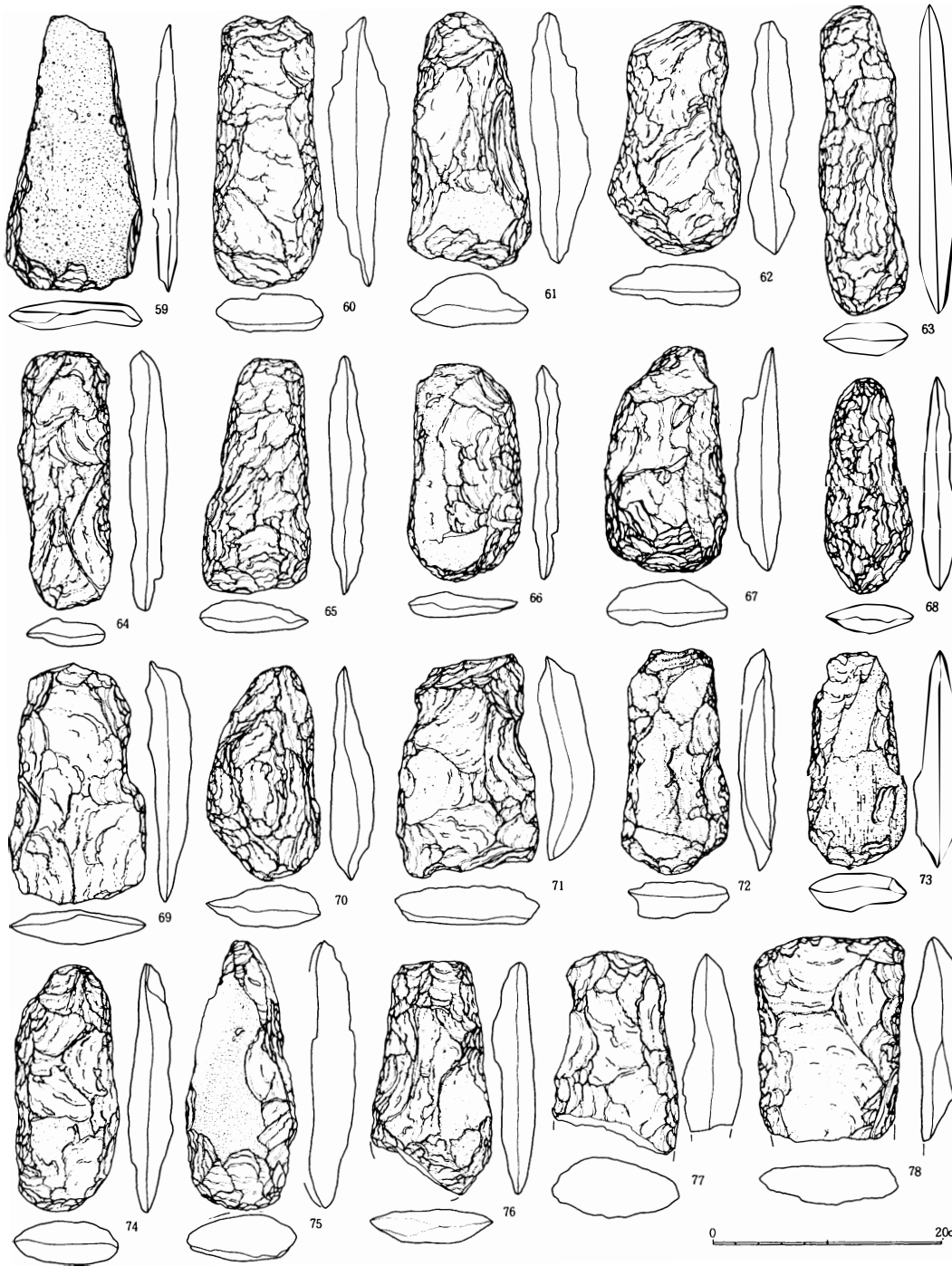


第113図　打製石斧　その2



第114図　打製石斧　その3

：7住・粘板岩ホルンフェルス化、34：11住・粘板岩、37：11住・粘板岩、39：11住・粘板岩ホルンフェルス化、42：35～38土・粘板岩ホルンフェルス化、51：42土・粘板岩、54：91土・粘板岩ホルンフェルス化、57：グリッド・粘板岩ホルンフェルス化、58：グリッド・泥質ホルン



第115図　打製石斧　その4

フェルス、76：A－17グリッド・泥質ホルンフェルス、77：古墳周溝内・泥質ホルンフェルス、78：C－54グリッド・半粒砂岩。

表2. 打製石斧一覧表

番号	出土位置	形態	長さ (cm)	基部幅 (cm)	刃部幅 (cm)	刃/基	刃部形	重量 (g)	石材
1	1住	短冊形	13.2	4.5	5.0	1.11	円刃	187.6	泥質ホルンフェルス
5	3住	〃	7.9	3.5	4.2	1.2	〃	42.5	粘板岩 ホルンフェルス化
6	〃	〃	9.3	3.6	4.25	1.18	斜刃	97.1	〃
10	4住	〃	9.3	3.9	4.35	1.11	円刃	88.7	泥質ホルンフェルス
11	〃	〃	9.3	4.1	4.65	1.13	斜刃	116.8	〃
12	〃	〃	11.5	4.05	4.6	1.13	円刃	136.2	〃
24	5住	〃	9.7	5.6	5.9	1.05	斜刃	91.9	粘板岩 ホルンフェルス化
25	〃	〃	9.8	4.0	4.9	1.22	円刃	75.2	泥質ホルンフェルス
33	11住	〃	14.1	4.5	5.4	1.20	斜刃	206.8	〃
35	〃	〃	12.9	4.3	5.2	1.20	円刃	179.6	粘板岩 ホルンフェルス化
36	〃	〃	10.2	3.5	4.2	1.20	〃	95.7	泥質ホルンフェルス
46	41土	〃	13.3	2.6	4.85	1.86	〃	200.0	〃
49	42土	〃	10.2	3.4	4.7	1.38	〃	75.5	粘板岩 ホルンフェルス化
60	A－29G	〃	11.8	3.9	4.65	1.19	〃	174.7	泥質ホルンフェルス
63	古周	〃	13.5	2.6	3.65	1.40	〃	89.5	粘板岩 ホルンフェルス化
64	A－22G	〃	11.4	3.6	3.4	0.94	〃	105.2	泥質ホルンフェルス
66	D区表採	〃	9.45	4.2	4.8	1.14	〃	74.5	粘板岩
74	B－29G	〃	11.0	3.7	4.6	1.24	〃	123.1	泥質ホルンフェルス
2	2住	撥形	11.5	3.5	5.2	1.48	〃	153.1	細粒砂岩
7	3住	〃	33.0	6.3	9.1	1.44	斜刃	1410.8	泥質ホルンフェルス
15	4住	〃	9.4		4.0		円刃	40.0	粘板岩
27	6住Pit1	〃	11.8		4.7		〃	138.5	ホルンフェルス
32	11住	〃	10.45	3.4	4.55	1.33	〃	102.7	泥質ホルンフェルス
38	〃	〃	7.7		5.8		直刃	81.6	ホルンフェルス
40	13土	〃	11.2	2.8	4.6	1.64	円刃	109.7	粘板岩 ホルンフェルス化
41	35～38土	〃	9.4		3.9		直刃	57.7	〃
43	〃	〃	11.65		4.9		斜刃	119.6	〃
44	41土	〃	11.95		6.25		円刃	148.4	粘板岩？
45	〃	〃	11.0	2.8	4.15	1.48	斜刃	63.5	粘板岩
47	〃	〃	9.2		4.9		円刃	105.5	シルト岩
48	〃	〃	8.25		5.9		直刃	52.5	粘板岩 ホルンフェルス化
50	42土	〃	13.15	3.1	5.1	1.64	円刃	153.5	〃

番号	出土位置	形　態	長　さ (cm)	基部幅 (cm)	刃部幅 (cm)	刃/基	刃部形	重　量 (g)	石　　材
53	52　土	撥　形	11.8	3.7	5.6	1.51	斜　刃	125.2	粘板岩 ホルンフェルス化
56	古　周	〃	14.4	3.3	7.8	2.36	円　刃	361.1	泥質ホルンフェルス
59	B－21G	〃	11.7	2.7	5.8	2.14	直　刃	126.0	細粒砂岩
61	B－27・28G	〃	11.0	3.0	5.2	1.73	〃	169.1	泥質ホルンフェルス
65	C区表採	〃	10.5	2.0	4.7	2.35	〃	106.6	粘板岩 ホルンフェルス化
67	古　周	〃	9.8		5.2		〃	123.1	粘板岩
68	F－28G	〃	9.4		3.8		斜　刃	54.8	粘板岩 ホルンフェルス化
70		〃	9.4		5.0		〃	96.4	〃
72	3 号 溝	〃	9.8	2.7	4.6	1.70	〃	104.3	泥質ホルンフェルス
73	A区表採	〃	9.5	2.5	4.3	1.72	円　刃	97.1	細粒砂岩
75	B区表採	〃	11.8		4.8		直　刃	137.4	〃
13	4　住	分胴形	8.7		3.9		円　刃	54.2	泥質ホルンフェルス
31	10　住	〃	9.55	3.5	5.6	1.60	直　刃	71.5	粘板岩
52	51　土	〃	10.7	4.6	5.6	1.21	斜　刃	150.8	泥質ホルンフェルス
55	C区表採	〃	12.7	4.0	5.1	1.27	円　刃	190.7	砂岩
62	A－23G	〃	10.2	3.9	5.7	1.46	〃	140.7	ホルンフェルス
69	1住付近	〃	10.6	3.7	5.9	1.59	直　刃	129.8	粘板岩 ホルンフェルス化
71	C－46G	〃	9.0	3.9	6.35	1.62	〃	168.0	泥質ホルンフェルス

○磨製石斧（第116図）

磨製石斧の出土量は少なく、図示した以外に、各部位の破片が6点あるだけである。このうち、定角式磨製石斧は図に示したうち、2・6・8・12の4点だけであり、あとはすべて乳棒状磨製石斧である。

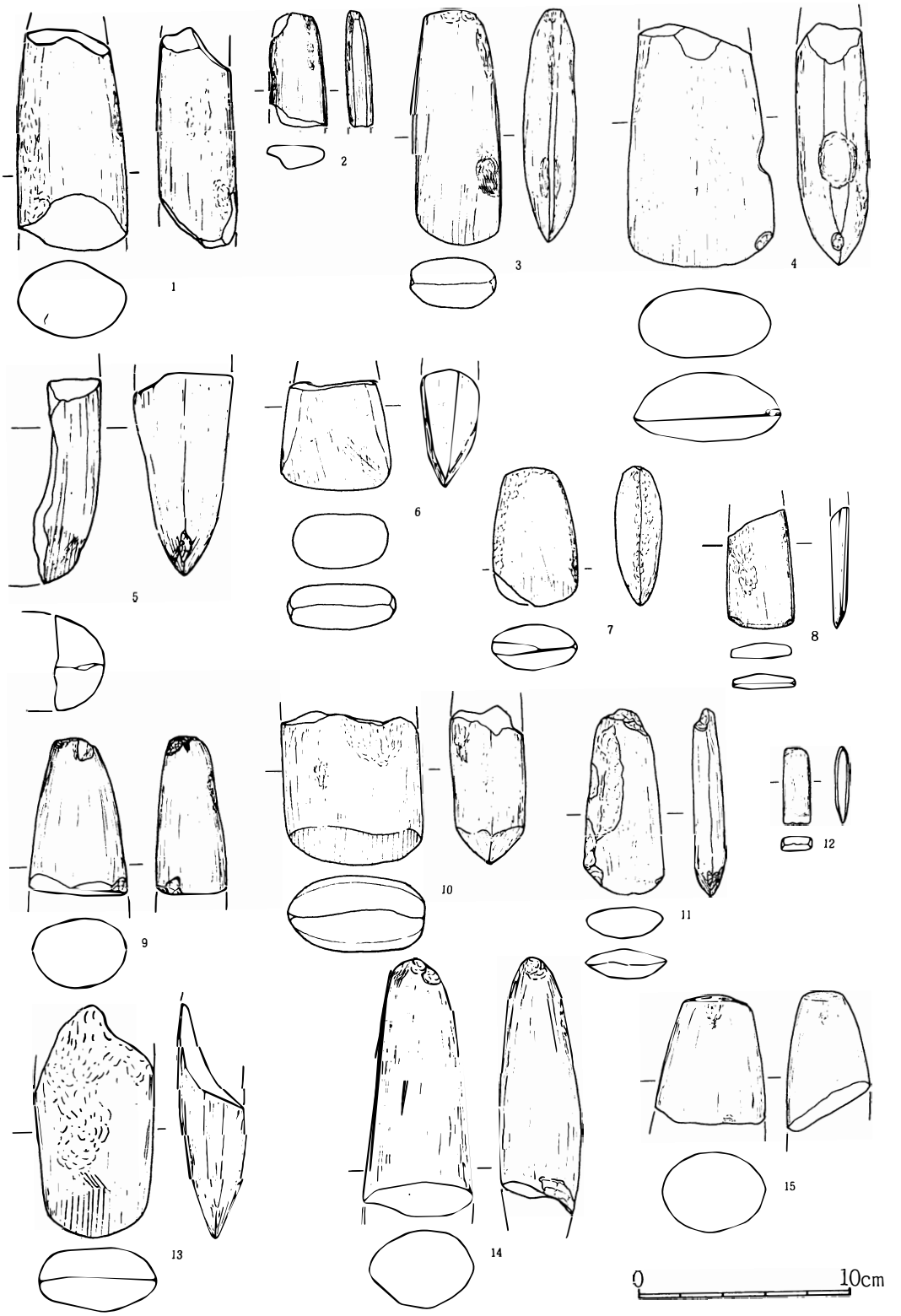
乳棒状磨製石斧は、大型で肉厚のものが多い。すべて両刃である。4がやや丸みをもった直刃である以外は、すべて円刃である。また、10は極めて急角度で刃がつくり出されていることから、破損品を再利用したと思われる。ほとんどが丁寧な磨きで仕上げられているが、7は、敲打後の磨きが極めて雑である。磨きは行われていない訳ではなく表面の一部に明らかに磨きによる滑らかな部分がみられるが、全体の凹凸は著しい。4は側縁の刃部寄りに幅2㎝、深さ5㎜ほどの抉りがみられる。

定角式磨製石斧は、2・8・12が小型で薄いつくりであるが、6は肉厚で大型である。刃はいずれも直刃かつ両刃である。6は刃に直交あるいは斜交する擦痕は認められる。また、12にも擦痕は認められるが、刃部に直交するものは皆無である。

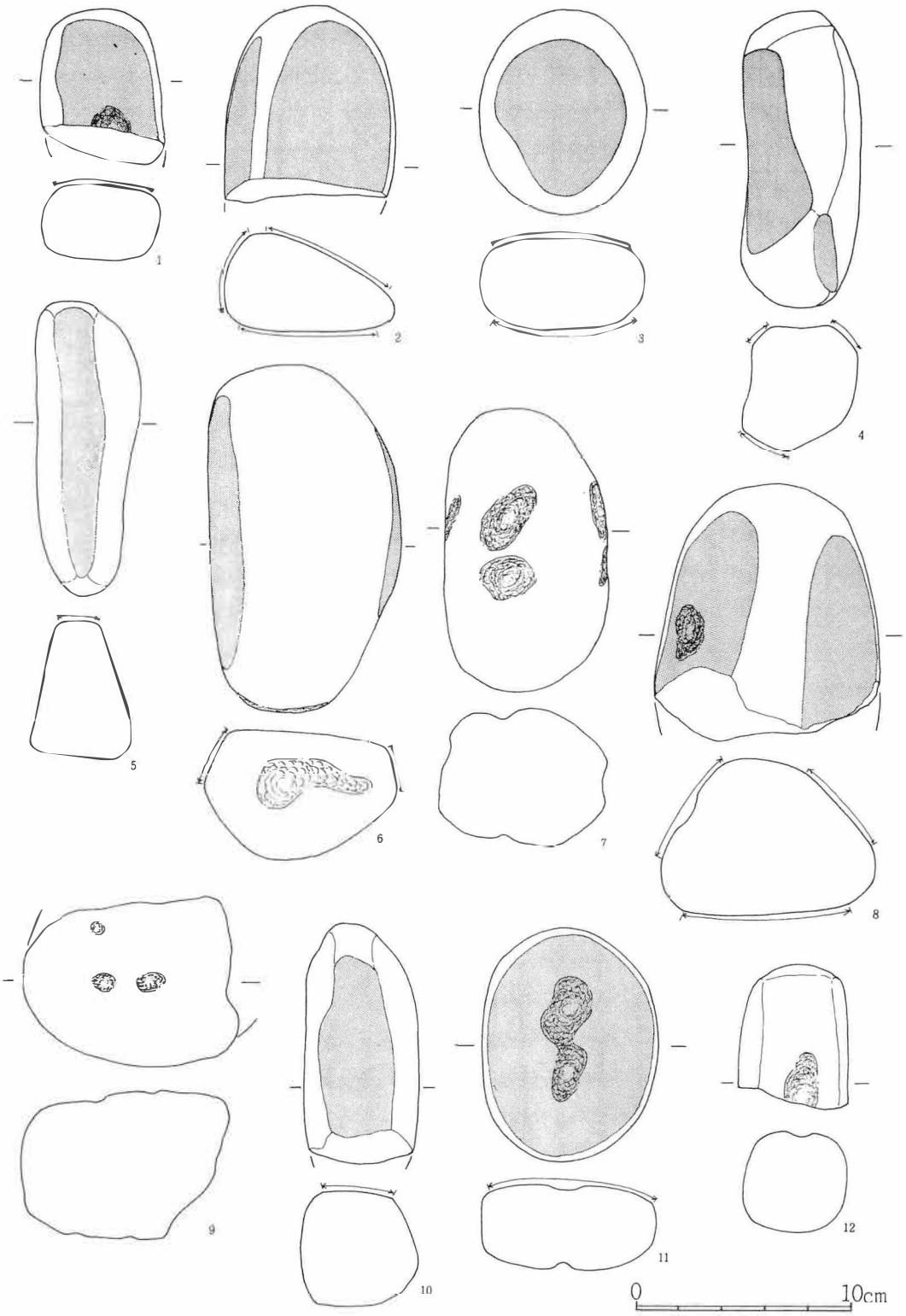
○磨石・凹石・敲石（第117図～第119図）

本遺跡ではこの種の石器は、打製石斧に次いで出土量が多い。

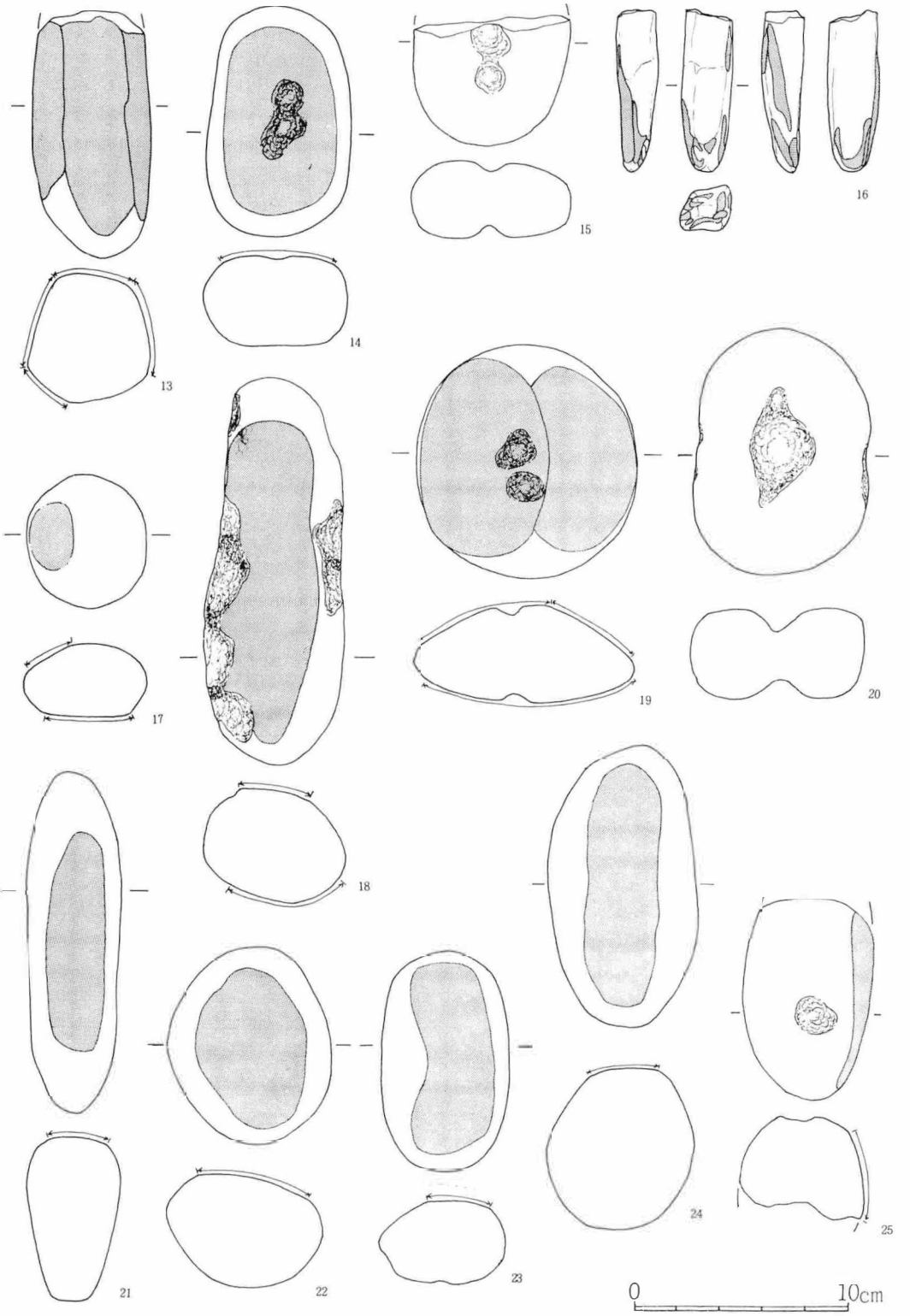
磨石は拳大よりやや大きい程度のものが圧側的に多いが、磨きにより平坦面を有し、稜の認められるものを磨石としており、磨きが行われているか不確実なものが遺構内からも出土して



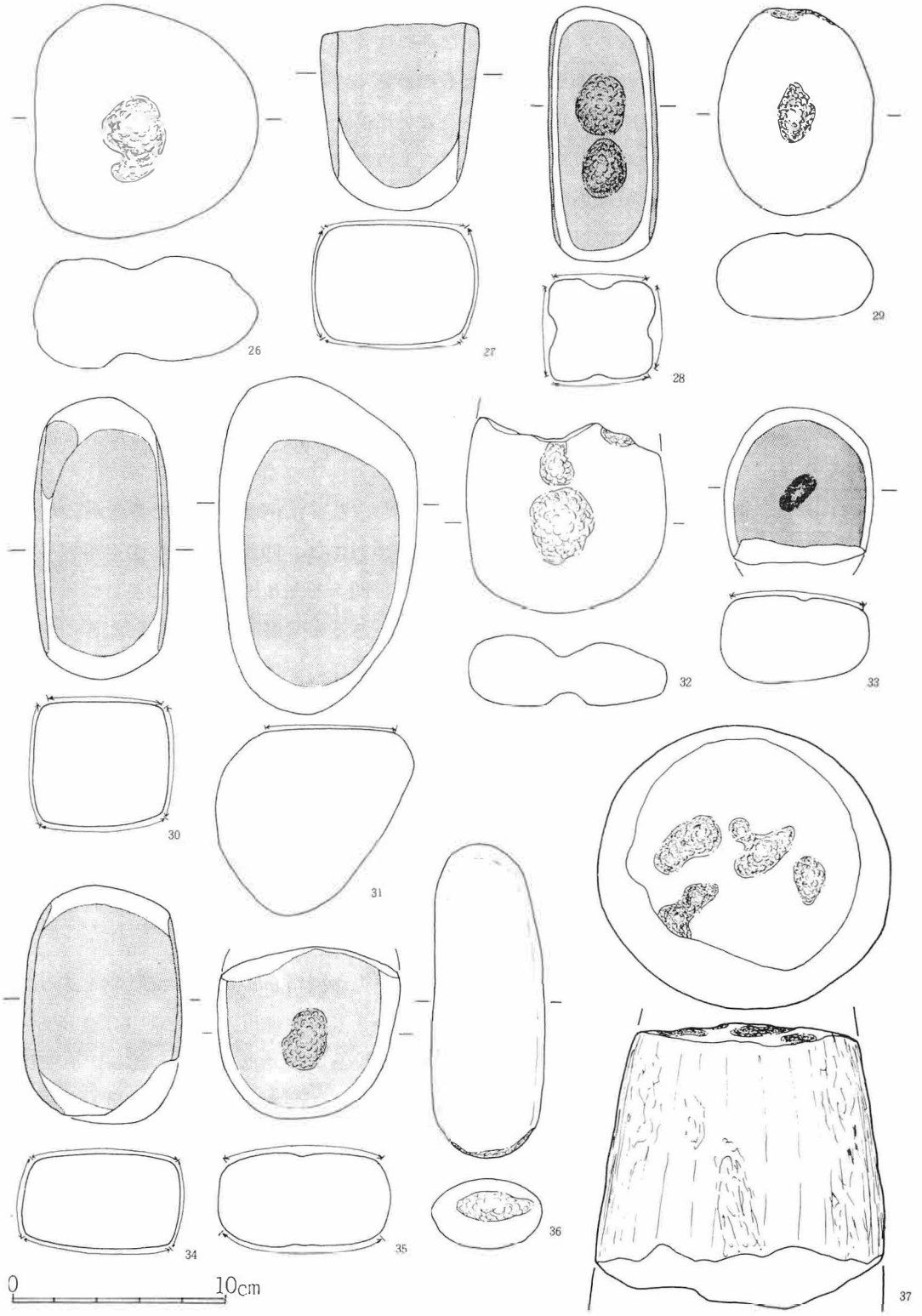
第 116 図　磨製石斧



第 117 図　磨石・凹石・敲石　その 1



第118図　磨石・凹石・敲石　その2



第119図　磨石・凹石・敲石　その3

いるが、それは除いてある。多くが凹石を兼ねている。

凹石は、両面を使用しているものが多いが、なかには4面を使用したものもみられる。また、1点だけではあるが、破損した石棒を利用したものがある。さらに、前述したように磨石と兼ねたものがあるが、凹石だけに使用されたものの方が比率としては高い。

敲石は、細長い河原石の一端を敲打したもので、1点だけ確認されたが、凹石あるいは磨石の端部に凹凸の認められるものがあり、敲石としても利用されていたと思われる。

この種の石器は、図示したもの以外にも、磨石が4点、磨石・凹石が3点、凹石が10点出土している。

磨石・凹石、あるいは敲石を兼ねているものは、図示しなかったものも含めて15点出土しているが、その組み合わせは、磨石・凹石が12点（1・8・11・14・19・25・28・33・35、他に3点）、磨石・敲石1点（6）、凹石・敲石2点（20・29）、となっている。このように、磨石・凹石の組み合せが最も多いが、図示したもの9点のうち8点までが、磨石の磨面に凹みがみられる。

以上のように、磨石と凹石が結果として兼ねたかたちになった例は多いのであるが、はたして併用されたものであるかは定かではない。ただ19については、凹面と磨面の接点が整った円形を呈し、また、凹み自体が浅くなっていることから、凹みを先につけて磨石として使用したと考えられる。凹石は用途不明とされているが、凹みがあるまま磨石として利用することが可能であることを示すものであろう。

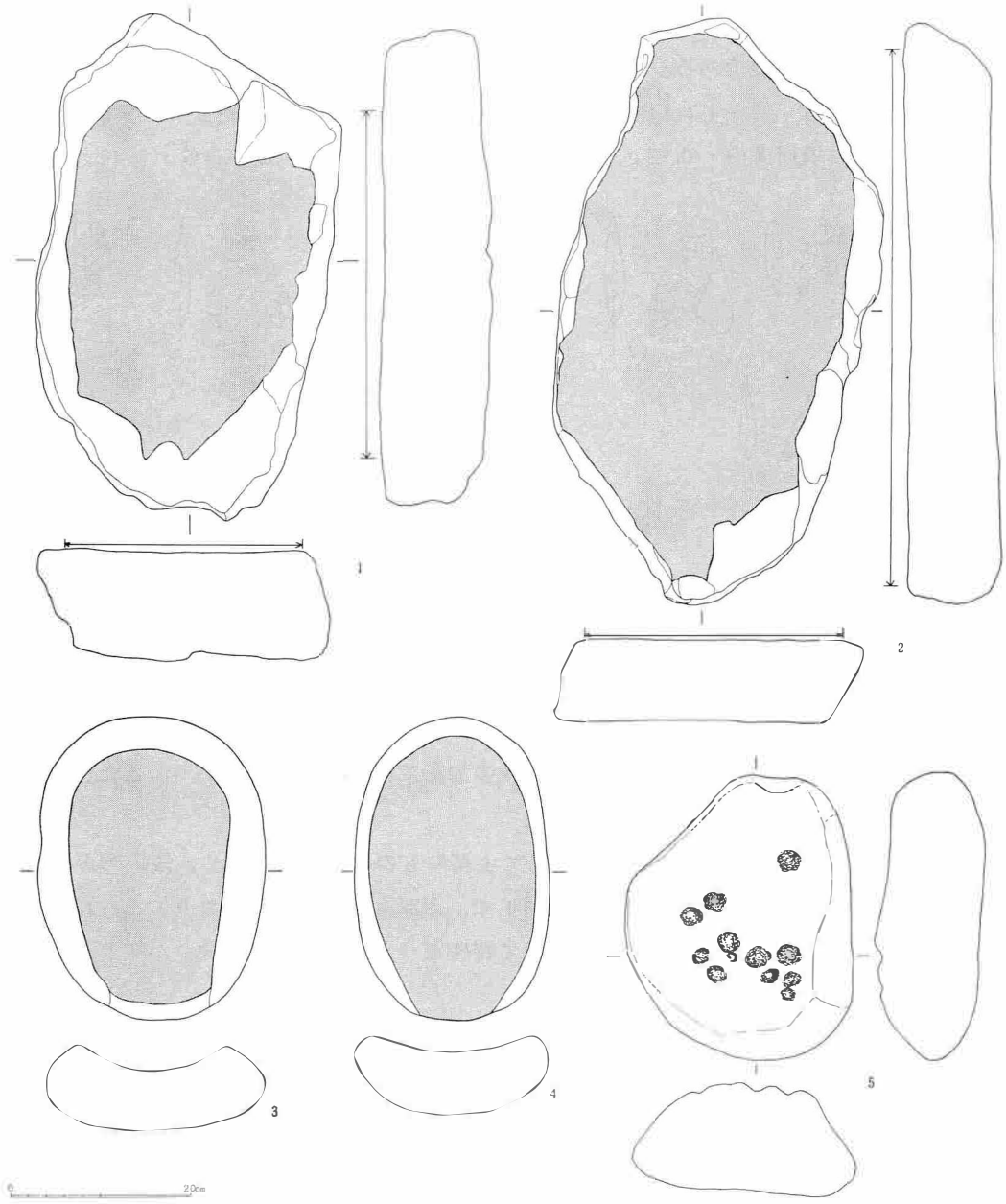
16は磨石として報告するが、通常の円礫と異なり、細長い河原石を用いて、先端部を中心に各面を使用している。使用法も、指先でつまむようにして、対象物にこすりつけるような方法が用いられていたと考えられる。石皿とセットを成す通常の磨石と違い、ある種の工具と考えるべきものであろう。

○石皿・多孔石（第120図）

石皿は磨石とセットを成すものであるが、図示した以外は、小破片が1点表採されているにすぎず、出土量は極めて少ない。

1・2は、板状石皿で、平石の一面が使用によって平坦かつ滑らかになったものである。とくに凹みや縁は形成されていない。いずれも、前期末の3号住居址出土である。1：全長55㎝、使用面は37㎝×27㎝。グラノファイアー製。　2：全長65㎝、使用面は60㎝×29㎝。石英閃緑岩製。　3は、井戸尻式期と考えられる38号土坑から出土しており、楕円形を呈し中央に凹みをもち、三方に明瞭な稜を有する。また、はき出し口にも不明瞭ながら稜を有し、粉末が外に出にくいようになされている。全長33.5㎝、使用面は28㎝×18㎝。安山岩製。なお、裏面は多孔石として使用されている。　4は前期末の40号土坑出土で、第57図1の土器に、磨面を下にしてかぶせられていた。楕円形を呈し中央が凹むが、凹みは3に比べてはるかに浅い。はき出し口部までが使用面となっている。全長34.5㎝、使用面は31.5㎝×18.5㎝。　安山岩製。

多孔石は7号住居址から1点だけ出土している。不定形の礫の上面を使用したもので、確実なとこで12個凹みがある。長さ31.5㎝、幅25㎝を測る。細粒砂岩製。なお、本資料は図示した



第120図　石皿・多孔石

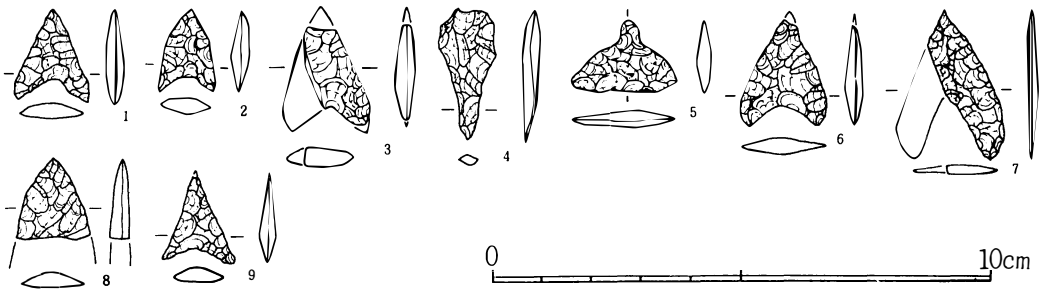
上面の一部、及び横面、下面が非常に滑らかで、かつ緩やかな凹みが認められ、石皿としても使用されたと思われる。

○石鏃・石錐・石匙（第121図）

石鏃の出土量は非常に少なく、破損品を含めても7点だけで、石錐もわずか1点だけである。石匙は第121図にそのほとんどを示したが、極く小型のものを先に示すことにした。　5は、つまみ部もつくられているが、他にこのような小型品はなく、石鏃製作中に石匙につくり変えたものであるかもしれない。本図に示した石器はすべて押圧剥離によって薄く丁寧に整形され

ているが、8は、剝離が大まかで、復元長も大きく、尖頭器の可能性もある。1がチャート製で、他はすべて黒曜石製である。また、基部のあるものはすべて凹基無茎である。

1：2住・0.75g、2～4：4住・0.54g・0.89g・1.08g、5：41土坑・0.75g、6：64土・0.97g、7：古墳周溝内・0.92g、8：B－28G・0.88g、9：B－34G・0.49g。



第121図　石鏃・石錐・石匙

○石匙（第122図）

図示したもの以外に、グリッドから8点出土しており、第121図の1点を加えて合計24点が出土している。縦型と横型の二種類が存在する。

縦型は数が少なく2・3・10と、図示していないものに1点の計4点だけであるが、5㎝以下の小型のものはみられない。すべてが片面だけの加工で、3は彎曲している。また、3・10は刃部加工の剝離が大きい。

横型は、大型と小型とに分けられるが、概して小型のものは剝離が細かく、鋭い刃がつくり出されている。14・11と第121図5は、両面加工で、刃部も両刃となっており、とくに14は薄く丁寧なつくりとなっている。また、11は極めて特殊なつくりで、中央に抉りが入り、刃部はくの字状を呈している。

○石錘・浮子（第123図）

石錘は2点だけの出土で、いずれも切目石錘である。1は堀之内式期の住居址である2号住居址炉内からの出土で、長さ5.2㎝、最大幅3.5㎝、厚さ1.4㎝、切目間（紐掛け間）5.0㎝、切目幅0.3㎝を測る。重量35.0g。粘板岩製。2はA－20グリッド出土。1に比べ切目の幅が広く深い。長さ4.8㎝、最大幅4.4㎝、厚さ1.6㎝、切目間4.2㎝、切目幅上部1.1㎝、下部1.2㎝を測る。重量39.8g。安山岩製。

浮子はA－27グリッドから1点だけ出土した。台形状に整形し、穿孔したもので長さ6.8㎝、最大幅4.7㎝、厚さ1.4㎝、孔径0.8㎝を測る。重量12.4g。軽石製。

6. グリッド出土土器

遺構に属さないかたちで多くの土器が出土しているが、復元可能なものは極くわずかである。以下に主な6点の概要を記す。（第124図）

1. 5単位の波状口縁を成す深鉢で、B－34グリッドより出土した。口縁下全面に目の荒い縄文が施される。整形は雑で磨きはほとんどなされていない。推定口径40㎝、現存高24.5㎝。

第122図　石　　匙

表 3. 磨製石斧一覧

番号	出土位置	長(cm)	刃部長(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材
1	1 住	(10.3)	—	3.6	(334.4)	細粒凝灰質砂岩
2	3 住	(5.4)	—	1.3	(26.5)	凝灰質泥岩
3	10 住	11.1	4.0	2.5	195.4	シルト岩
4	10 住	(11.5)	6.6	3.4	(462.3)	安山岩
5	11 住	(9.5)	—	—	159.1	細礫岩
6	53 土	(5.0)	5.2	2.7	(118.5)	シルト岩
7	90 土	6.6	3.6	2.2	87.6	凝灰岩
8	グリッド	(5.7)	2.0	0.9	(23.7)	細粒砂岩
9	古墳周溝	(7.5)	—	3.3	(163.3)	中粒砂岩
10	古墳周溝	(7.2)	6.4	3.6	(298.6)	安山岩
11	B－26G	8.8	3.6	1.4	72.2	凝灰岩
12	B－23G	3.6	1.3	0.7	6.4	泥岩
13	C－27G	(11.0)	4.8	3.0	(210.3)	シルト岩
14	B－23G	(11.2)	—	4.0	(340.9)	細礫岩
15	A－48G	(6.1)	—	2.9	(177.2)	極粗粒砂岩

(　　)内現存部測定値

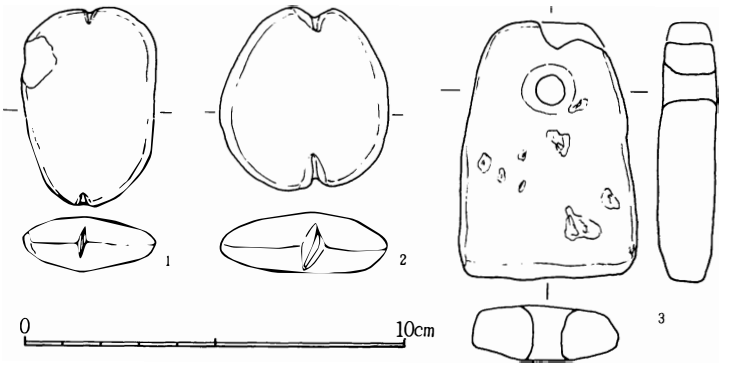
表 4. 磨石・凹石・敲石一覧

番号	出土位置	長さ(cm)	重量(g)	使用面		石材
1	2 住	7.2	215.7	1 面		安山岩
2	〃	9.3	464.6	3 面		〃
3	〃	9.55	458.4	2 面		粗粒砂岩
4	3 住	13.9	762.2	3 面		閃緑岩
5	〃	13.7	635.8	5 面		凝灰岩
6	〃	16.2	1181.1	2 及び先端		安山岩
7	4 住	13.4	813.2	4 面		〃
8	〃	12.0	1185.1	3 面		閃緑岩
9	〃	9.6	604.3	2 面		安山岩
10	5 住	11.2	562.0	1 面		閃緑岩
11	〃	10.9	488.4	2 面		安山岩
12	〃	6.7	222.6	1 面		〃
13	〃	11.5	576.1	4 面		〃
14	〃	10.8	504.1	1 面		〃
15	〃	6.1	200.9	2 面		〃
16	〃	7.6	51.3	4 及び先端		細粒砂岩
17	6 住	6.25	171.3	2 面		石英閃緑岩

番号	出土位置	長さ(cm)	重量(g)	使用面		石　　材
18	6　住	18.0	931.7	2　面		安山岩
19	7　住	10.85	622.5	3　面		〃
20	〃	11.4	544.1	2　面		〃
21	〃	15.9	684.4	1　面		〃
22	8　住	9.3	541.8	1　面		〃
23	〃	10.35	423.1	2　面		〃
24	9　住	13.2	943.5	1　面		石英閃緑岩
25	〃	9.4	315.1	2　面		安山岩
26	10　住	11.0	709.4	2　面		〃
27	11　住	8.8	624.6	4　面		〃
28	35～38土	12.0	494.5	4　面		〃
29	46　土	9.7	393.3	1　面		〃
30	89　土	13.2	918.5	4　面		〃
31	〃	15.75	1773.1	1　面		閃緑岩
32	100　土	9.1	386.9	2　面		安山岩
33	B－24G	7.4	325.5	1　面		〃
34	B－34G	11.15	540.5	4　面		閃緑岩
35	C－25G	8.0	475.8	2　面		安山岩
36	古墳周溝	14.65	409.3	先　端		閃緑岩
37	A－28G	13.4	2920.0	上　面		安山岩

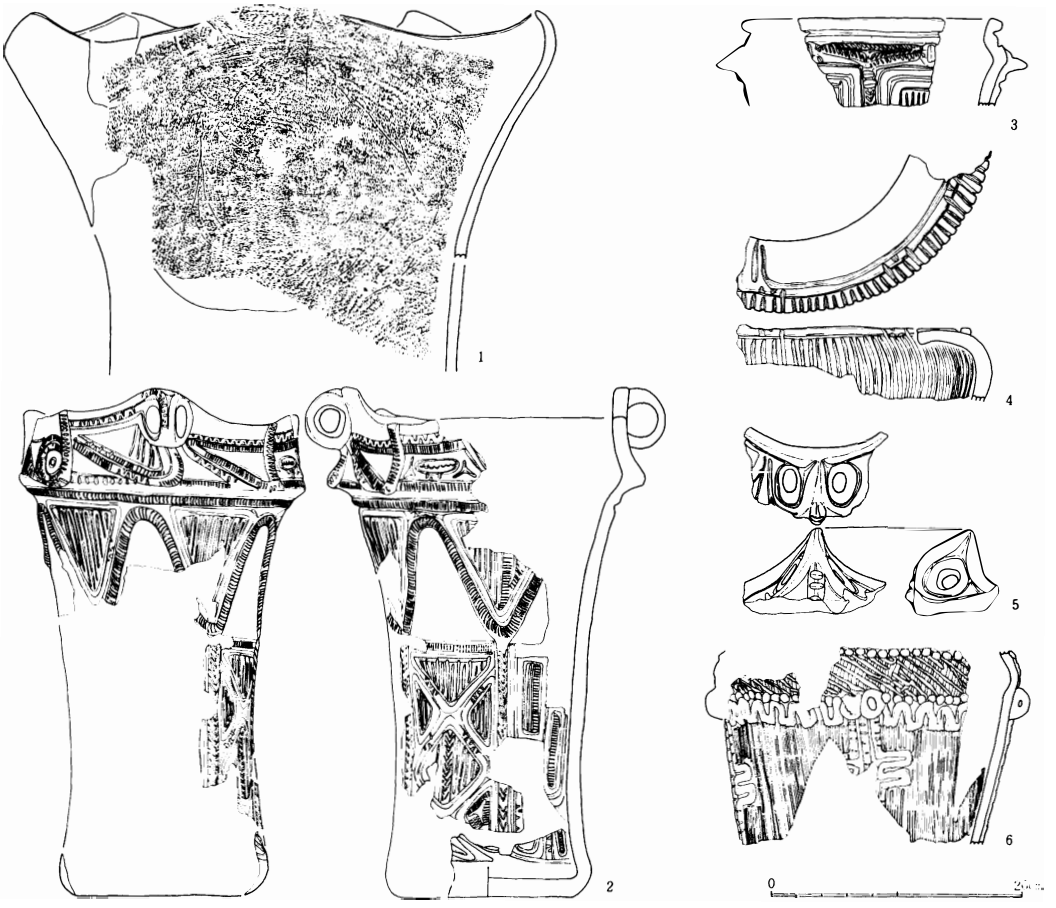
表 5.　石匙一覧

番号	出土位置	長さ(cm)	幅 (g)	重量(g)		石　　材
1	1　住	12.1	5.45	83.0		ホルンフェルス？
2	〃	9.1	4.8	46.2		粘板岩
3	〃	10.7	4.5	61.4		凝灰岩
4	4　住	10.2	7.85	112.2		〃
5	〃	5.05	3.2	10.7		〃
6	〃	3.2	2.65	7.3		〃
7	8　住	(3.8)	(3.15)	9.0		〃
8	11　住	(6.7)	6.4	55.7		粘板岩
9	11　土	9.15	6.8	72.0		〃
10	48　土	(7.1)	2.85	19.6		凝灰岩
11	89　土	(7.1)	4.3	11.9		〃
12	表　採	12.3	8.1	122.0		細粒砂岩
13	G	(3.05)	3.3	6.9		粘板岩
14	G	(3.45)	2.35	2.1		チャート？
15	G	6.6	3.4	21.5		凝灰岩



第 123 図　石錘・浮子

暗褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成良好。諸磯ｂ式期に位置づけられる。　2.　1 単位の把手を有する深鉢で、口縁部、胴部とも隆帯による三角形区画を基本とする。口径21㎝、器高41㎝、底径14㎝を測る。褐色を呈し、胎土は精選され、磨きも丁寧である。焼成良好。藤内式期に位置づけられる。　3.　口縁下に三角形状の突起を 4 単位有する深鉢で、各突起から隆帯が垂下し、胴部を分割する。底部は屈折底になると思われる。暗褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成は良好である。藤内もしくは井戸尻Ⅰ式期に位置づけられる。　4.　キャリパー形を呈すると思われる深鉢で、内彎した口縁上部に 4 単位の小突起を有する。



第 124 図　グリッド出土土器

第125図　繊維土器

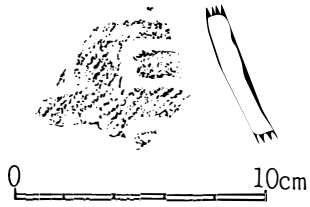
褐色を呈し、胎土は精選されている。焼成良好。井戸尻Ⅲ式期に位置づけられる。　5. いわゆるミミズク把手である。本遺跡ではこの種の把手が多く出土している。井戸尻期に位置づけられる。　6. 頸部に粘土紐を貼付する深鉢で、格子状に貼付し、上に粘土紐を付けている。さらに下段には一条蛇行貼付を施す。また、胴部には、隆帯による十字文モチーフがみられる。曽利Ⅰ式土器の古手に位置づけられよう。

また、本遺跡では、諸磯b式～堀之内式までの土器が得られているが、それ以外として、4片の繊維土器が確認されたので報告しておく。第125図に示したが、1～3はB－44グリッド、4はC－44グリッドで近接しており、いずれも胴部破片で同一個体と思われる。この区域は、小さな谷が入り、黒色土が堆積している部分であって、あるいは、流れ込みによるものかもしれない。含まれる繊維の量は非常に多く、整形は雑である。また、繊維以外にも小砂粒が目立つ。灰褐色を呈し、焼成も良好である。早期末～前期初頭に位置づけられるものであろう。

第2節　弥生時代

本遺跡では、弥生時代の遺構は発見されていないが、該期の土器が1点だけ出土している。

この土器は、調査区中央部のA－28グリッド内から出土したもので、壺形土器肩部破片と考えられる。文様は部分的ではあるが沈線による「王」の字状区画を行い、区画内部にLR縄文を施している。胎土は石英粒、長石粒を多く含み、色調は暗褐色を呈する。本資料は文様モチーフなどから弥生時代中期後葉に比定されるもので、東海地方東部の原添式から有東式土器に類似する。



第126図　弥生土器

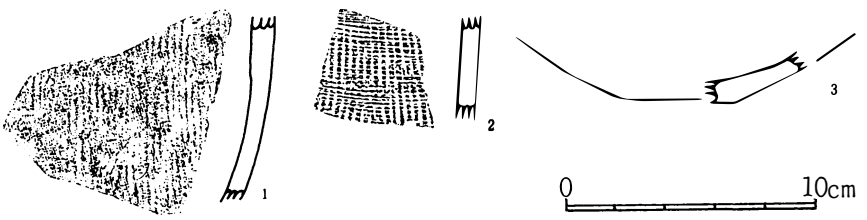
第3節　古墳時代

古墳が1基確認された。墳丘は崩壊が著しいが、外表面に葺石をもち下部に黒褐色及び黄褐色粘質土による版築状況が確認できた。葺石には、10㎝～60㎝程の山礫を利用するが、周濠部に崩れ落ちたものも多い。さらに大型の石材が墳丘上より検出されたが、これらは本来石室側壁として使用されたものと推定される。周濠は幅2ｍ～2.5ｍほどで弧状に墳丘を囲み、全体的なプランは直径20ｍほどの円形を呈するものと思われる。濠の深さは確認面より40㎝ほどである。周濠覆土中より須恵器片が3点出土した。

第127図　古　　墳

本古墳は墳頂部がすでに崩壊するため、石室等の内部施設は明らかにできなかった。東西方向の墳丘セクションには、版築の途切れる部分と石室側壁を支える裏込めの石と考えられる部分が認められることから、石室は南北方向に主軸をもつものと推定される。付近の古墳などから内部構造は横穴式石室であったと考えられる。

本古墳は出土須恵器などから、古墳時代後期に築造された円墳で、狐川流域に分布する古墳群の一つとして捉えられよう。



第128図　古墳出土須恵器

第Ⅳ章　ま　と　め

第1節　集落について

本遺跡では、遺構からの出土土器によれば、諸磯ｂ式～ｃ式期が最も古く、藤内式期、井戸尻Ⅲ式期、曽利Ⅰ式期と続き、称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式期が最も新しい時期となる。住居址でも炉内、床面直上で土器を出土していないもの、土坑では小破片をわずかに出土したにすぎないものは除き、ほぼ確実であると思われるものを時期ごとに示すと以下のようになる。

Ⅰ期：諸磯ｂ式～ｃ式期……3号住居址、5号集石・6号・40号・63号・76号・82号土坑

Ⅱ期：藤内式期……11号住居址、29号・42号・85号土坑

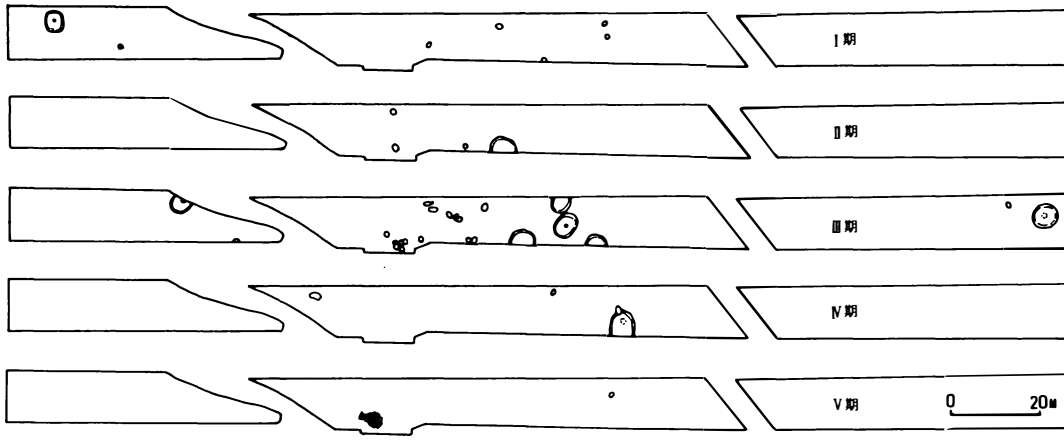
Ⅲ期：井戸尻Ⅲ式期……1号・4号・5号・6号・9号・10号住居址、11号・34号・36号・37号・41号・46号・47号・48号・50号・56号・61号・65号・86号・90号・93号・94号・97号土坑

Ⅳ期：曽利Ⅰ式期……7号住居址、44号・77号・6号住居内土坑

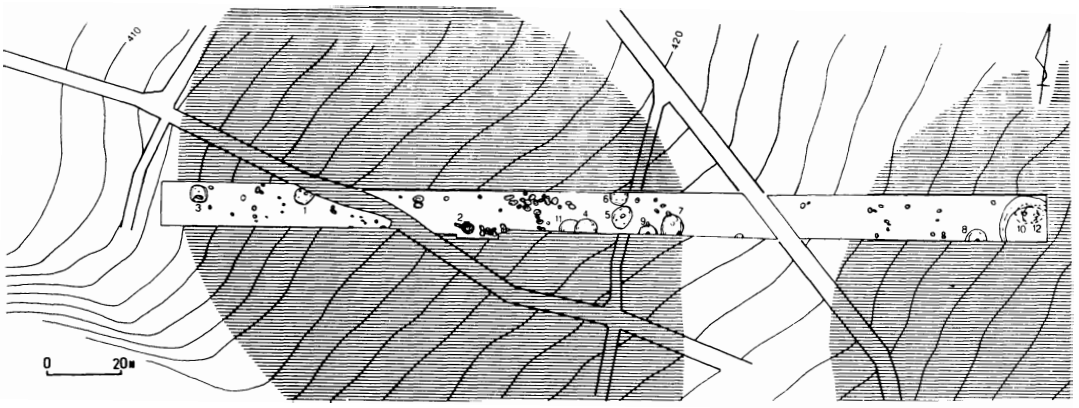
Ⅴ期：称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式期……2号住居址、2号集石土坑（第129図）

以上のような変遷がみられるが、Ⅰ期に属する3号住居址が谷のすぐ脇で、傾斜面に位置する他は、住居址も土坑も尾根の中央部に営まれている。このうち、Ⅲ期以外は住居址がいずれも1軒だけの確認であり、集落としての広がりを推定することは不可能である。Ⅳ期、Ⅴ期では土坑も極くわずかで、尾根頂部の平坦部でも調査区域外にその中心をもつものと思われる。

本遺跡の調査終了間際に行った、調査区周辺地域の分布調査では、第130図に示した範囲で遺物の表面採集が可能であった。土器では藤内式～曽利Ⅲ式までが多く、本調査で確認された、前期、後期の土器は少なかった。また、調査区中央東寄りに浅い谷が入っていることは前述したが、分布調査でもその部分で表採できたものは少なく、大きく二つの集落から成ることが予



第129図　各時期における遺構位置図



第130図　一の沢西遺跡周辺遺物分布状況

想される。本遺跡では、このうちの西側集落が中心となるが、こちらは東西130ｍ、南北100ｍ以上の規模と推定される。また、東側集落は今回の調査区東端がこれにかかり、昨年度調査の北一の沢遺跡に続くものである。北一の沢遺跡は少なくとも120ｍの幅をもつとのことで、それに今回の調査結果を加えると、幅180ｍ程度と推定される。北一の沢遺跡でもⅢ期～Ⅴ期の遺構・遺物が確認され、とくにⅣ期は3軒の住居址が報告されていることから、Ⅳ期段階では東側集落に中心を移したものと考えられる。

さて、Ⅲ期は住居の構築された位置からは大きく三ヶ所に分けられる。また土坑群は、中央の住居群の西側に集中する傾向がある。これに、前述の分布状況を加味すると、調査区東端の住居址（10号）は東側集落に属するものと思われ、北一の沢遺跡で調査された2軒の住居址と繋がるものであろう。一方、西側の住居址（1号）と中央の土坑群、4軒の住居址（4号・5号・6号・9号）を一つの集落とすることができる。その場合、1号住居址と、最も遠い9号住居址との間は86ｍ、最も近い4号住居址との間は70ｍを測る。また、土坑群は中央空白部域の東側に集中しており、西側には1基だけ存在する。その空白部域（東西の土坑間）は30ｍを測る。

このような井戸尻Ⅲ式期の集落は、県内では初めて確認されるものであり、他と比較できる状況ではないが、長野県原村居沢尾根遺跡では、井戸尻Ⅲ式～曽利Ⅱ式までの住居址28軒が調査され良好な状態を示している。遺跡は、北西に延びる尾根の先端部に位置し、複合する時期の全体としては住居群は環状を呈し、土坑群はその内部に集中する。このうち、井戸尻Ⅲ式期の住居址は4軒確認されている。この4軒は、本遺跡のように明瞭な距離をおいての位置関係にはなっていないが、大きく西に1軒、北に3軒とに分かれており、調査区域外を考慮すれば環状を呈すると考えられる。そして土坑群は、環状の住居列より内側の空間に営まれる。また、住居列の規模は、直径50ｍ程度と推定される。本遺跡でも、土坑群が内側に営まれる点は同様であるが、本遺跡の場合、前述したように土坑群は住居列の内側でも、比較的住居址にちかい部分に同心円状につくられており、30ｍ程の土坑群空白域（広場）が想定されるのに対し、居沢尾根遺跡の場合、住居列と土坑群の間に距離がみられ、本遺跡の空白域に相当する部分に土

坑が集中するようである。

このように、馬蹄形あるいは環状を呈する集落にも、土坑群の集中する場所がやや異なる様相を示す例がみられるが、むしろ、居沢尾根遺跡例が、いままで考えられていた集落形態と異なるものであり、本遺跡のような、中心から空白域、土坑群、住居列という同心円状の遺構配置が一般的な集落形態とされるものである。

ただ、本遺跡も居沢尾根遺跡も、その全面を調査している訳ではなく、また、とくに該期は山梨、長野両県下での調査例が少ないことからも、規模、形態等については依然として不明な点が多いと言わざるを得ない。さらに、このような少なくとも二種類の環状集落の存在は、定着的あるいは一時的というような性格状の違いによるものか、祭祀形態の違いによるものかという問題も提起される。

また、土坑群をある時期に特定する場合の判断材料となるのは完形あるいは一括土器による場合が多いが、本遺跡のような複数の時期にまたがる遺跡の場合、遺物を全く出土しないものや、出土遺物が極くわずかで、しかも時期を特定できない状況（小破片、数時期にわたるものなど）で出土しているものなどについては、確実と思われるものだけを拾いあげることによって浮ぶ「空白域」が、真に空白域であるのか、という大きな問題が残る。本遺跡でも、113基の土坑、集石土坑のうち、確実と思われるものは30基に満たない状況である。Ⅲ期には、30mほどの幅の土坑群空白域が存在するとしたが、その空白域にさらに土坑がいくつか存在する可能性も否定はできない。

第2節　井戸尻Ⅲ式土器について

本遺跡では、4号住居址を中心に井戸尻Ⅲ式土器が多量に出土している。小稿では形態分類を行い、さらに、井戸尻Ⅲ式土器の細分を試みることとする。

まず、4号住居址出土土器の検討を行うことにする。前述したように、4号住居址出土土器はすべて覆土であり、井戸尻Ⅲ式土器という範ちゅうに入るか否かを見る必要がある。それについては、出土層位（基準レベルからの高さ）及び土器どうしの「乗り合い関係」を具体的に示すことで明らかにしたい。

4号住居址では、出土土器48点を図示したが、ほぼ完形で一ヶ所から出土したものから、細片となって散って出土したものまで、さまざまである。このなかでも、とくに土器が接した状態で集中する部分があり、それぞれを小ブロックとすると、以下のようなまとまりとすることができた。

Ⅰブロック……2・4・6・7・10・13・19・35

Ⅱブロック……29・42

Ⅲブロック……27・39

Ⅳブロック……1・17・25

Ⅰブロックでは、それぞれの土器が繋がっているか、あるいは上下の乗り合いで出土しているが、4の上に10・19が乗るかたちとなっていた。また、35の下に13・19が存在しており、

10の上に2の大破片が乗っていた。このような上下関係がみられるが、全体としては19を中心に接している。レベルは水糸を基準に2（最上28㎝、最下31㎝、以下数字のみ記入）、4（11、36）、6（22、43）、7（17、36）、10（8、33）、13（26、38）、19（9、28）、35（13、34）となり、ほとんど同一レベルと見なしてよいと考えられる。したがって、廃棄順序として、4・10・13・19・35においては、4が古く、10・13・19と続き、35が新しいことになるが、レベルでは19と35では35が下にまで入っている。また、10と2では、10が古いことになる。

Ⅱブロックでは、29（26、36）、42（27、33.5）が対象となるが、42が29に乗るかたちで出土している。

Ⅲブロックでは、27（30、36）、39（32、44）が接するが、39が下となっている。

Ⅳブロックでは、1（15、24）、17（28.5、40.5）、25（22、31）が接し、1が17の上に乗っていた。

以上のようなまとまりがみられるが、4号住居址出土器は、層位的に分割できる状態ではなく、ほとんどが同一レベルとみなすことができる。そのなかで、乗り合いから個々の資料の廃棄順序をみてみると、古→新とすれば、4→10・13・19→35、10→2、29→42、39→27、17→1という状態が復元される。

これを前提としてみると、1は17より古くなることは考えられず、ほぼ同時期とすることができよう。したがって、17が、井戸尻Ⅲ式にみられる形態・施文であることから、1の時期も該期とすることが可能である。同様に、10と2の関係により、2も該期とできる。さらに、4・10・13・19・35の関係によっても、4・35がともに井戸尻Ⅲ式と考えられることから、10・13・19を該期に位置づけることが可能となる。しかし、これはあくまで廃棄の順序における新旧関係であって、井戸尻Ⅲ式土器の型式細分の基準とはなり得ない。古型式と新型式の使用期間には重なる部分があり、新型式の土器が先に使用不能となって廃棄されることは当然あり得るからである。したがって、この乗り合いからは、4号住居址覆土からの出土土器は、井戸尻Ⅲ式期という期間にすべてが納まるということだけが言えることになる。しかし、この中に、明らかに施文、胎土等の異なる土器は存在しておらず、すべての資料を井戸尻Ⅲ式とみてよいと考えられる。すなわち、4号住居址出土土器は、井戸尻Ⅲ式の、形態・施文及び時期的な差を含んだ、バラエティーに富んだ資料ということが言えるのである。時期的な側面からは、塔状把手を有し、かつて井戸尻Ⅰ式とされていた資料も多く、また、東京都狐塚遺跡で甕Cと分類された褶曲文をもつ一群や、曽利Ⅰ式期にも続く十字文をもつものなどかなりの時間幅をもつものと思われる。これらの資料を基準にし、他の遺構からの資料も加えて、以下に形態分類、型式細分を試みることにする。

本遺跡で出土した井戸尻Ⅲ式土器は、深鉢、浅鉢、有孔鍔付土器があるが、浅鉢、有孔鍔付土器には形態分類をできるほどの出土量がなく、深鉢について行いたい。

深鉢は、大きく直線的な底部をもつもの（A種）と屈折底をもつもの（B種）の二種類が存在するが、さらに、口縁部、頸部等の形状により細分が可能となる。4号住居址の資料を用いて行うと以下のようになる。

Ａ１形態……口縁が外反し、肩部に膨らみをもつもの。1

Ａ２形態……口縁が外反するが、頸部でくびれるもの。28

Ａ３形態……口縁が内彎し、頸部がくびれるもの。2

Ａ3′形態……Ａ３形態と同様の形態であるが、胴下半が下膨れとなるもの。27

Ａ４形態……口縁が内彎し、頸部がくびれずに底部につづくもの。25、26

Ａ4′形態……Ａ４形態と同様の形態であるが、口縁の内彎が急で、口縁に明瞭な稜のつくもの。12

Ａ５形態……口縁が内彎し、胴張りで底部につづくもの。23

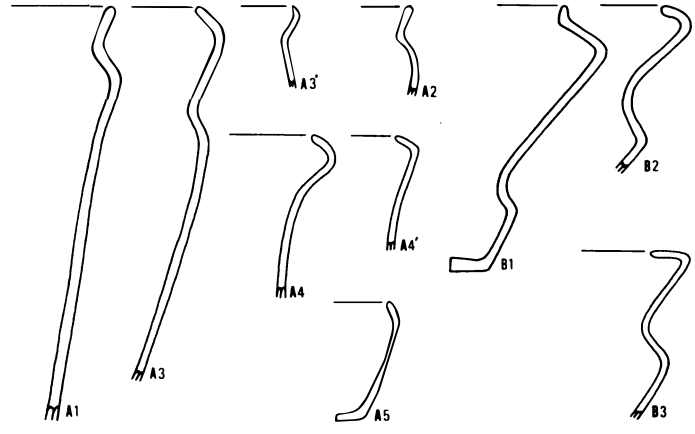
Ｂ種は、屈折底をもつものであるが、すべて、胴中央部がくびれる形態となっており、口縁形態による分類である。

Ｂ１形態……口唇部が直立するもの。3、5、7、8、17

Ｂ２形態……直立する口唇部をもたず、口縁は内彎したあと緩く上がってゆくもの。4、6、10、18、19

Ｂ３形態……直立する口唇部をもたず、口縁は内彎して、底部とほぼ平行になるもの。13、15、20、（第131図）

以上のように分類できる。4号住居址では、把手・突起類が非常に多く出土しているが、これらは、Ｂ１、Ｂ２形態の土器に4単位もしくは2単位で付けられたものが多い。とくに、中空の塔状把手は、いずれもこの二種類の形態に付けられている。また、Ｂ３形態では中空把手ではなく突起となっており、2単位以下となる。



第131図　形態分類模式図

大小の別では、Ａ１、Ａ２、Ｂ１形態に大型品がみられ、それ以外の形態は中・小型の土器に用いられている。

井戸尻Ⅲ式土器は、井戸尻遺跡3号住居址出土土器を標式として設定された。これについては、松村恵司氏をはじめとして、標式そのものについての批判があるが、このうち明らかに曽利Ⅰ式を除いた土器から導き出された文様等の特徴、また、長崎元広氏等によって抽出された該期終末期の土器の特徴を改めて示すと以下のようになる。

①井戸尻Ⅰ式に比べ、キャリパー形深鉢、甕、台付の甕などが多い。

②旧Ⅱ式の胴部櫛形文は楕円文へと変化する。

③区画・抽象文が退化し、条線を多用する。

④口縁から延びる隆帯が胴部へ垂下する。

⑤把手・突起、文様帯区画などに4単位が定着する。

⑥中帯文の残存。

⑦十字文の多用。

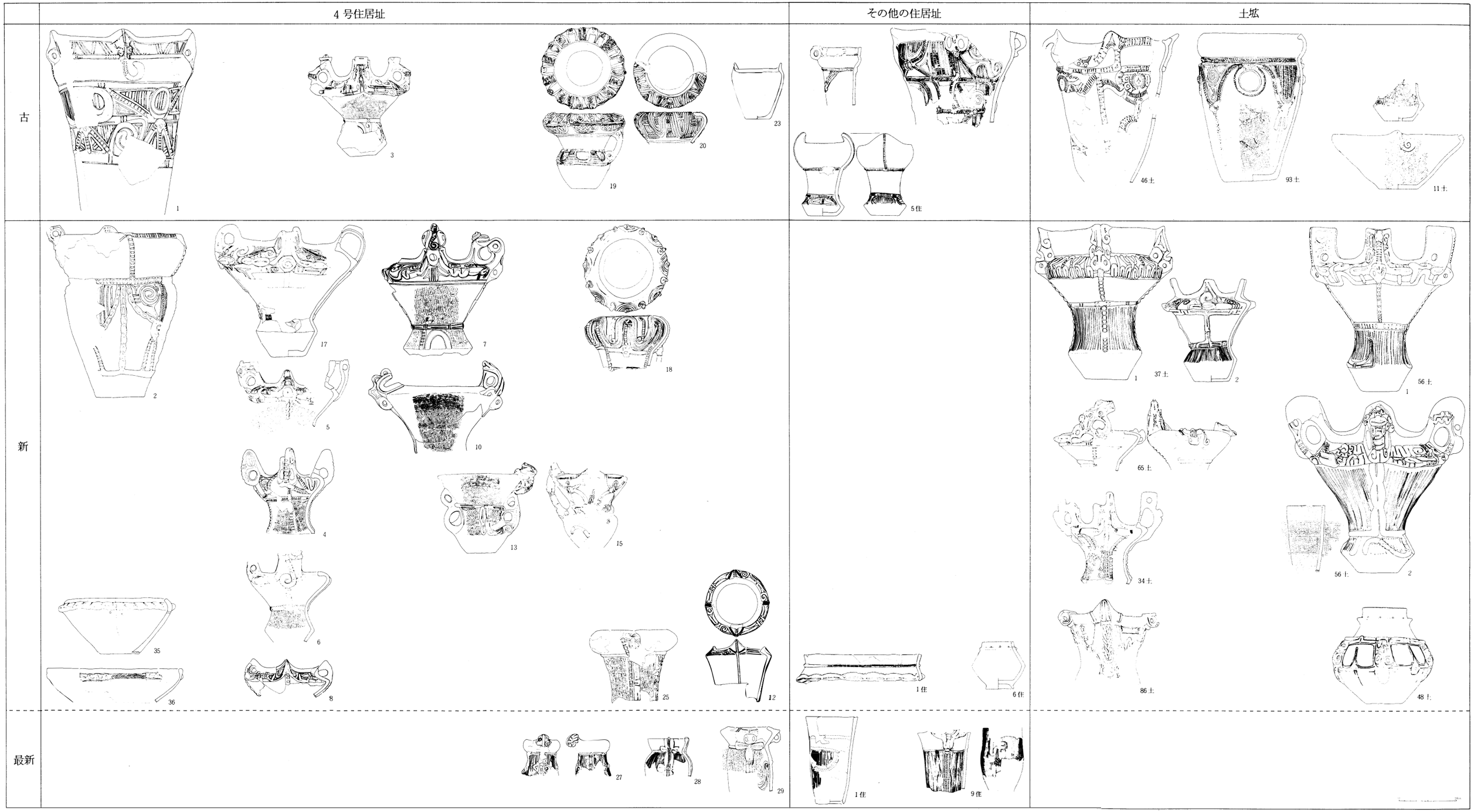
以上のように7点が指摘できる。井戸尻Ⅲ式について、それを特徴づける際よく言われるのが、勝坂的要素の衰退ということであり、上記の7点も確かにその点を示すものであるが、一方で、本遺跡においては、B種の深鉢が多いことが特徴である。B種などはまさしく勝坂的な要素と言うべきものである。山梨・長野でも、藤内式、井戸尻Ⅰ式などの時期には、しばしば屈折底がみられるが、把手部を除いた本体の器高と、底部屈折部までの高さの比率をみてみると、藤内式～井戸尻Ⅰ式までの屈折底と本遺跡の資料とを比較すれば、微妙な差がある。底部屈折部高を器高で割った数値は、前者に位置づけられる藤内特殊遺構の3個体が0.11、0.04、0.06、井戸尻4号住居址の2個体が0.10、0.12、藤内12号住居址0.08、乙事沢0.08となっている。これに対し本遺跡では4号住居址の17が0.2、13が0.22、56号土坑が0.18、0.13、37号土坑が0.17、0.23となっており、前者は0.12以下、後者は0.13以上という比率となっており、後者になるほど屈折部が高くなってゆく傾向を見い出せる。胴下部で小さな屈折底を有する深鉢が、藤内式から井戸尻Ⅰ式にかけてみられるもので、本遺跡のような大きな屈折底はそれ以降とすることが可能と思われる。

一方、終末期の様相については、長崎氏等によって、曽利Ⅰ式土器の二細分が行われており、とくに古段階にみられる特徴と対比すれば、曽利Ⅰ式に引き続き用いられる要素として、③、④、⑦があげられる。茅野市判の木山東遺跡例からも、井戸尻Ⅲ式終末期には勝坂的色彩の薄れた土器へと変化してゆき、それが曽利Ⅰ式の母体となったことは疑いないものと思われる。そして、井戸尻Ⅲ式から曽利Ⅰ式への変化のなかでも、隆帯が「懸垂文化」してゆく傾向が、現在の井戸尻Ⅲ式という一つの型式の中で見ることができるものである。すなわち、井戸尻Ⅲ式細分の際、口縁部からの連続した隆帯の垂下がみられるか否かが、一つの基準となり得るものと考えられる。これによって大まかな二段階（古、新）の分類が可能となるが、これに加えて新段階では、より曽利的要素の強い⑦の特徴を中心に細分が可能であると思われる。

4号住居址の深鉢のうち、A種ではA1、A5形態には隆帯の垂下がみられず、他はすべてにみられる。またB種ではB1～B3形態のすべてに垂下するものとしないものとが存在する。これをもとに古・新の二段階分類したのが第132図である。

図の左側には4号住居址の資料を示し、右側には他の遺構資料を示したが、多くは新段階に含まれるものと思われる。

古段階では、A1、A5、B1～B3形態がみられるが、土坑出土資料はA1、A3形態である。また、5号住居址出土の2点については類例がなく、とくに屈折底を有する深鉢は屈折部が楕円区画となっているところから井戸尻Ⅲ式と判断して、古段階に含めてある。4号住居址の19、20の口縁部文様は、曽利Ⅰ式にみられる褶曲文の祖形となるものと考えられ、19については胴部に櫛形状区画が存在することからも古段階とすることが可能である。



第 131 図　井戸尻Ⅲ式土器細分試案図

新段階ではＡ２、Ａ３、Ａ3′、Ａ4′の各形態とＢ種が存在する。他の遺構では円筒形深鉢もこの時期に存在することとなる。またＢ種は、４号住居址と土坑群とで肩部屈曲部にとくに共通点を見い出せる。４号住居址の17と56号土坑の１、37号土坑の２、65号土坑は一条の沈線の施された楕円文が巡り、これは、35の浅鉢、１号住居址炉体土器などにも共通するものである。これはさらに付けられる部位こそ違え、Ａ３形態の２、Ｂ３形態の13、56号土坑の２などにも同様のモチーフが用いられている。

また、４号住居址の５～７には、肩部に刻み（これをさらに大きくしたものが前述の楕円文とも考えられる）がみられるが、56号土坑の２にも共通する。

その他、明らかに同一遺構で伴出したものは同時期として新段階に含めてある。有孔鍔付土器２点は、その施文からは型式を把握できないが、48号土坑出土土器については、蛇体、獣面の装飾が付き、そのうちの獣面モチーフが37号土坑の１に共通していることから新段階とした。

以上のように、口縁部から胴部への連続した隆帯の垂下の有無によって二段階分類を行ったが、新段階においては、４号住居址の27・28、１号住居址の２点の深鉢、さらに56号、37号土坑の各２点が条線を多用するものであり、とくにＢ１形態としたものでは、４号住居址は胴部が無文か縄文、56号、37号土坑では条線と対象的であり、これがあるいは時期差を示すものであるかもしれない。

一方、新段階のうち、前述したような、より曽利Ⅰ式的様相の強い一群が存在する。十字文をもつものが、４号住居址の28、29、その変形文様をもつものが４号住居址の27と９号住居址の２点、胴部のＵ字状隆帯をもつものが４号住居址の29、１号住居址の円筒形深鉢、９号住居址の深鉢である。これらの一群は、明らかに新段階でも最も新しい時期に位置づけられるもので、井戸尻Ⅲ式全体としては三段階細分が可能となる。

第３節　石錘について

本遺跡は、曽根丘陵の尾根上に立地しており、最も近い大河川は甲府盆地中央部を西流する笛吹川である。遺跡立地部は標高410 m ～ 430 m を測り、笛吹川の遺跡に最も近い部分は標高260 m 前後である。比高は約150 m を測り、また付近の起伏等をみると、およそ漁撈との係わりは考えにくい。しかし、今回の調査により、土器片錘１点、切目石錘２点、浮子１点の漁撈関係遺物が出土した。いずれも出土地点が異なり、遺構外がほとんどで、切目石錘のうちの１点が２号住居址炉内からの出土で、後期前半と考えられるが、それ以外の遺物については、時期は特定できない。

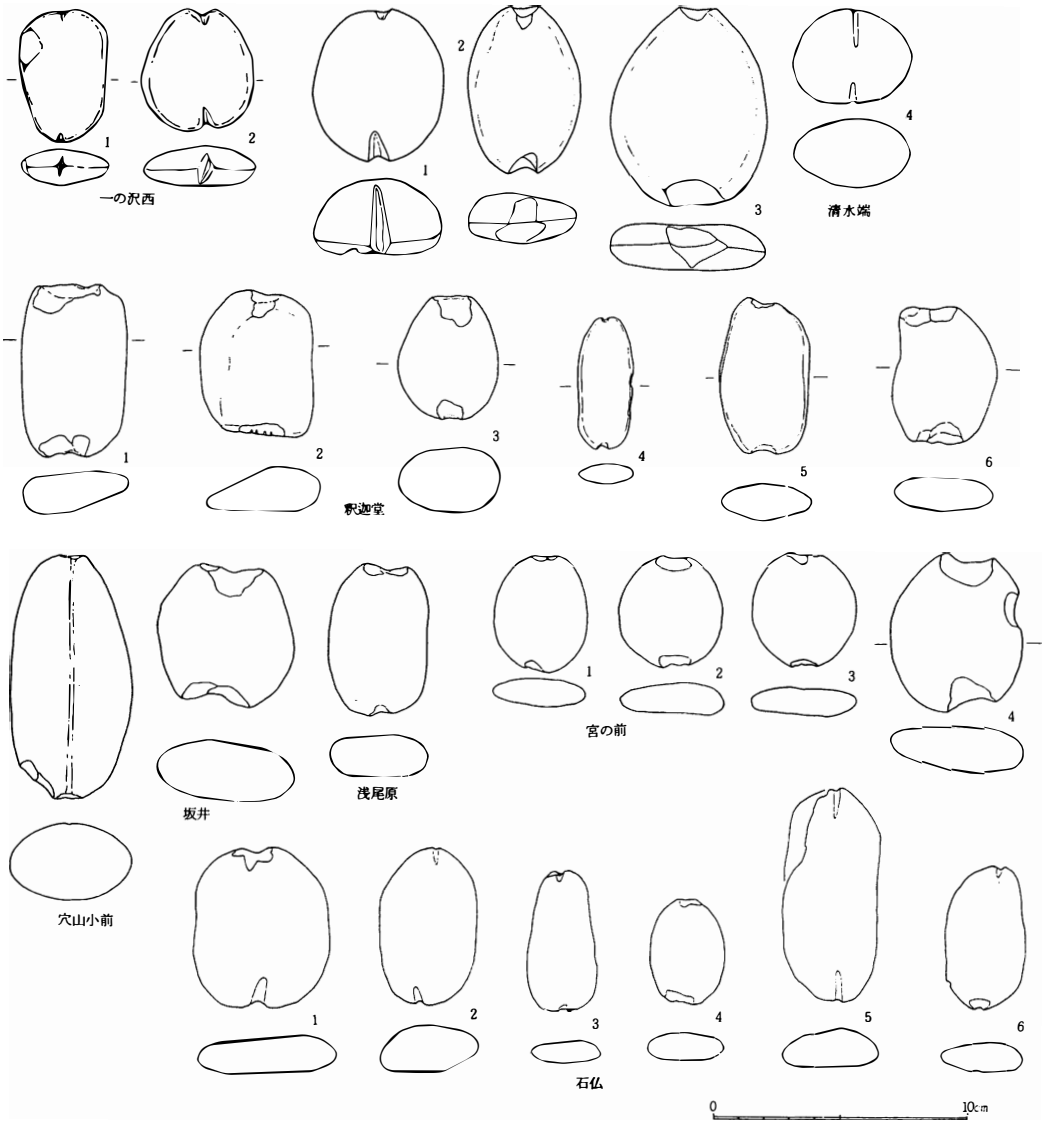
この中で、石錘については、県内でも数遺跡で報告があるが、その特徴等について触れたものは少ない。本遺跡でも、わずか２点の出土にすぎないが、以下に県内出土の石錘について概観し、今後の資料としたい。

渡辺誠氏は、1973年に全国の切目石錘出土遺跡を集成し、長軸に切目を有するものをＡ種、さらに短軸にも切目を有するものをＢ種と分類している。また、その背景については土器片錘からの材質転換によって中期後半から定着することを明らかにしている。しかしながら、その

時点では、同じ内陸県である長野県で、すでに12遺跡が確認されているのに対し、山梨は０となっている。

今回、筆者の手元にある県内の報告書及び未発表の資料を集成したところ、以下の状況となった。なお、遺跡名のあとには石錘の種別と点数、時期の明らかなものについては時期を示すことにする。

1. 境川村一の沢西遺跡　切目Ａ種２点、後期（称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式）
2. 明野村清水端遺跡　切目Ａ種１点・切目短軸のみ１点・礫長軸２点、後期（加曽利Ｂ式）
3. 一宮町・勝沼町釈迦堂遺跡群　上端打ち欠き下端切目１点・礫長軸４点・礫長軸＋短軸



第133図　山梨県内各遺跡出土石錘

片側１点、後期？

4. 韮崎市穴山小前遺跡　礫長軸＋片面のみ溝１点
5. 韮崎市坂井遺跡　礫長軸１点、中期？
6. 明野村浅尾原地区　礫長軸１点
7. 市川大門町宮の前遺跡　礫長軸４点、中期（曽利Ⅲ式）
8. 六郷町石仏遺跡　切目Ａ種９点・礫長軸２点
9. 早川町御料平遺跡　切目Ａ種１点・切目Ｂ種１点・礫長軸１点、中期末
10. 豊富村宇山平遺跡　礫長軸１点
11. 櫛形町曽根遺跡　礫長軸＋短軸１点
12. 三富村上萩原遺跡　切目Ａ種２点、中期末
13. 都留市中谷遺跡　礫長軸２点、後期
14. 境川村京原遺跡　礫長軸１点
15. 櫛形町六科丘遺跡　切目Ａ種１点、礫長軸１点
16. 都留市尾咲原遺跡　切目Ａ種２点？
17. 高根町青木遺跡　切目Ａ種５点？、後期
18. 高根町石堂遺跡　１点？
19. 韮崎市中田小遺跡　１点
20. 長坂町競馬場遺跡　１点
21. 長坂町下原遺跡　１点
22. 韮崎市飯米場遺跡　17点
23. 明野村下反保遺跡　２点
24. 双葉町堰上遺跡　１点
25. 大泉村金生遺跡　切目Ａ種２点・切目短軸のみ１点・有溝Ａ種２点、後・晩期

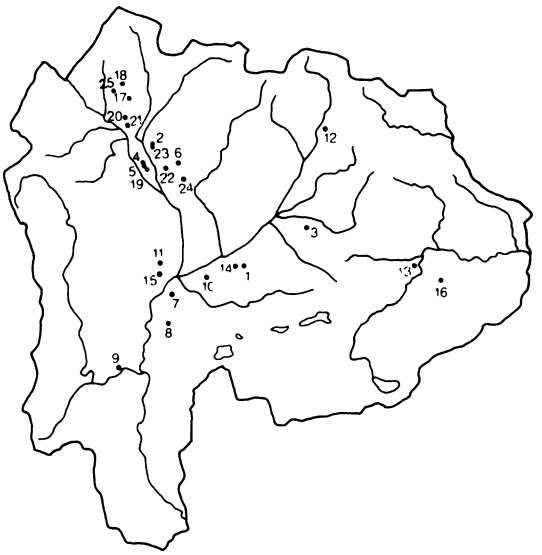
以上のように25遺跡で石錘の出土を確認できた。このうち、実測図のあるものは上記の１～15までの15遺跡42点で、切目石錘19点、礫石錘23点となっているがその一部を第133図に示した。

切目石錘は、渡辺氏分類のＡ種がほとんどで、Ｂ種は御料平遺跡の１点のみである。他の形態としては、清水端遺跡の４が短軸にのみ切目を有し、釈迦堂遺跡群の２は上端が打ち欠き、下端が切目となり、その切目も細い４本が確認できる。この二例が特殊な例で、他はすべてＡ種となる。

礫石錘は、長軸の両端を打ち欠くものが圧到的に多く、23点のうち19点までがこのタイプである。他の４点では、穴山小前遺跡出土の大型の石錘には片面にのみ極く浅い溝がみられ、有溝石錘の未製品とも考えられる。また、釈迦堂遺跡群の４には、長軸に加え短軸の片方にも打ち欠きが入り、十字形の紐掛けが想定される。宮の前遺跡の４も同様の形態である。さらに曽根遺跡例は、図示していないが、長軸・短軸に二ヶ所づつの打ち欠きが入り、これは明らかに十字形となる。したがって、礫石錘も長軸方向だけのものと、短軸にも打ち欠きの入るものとの二種類が存在するが、後者の比率は少ない。

以上のように山梨県下では、切目石錘と礫石錘とが認められるが、過去の文献資料等をみても、礫石錘の方が出土比率が高いと思われる。

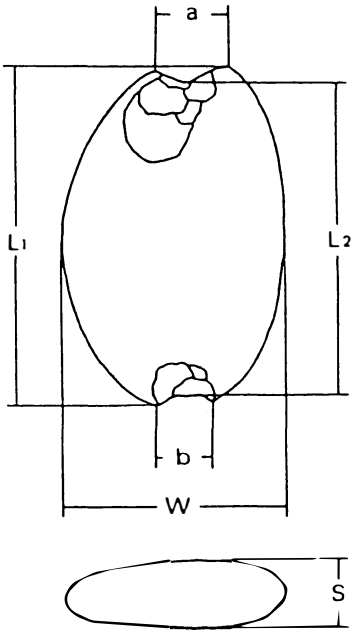
第134図には、前述の25遺跡の分布と主な河川、湖沼を示したが、出土遺跡は河川のちかくに集中する傾向がある。ただし、本遺跡や宮の前遺跡のように、河川との比高が100 mを遥かに超える遺跡も多く、石錘の出土をもって、漁撈との係わりが強いとは一概に言えない場合もある。



第134図　石錘出土遺跡分布図

切目石錘は、漁網錘であるという考え方は一般的であるが、礫石錘については編物を編む際のおもりとしての用途が近年考えられつつあり、本県のような山間地ではとくに後者を考慮すべきであろう。また、本遺跡では2点の切目石錘が出土しているが、前述したように漁撈とは結びつきにくい状況であり、うち1点は炉内から出土していることからも、住居内での使用も想定する必要があるかもしれない。

なお、石錘の計測については、渡辺氏による計測部位の統一（第135図）の提唱があるので、それに従い記しておく。



第135図　石錘測定位置図

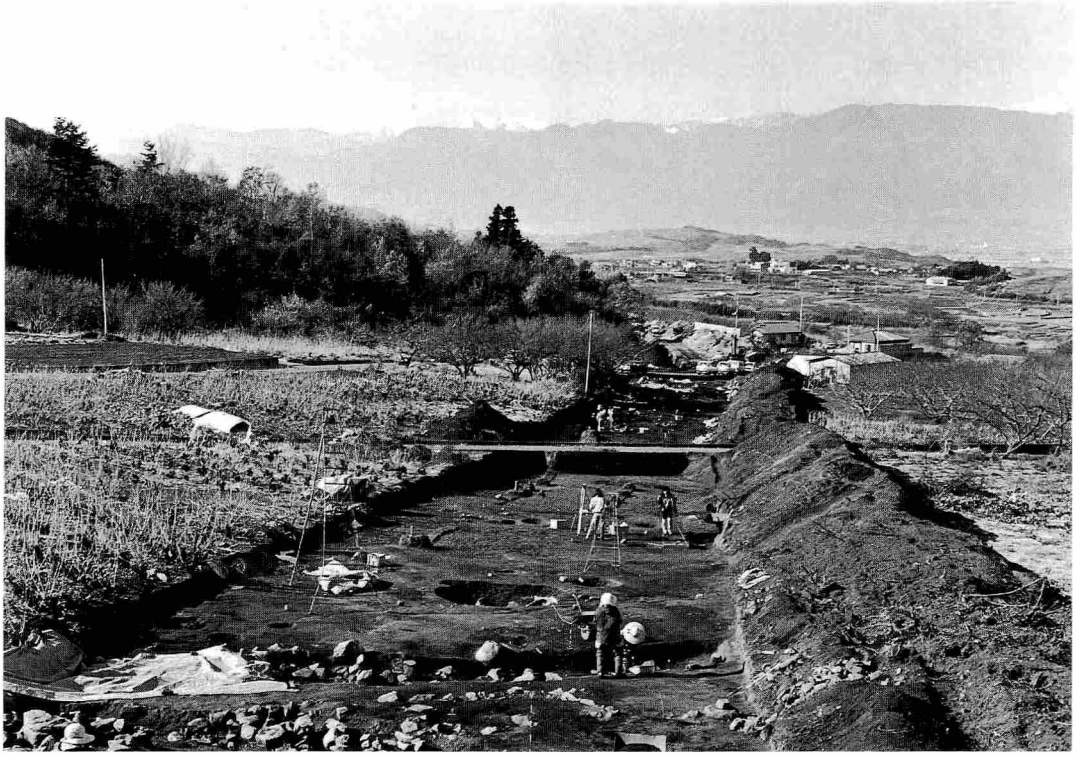
表 6. 石錘計測値

遺跡名	a (mm)	b (mm)	W (mm)	L_1 (mm)	L_2 (mm)	S (mm)	重量 (g)
一の沢西 1	3	2.5	34.5	52	50.5	14	35
〃 2	10	11.5	44	48.5	42	16	39.8
清水端 1	5	7	53	59.5	56	29.5	68.8
〃 2	10.5	10.5	45	66	62.5	19.5	92.8
〃 3	11.5	11	62	79	76.5	19	114.9
〃 4							51.1
釈迦堂 1	21	13.5	41	67.5	64.5	17.5	73.3
〃 2	10	8.5	44	57.5	54	18	76.1
〃 3	10.5	7	40	48	47.5	25	73.2
〃 4	3.5	3.5	22	51.5	49	9	13.7
〃 5	9.5	11.5	35.5	61	57	18	49.1
〃 6	13	14	40	55	52	15	48.6
穴山小前	5	7	49.5	95.5	95	30	220.0
坂井	24	24.5	55	53.5	47.5	21	95.8
浅尾原	15	10	40	58.5	55	17	59.8
宮の前 1	10	9	37	46	43.5	11.5	28.5
〃 2	9.5	10	41.5	44	41.5	12.5	32.1
〃 3	11.5	10	41	45	42.5	11	29.5
〃 4	17.5	18.5	52	63.5	53.5	13	53.2
石仏 1	2.5	3.5	40	62.5	61	18	87.6
〃 2	6.5	10	54	63.5	59	14.5	70.9
〃 3	3	4	28	55.5	53.5	8.5	22.6
〃 4	5.5	10	29.5	40.5	39.5	11	22.0
〃 5	2	2.5	37.5	84	82	15	73.3
〃 6	2.5	3	31.5	57	55	11	31.8

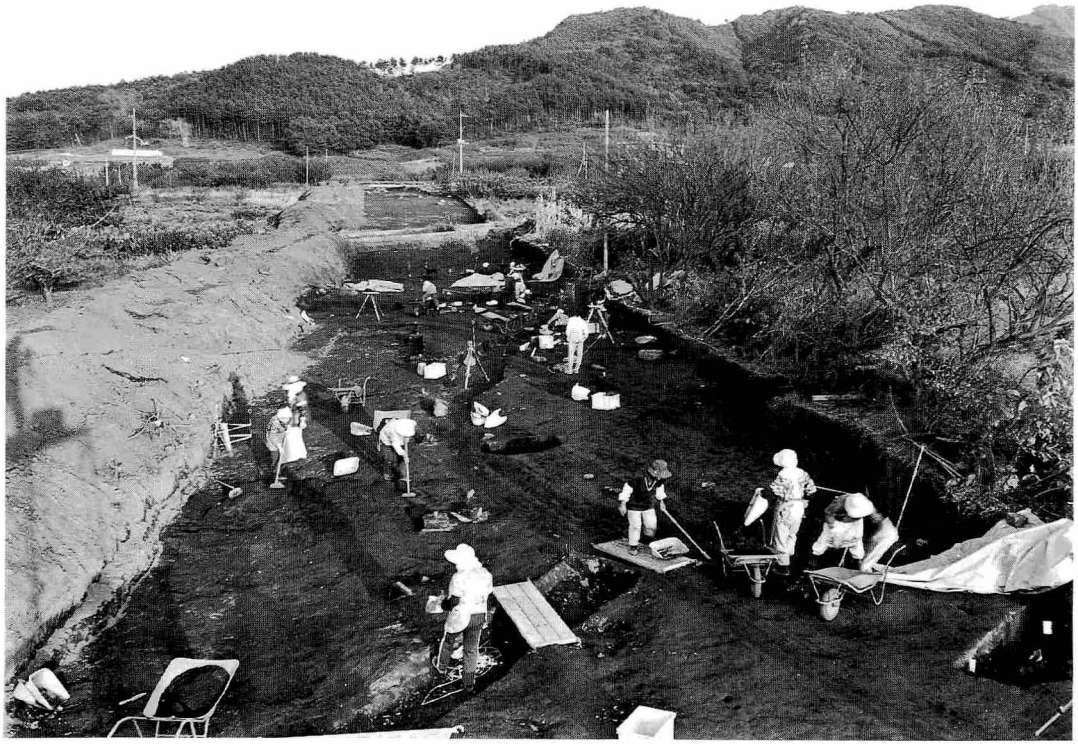
参考文献

o 『境川村誌』 1978 境川村
o 『昭和52年度埋蔵文化財分布調査報告書』 1978 山梨県教育委員会
o 磯貝正義他 『角川日本地名大辞典・山梨県』 1984 角川書店
o 小林広和 「北一の沢遺跡」『年報』 1 1984 山梨県埋蔵文化財センター
o 鈴木道之助 『図録 石器の基礎知識Ⅲ』 1981 柏書房
o 山本直人 「打製石斧」『野々市町御経塚遺跡』 1983 野々市町教育委員会
o 藤森栄一編『井戸尻』 1965 中央公論美術出版
o 長崎元広他『中部高地縄文土器集成』第一集 1979 中部高地縄文土器集成グループ
o 樋口昇一、青沼博之他 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その4』 1981 長野県教育委員会
o 武藤雄六、宮坂光昭他 『曽利』 1978 富士見町教育委員会
o 村松恵司 「井戸尻編年の諸問題」『Circum pacific』 2 1975 環太平洋学会
o 服部敬史他 「東京都狐塚遺跡の調査」『長野県考古学会誌』 11 1971 長野県考古学会
o 長沢宏昌 「山梨県の縄文時代遺跡」『歴史手帖』 13の1 1985 名著出版社
o 小野正文 「縄文時代における猪飼養問題」『甲府盆地－その歴史とその地域性』 1984 雄山閣出版
o 『縄文時代集落の変遷』－日本考古学協会 昭和59年度大会資料－ 1984 日本考古学協会
o 村田文夫 『縄文集落』 1985 ニューサイエンス社
o 渡辺誠 『縄文時代の漁業』 1977 雄山閣出版
o 渡辺誠編 『阿曽田遺跡発掘調査報告書』 1985 中津川市教育委員会
o 矢田一法編 『先史原史時代調査』 1932 北巨摩郡教育会
o 甲斐丘陵考古学研究会編 『御料平遺跡』 1977 早川町教育委員会
o 野田昭人 『上荻原遺跡発掘調査報告書』 1983 三富村教育委員会
o 奈良泰史他『中谷・宮脇遺跡』 1981 都留市教育委員会
o 清水博他 『曽根遺跡』 1984 櫛形町教育委員会
o 『宇山平遺跡』 1973 山梨県教育委員会
o 萩原三雄他 『京原』 1974 山梨県教育委員会
o 関根孝夫、清水博他『六科丘』 1985 櫛形町教育委員会
o 志村滝蔵 『坂井』 1965
o 『六郷町誌』 1982 六郷町

図　　版

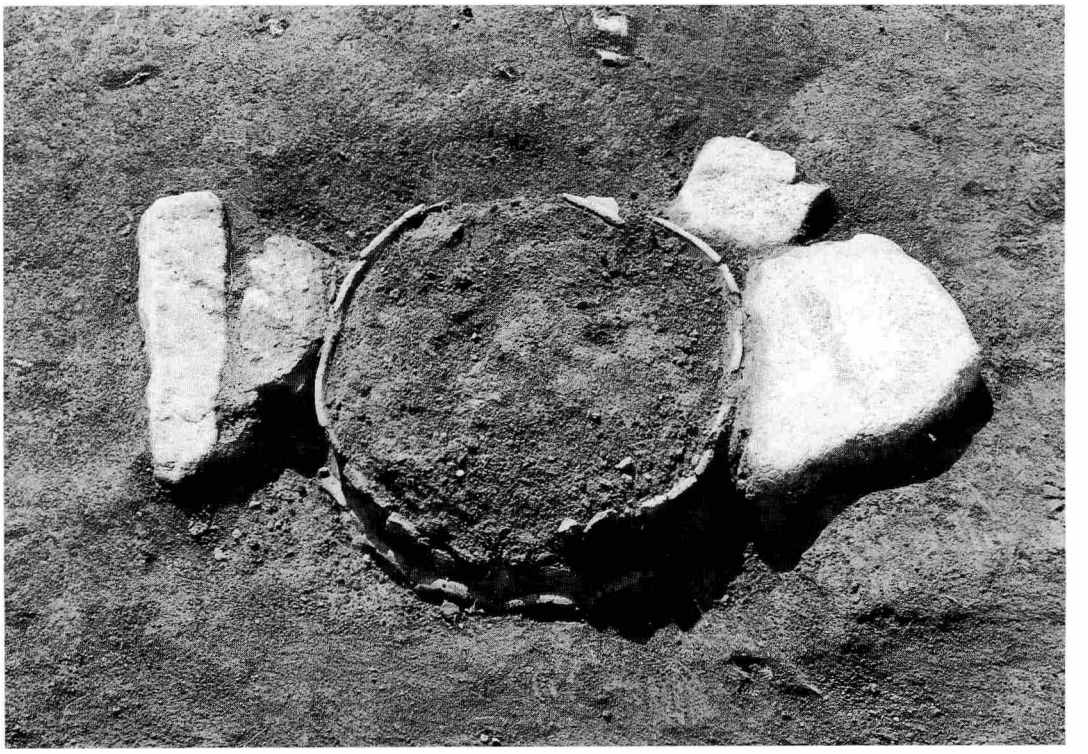


遺跡全景



作業風景

1 号 住 居 址

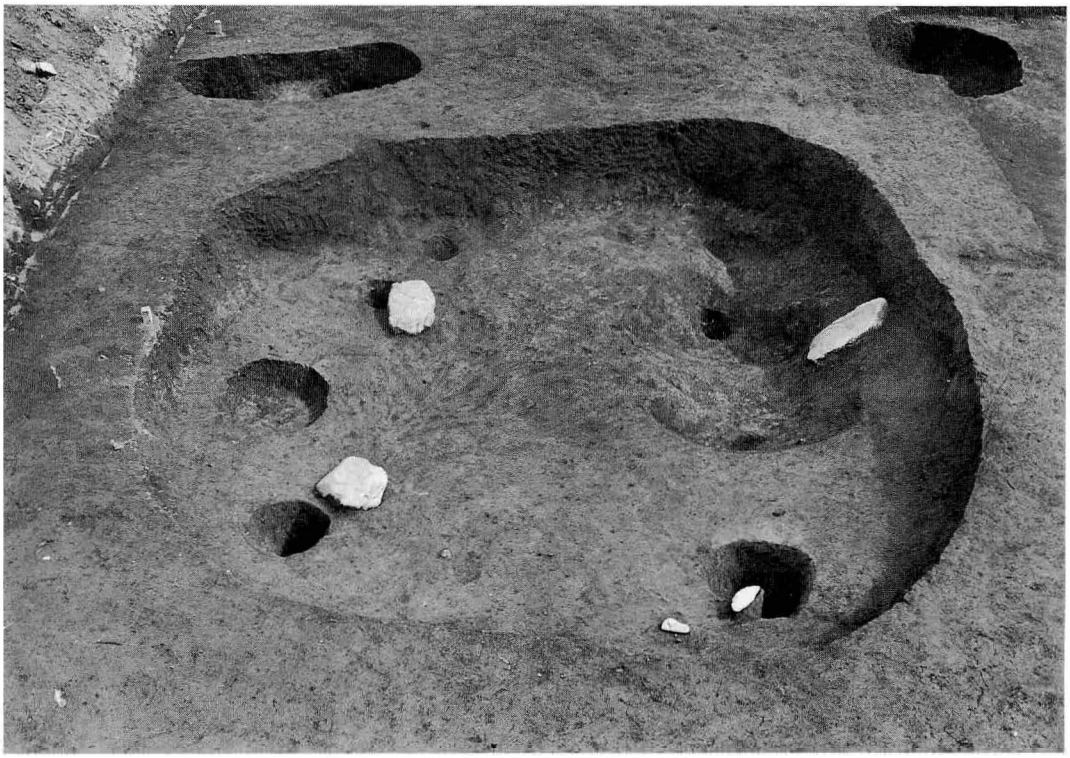


1 号 住 居 址 炉

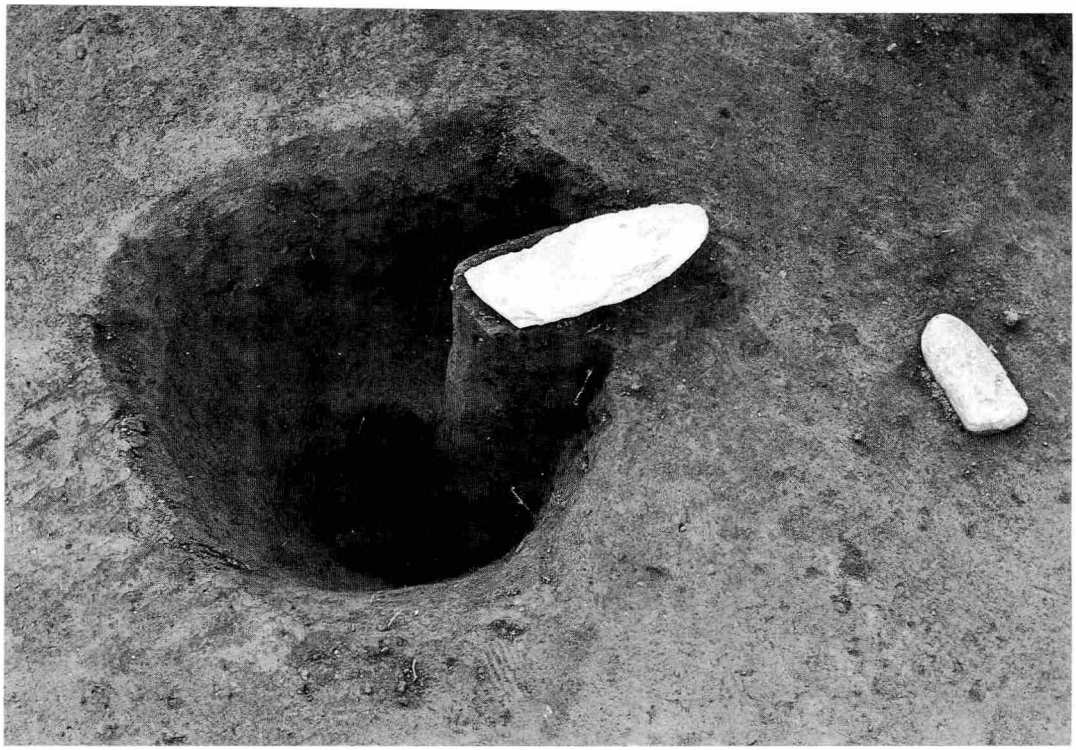
2 号 住 居 址

同　　上

2 号 住 居 址 炉



3 号 住 居 址



3 号住居址打製石斧出土状態

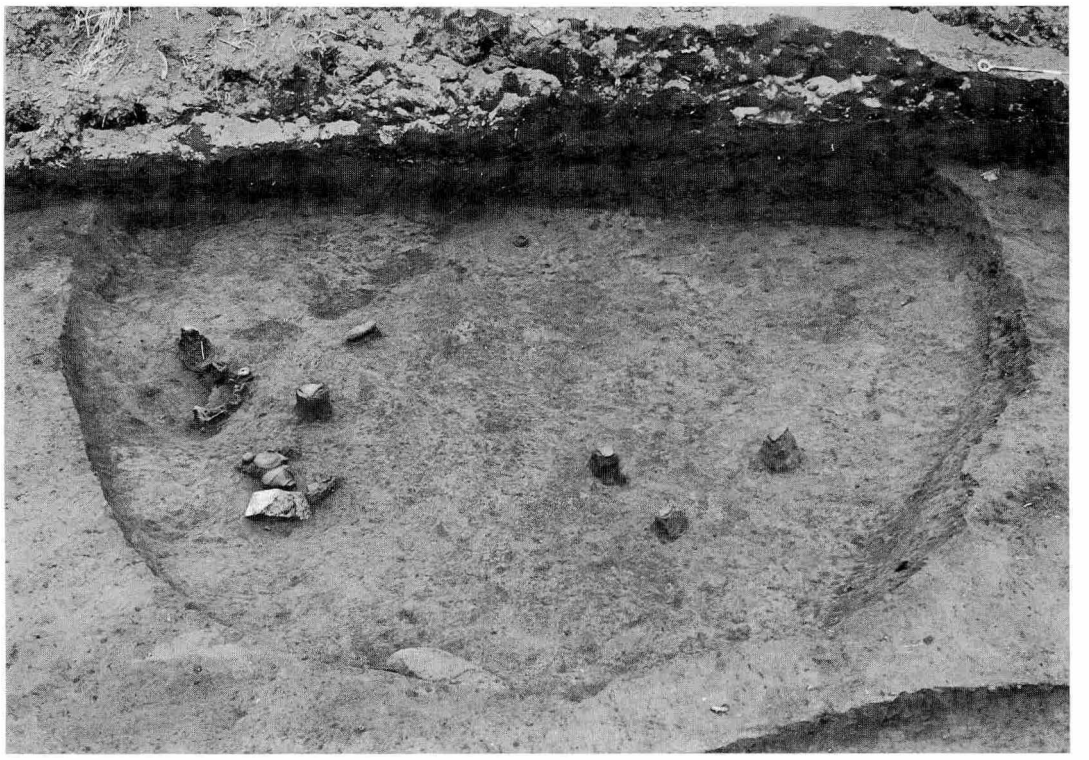
4 号住居址遺物出土状態

4 号 住 居 址 遺 物 出 土 状 態

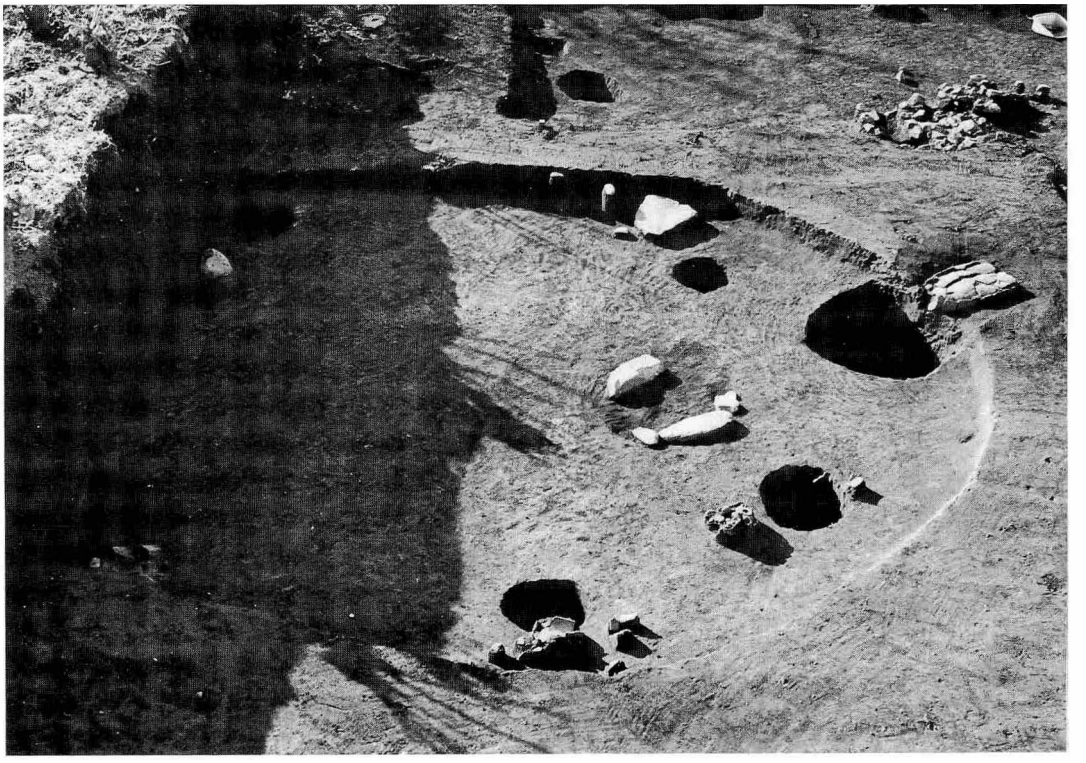
5 号 住 居 址

5 号 住 居 址 立 石

5 号 住 居 址 遺 物 出 土 状 態



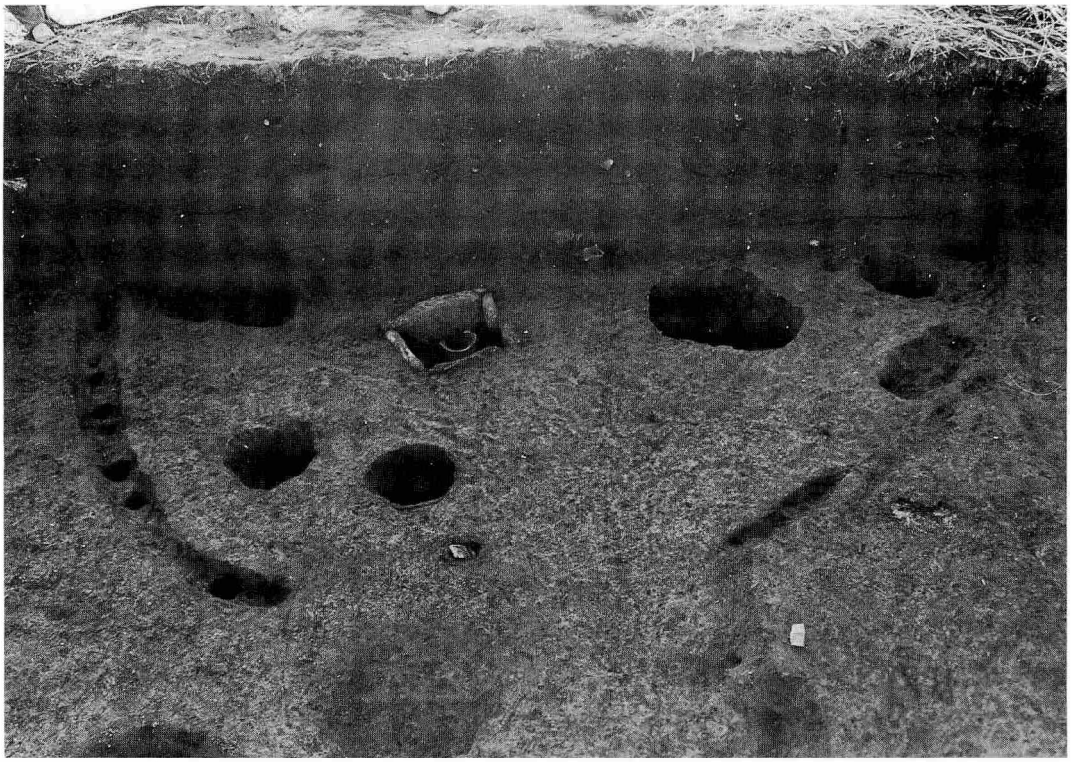
6 号 住 居 址



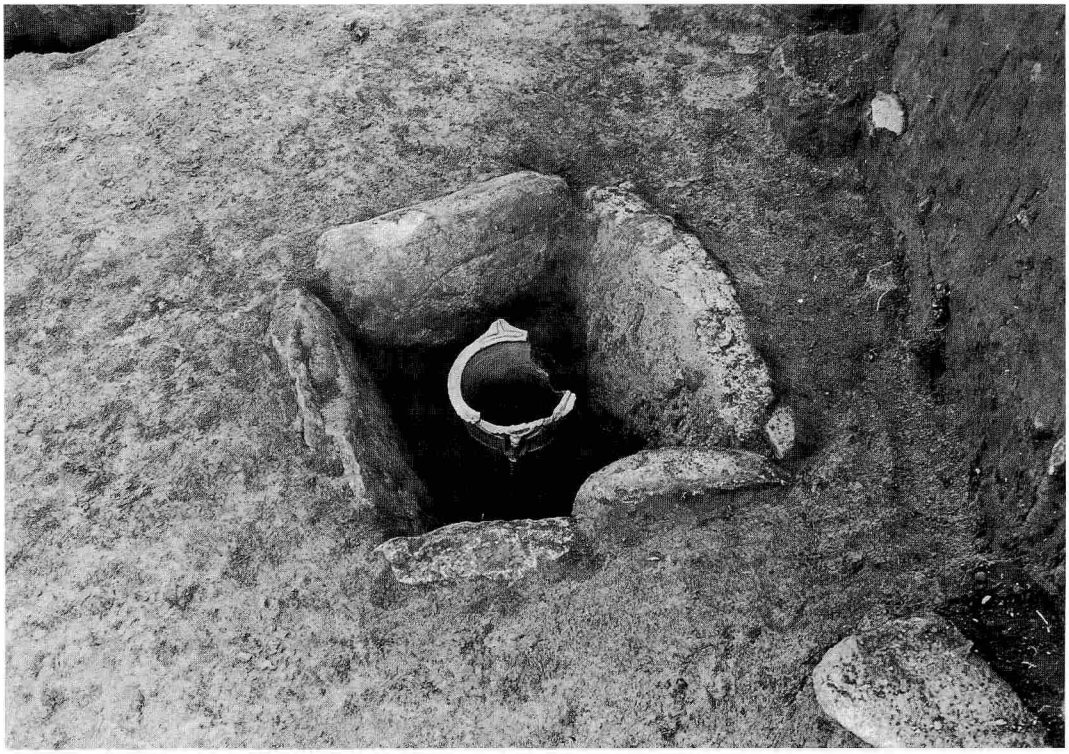
7 号 住 居 址 ・ 77 号 土 坑

7 号 住 居 址 炉

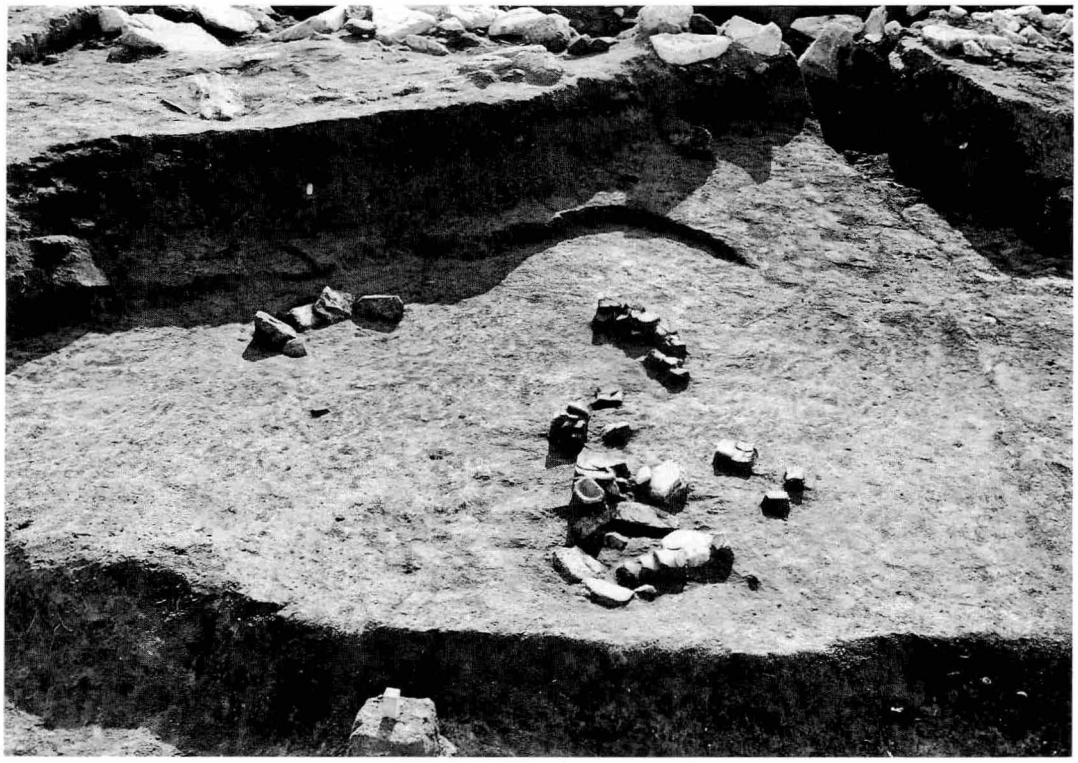
8 号 住 居 址



9 号 住 居 址



同　　炉



10 号 ・ 12 号 住 居 址

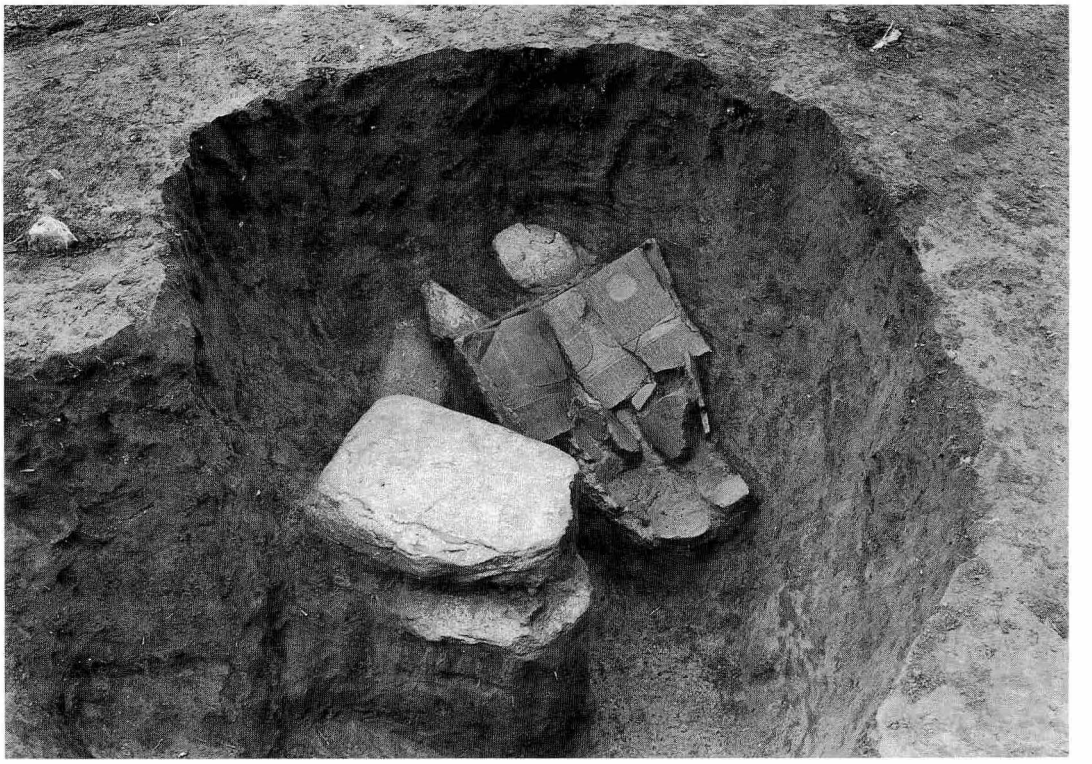
11 号 住 居 址

11 号 住 居 址 遺 物 出 土 状 態

56 号 土 坑 遺 物 出 土 状 態

56号土坑遺物出土状態

同　上（下層）

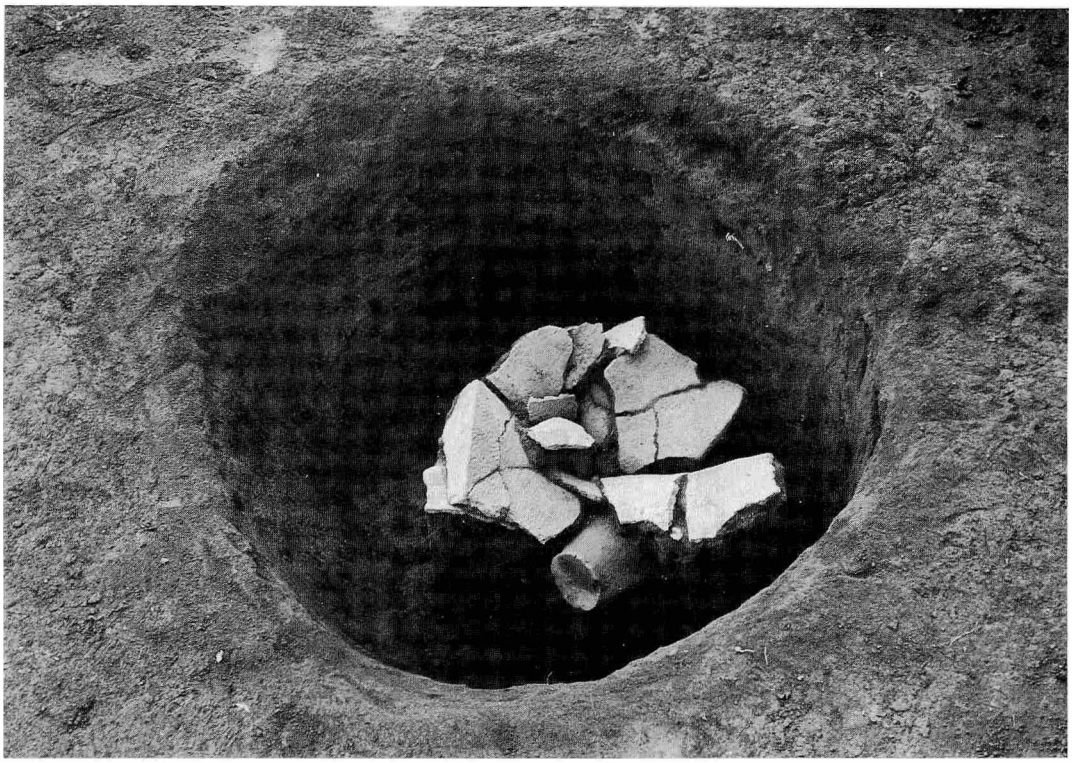


42 号 土 坑

藤内・井戸尻期土坑集中区（37号・65号・42号土坑他）

48 号 土 坑 遺 物 出 土 状 態

76 号 土 坑 遺 物 出 土 状 態



76号土坑遺物出土状態（下層）

古　　墳

1 号住居址出土土器

4 号住居址出土土器

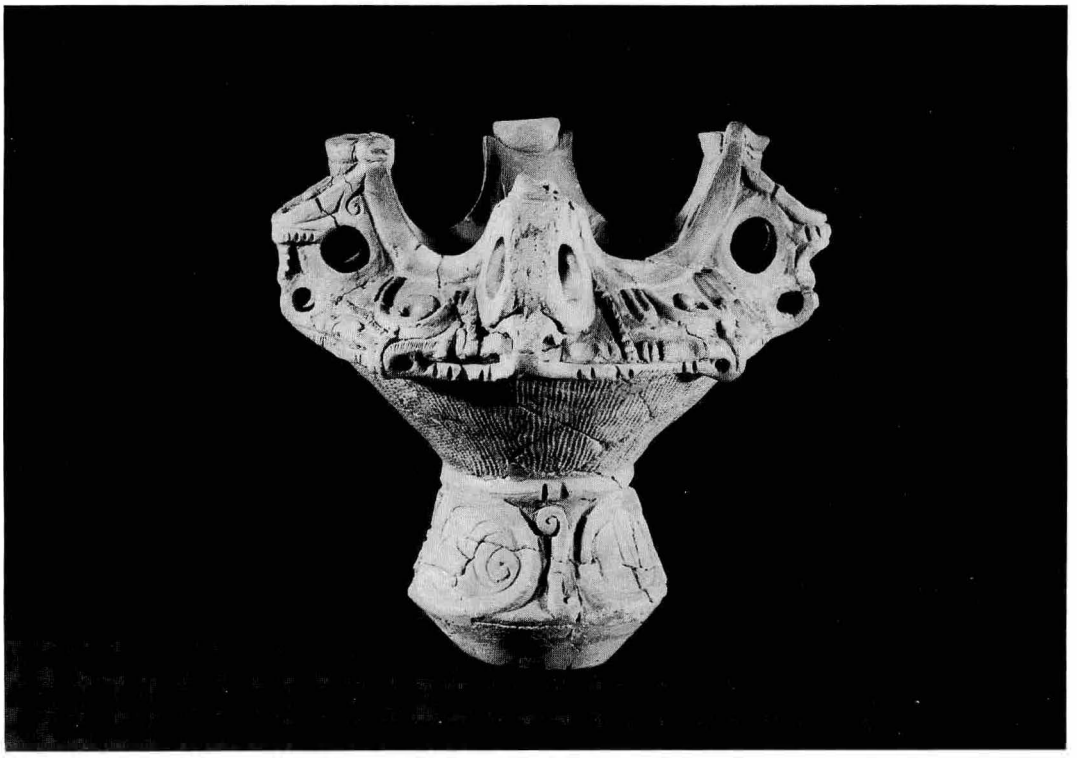
4 号住居址出土土器

同　　上

4 号 住 居 址 出 土 土 器

同　　上

4 号 住 居 址 出 土 土 器



同　　上

4 号 住 居 址 出 土 土 器

同　　上

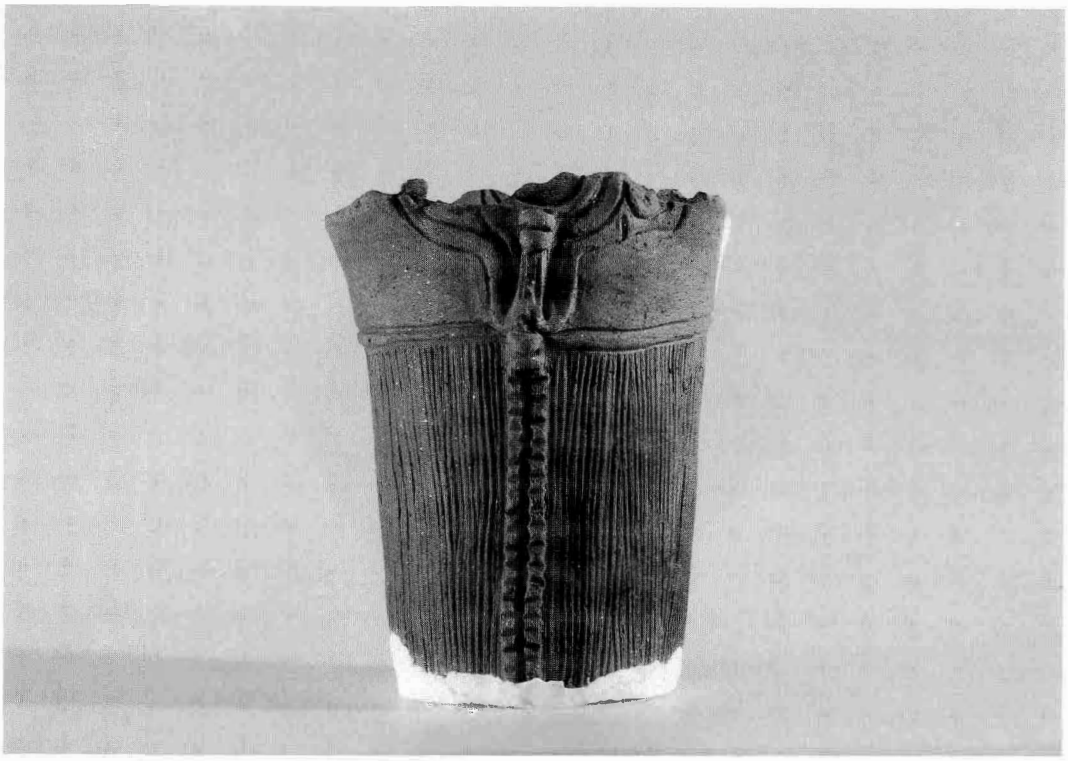
4 号住居址出土土器

5 号住居址出土土器

5 号 住 居 址 出 土 土 器

6 号 住 居 址 出 土 土 器

7 号 住 居 址 炉 体 土 器



9 号 住 居 址 炉 体 土 器

11号住居址出土土器

同　上

11 号 住 居 址 出 土 土 器

40 号 土 坑 出 土 土 器

76 号 土 坑 出 土 土 器

42 号 土 坑 出 土 土 器

93 号 土 坑 出 土 土 器

48 号 土 坑 出 土 土 器

56 号 土 坑 出 土 土 器

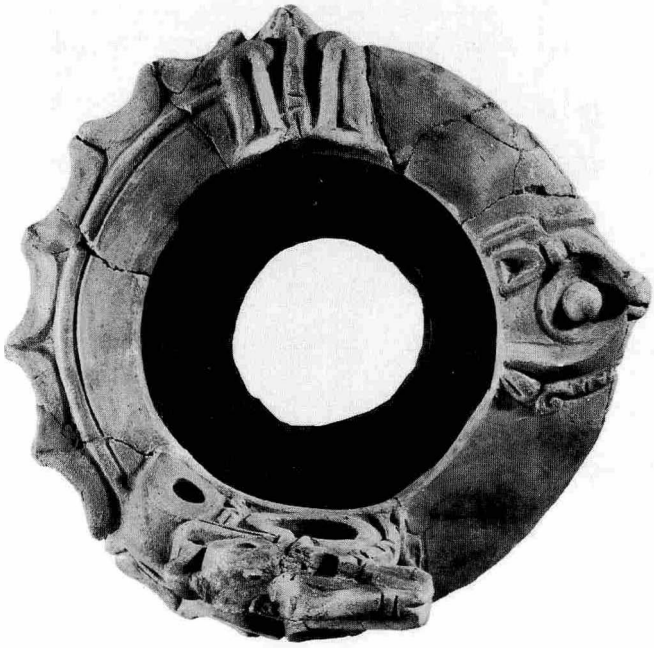
同　　上

56 号 土 坑 出 土 土 器

同　　上

37 号 土 坑 出 土 土 器

同　　上

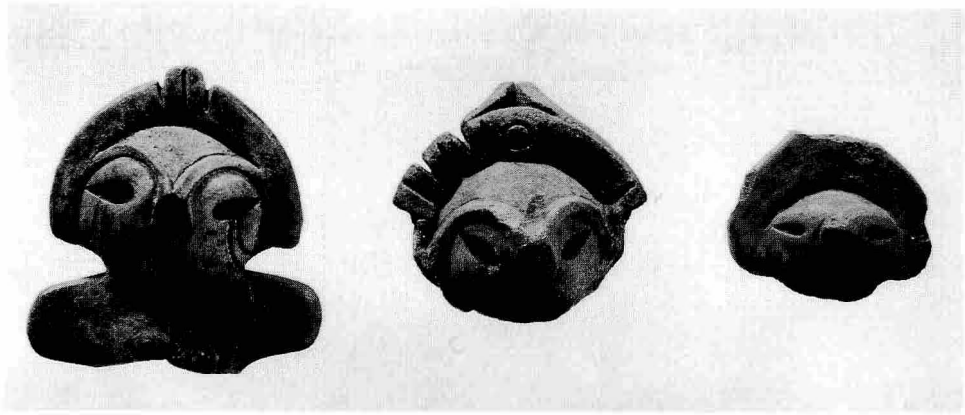


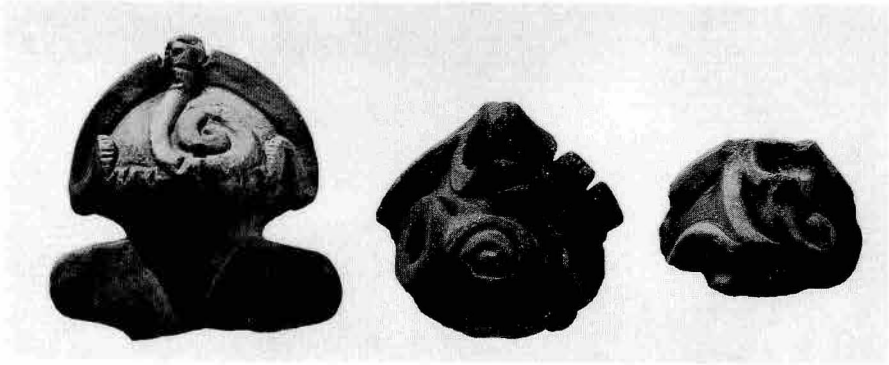
65 号 土 坑 出 土 土 器 （ 上 面 ）

同　　上 （ 側 面 ）

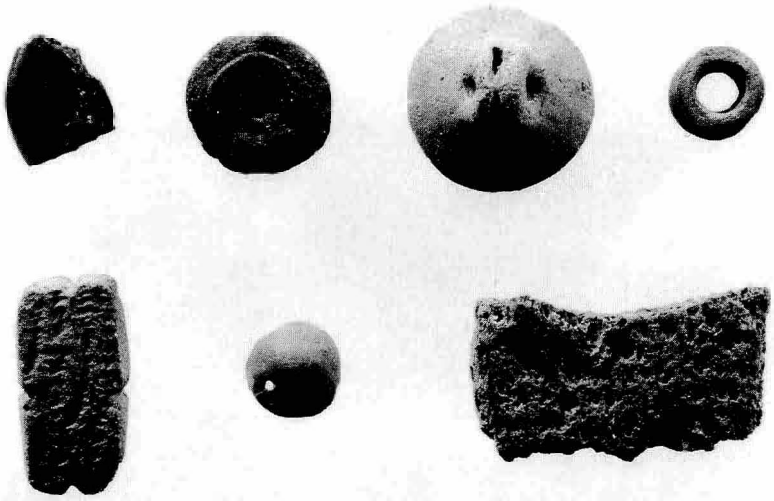
77号土坑出土土器

単独埋甕

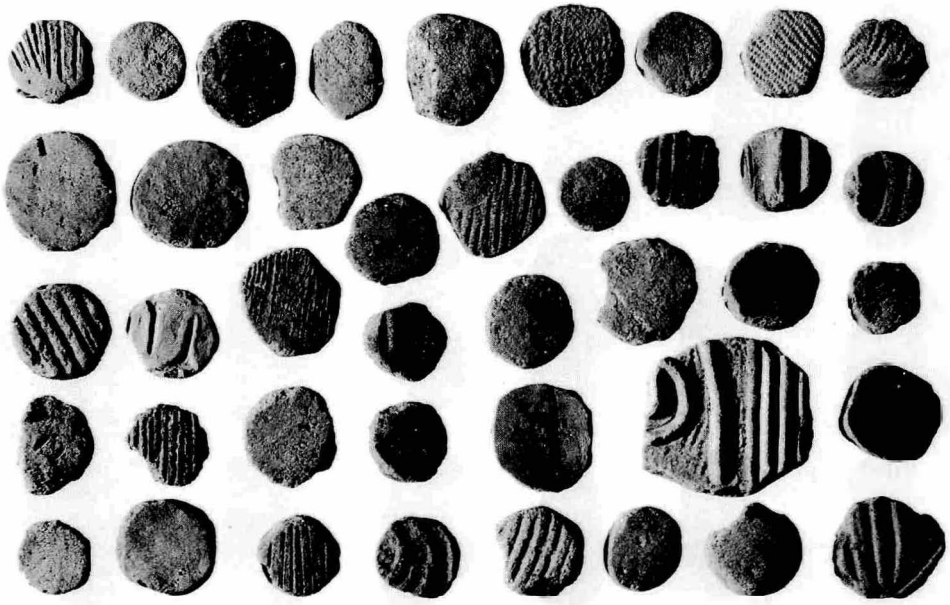




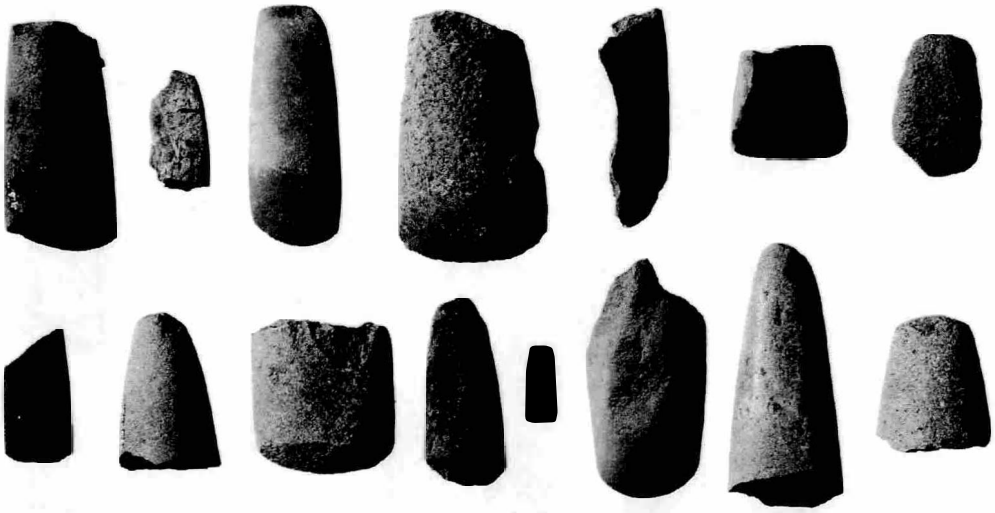
土偶（４号住居址・41号土坑・５号住居址）



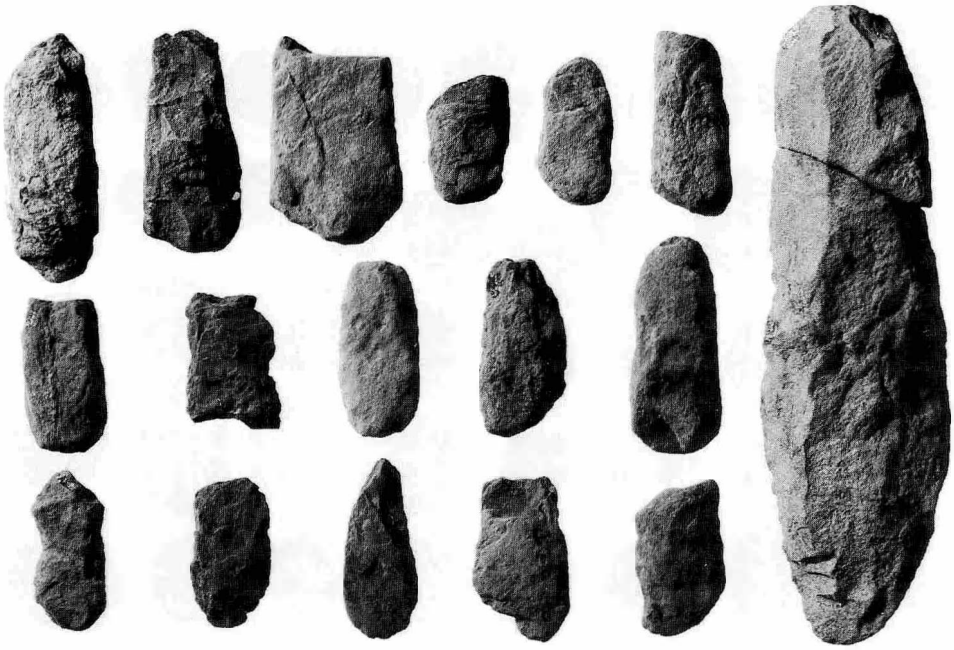
土製品（ミニチュア・土器片錘他）



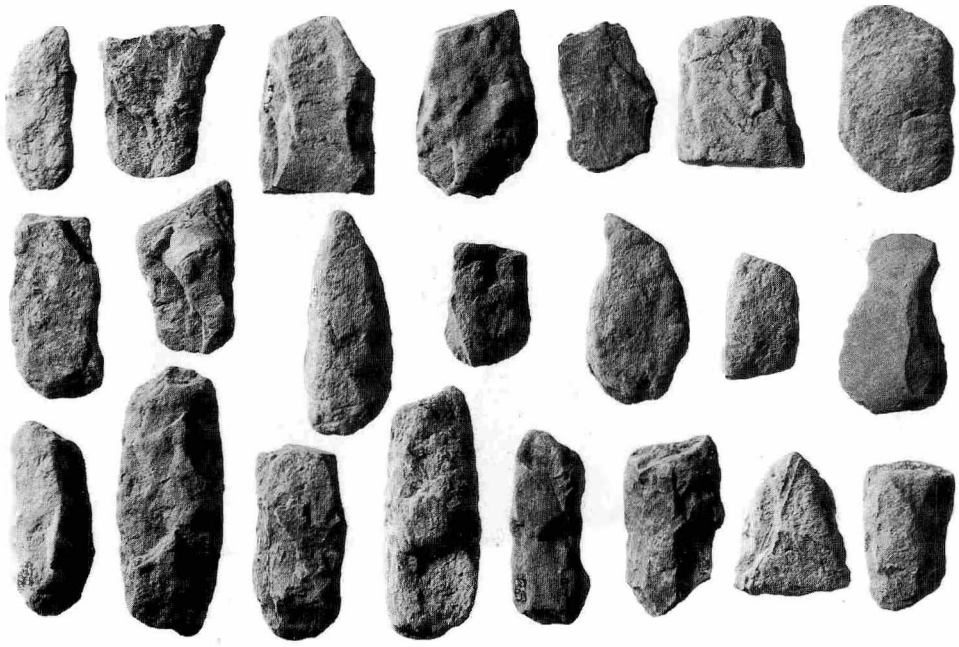
土製円板



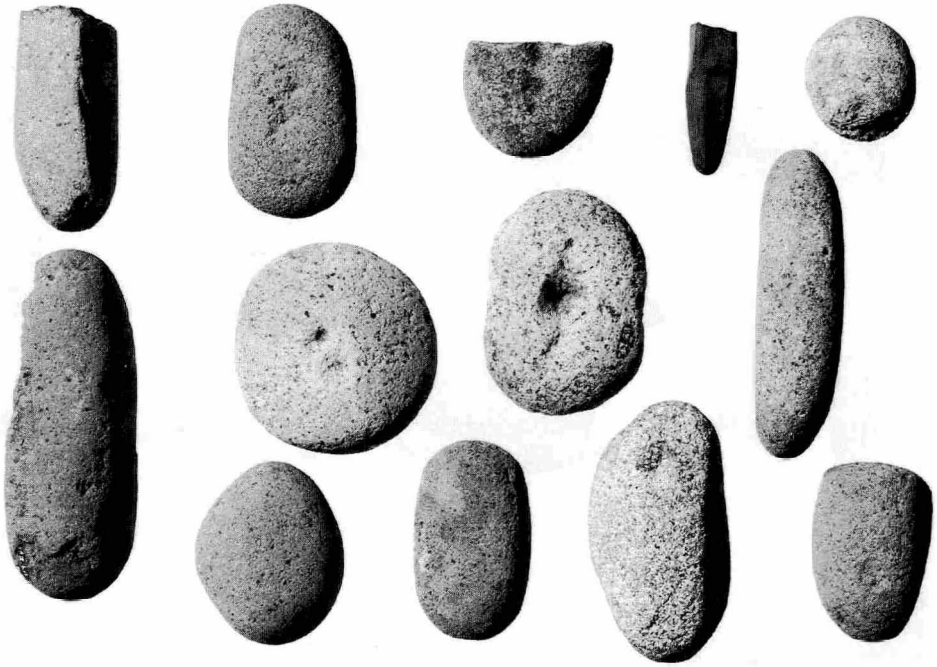
磨製石斧



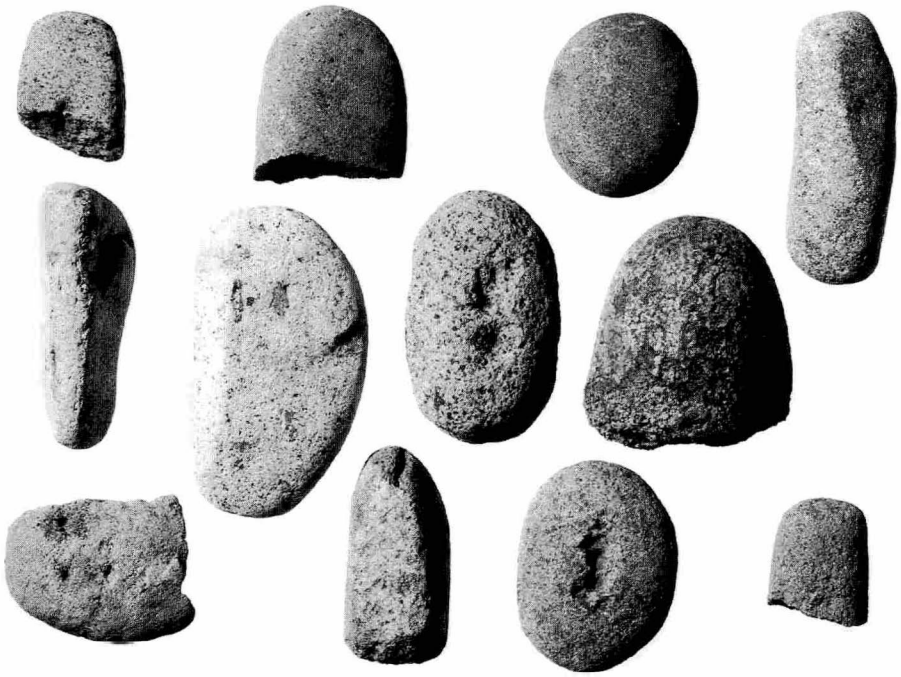
打製石斧



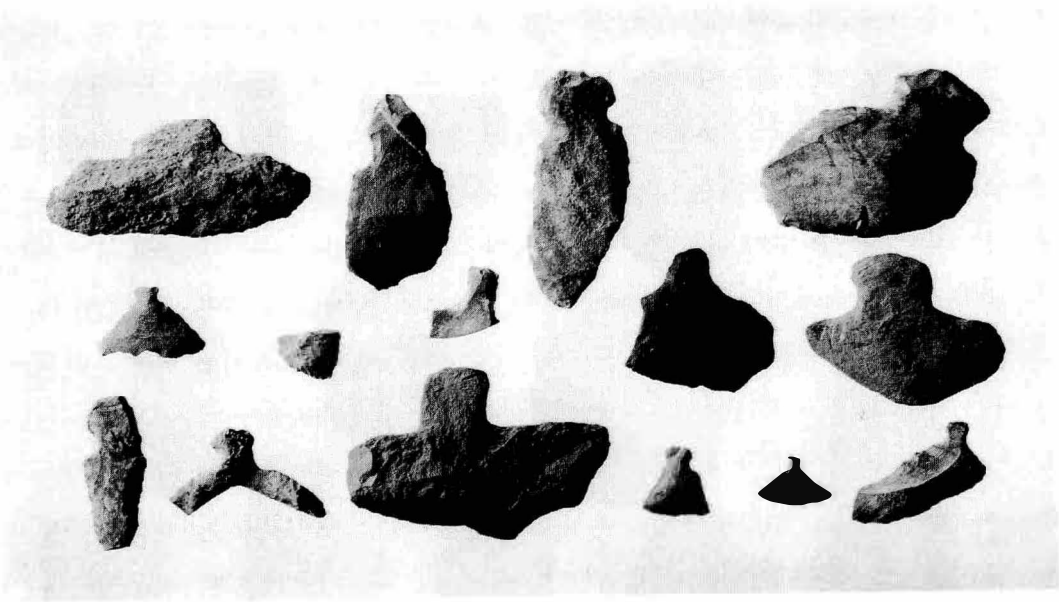
同　上



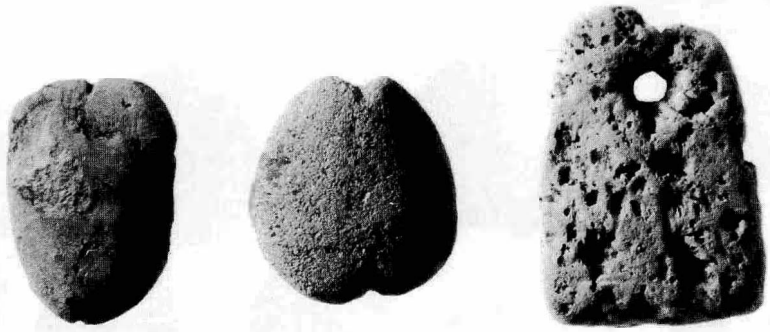
磨石・凹石



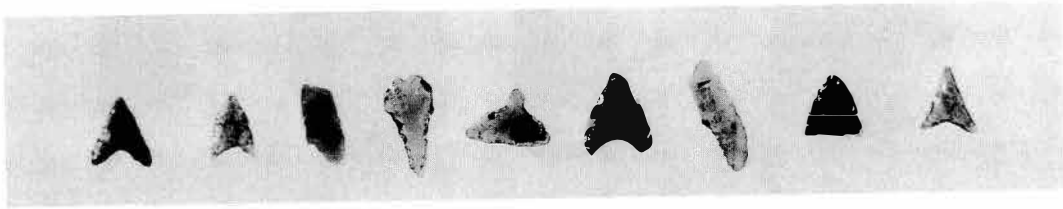
同　上



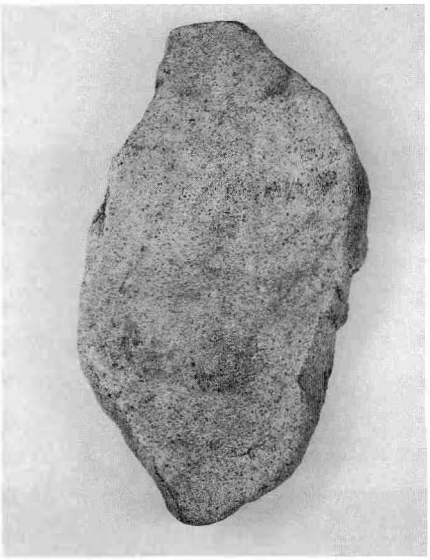
石　匙

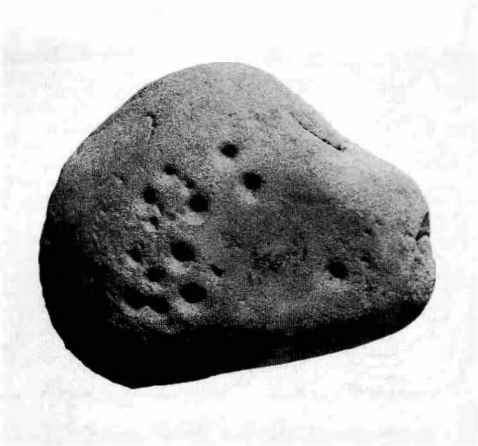


石錘・浮子

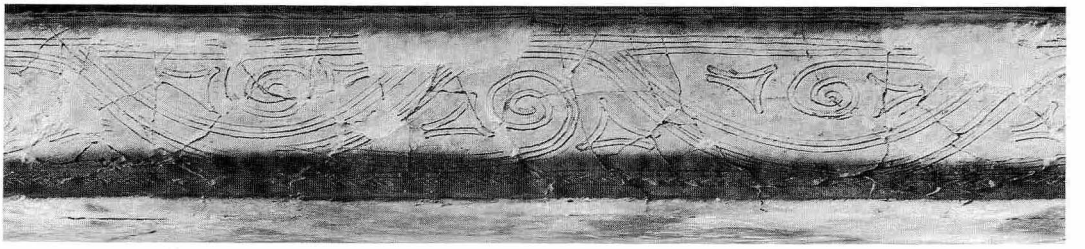


石鏃・石錐・石匙



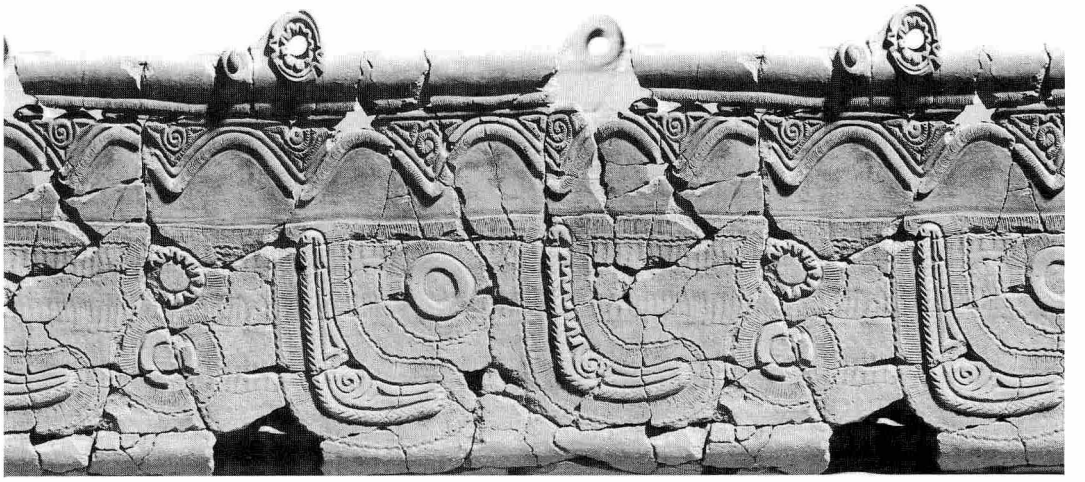


石皿・多孔石（3号住居址・38号土坑・40号土坑・7号住居址）

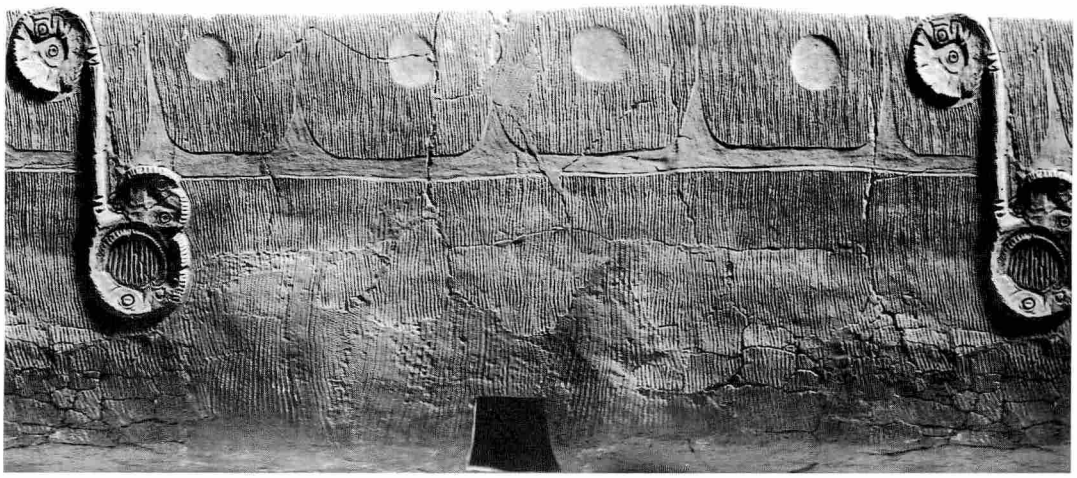


40 号 土 坑

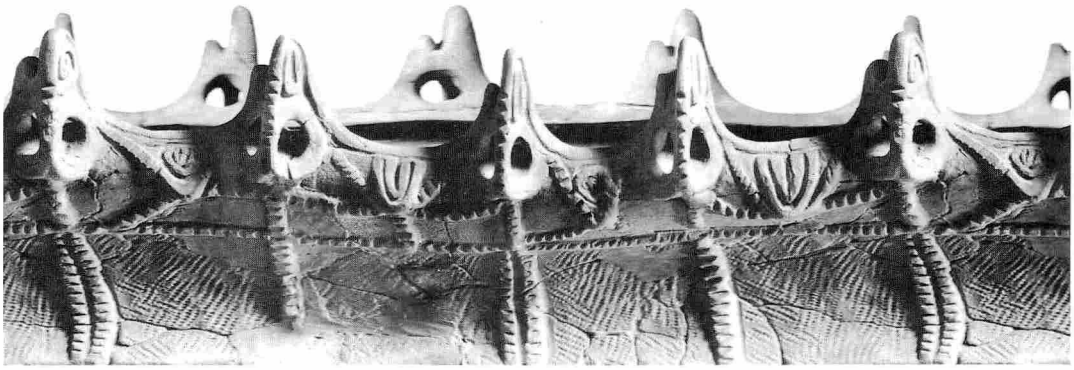
11 号 住 居 址



11 号 住 居 址



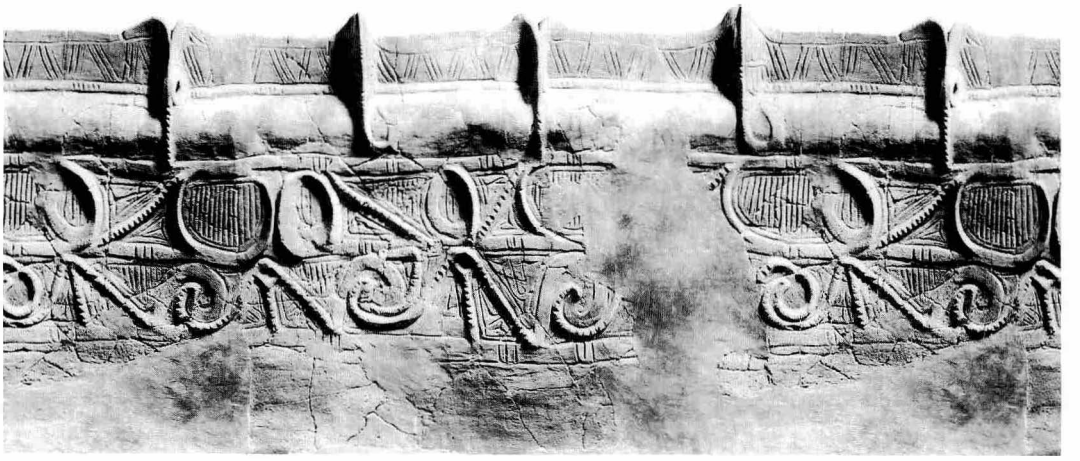
42 号 土 坑



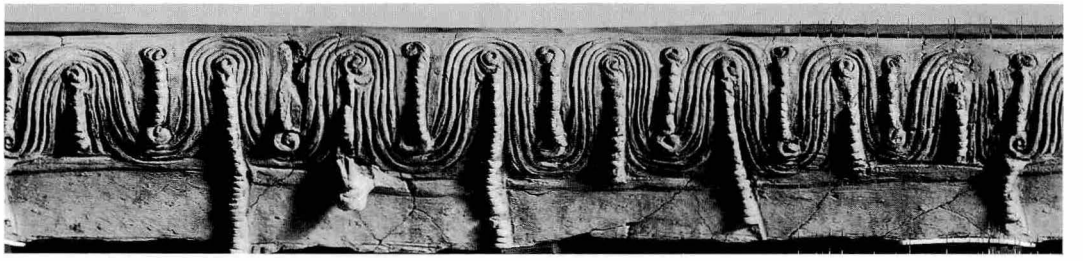
4 号 住 居 址

4 号 住 居 址

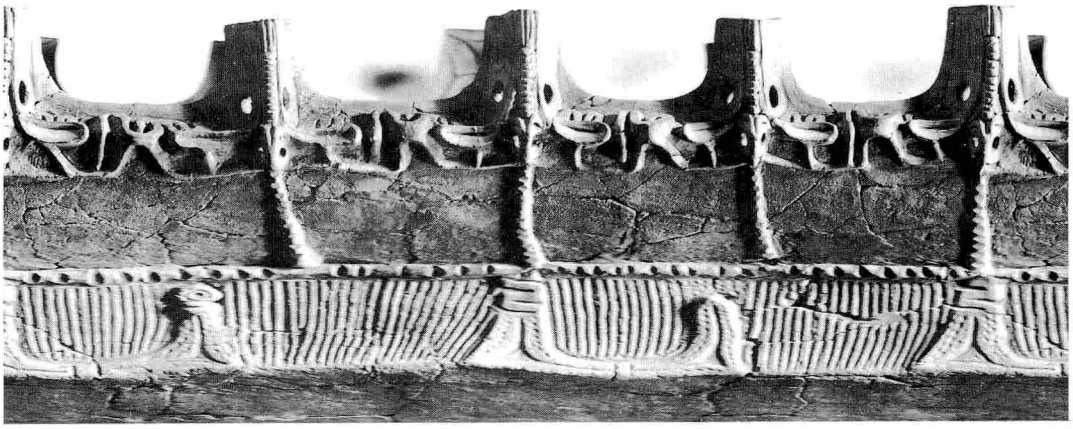
4 号 住 居 址



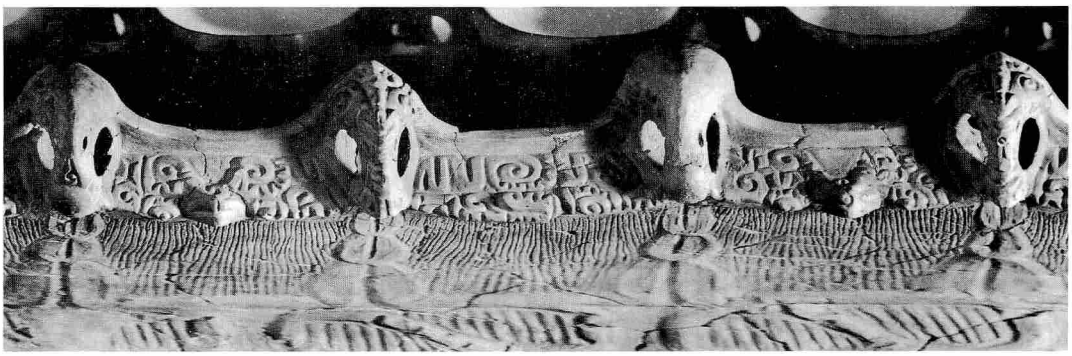
4 号 住 居 址



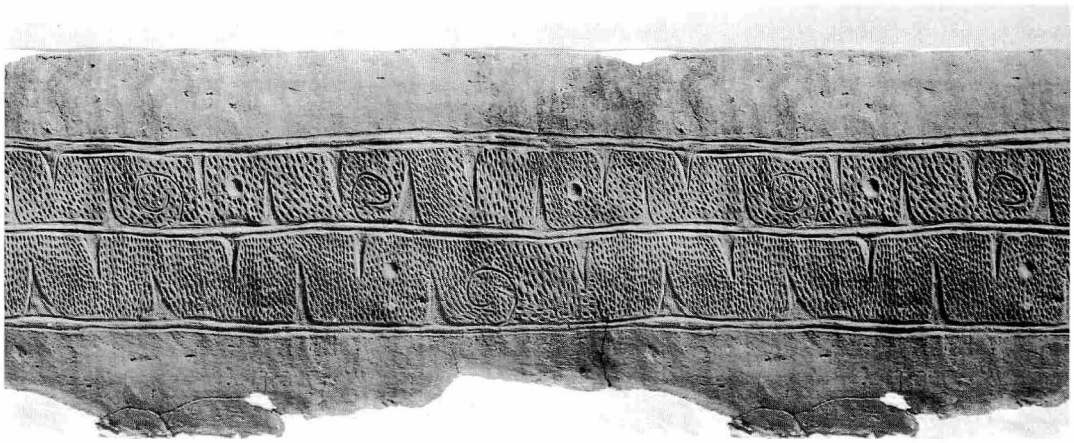
4 号 住 居 址



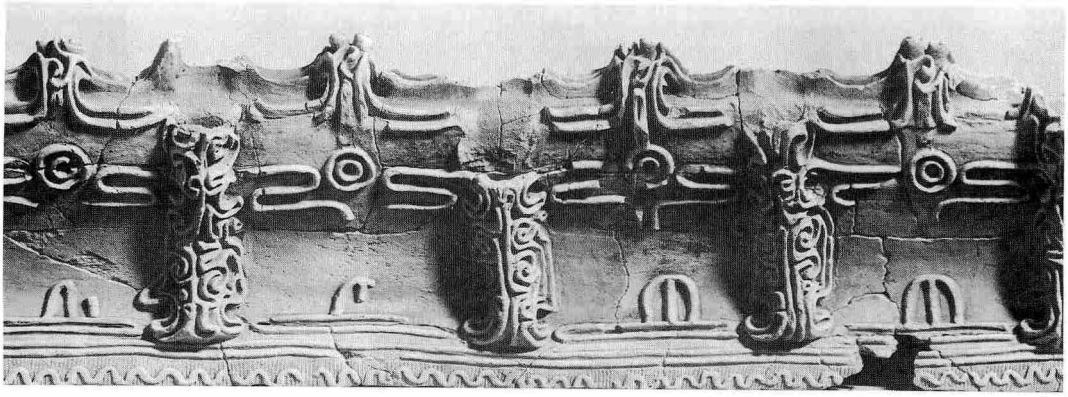
56 号 土 坑



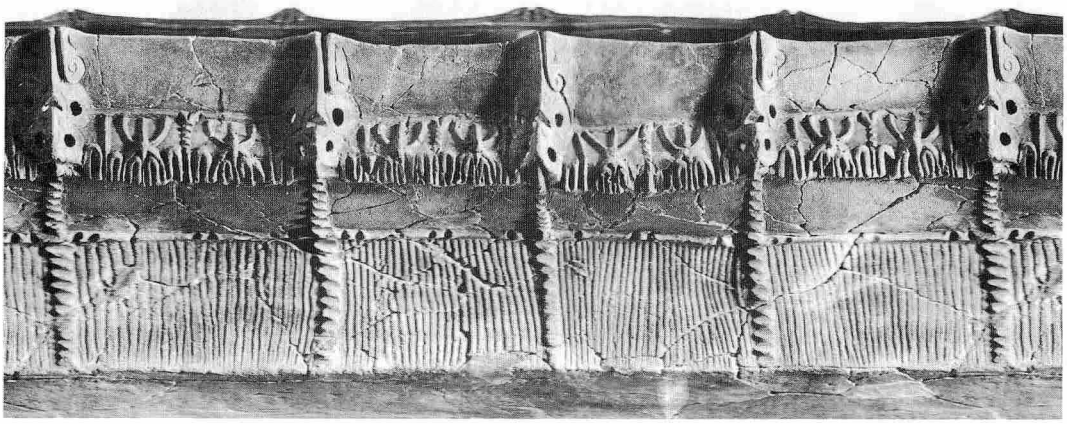
56 号 土 坑



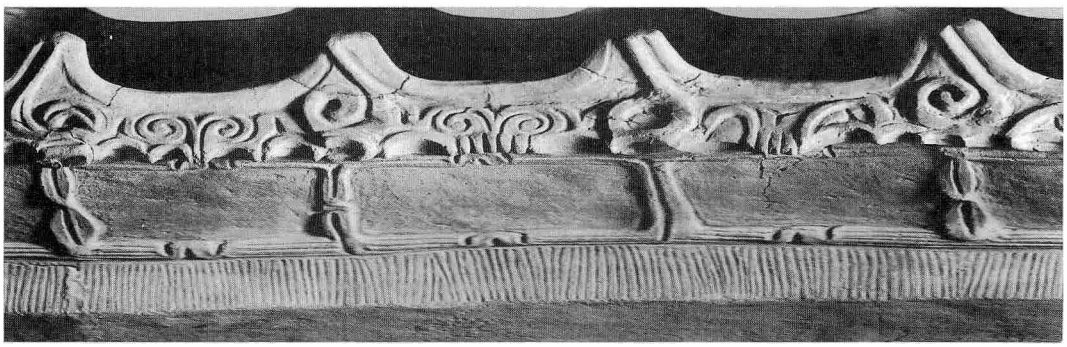
56 号 土 坑



56 号 土 坑



37 号 土 坑



37 号 土 坑

村上遺跡
後呂遺跡
浜井場遺跡

例　　言

1. 本報告書は、昭和59年度の笛吹川農業水利事業国営幹線管水路敷設工事に伴って発掘調査された遺跡の内、下記の3遺跡の調査報告書である。
   村上遺跡、後呂遺跡、浜井場遺跡
2. 発掘調査は、山梨県教育委員会が農林水産省関東農政局の委託と文化庁の国庫補助金を受けて実施した。
3. 発掘調査は、山梨県埋蔵文化財センターが行い、田代孝、中山誠二が担当した。
4. 本書の執筆、編集は中山誠二が行った。
5. 写真撮影は、遺構を中山誠二、遺物を塚原明生（日本写真家協会会員）が行った。
6. 本報告書にかかわる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 出土品整理参加者
   長田久美子、桜井里子、佐野生子、五味信子、宮川治子、中楯由美、石原はつ子、加藤綾子、田中正江、田中弘子、長田純子、梶本宏、小池和仁、遠藤映子、石田文次郎、山本治代、渡辺薫、高野俊彦、羽中田恵子、丸山孝子、広瀬千江美、坂本穂波
8. 発掘調査にあたって、文化庁文部技官岡本東三氏にご指導を賜った。

目　　次

第Ⅰ章　調査状況 …… 125

第1節　調査に至る経過 …… 125

第2節　調査組織 …… 125

第Ⅱ章　村上遺跡 …… 126

第1節　遺跡の位置と周辺の環境 …… 126

第2節　遺構と遺物 …… 127

第3節　まとめ …… 135

第Ⅲ章　後呂遺跡 …… 136

第1節　遺跡の位置と周辺の環境 …… 136

第2節　遺構と遺物 …… 137

第3節　まとめ …… 154

第Ⅳ章　浜井場遺跡 …… 155

第1節　遺跡の位置と周辺の環境 …… 155

第2節　遺構と遺物 …… 155

第3節　まとめ …… 156

挿図目次

第1図　村上遺跡位置図
第2図　村上遺跡A地区
第3図　村上遺跡B地区
第4図　村上遺跡A地区遺構配置図
第5図　村上遺跡1号住居址
第6図　村上遺跡1号集石遺構
第7図　村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器
第8図　村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器
第9図　村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器
第10図　村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器
第11図　村上遺跡B地区出土土器
第12図　後呂遺跡位置図
第13図　後呂遺跡調査区域図
第14図　後呂遺跡A地区遺構配置図
第15図　後呂遺跡B地区遺構配置図
第16図　後呂遺跡C地区遺構配置図
第17図　後呂遺跡1号・4号住居址
第18図　後呂遺跡1号住居址出土土器
第19図　後呂遺跡1号住居址出土土器
第20図　後呂遺跡2号住居址
第21図　後呂遺跡2号住居址炉址
第22図　後呂遺跡2号住居址出土土器
第23図　後呂遺跡2号住居址出土土器
第24図　後呂遺跡3号住居址
第25図　後呂遺跡3号住居址炉址
第26図　後呂遺跡3号住居址出土土器
第27図　後呂遺跡3号住居址出土土器
第28図　後呂遺跡1号配石遺構、3号埋甕
第29図　後呂遺跡1号配石出土土器
第30図　後呂遺跡1号配石出土土器
第31図　後呂遺跡1号竪穴、3号・4号土坑
第32図　後呂遺跡1号・2号土坑
第33図　後呂遺跡1号土坑遺物出土状況
第34図　後呂遺跡1号土坑出土土器
第35図　後呂遺跡5号・6号土坑
第36図　後呂遺跡7号・8号土坑
第37図　後呂遺跡9号・10号土坑
第38図　後呂遺跡9号・10号土坑出土土器
第39図　後呂遺跡1号・2号埋甕
第40図　後呂遺跡1号・2号埋甕内埋設土器
第41図　後呂遺跡3号埋甕
第42図　後呂遺跡3号埋甕内埋設土器
第43図　後呂遺跡1号溝状遺構
第44図　後呂遺跡2号溝状遺構
第45図　後呂遺跡3号溝状遺構
第46図　後呂遺跡3号溝出土遺物
第47図　後呂遺跡遺構外出土ナイフ形石器
第48図　後呂遺跡遺構外出土土器
第49図　後呂遺跡遺構外出土土製品
第50図　後呂遺跡出土石器
第51図　後呂遺跡遺構外出土土師質土器
第52図　浜井場遺跡位置図
第53図　浜井場遺跡調査区域図
第54図　浜井場遺跡出土土器

図版目次

図版 1　村上遺跡1号住居址、村上遺跡1号集石遺構
図版 2　村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器
図版 3　村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器
図版 4　村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器、村上遺跡B地区出土土器
図版 5　後呂遺跡1号住居址、後呂遺跡2号住居址
図版 6　後呂遺跡3号住居址、後呂遺跡1号配石遺構
図版 7　後呂遺跡1号土坑、後呂遺跡3号・4号土坑
図版 8　後呂遺跡5号・6号土坑、後呂遺跡7号土坑
図版 9　後呂遺跡1号・2号埋甕、後呂遺跡3号埋甕
図版 10　後呂遺跡1号溝状遺構、後呂遺跡2号・3号溝状遺構
図版 11　後呂遺跡1号住居址出土土器、後呂遺跡2号住居址出土土器
図版 12　後呂遺跡3号住居址出土土器、後呂遺跡1号配石出土土器
図版 13　後呂遺跡1号土坑出土土器、後呂遺跡9号・10号土坑出土土器、後呂遺跡1号埋甕、後呂遺跡2号埋甕、後呂遺跡3号埋甕
図版 14　後呂遺跡3号溝出土遺物、後呂遺跡遺構外出土遺物、後呂遺跡出土石器

第Ⅰ章　調査状況

第１節　調査に至る経過

昭和59年10月１日　　文化庁に発掘通知を提出する。
昭和59年10月８日　　発掘調査を開始する。
昭和59年12月27日　　発掘調査を終了する。
昭和60年２月７日　　甲府南警察署へ発見通知を提出する。

第２節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　田代孝、中山誠二（文化財主事）
調　査　員　塚原明生（日本写真家協会会員）
　　新津重子、日向千恵
作　業　員　田中治江、望月太千代、小林澄子、五味京子、五味当子、田中つき代、柿島伸世、柿島つねじ、渡辺喜の女、渡辺かつ子、土橋敦子、五味信子、池谷ひでじ、池谷多称子、池谷百代、池谷太吉、池谷はつ江、池谷たつ子、池谷松子、小林あさ子、池谷くめ子、河野まさ子、長田久美子、渡辺礼子、桜井里子、中込秀夫、中楯みな子、佐野生子、宮川治子、平川恵三、丸山孝子、羽中田恵子、坂本穂波、広瀬千江美、斉藤多喜子、池谷美恵子、斉藤つね子、山下政司、北村玲子、堀越光子、渡辺澄雄、木ノ瀬いつ子、田中正江、田中弘子、中込敬子、土橋ナミエ、鮫田黎子

（順不同）

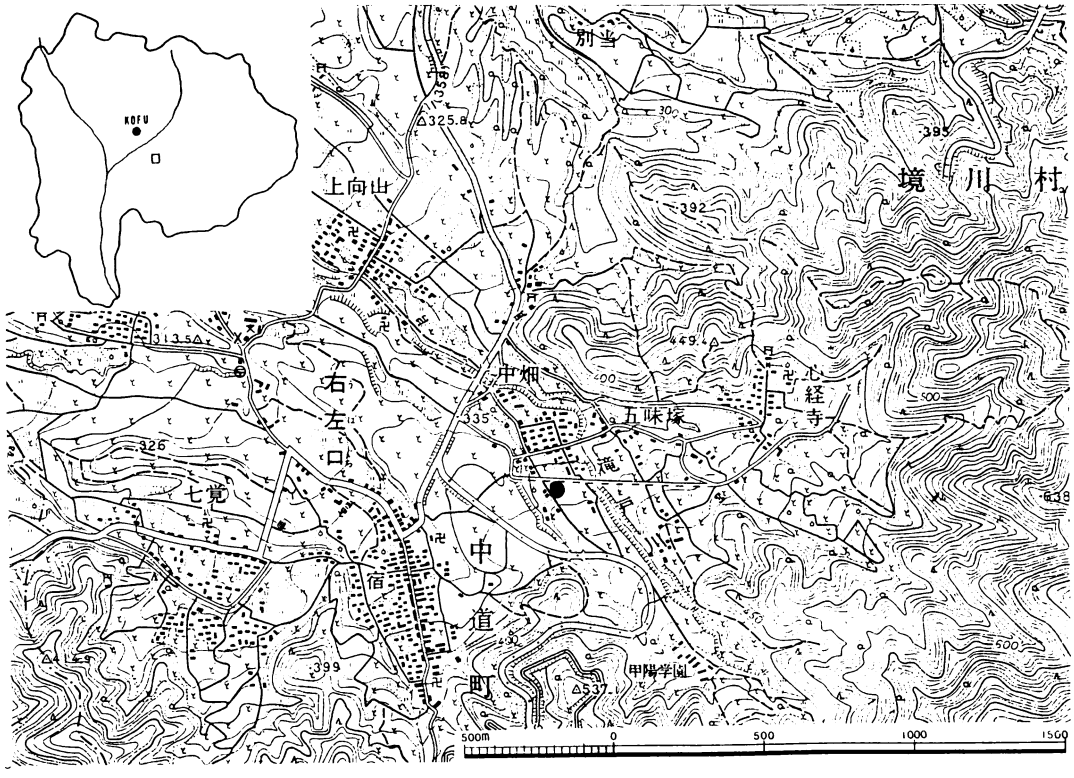
調査協力機関
　　中道町教育委員会
　　豊富村教育委員会

第II章　村上遺跡

第１節　遺跡の位置と周辺の環境

村上遺跡は、東八代郡中道町中畑地内に所在する。甲府盆地南縁に帯状にのびる曽根丘陵上の中でも最上部に位置し、標高 360 m 前後を測る。遺跡の南側には御坂山塊に連なる日蔭山、滝戸山などがせまり、北側には心経寺山が西方へ向けて迫り出すため付近は西側に向かって開く山懐をなす。この山懐には現在中畑と心経寺の集落が存在している。現在の中畑集落の南に位置する本遺跡は、東側の滝戸川、西側の西川によって形式された幅のせまい扇状地上にのり、東西は両河川によって削られた深い侵蝕崖をなしている。

遺跡の所在する中道町は、曽根丘陵とその北側を西流する笛吹川の氾濫原に地形的に２分されるが、この丘陵地帯には数多くの遺跡の存在が知られている。丘陵先端部の米倉山、東山地域では、米倉山Ａ・Ｂ遺跡、女沢遺跡、上の平遺跡、立石遺跡など先土器時代から古墳時代前期に至る遺跡群をはじめ、小平沢古墳、銚子塚古墳、大丸山古墳、丸山塚古墳などの前期古墳が存在する。一方、本遺跡周辺の丘陵最上部においては、西川左岸に上野原遺跡、城越遺跡など縄文時代前期から後期を中心とする集落跡が認められ、後背地にある御坂山塊と前面に広がる丘陵上を舞台とした縄文時代人の営みが看取される。古墳時代の遺跡としては、本遺跡と同一扇状地上に位置する向井遺跡、滝戸原遺跡のほかに、後期古墳が付近に点在する。本遺跡東方



第１図　村上遺跡位置図

の心経寺地内には、奈良・平安時代の心経寺清水遺跡、心経寺上之原遺跡などが知られる。また、この地域には心経寺の地名の由来となった廃寺跡が存在し、現在当地にある悟道山安国寺の前身寺院とする説もある。寺域からは布目瓦のほかに、建武3年（1336）および康永4年（1343）在銘の五輪塔の一部が出土している。さらに、村上遺跡南方の日蔭山の支脈には、中世の山城とされる城山が存在する。盆地と太平洋沿岸地域を最短距離で結ぶ中道往環が通るこの周辺地域は、古代～中世甲斐国の要衝の地として重要な意味を持っていたことが窺える。

村上遺跡は、1976年東八代横断広域農道建設に伴って県教育委員会により発掘調査され、同時に周辺の遺跡分布調査が行われている。その結果、縄文時代中期の住居址2軒、集石遺構1基、平安時代の住居址1軒が検出され、分布調査では、縄文時代中期を中心とする土器、平安時代の土師器、中世陶器や土師質土器などの散布状況が明らかにされている。

参考文献

山梨県教育委員会　『村上遺跡―東八代横断広域農道建設に伴う発掘調査報告書―』1980

中道町史編纂委員会　『中道町史』上　1975

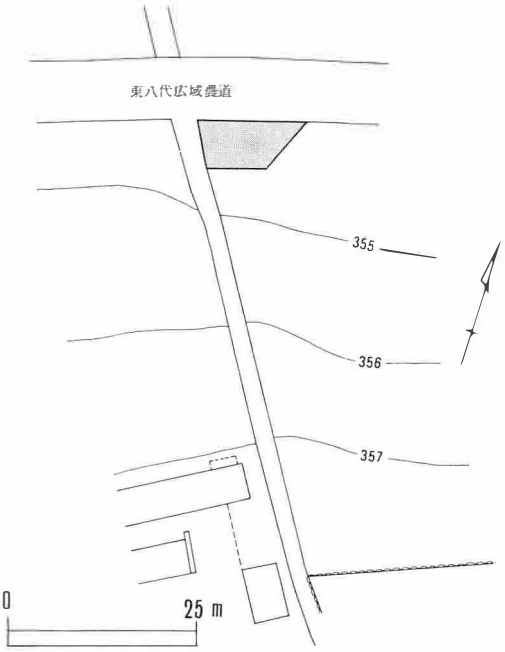
山梨県教育委員会　『山梨県の文化財』改訂第1集　1980

山梨県教育委員会　『昭和52年度（笛吹川沿岸土地改良事業地域内）埋蔵文化財分布調査報告書』1978

磯貝正義ほか　『角川日本地名大辞典19　山梨県』1984　角川書店

第2節　遺構と遺物

発掘調査対象区域は、東八代広域農道に面したA地区（第2図）とその南方200 mの西川右岸に位置するB地区（第3図）に分けられる。A地区は、全面的に表土剥ぎとりを行い遺構確認した結果、縄文時代中期の住居址1軒と集石遺構1基が発見された。B地区は幅7～9 m、長さ70 mの調査区に13ヶ所試掘坑を入れたが、表土より50cm程下層で人頭大の礫を含む礫層にあたり遺構は確認されなかった。遺物は、縄文土器が少量出土している。

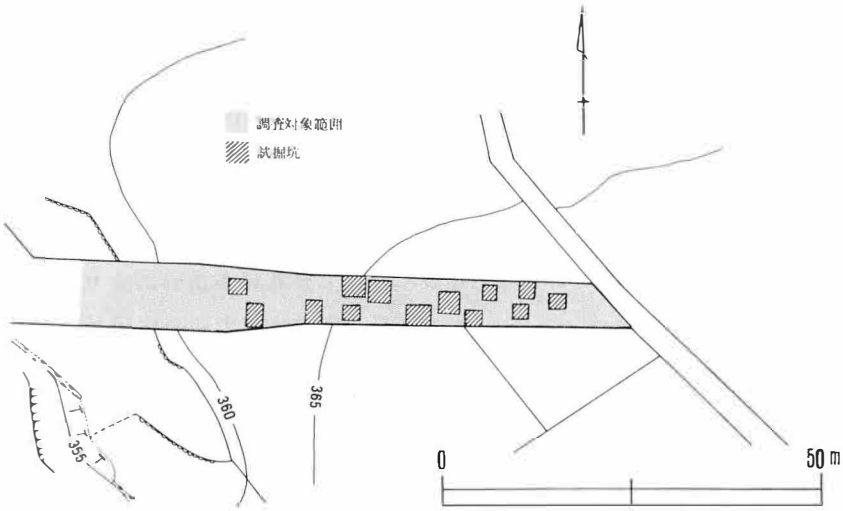


第2図　村上遺跡A地区

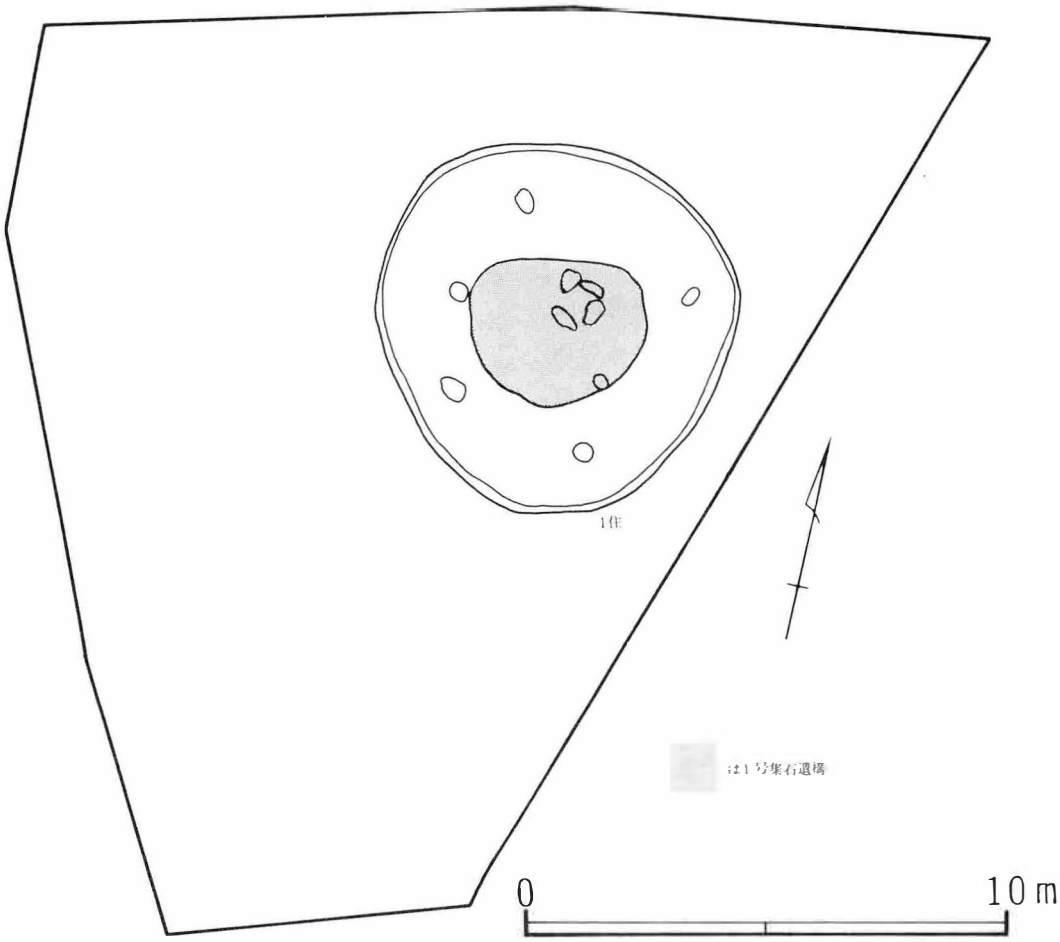
(1)　遺構と出土遺物

1号住居址

A地区調査区の中でやや北東よりに存在する。住居址平面形は、南北4 m80cm、東西4 m70cmの卵形を呈し、主軸は柱穴の配列から

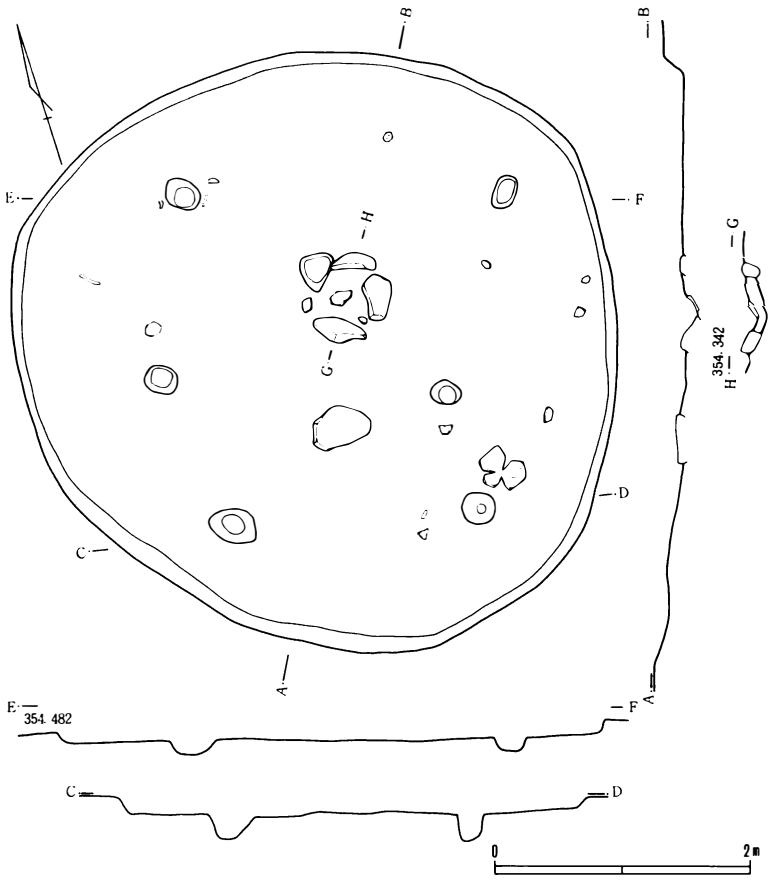


第３図　村上遺跡Ｂ地区



第４図　村上遺跡Ａ地区遺構配置図

推定するとほぼ南北方向をとる。確認面は表土下20㎝程であるが、住居址床面はそこからわずか15㎝程度である。ピットは、住居東側に3本、西側に3本検出された。柱穴の径は20㎝～35㎝で、床面からの深さは10㎝～20㎝を測る。炉は石囲い炉で、住居址中央よりやや北に扁して存在する。石囲い炉は、西側の石がぬきとられているため「コ」の字状に残存する。遺物は覆土中から多量に出土しているが、住居址中央部直上に存在する集石遺構のものと分離し難く、一括して後述する。



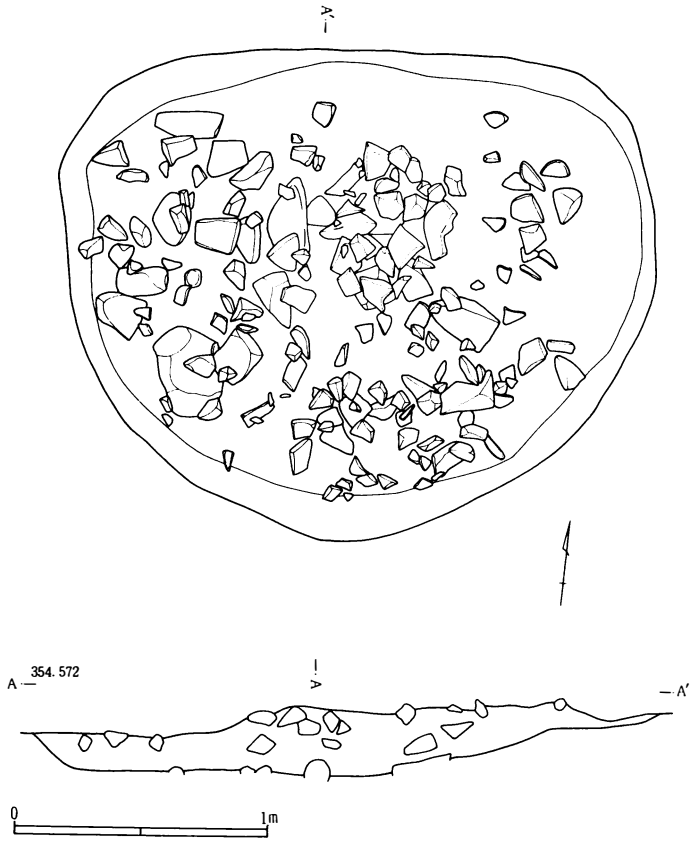
第5図　村上遺跡1号住居址

1号集石遺構（第6図）

A地区1号住居址中央部のほぼ直上に位置する。集石は、南北1ｍ90㎝、東西2ｍ30㎝を測り、楕円形プランを呈する。集石の掘り込みの深さは確認面より約20㎝を測り、基底は住居址炉石の上面と接する。礫の大きさは、拳大から人頭大の角礫がほとんどである。

1号住居址及び1号集石内出土遺物（第7～10図）

1～6は、深鉢形土器の把手部破片である。3・4は、口縁部側面にみみづく状の把手をつけ、口縁部に無文帯を残すもので、胴上部は3では縄文、4では沈線が施される。5は器内側に顔面把手をもち、外面にはみみづく状把手が縦に2つ連なり、その上部は断面がくちばし状を呈する。顔面はその断面が半球状に突出し、そこにつりあがった両目と丸い口を穿ち表現されている。顔面以外の部分には、三叉文や刻みをもつ隆帯などが多く施文される。胴部以下を欠くが基本的な器形は、口縁部が内湾し、胴部中位がくびれソロバン玉底を有する深鉢と考えられる。胎土は長石粒を多く含み、色調は茶褐色を呈する。外面に比べ内面顔面部の風化が著しい。6は、5よりやや大型の把手で、内側はみみづく状を呈する。5と同様玉抱き三叉文や鋸歯状文を刻んだ隆帯、うずまき文を多用する。色調は淡褐色。7は、胴部が樽状を呈する深鉢胴

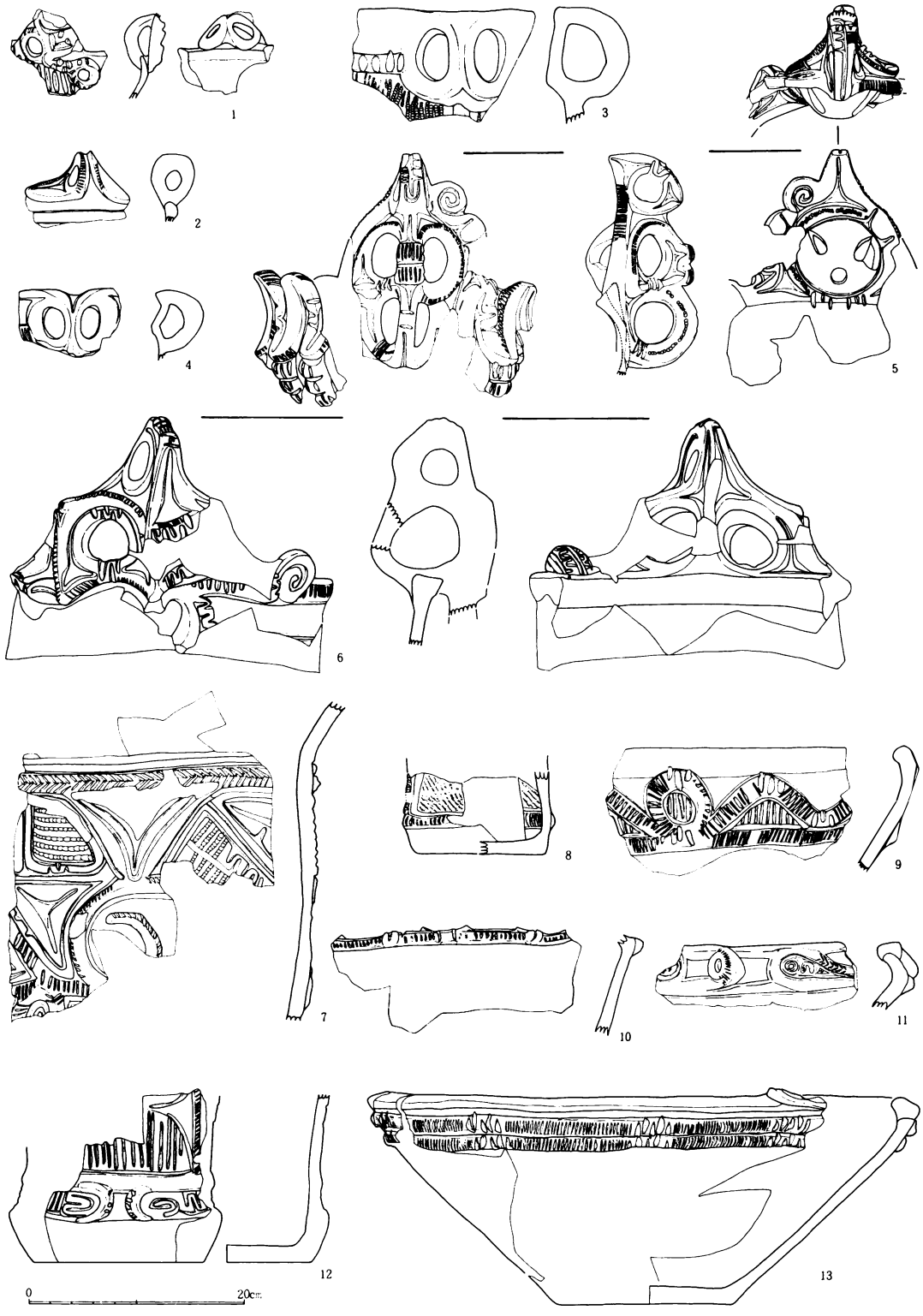


第6図　村上遺跡1号集石遺構

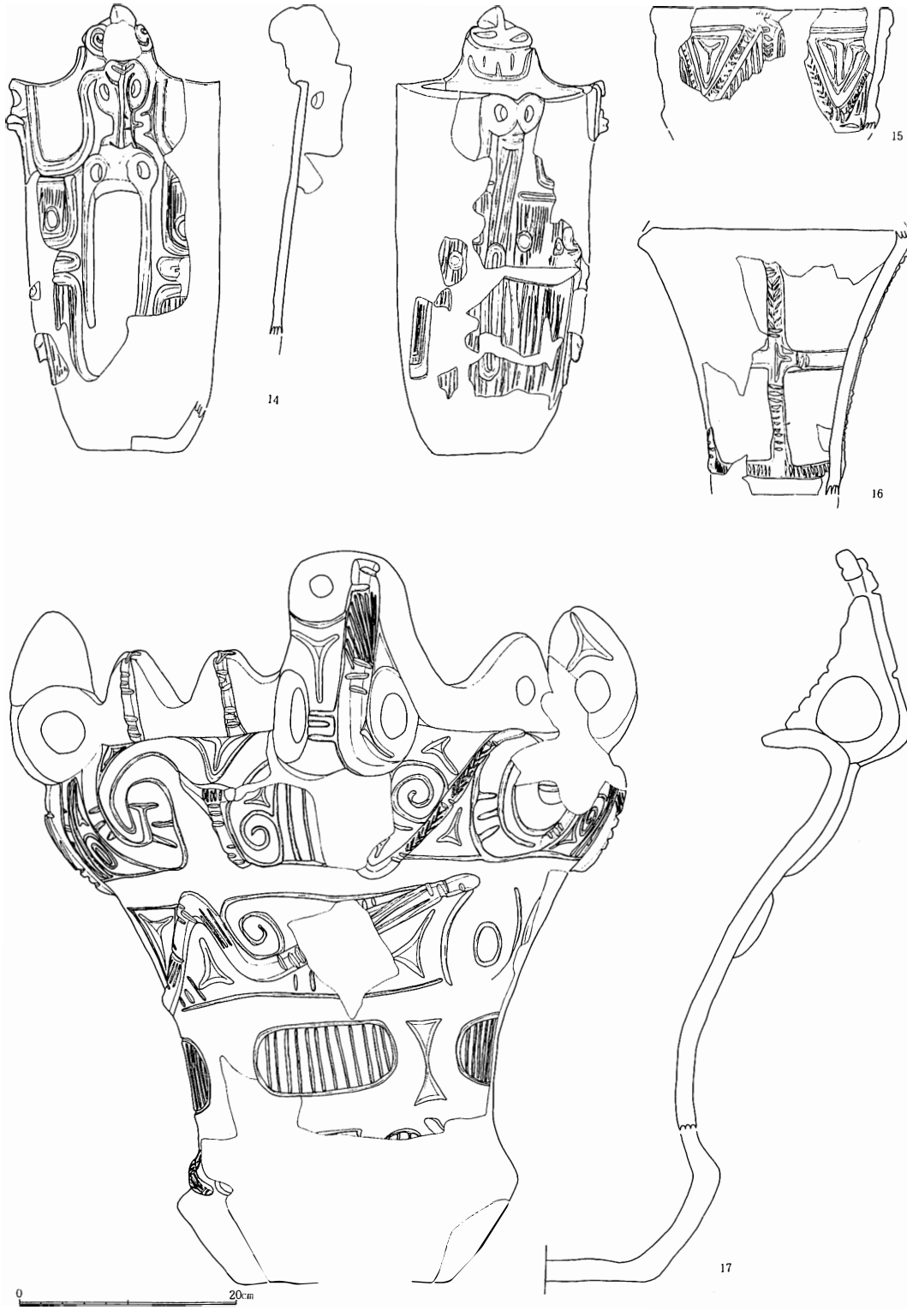
部破片である。口縁部は無文で、やや外反する。胴部文様は、隆帯による区画文の中をさらに沈線で区画し、内部を三叉文や棒状工具の押引文で充填している。胎土は石英、長石などの砂粒を多く含み、色調は橙褐色および暗褐色を呈する。8・10・12は、屈折底をもつ土器の破片資料である。9・11・13は、浅鉢形土器で、口縁部が内湾する点が共通する。9は、口縁部文様帯に隆帯によって三角形と逆三角形の区画文を作り、三角形区画内に縦位の平行沈線、上部区画内にドーナッツ状文様を施す。11は、口縁部に2本の平行する隆帯を巡らし、その内部に楕円形区画を作り出す。13は、刻目をもつ隆帯を2本口縁部に巡らしている。14は、口縁部に獣面把手をもつ円筒形の深鉢形土器で、獣面把手と口縁側面につけられたみみづく状把手により文様帯が4分割される。把手下部には懸垂文が垂下し、把手間の口縁部にはU字状隆帯区画がなされる。胴部はヘラ状工具による条線を地文とし、胴上部の一部分にドーナッツ状の沈線文を施す。胎土には金雲母、石英粒が多く含まれ、色調は淡褐色から橙褐色を示す。15は、円筒状の深鉢口縁部である。胴上部に三角形と逆三角形を組みあわせた区画帯をもち、内部を三叉文、沈線文で埋めている。16は、胴部が外反し、口縁部が内屈する深鉢で胴下部を欠損する。胴部には隆帯が縦横に交叉する。17は、屈折底を有するキャリパー形の大型深鉢形土器で、器高67㎝、最大径57㎝を測る。口縁上部に大小の山形把手とみみづく状把手をつけ装飾的効果が強い。口縁部から胴下部の屈曲まで4段の文様帯が認められ、沈線による玉抱き三叉文、楕円区画文、渦巻文などがモチーフとして多用される。

以上の土器群は、縄文時代中期中葉の井戸尻Ⅲ式に比定される。

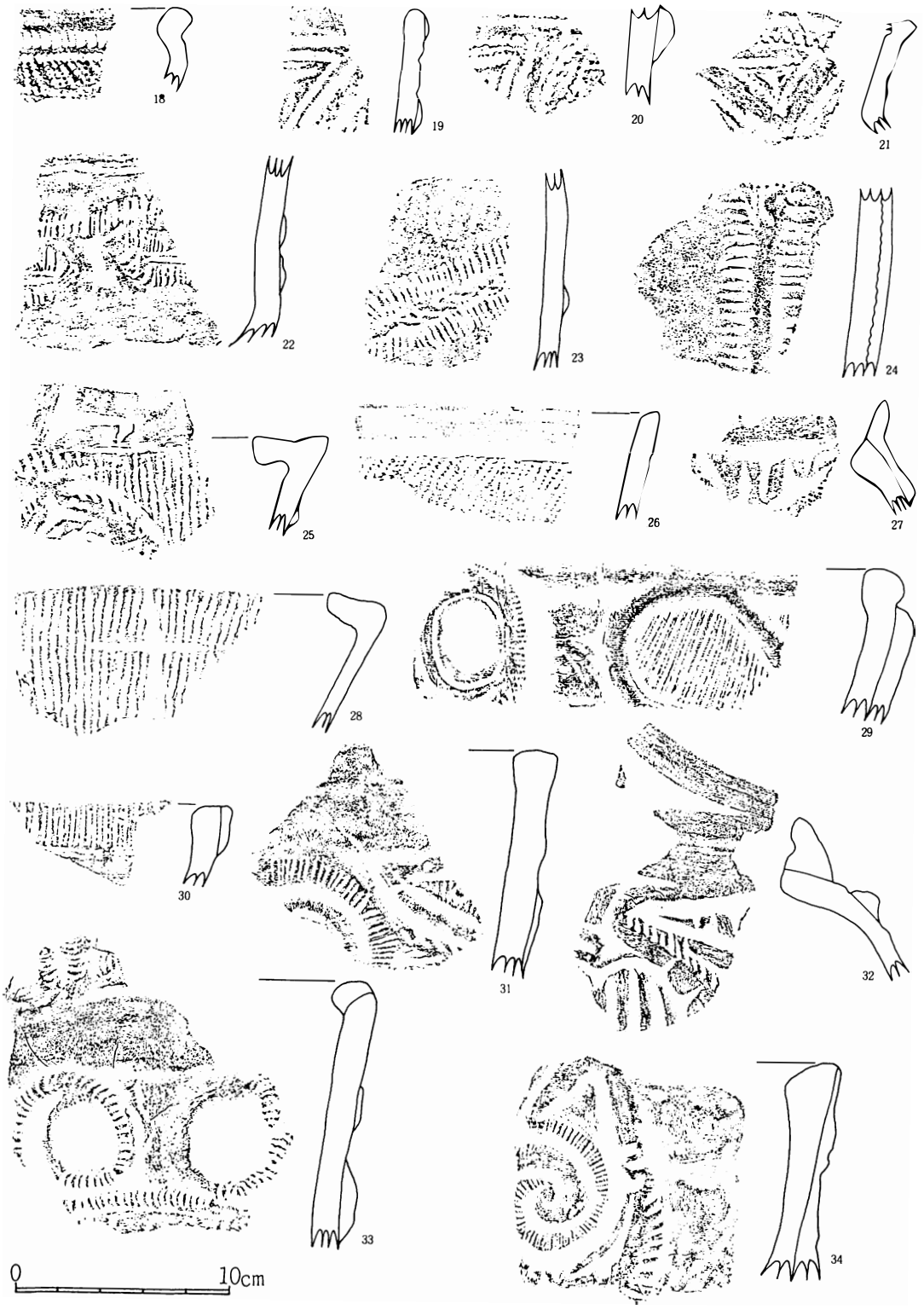
拓本資料では、18・20・21が区画文の内部を半截竹管による押引文で充填し、新道式の特徴を示す。22～24は、楕円区画と所謂キャタピラ文などを施す胴部破片で、藤内式に対比される。19および25～46は、実測資料と同時期の土器と考えられる。47・48は、地文の条線や隆帯による渦巻文など曽利Ⅰ～Ⅱ式に特徴的な文様を施している。



第７図　村上遺跡１号住居址及び１号集石内出土土器



第８図　村上遺跡１号住居址及び１号集石内出土土器



第９図　村上遺跡１号住居址及び１号集石内出土土器

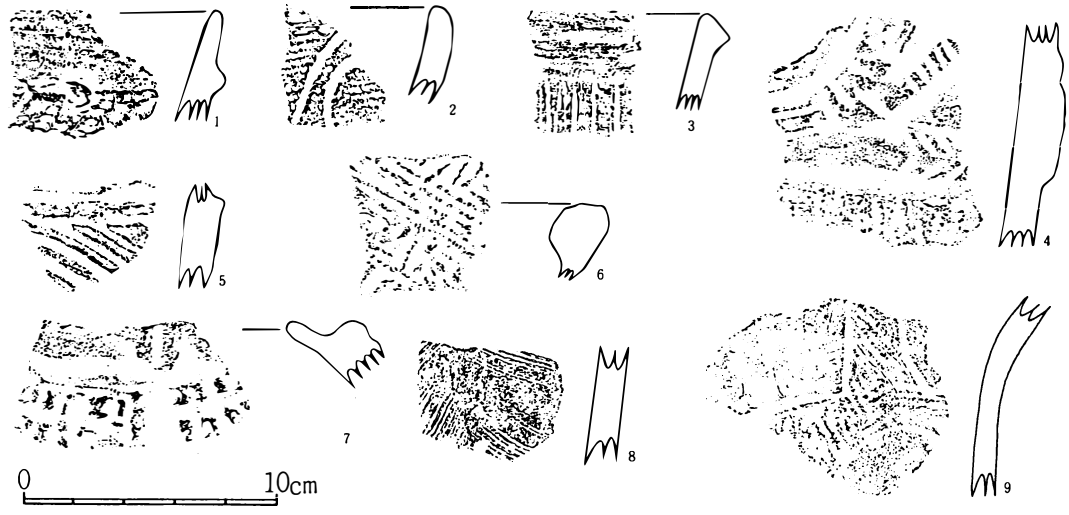
第10図　村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器

(2) 遺構外出土遺物

B地区試掘坑内出土土器

1は、深鉢口縁部破片で、口縁部無文帯下に低い隆帯を巡らし、胴部に縄文を施す。2は、竹管背部による沈線文とRL縄文を縦方向に施文する。3は、口縁直下に断面三角形の隆帯を巡らし、下部に縦位の条線文をもつ。4は、胴部破片で、上部を刻目をもつ幅広の隆帯文、下部に縄文を施す。6は、斜状沈線に直交する隆帯によって格子状文を施した口縁部破片である。7は、口縁部が内側に屈折する深鉢口縁で隆帯による文様をもつ。8は、クシ状工具による「ハ」の字状の文様を施した胴部破片である。9は、沈線による区画内を縄文で埋めている。

B地区から出土した土器は、遺構に伴なわず、試掘坑内出土のものである。出土資料はいずれも縄文土器であるが、その時期は中期中葉から後期前半におよぶ。4・7は井戸尻式、1・2・6は曽利式、9は称名寺式、8は堀之内式に各々比定されよう。



第11図　村上遺跡B地区出土土器

第3節　まとめ

今回本遺跡の発掘調査で明らかにされた遺構は、縄文時代中期中葉の住居址1軒と集石遺構1基であった。遺構の発見されたA地区は、1976年に発掘調査された地域のすぐ南に位置し、同一地番内に所在している。かっての付近の分布調査では、扇状地上の南北200 m、東西150 mほどの区域に縄文時代中期の土器片が多く採集され、この地域に該期の集落が存在したことが推定されている。今回調査された住居址は、その集落を構成する1軒と考えられ、集落址の中でも北側に位置するものと推定される。

遺物は、1号住居址及び1号集石出土の土器が井戸尻Ⅲ式期の資料で、一の沢遺跡、上野原遺跡などとともに該期の良好なセット資料と言える。

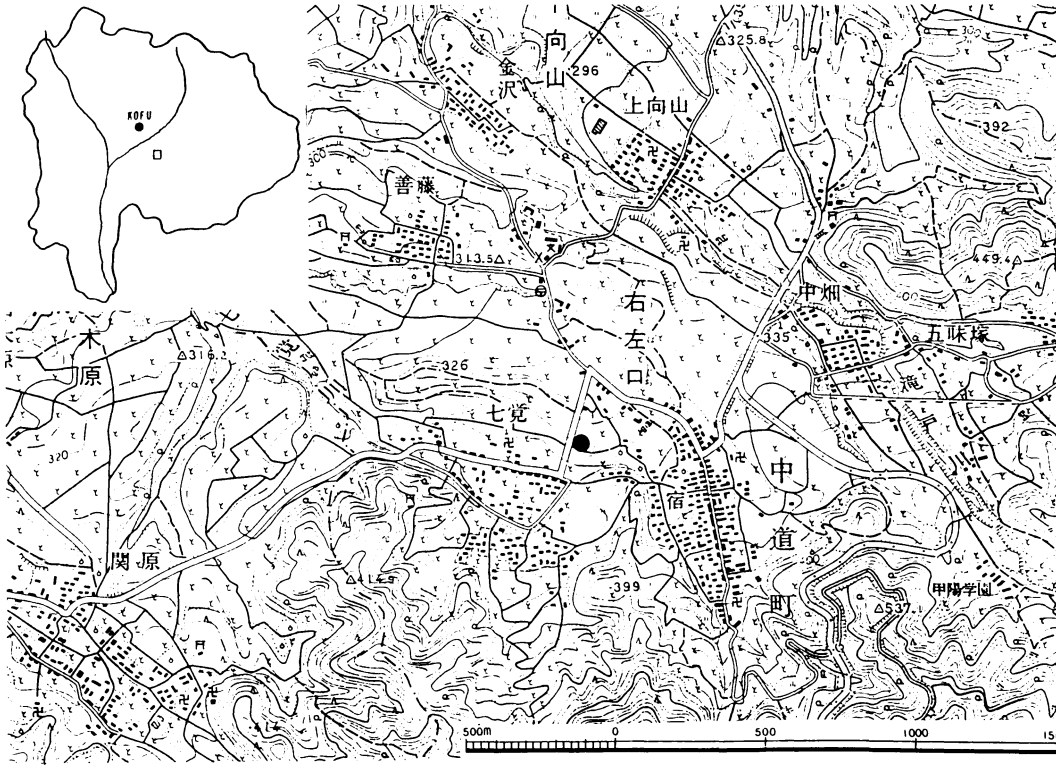
第Ⅲ章　後呂遺跡

第１節　遺跡の位置と周辺の環境

後呂遺跡は、東八代郡中道町右左口字郷戸および後呂地内に所在する。村上遺跡の西方１km の曽根丘陵上に位置し、標高 320 m 前後を測る。遺跡周辺は、西側に七覚西川、北側に宮沢川、南側に七覚川が開析するため東西に長い台地をなし、その東端部に発掘調査対象地域が存在する。

遺跡をのせる台地上には、左エ門塚、右エ門塚などの古墳や供養寺遺跡が存在する。宮沢川対岸には上野原遺跡、城越遺跡など縄文時代の集落跡が知られる一方、遺跡南側の山腹には仏具山遺跡、前田原遺跡など弥生～古墳時代の遺跡も確認されている。また、付近には七覚山円楽寺があり、現在の五社神社裏手の山頂に当寺に伴なう行者堂跡が残されている。円楽寺は、『甲斐国志』などから廻国納経所であったことが知られているが、寺に伝わる六角宝幢式経筒や五輪塔形泥塔は、その記述を裏づけするものとして注目される。遺跡の所在する右左口は、近世においては中道往環の宿駅が置かれていたが、それ以前より甲斐と駿河を結ぶ経済的、軍事的要衝であったことが窺える。

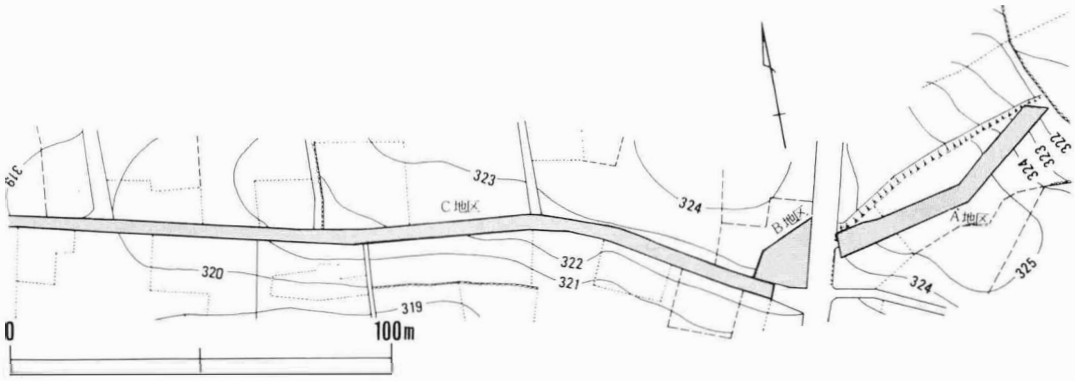
参考文献



第12図　後呂遺跡位置図

山梨県教育委員会　『昭和52年度（笛吹川沿岸土地改良事業地内）埋蔵文化財分布調査報告告書』1978
磯貝正義ほか　『角川日本地名大辞典19　山梨県』1984　角川書店
田代孝「七覚山円楽寺の経筒と泥塔について」　『考古学ジャーナル』1985　1月号

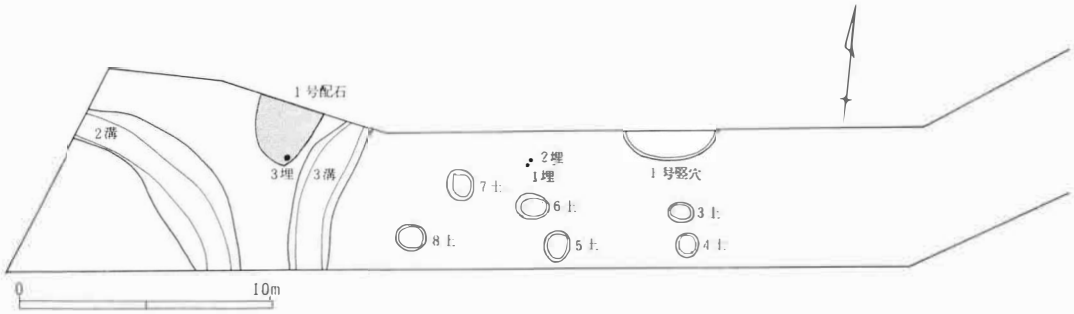
第2節　遺構と遺物



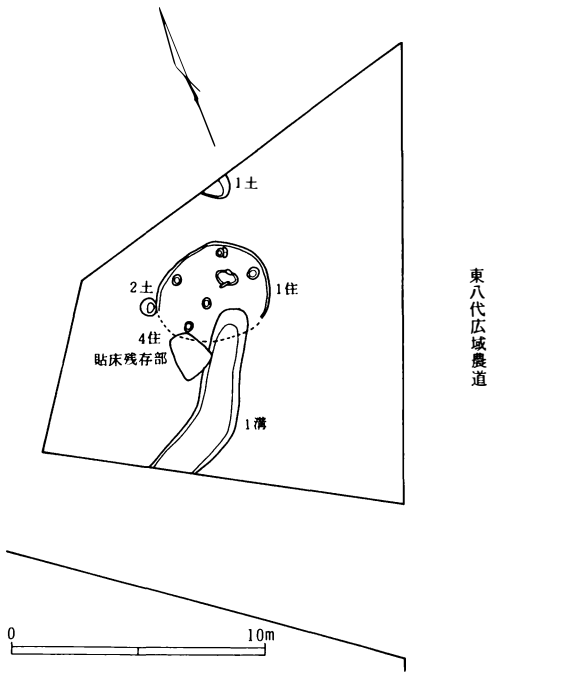
第13図　後呂遺跡調査区域図

本遺跡の調査区域は、東西長さ280 mに及ぶため便宜的にA・B・C地区に区分し、全面調査を行った（第13図）。

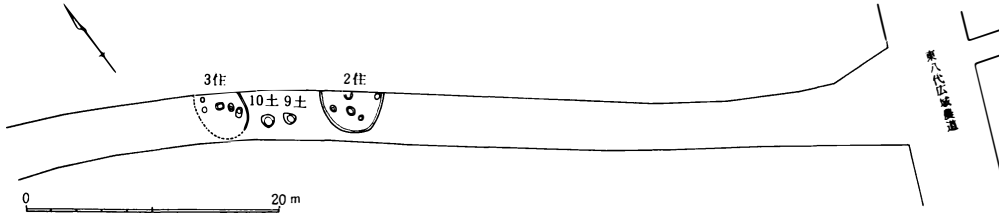
最も東方に位置するA地区は、台地東端にあたり、東側が谷へ向かって下る斜面となる。そのため、遺構が検出されたのはA地区でも西側平坦面で、縄文時代の配石遺構1基、屋外埋甕3基、土坑6基、古墳時代初頭と考えられる溝状遺構2本、時期不明の竪穴状遺構1基が確認されている（第14図）。B地区では、縄文時代の住居址1軒、土坑2基、古墳時代初頭の住居址1軒、溝状遺構1本が検出された（第15図）。C地区は、現在使用されている道路の下面を1mほど掘り下げ遺構確認面とした結果、縄文時代の住居址2軒、土坑2基が発見された（第16図）。



第14図　後呂遺跡A地区遺構配置図



第15図
後呂遺跡B地区遺構配置図



第16図　後呂遺跡C地区遺構配置図

(1)　遺構と出土遺物

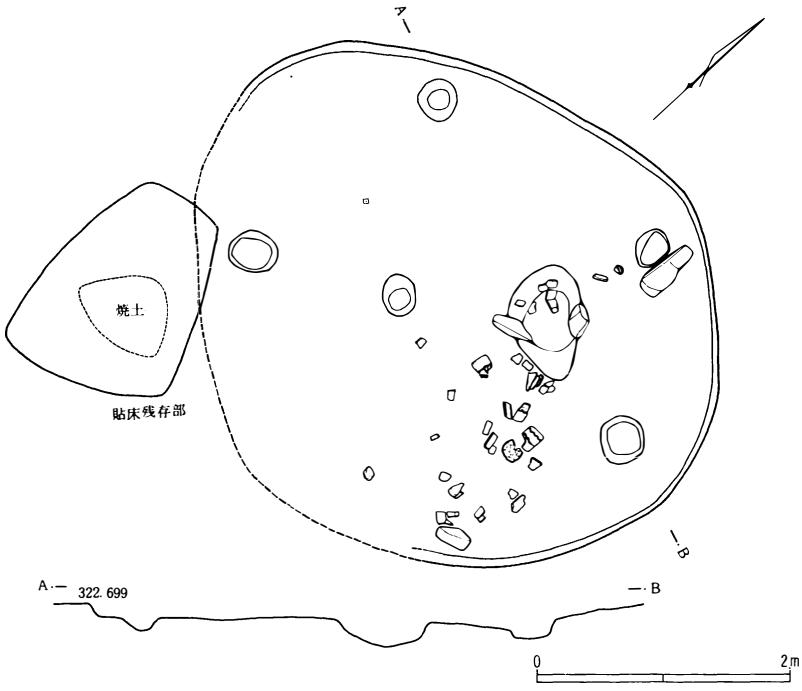
住 居 址

1号住居址（第17図）

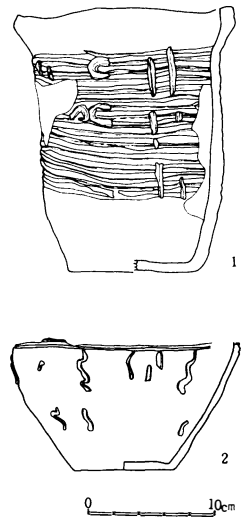
B地区中央部に位置する。住居址南側を1号溝および4号住居址によって破壊されているため全体の平面形は不明であるが、長径4.2 m、短径3.8 mほどの楕円形を呈するものと推定される。柱穴は5本検出され、壁から30cm～40cmほど内側をめぐる。柱穴径は30cm～40cmで床面からの深さは10cm～30cmを測る。炉は石囲い炉で、住居址北東寄りに設置されるが、炉石は2個を残して他はぬきとられている。

出土遺物（第18図、第19図、第50図）

1は、円筒形の深鉢で口縁部がやや開く。口縁部を無文で残すが、胴部は横走する平行沈線の上部に隆帯による貼付文が残存する。底径10cm、高さ20.5cmを測る。2は、深鉢胴下半部で隆帯による懸垂文を残す。器壁は0.7cmほどで非常に薄い。3～5・7は縄文を地文とし、その上に隆帯貼付による懸垂文、渦巻文を施すもので、3・4・7が深鉢、5が浅鉢胴部破片と



第17図　後呂遺跡１号・４号住居址



第18図
後呂遺跡
１号住居址出土土器

第19図　後呂遺跡１号住居址出土土器

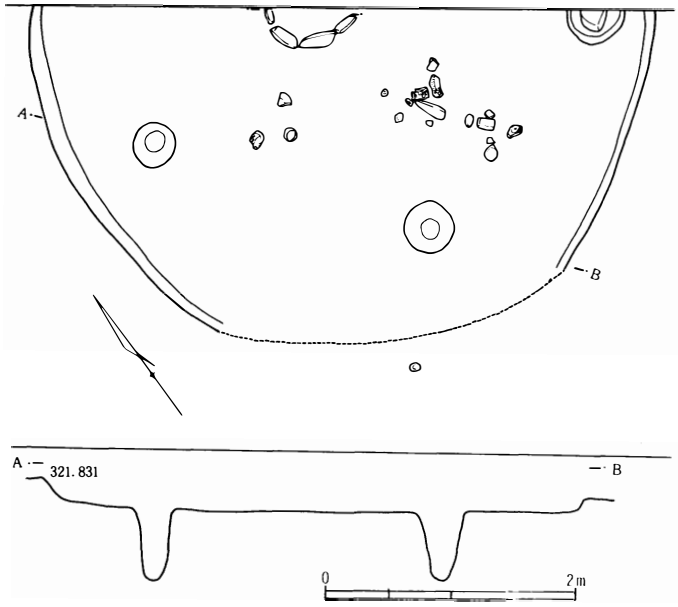
推定される。6は深鉢口縁部破片で、口辺に渦巻状の突起と棒状工具による列点文をもち、胴部に縄文と沈線文を施す。

石器は、凹石1点のみが出土した（第50図－1）。

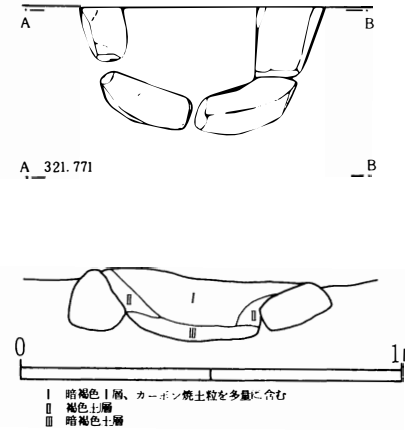
本住居址出土土器は、縄文時代中期後葉の曽利Ⅱ式期のものと考えられる。

2号住居址（第20、21図）

C地区東端から40ｍほど西側に位置する。調査区域の関係で住居南半分が調査された。形状は、直径4.9ｍのほぼ円形を呈すると考えられる。壁高は確認面から20㎝ほどで、南壁部分は撹乱を受けている。検出された3本のピットは、径40㎝ほどの円形を呈し、床面からの深さ約60㎝を測る。炉は石囲い炉で、住居中央やや西寄りに設置される。炉石は、長さ30㎝、幅15㎝ほどの自然礫を利用している（第21図）。遺物は、床面直上のものと床面よりやや浮いて出土するものがある。



第20図　後呂遺跡2号住居址



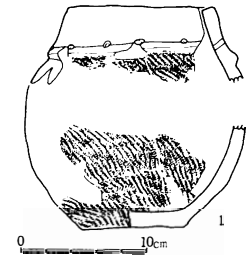
第21図　後呂遺跡2号住居址炉址

出土遺物（第22図、23図、50図）

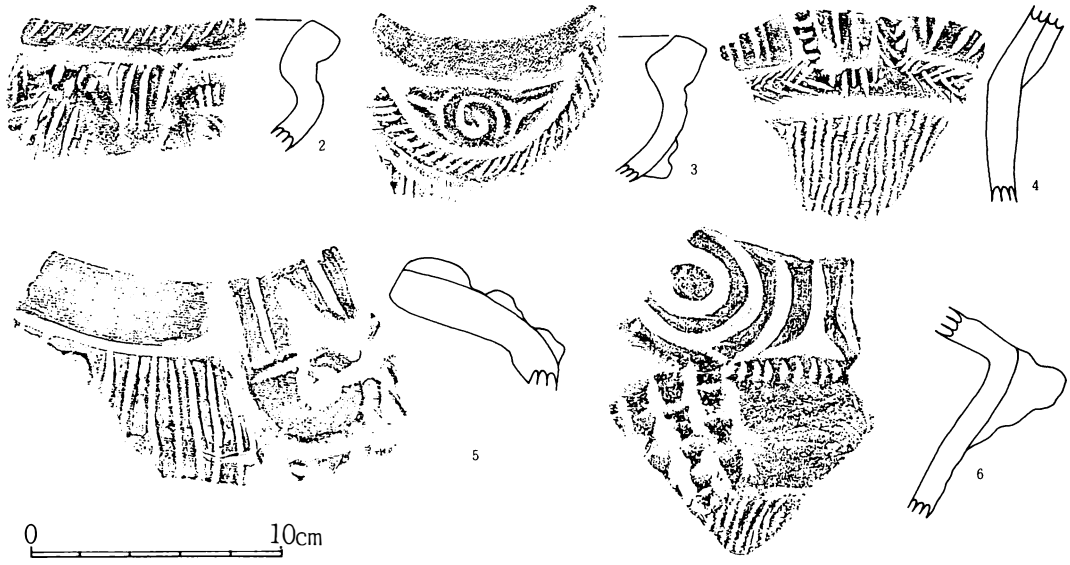
本住居址から出土した遺物は、縄文土器と石器がある。

1は、口径11.5㎝、底径8㎝、高さ17.5㎝の樽形有孔鍔付土器である。口縁部を無文で残し、鍔下の胴部全体に縄文を施している。鍔上部の円孔は、器壁を貫通し斜めに穿たれる。2～6は、深鉢口縁部および胴部破片である。口縁部から胴上部は平行沈線や三叉状沈線と有刻の隆帯を用いた文様が多く、下部には縄文が施される。

石器は、磨石1点と凹石1点がある（第50図－2・3）。凹石は、両面に凹部をもつ。磨石は半壊するが、周囲5面に磨痕が認められる。



第22図
後呂遺跡
2号住居址出土土器



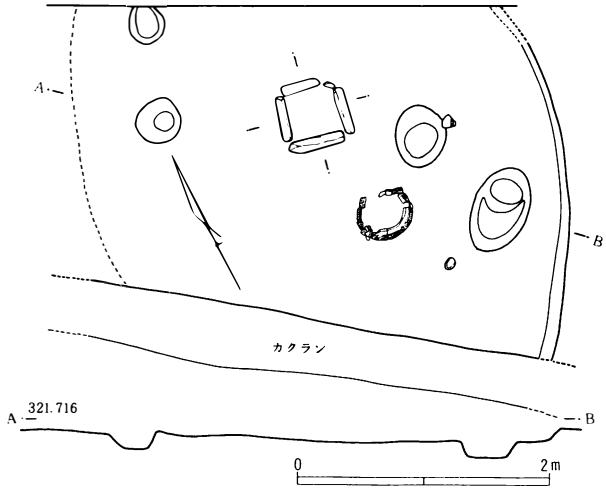
第23図　後呂遺跡２号住居址出土土器

石材は、安山岩製である。

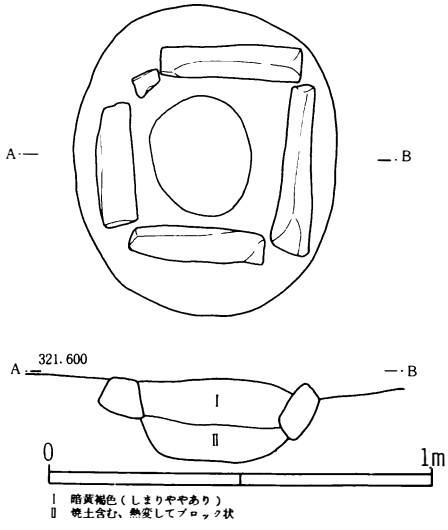
以上の出土遺物から本住居址は、縄文時代中期中葉井戸尻Ⅲ式期に位置づけられる。

３号住居址（第24、25図）

２号住居址の西６ｍに位置する。炉址、柱穴および東壁が確認されたが、全体のプランは不明である。壁は、東側の一部で10㎝ほどの立ち上りを確認できたが、南側は溝状の撹乱によって破壊され、西側は削平されていた。ピットは、径30～40㎝ほどの円形乃至楕円形を呈し、床面からの深さは15㎝を測る。炉址は石囲い炉で、長さ30㎝ほどの細長い自然石を四角形に配する。遺物は、床面よりやや上部で出土している。



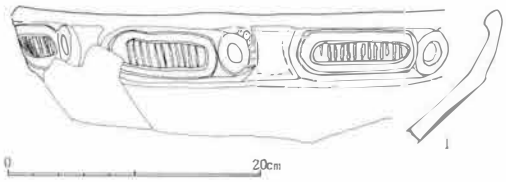
第24図　後呂遺跡３号住居址



第25図　後呂遺跡３号住居址炉址

出土土器（第26、27図）

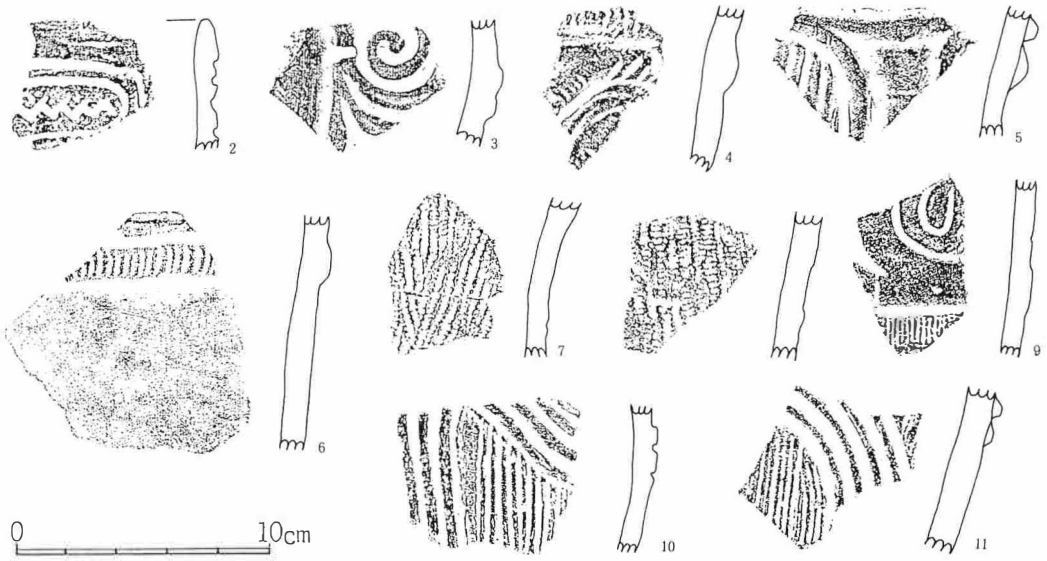
1は、浅鉢形土器上半で口径39cmを測る。口縁部に低い隆帯による楕円区画文をもち、その内部を平行沈線で埋めている。胴部は無文。色調は淡褐色で、焼成は良好である。2は、深鉢口縁部破片で、竹管背部の押引により楕円区画し、内部にジグザグの押引文を施す。3は、渦巻状沈線と三叉文をもつ深鉢胴部片である。5は、隆帯による楕円区画内を縦位の平行沈線で埋める。10・11は、細い半截竹管による条線を地文とし、太目の半截竹管による大柄渦巻文を施す。



第26図　後呂遺跡3号住居址出土土器

以上の出土土器の内、2は狢沢式、1・3～9は井戸尻式、10・11は曽利式に比定される。

本住居址は、出土土器や炉址の形態的特徴から縄文時代中期中葉の井戸尻式期に対比されるものと考えられる。



第27図　後呂遺跡3号住居址出土土器

4号住居址（第17図）

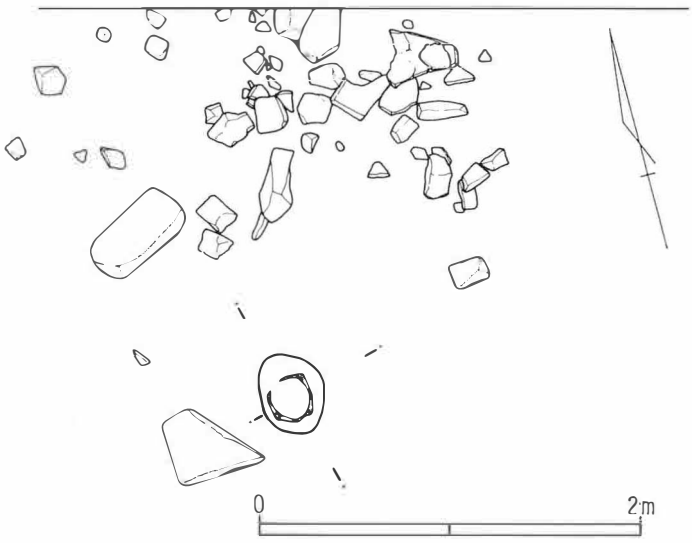
B地区1号住居址の南に位置するが、ほとんど削平されており、床面が2m×1mほどの範囲で残されているのみであった。床は貼床で非常に堅緻にしまっている。床面直上に焼土が検出されたが、伴出遺物はない。遺構の残存状況から1号溝埋没後に構築された竪穴式住居と考えられるが、正確な時期については不明である。床面直上の焼土が炉に関するものとすると、かまど導入以前の古墳時代前半の住居と推定される。

配石遺構

1号配石遺構（第28図）

A地区西側2号溝と3号溝の間に位置する。拳大から人頭大の角礫が多く、まれに長さ50cmほ

どの扁平石を配するが、すでに撹乱を受けており全体の形状は不明確である。下部遺構は検出されなかったが、付近に3号埋甕が埋設されており、何らかの関係のある施設であったことも考えられる。配石間から土器が出土している。



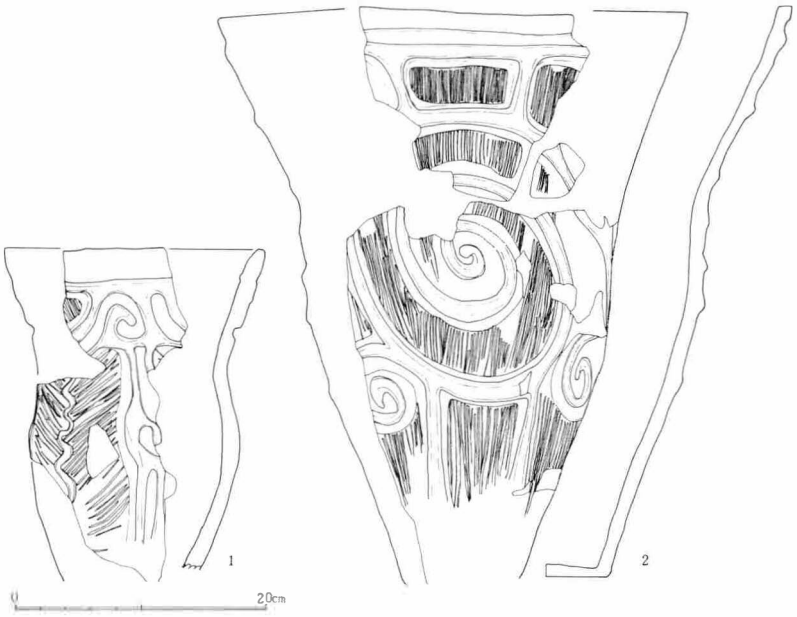
第28図　後呂遺跡1号配石遺構、3号埋甕

出土遺物（第29、30図）

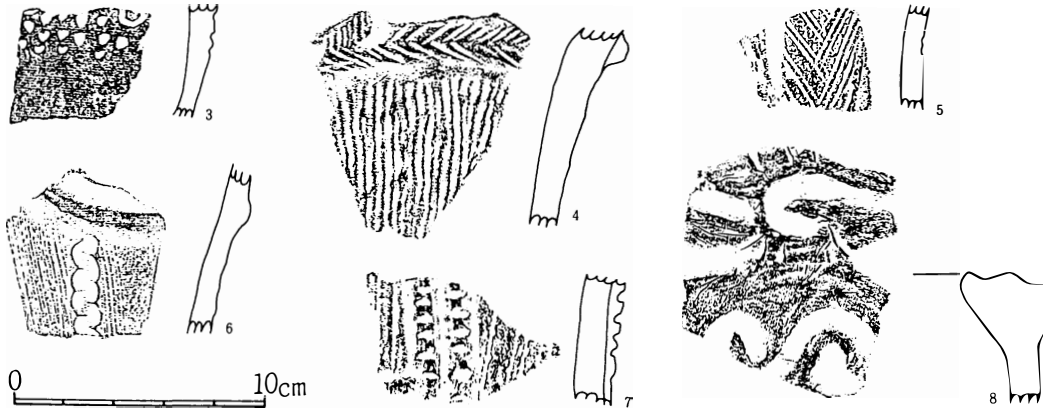
1は、胴上部がゆるやかにくびれる深鉢形土器で、口径約20㎝、現存高26㎝を測る。口縁直下は無文であるが、その下部に沈線による横S字文、胴部に蛇行懸垂文と綾杉状条線文を施す。2は、大型の深鉢形土器で、口径約37㎝、器高45㎝を測る。地文に条線文をもち、胴部には低い隆帯による大柄渦巻文が施される。色調は暗褐色。1・2の文様と同様の特徴を有する破片には、5・6・8がある。4は深鉢胴部破片と考えられ、「ハ」の字状の刻みをもつ隆帯が横走し、その下部に縄文が施される。7はやはり深鉢胴部破片であろうが有刻の隆帯が垂下し、地文に条線をもつ。

以上の出土土器のの内、4は井戸尻式、7は曽利Ⅰ～Ⅱ式、1・2・5・6・8は曽利Ⅳ式に比定される。

本遺構の帰属時期は、曽利Ⅳ式として捉えておく。



第29図　後呂遺跡1号配石出土土器

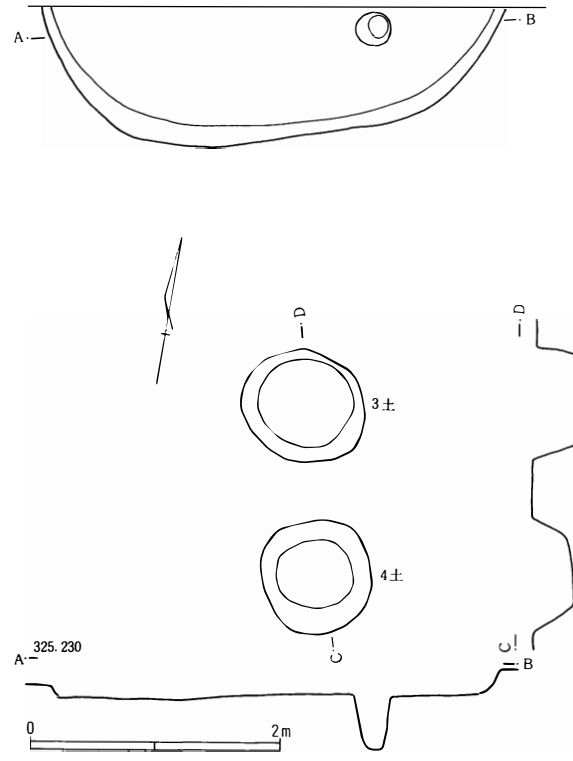


第30図　後呂遺跡１号配石出土土器

竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第31図）

Ａ地区平坦面の東側に位置し、３・４号土坑の北側にある。遺構の大半は調査区外へと伸びる。南側コーナーはやや隅丸状を呈し、幅３ｍ60㎝、壁高約20㎝を測る。床面はほぼ平坦で、遺構東側にピットが存在する。ピットの径は約27㎝の円形を呈し、深さ40㎝を測る。調査部分が少なく、本遺構が住居址であるか否か判断し難いため、ここでは竪穴状遺構として記録する。出土遺物はない。



第31図　後呂遺跡１号竪穴、３号・４号土坑

土坑

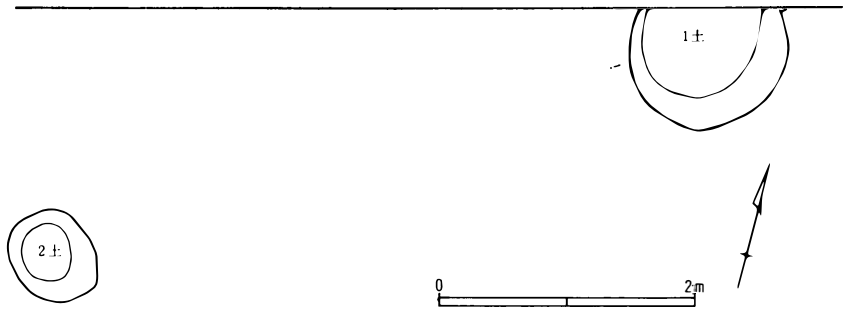
１号土坑（第32、33図）

Ｂ地区北側に位置し、土坑の北半分は調査区外へと伸びる。全体の形状は直径130㎝ほどの円形を呈するものと推定され、壁高は60㎝を測る。土坑壁の立ち上りはほぼ垂直で、坑内には長さ70㎝、幅20㎝ほどの自然石が斜めに落ち込む状態で出土している外、人頭大の自然石と土器が覆土中から検出された。

出土遺物

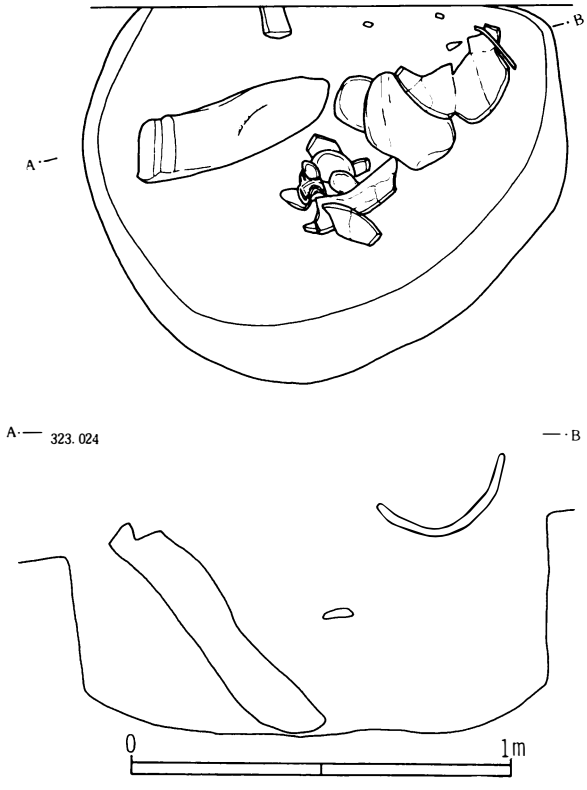
（第34図）

1は、口縁部と底部を欠損した浅鉢形土器で、胴上部最大径35㎝、現存高17㎝を測る。胴部全体に縄文が施される。2は、条線を地文とし隆帯による蛇行懸垂文をもつ深鉢胴部破片である。4は、沈線による蛇行懸垂文と綾杉状沈線文を有する。

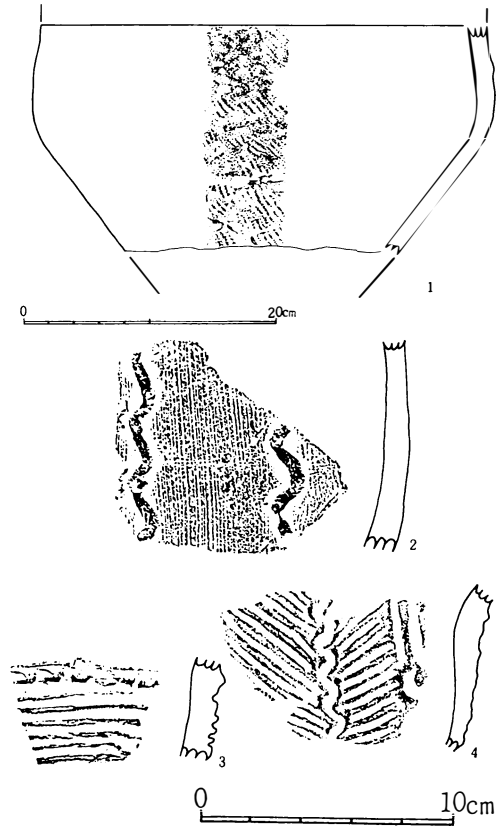


第32図　後呂遺跡1号・2号土坑

出土土器から本土坑は、縄文時代中期後葉の曽利Ⅱ～Ⅳ式期に比定される。



第33図　後呂遺跡1号土坑遺物出土状況



第34図　後呂遺跡1号土坑出土土器

2号土坑（第32図）

B地区1号住居址西側に位置する。長径75㎝、短径60㎝ほどの楕円形プランを呈し、深さ40㎝を測る。坑内からの出土遺物はない。

3号土坑（第31図）

A地区1号竪穴の南側に位置する。直径90㎝ほどの円形を呈し、壁高40㎝を測る。底部は平

底をなし、壁は斜めに立ち上る。坑内から完形の磨製石斧が1点出土しているが、伴出土器はない。

出土遺物（第50図7）

長さ17㎝、幅5㎝、厚さ3.5㎝を測る砂岩製の磨製石斧である。磨斧片面に黒色のタール状付着物があり、その残存状況から石斧の装着状態が推定できる。磨斧は縦斧で、柄に対して65度の角度で装着されたものであろう。

4号土坑（第31図）

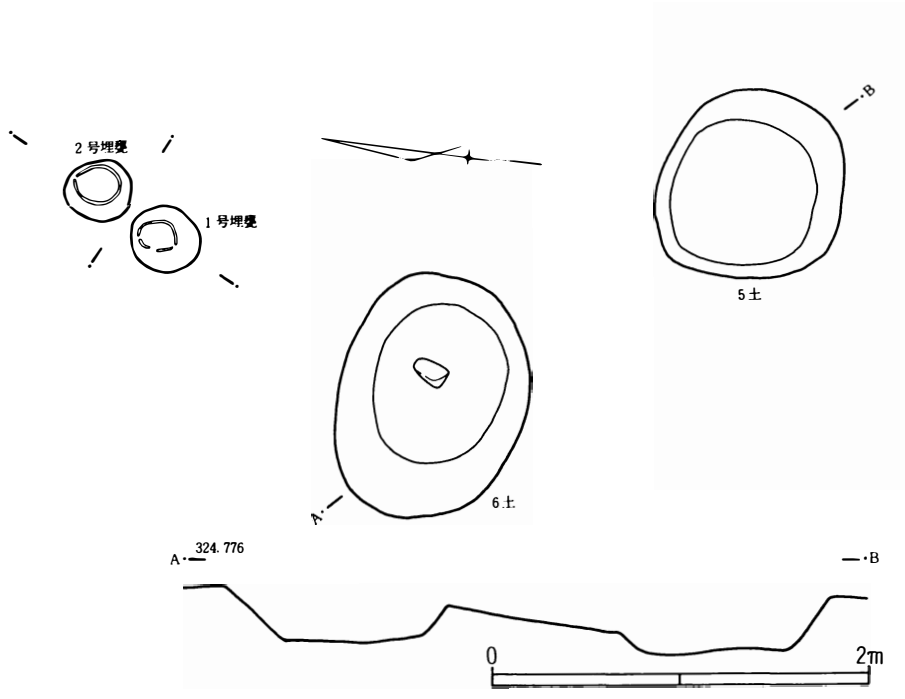
3号土坑の南側に位置する。土坑の形状は3号土坑に類似し、直径90㎝、深さ30㎝を測る。出土遺物はない。

5号土坑（第35図）

A地区1・2号埋甕の南側に位置する。本土坑は直径1mほどの円形を呈し、深さ約25㎝を測る。底部はほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上る。出土遺物はない。

6号土坑（第35図）

5号土坑の北側に位置する。長径1m30㎝、短径1mの東西に長い楕円形プランを呈し、壁高は最大部で30㎝を測る。坑内より自然石が1点出土した以外に遺物は認められない。



第35図　後呂遺跡5号・6号土坑

7号土坑（第36図）

A地区3号溝東側4mの地点に存在する。長径1m30㎝、短径1m10㎝ほどの楕円形を呈し、器高は約50㎝を測る。底部は平坦で、壁が斜めに広がりながら立ち上る。出土遺物はない。

8号土坑（第36図）

7号土坑より1m50㎝ほど南西に位置する。平面形は長径1m30㎝、短径1mほどの楕円形

を呈し、壁高は40㎝を測る。壁や底部の状況は7号土坑に類似する。出土遺物はない。

9号土坑

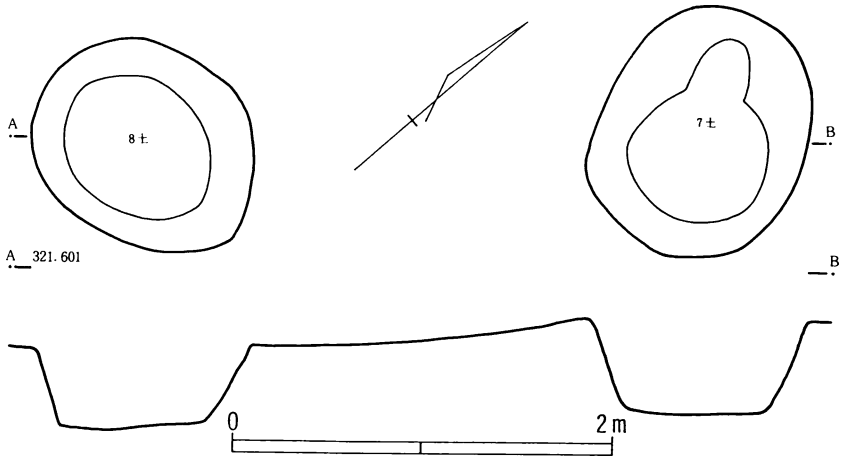
（37図）

10号土坑とともにC地区2号住居址と3号住居址の中間に位置する。長径95㎝、短径75㎝の楕円形を呈し、壁高は確認面より15㎝と浅い。坑内から拳大の自然礫と土器が出土している。

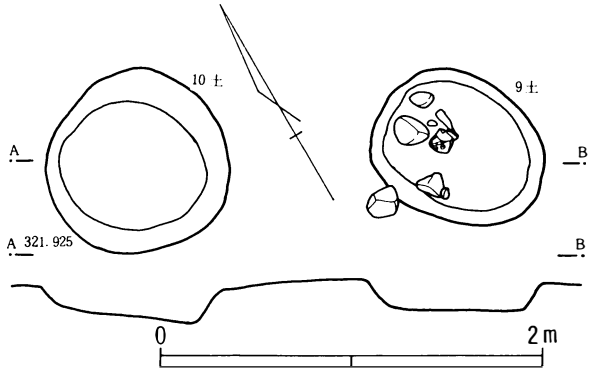
出土遺物（第38図1～3・5）

1は、深鉢口縁部である。口唇部が肥厚し口縁下に斜状沈線を充填した沈線区画文が施される。色調は茶褐色。2・3は沈線と鋸歯文をもつ深鉢胴部破片である。5は内部が空洞の把手で、内側にみみづく状の獣面を表現している。

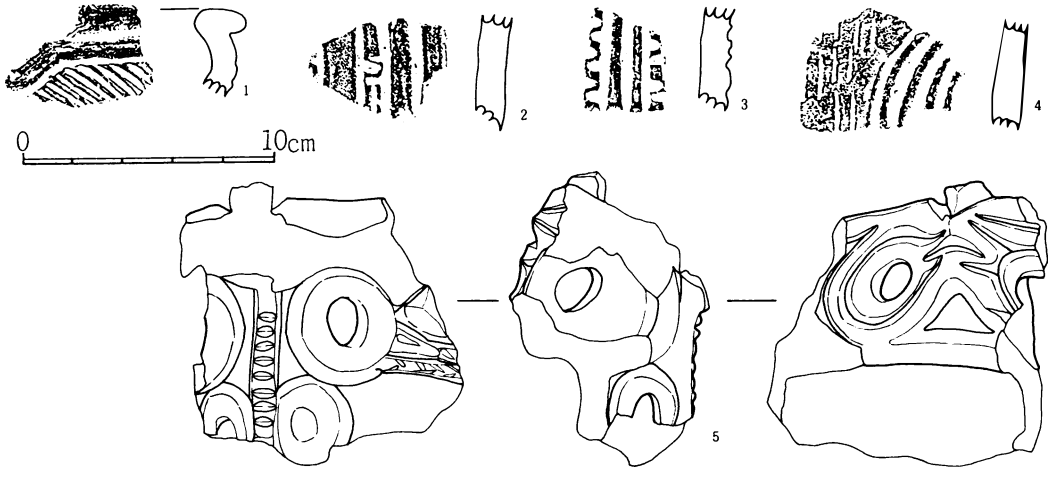
出土土器から本土坑は、縄文時代中期中葉の井戸尻式のものと判断される。



第36図　後呂遺跡7号・8号土坑



第37図　後呂遺跡9号・10号土坑



第38図　後呂遺跡9号・10号土坑出土土器

10号土坑（第37図）

直径1mほどの円形プランを呈し、壁高は最深部で20cmを測る。底部は土坑東側にやや傾斜する。

出土遺物（第38図4）

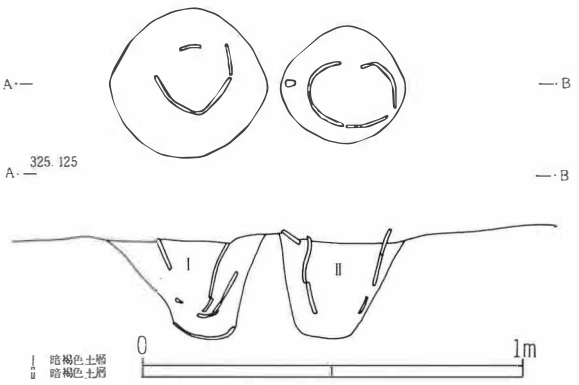
ヘラ状工具による列点状の沈線を地文とし半截竹管による渦文が認められる。色調は、淡褐色。縄文時代中期後葉曽利Ⅱ式に比定される。

以上10基の土坑の内、出土土器から帰属時期が判明するものは1・9・10号土坑の3基のみである。3号土坑については縄文時代の磨製石斧を出土しており、やはり縄文期の所産と考えられる。他の土坑については年代を知る手掛りを欠くが、堆積する覆土などは縄文時代の土坑と変わらず、それ以後に掘りこまれた溝状遺構の覆土などとは性質が一見して異なることから縄文時代の所産として捉えておきたい。

埋甕

1・2号埋甕（第39図）

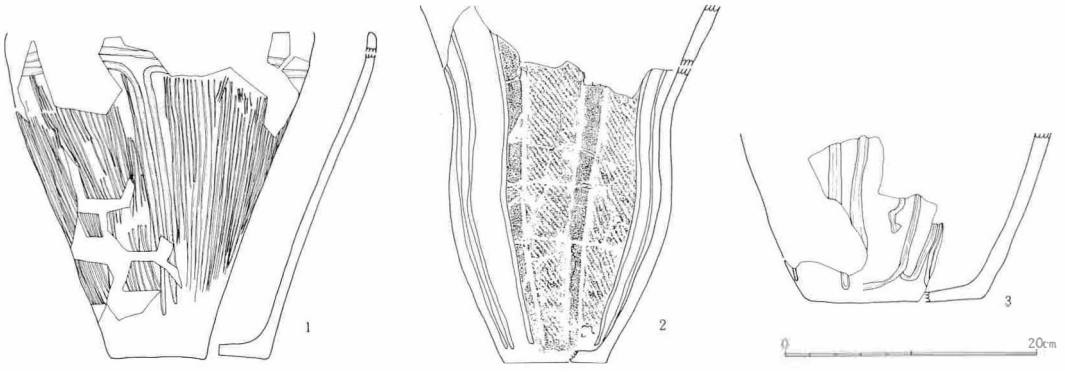
A地区平坦面のほぼ中央に位置し、6号土坑北側に2基併設されていた。1号埋甕は、第40図1と3の2点の土器が重なる状態で出土している。2号埋甕は、第40図2が正位に埋設されていた。埋甕の掘り方は直径70～80cmほどの円形を呈し、深さ25cmを測る。



第39図　後呂遺跡1号・2号埋甕

土器（第40図）

1は口縁部に向かって単純に開く深鉢で、口径25cm、底径7.5cm、高さ25cmを測る。口縁下に沈線が巡り、その下部に冂形の沈線区画を有する。区画内は縦位の条線が充填される。2は、キャリパー形の深鉢形土器で口縁部を欠損する。底径8cm、現存高29cmを測る。沈線により縦方向に区画し、その区画



第40図　後呂遺跡1号・2号埋甕内埋設土器

内を1つ置きに縄文施文を行う。3は、深鉢形土器胴下部で、底径9㎝を測る。上方から底部付近まで沈線による懸垂文が認められる。

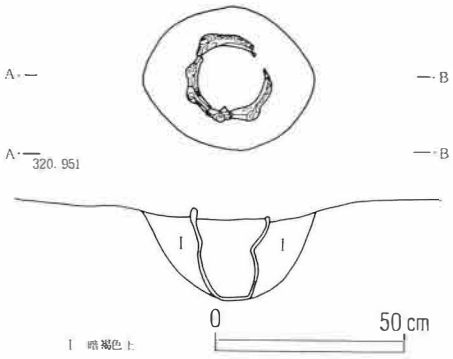
以上の埋設土器の内、1号埋甕とした1・3は曽利Ⅳ式に対比される。2号埋甕は、南関東地方の該期の土器に類似し、加曽利EⅢ～Ⅳ式に含まれるものと考えられる。

3号埋甕（第41図）

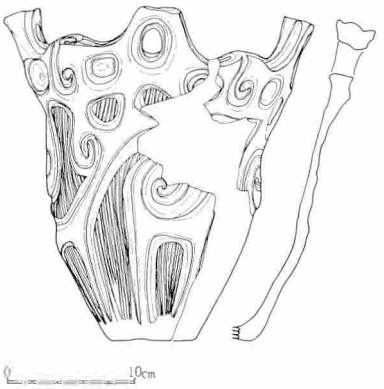
1号配石南側に位置する。埋甕の掘り方は直径90㎝ほどの円形を呈し、深さ約50㎝を測る。埋甕は、正位の状態で埋設されていた。

土器（第42図）

口縁部に4単位の山形突起を有する深鉢で口径24㎝、高さ26㎝を測る。口縁部が胴部と比べやや肥厚する。山形突起内には貫通孔を有し、口縁部は沈線による円文、渦文が施される。胴部は低突帯による大柄渦文をもち、地文に条線を施す。



第41図　後呂遺跡3号埋甕

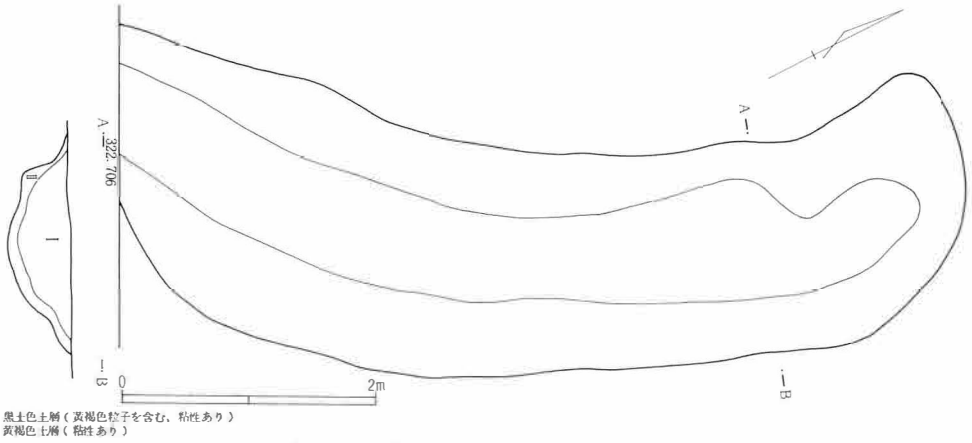


第42図　後呂遺跡3号埋甕内埋設土器

溝状遺構

1号溝（第43図）

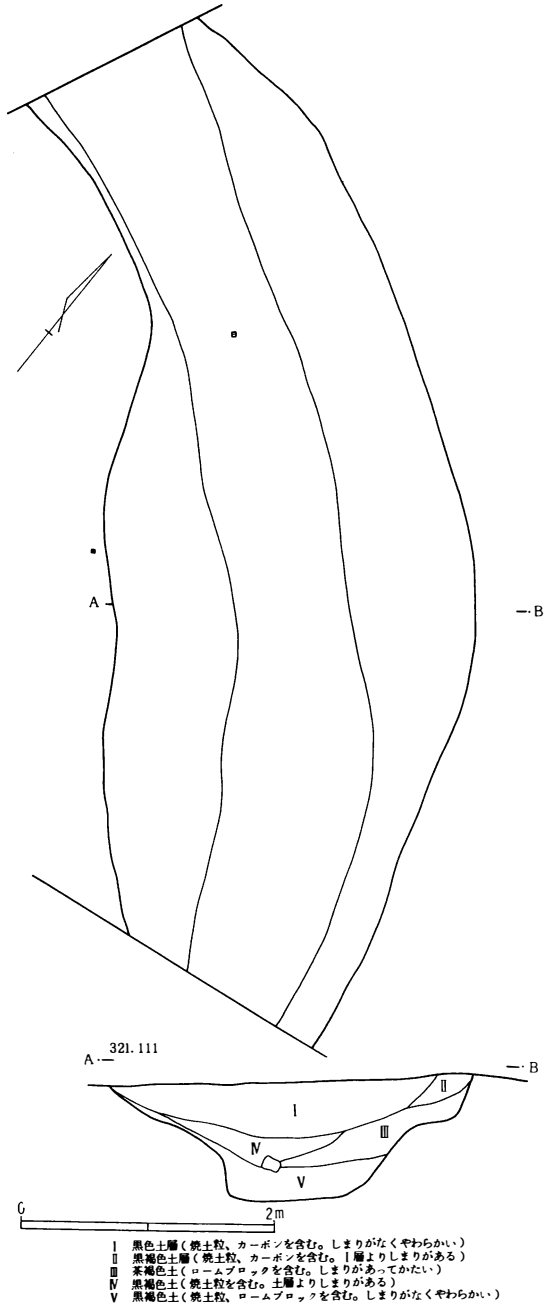
B地区中央部より南側に向かって伸びる。溝北端は1号住居址を切って掘り込まれる。溝の幅は1ｍ50㎝で弧状に走る。深さは50㎝ほどで、溝断面がU字形をなす。溝内の土層は2層に分けられるが、いずれも自然堆積によるものと考えられる。溝内から縄文土器の破片が数点出土しているが、覆土の状態などから3号溝と余り時間差をもたないものと思われる。古墳あるいは方形周溝墓等の周溝部の可能性もあるが、その性格については明確には判断し難い。



第43図　後呂遺跡1号溝状遺構

2号溝（第44図）

A地区西端に位置し、弧状を描く。溝の幅は最大部で3m、深さは約1mを測る。溝底部はほぼ平坦であるが、壁の立上りがテラス状に有段となる個所も存在する。出土遺物は覆土中から縄文土器数片が検出されているが、これらは溝の埋没時に混入したものと考えられる。本溝状遺構の構築年代は、1・3号溝とほぼ同時期のもので、1号溝同様古墳又は円形周溝墓の周溝の可能性もある。

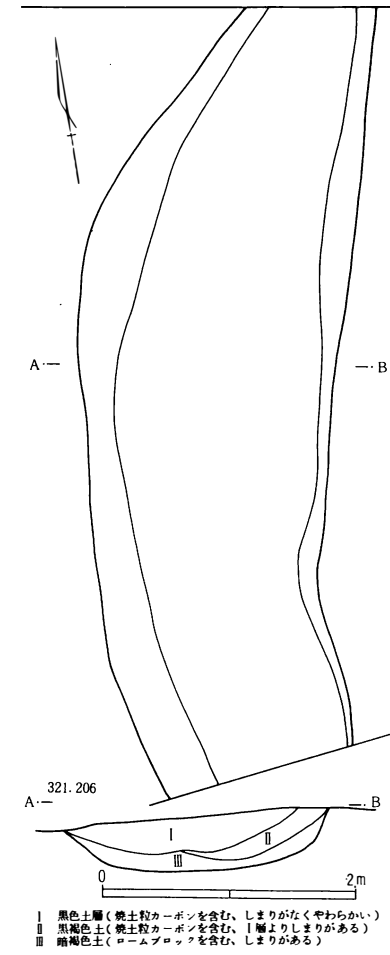


第44図　後呂遺跡2号溝状遺構

3号溝（第45図）

A地区2号溝東側に位置し、調査区をゆるやかに弧を描きながら横断する。溝幅約2m、深さ50cmを測り、壁はゆるやかに立ち上る。溝の堆積は自然堆積で3層に分けられる。

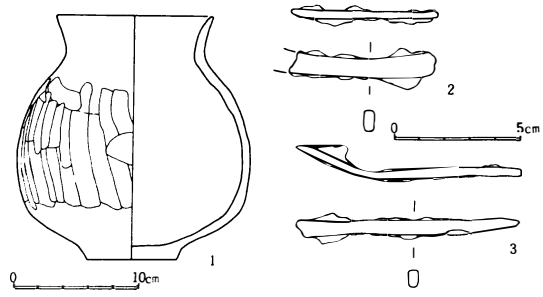
出土遺物（第46図）



第45図　後呂遺跡3号溝状遺構

広口壷形土器(1)と鉄器(2・3)が出土している。

広口壷は、胴下部が屈曲気味となるもので口径12㎝、最大径18㎝、器高19㎝を測る。胴部にヘラ削り痕、口縁部に横ナデ痕を明瞭に残し、色調は淡褐色を呈する。



第46図　後呂遺跡3号溝出土遺物

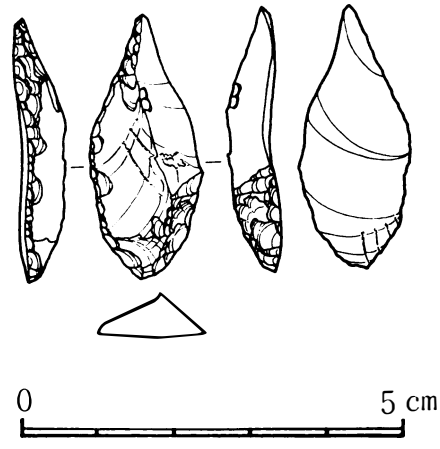
2は、現存長5.7㎝、幅0.8㎝、厚さ0.4㎝を測り、断面が四角形を呈する。3は、現存長8.7㎝、幅0.6㎝、厚さ0.4㎝を測り、断面が1と同様に四角形を呈する。一端が折れ曲がり湾曲している。2点の鉄器は、断面形などから鉄鏃の一部分と考えられる。

本溝状遺構は出土遺物から古墳時代初頭に比定される。

(2) 遺構外出土遺物

① 先土器時代

B地区より先土器時代の黒曜石製のナイフ形石器1点が出土している(第47図)。1側縁上部に素材の縁辺を残し、先端部と基部を斜めに断ち切り平行四辺形とする。左側縁部に浅い調整が連続し、特に基部は角度を変えてやや平坦な剥離をみせる。器長3.4㎝、器幅1.4㎝を測る茂呂型のナイフ形石器と考えられる。今回の調査では先土器時代の遺構、遺物確認のためA・B両地区に2×2mのグリッドを7ヶ所設定し精査したが、他に発見されなかった。



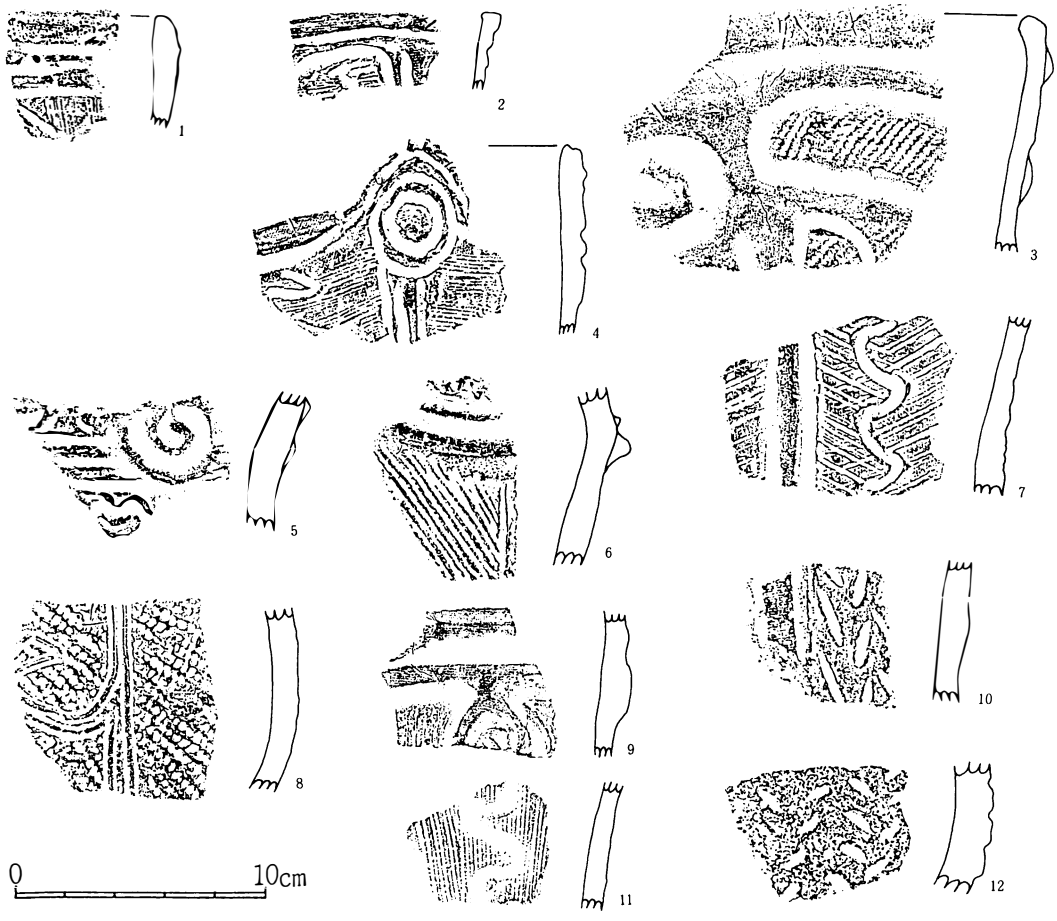
第47図　後呂遺跡遺構外出土ナイフ形石器

② 縄文時代

土器(第48図)

1は、深鉢口縁部破片である。口縁部に3本の平行線が横走し、クシ状工具による沈線文がその下部に施される。色調は暗褐色。2は、口縁に1条の沈線を巡らし、胴部の縦方向の沈線区画内に条線と蛇行懸垂文を充填する。3は、幅広の低隆帯により楕円区画や渦文を描き、区画内に縄文を施す深鉢形土器の破片で、色調は淡褐色、胎土は長石、石英粒を多量に含む。4は山形突起を有する深鉢形土器口縁部である。山形突起部には円文が表現され、胴部に櫛描沈線文が斜走し蛇行懸垂文が垂下する。色調は暗褐色。4に類似した文様をもつ土器に7・11などがある。6は隆帯による大柄渦文と半截竹管による斜走沈線をもつ。8は半截竹管による平行沈線と渦文を施し、地文に縄文をもつ深鉢胴部破片である。10・12は「ハ」の字文を施す。

以上の土器は、縄文時代中期後葉に含まれるが、さらに細分すると5が曽利Ⅰ～Ⅱ式、6・8が曽利Ⅱ式、1～4・7・9・11が曽利Ⅳ式、10・12が曽利Ⅴ式に比定される。



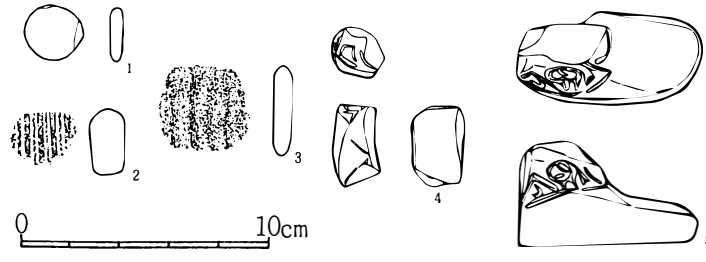
第48図　後呂遺跡遺構外出土土器

石器（第50図）

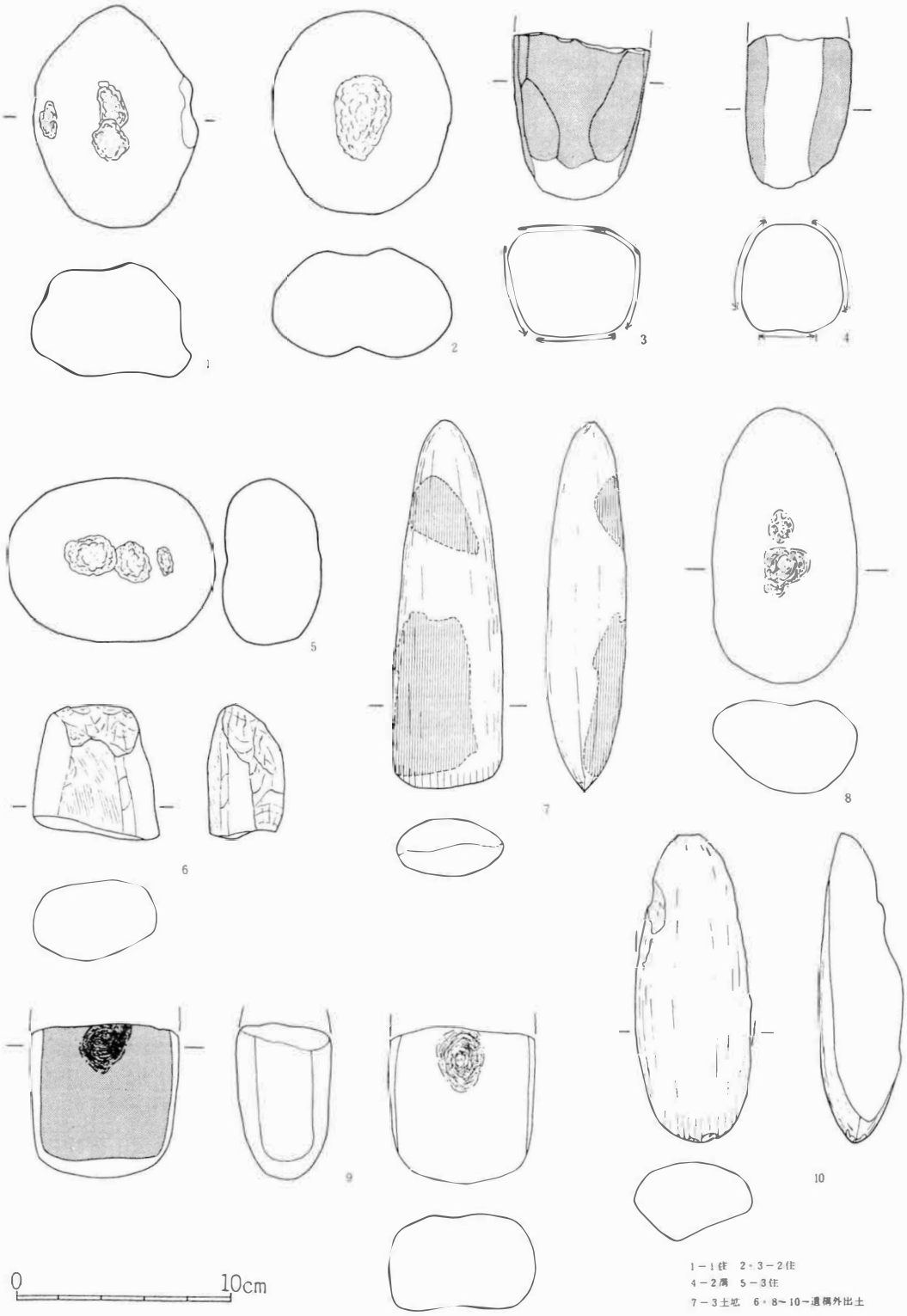
凹石、磨製石斧等が出土している。6は、凝灰岩製の磨製石斧の基部破片で、片面に擦痕が認められる。8は片面にのみ凹部をもつ安山岩製の凹石で、長さ12.5㎝、幅6.5㎝、厚さ4㎝を測る。9は両面に凹部をもつ安山岩製凹石であるが、半壊している。幅7㎝、厚さ4.5㎝を測り、片面は磨石として使用されている。10は泥岩製の磨製石斧の刃部で、基部から片面が斜めに損壊する。現存長14㎝、幅5㎝、厚さ3.5㎝を測る。

土製品（第49図）

小型の円板状土製品3点と土偶2点が出土している。円板状土製品の内、1・3は無文、2は条線文が施される。4は土偶胴下部の一部と考えられ、ヘラにより鋭く刻まれた文様が認められる。色調は



第49図　後呂遺跡遺構外出土土製品

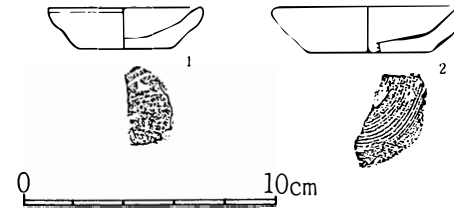


第50図　後呂遺跡出土石器

茶褐色。5は土偶右足破片で、脚下部にヘラによる文様が描かれる。色調は暗褐色を呈する。

③中世

C地区より土師質土器2点が出土している（第51図）。1は口径6.2㎝、高さ1.6㎝を測り、底部に糸切り痕を残す。色調は淡褐色。2は口径7.6㎝、器高1.7㎝を測り、1と同様に底部に糸切り痕を残す。



第51図　後呂遺跡遺構外出土土師質土器

第3節　まとめ

今回本遺跡の調査で発見された遺構は、縄文時代の住居址3軒、土坑10基、埋甕3基、古墳時代初頭の住居址1軒、溝状遺構3本、時期不明の竪穴状遺構1基である。

縄文時代の住居址は、中期中葉から後葉にかけてのもので、同台地上に営まれた集落の一部と考えられる。集落の規模等については調査範囲が狭く明確にはできない。

3本の溝状遺構は、いずれも弧状に走るが、全体的なプランは調査区の関係で明らかではない。遺構の概要でふれたとおり、1・2号溝については古墳時代初頭の方形周溝墓等の一部分であったと推定されるが、ここでは可能性にとどめておく。

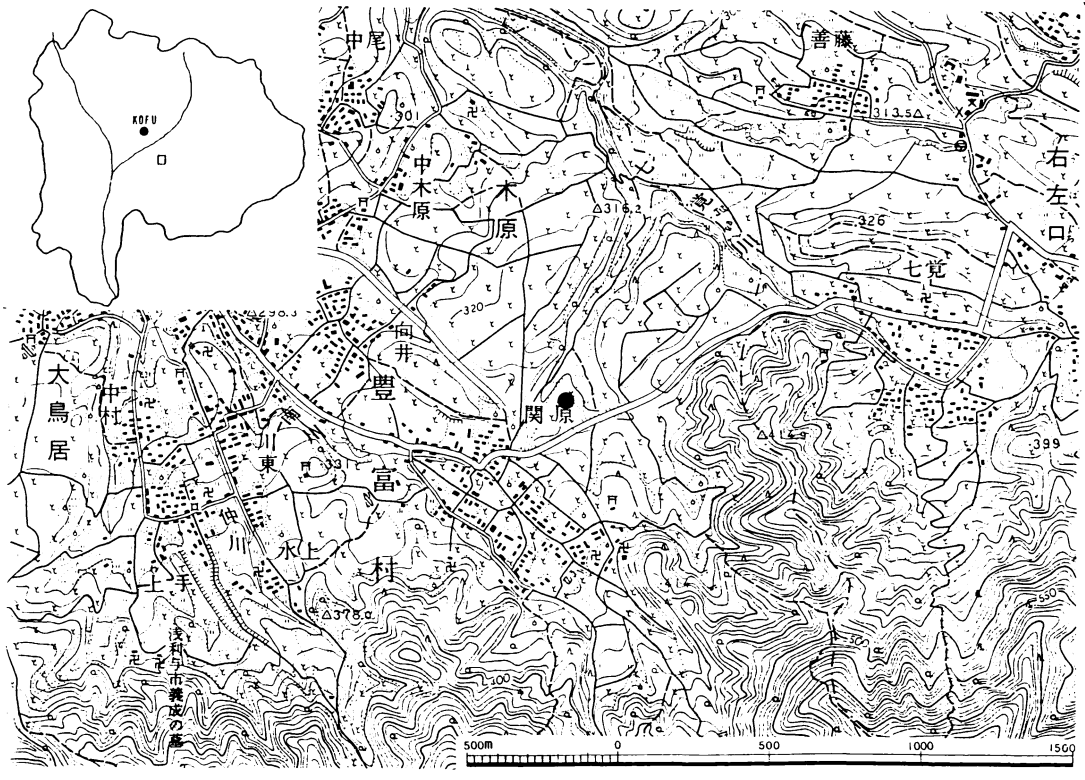
第Ⅳ章　浜井場遺跡

第１節　遺跡の位置と周辺の環境

浜井場遺跡は、東八代郡豊富村関原字浜井場に所在する。後呂遺跡の西方1.5ｍ程の曽根丘陵最上部に位置し、標高300ｍを測る。付近は御坂山塊と曽根丘陵の接点にあたり、東側を舟井川、西側を浅利川が流れる。

周辺の台地上には、縄文時代の付山南遺跡、付山北遺跡、原遺跡、東原遺跡、中原遺跡などが知られる一方、遺跡北部の丘陵先端部には王塚古墳、伊勢塚古墳をはじめ多くの古墳が散在する。

本遺跡は、埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、縄文時代中期の土器が東西250ｍ、南北90ｍほどの範囲で散布することが記されている。今回の調査区は、その北側に位置する。

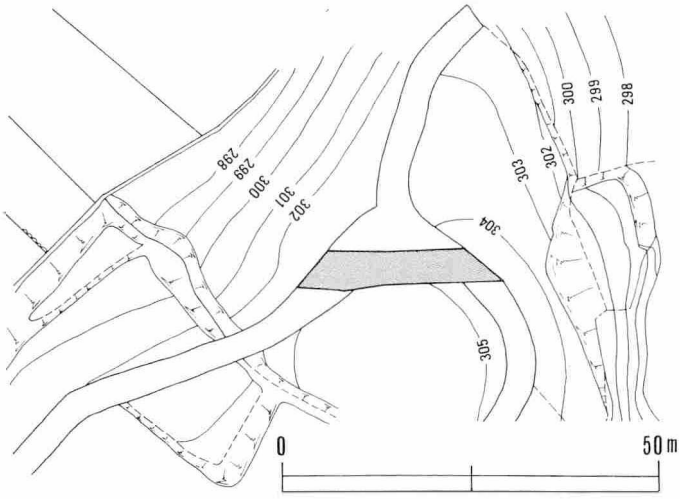


第52図　浜井場遺跡位置図

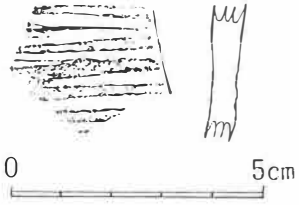
第２節　遺構と遺物

調査区は遺跡北端に位置し、台地上平坦部と谷部に向けて下る斜面との接点にあたる。

調査は、２ｍ×２ｍの試掘坑を２ヶ所設定し掘り下げを行ったが、遺構は発見されなかった。遺物は１点で、棒状工具乃至クシ状工具によって横位に条痕文を施す土器破片である。小破片ではあるが、その特徴から弥生時代中期初頭の壷の一部と推定される（第54図）。



第53図　浜井場遺跡調査区域図

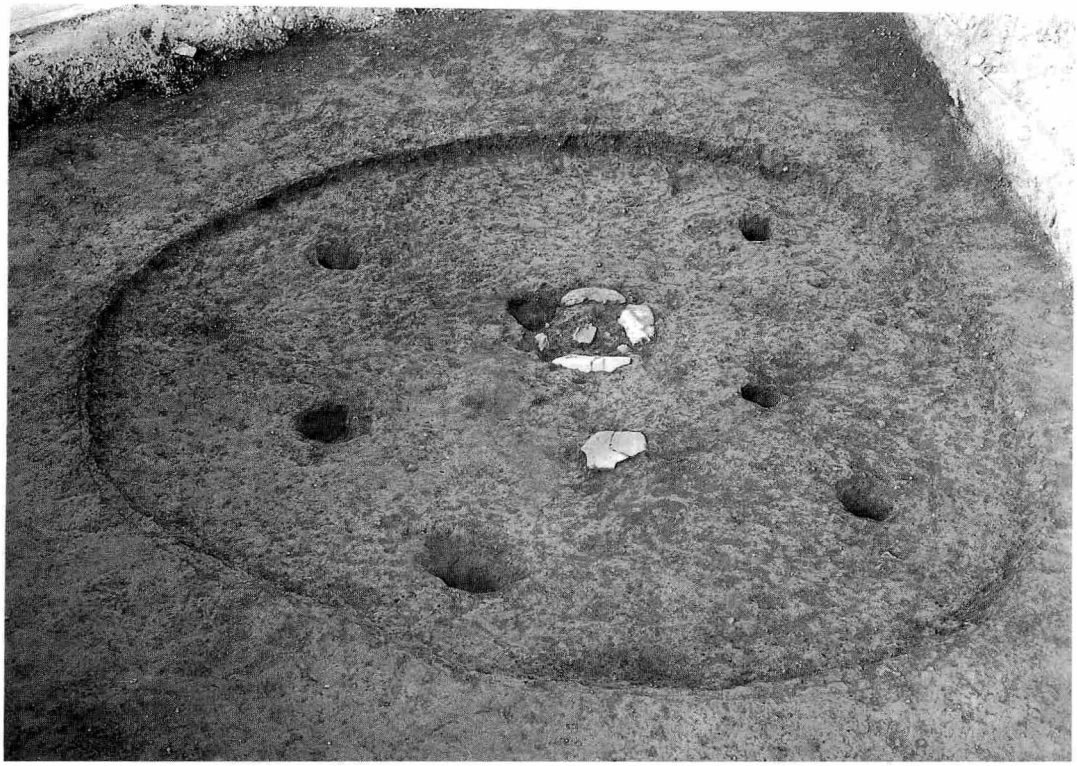


第54図　浜井場遺跡出土土器

第３節　まとめ

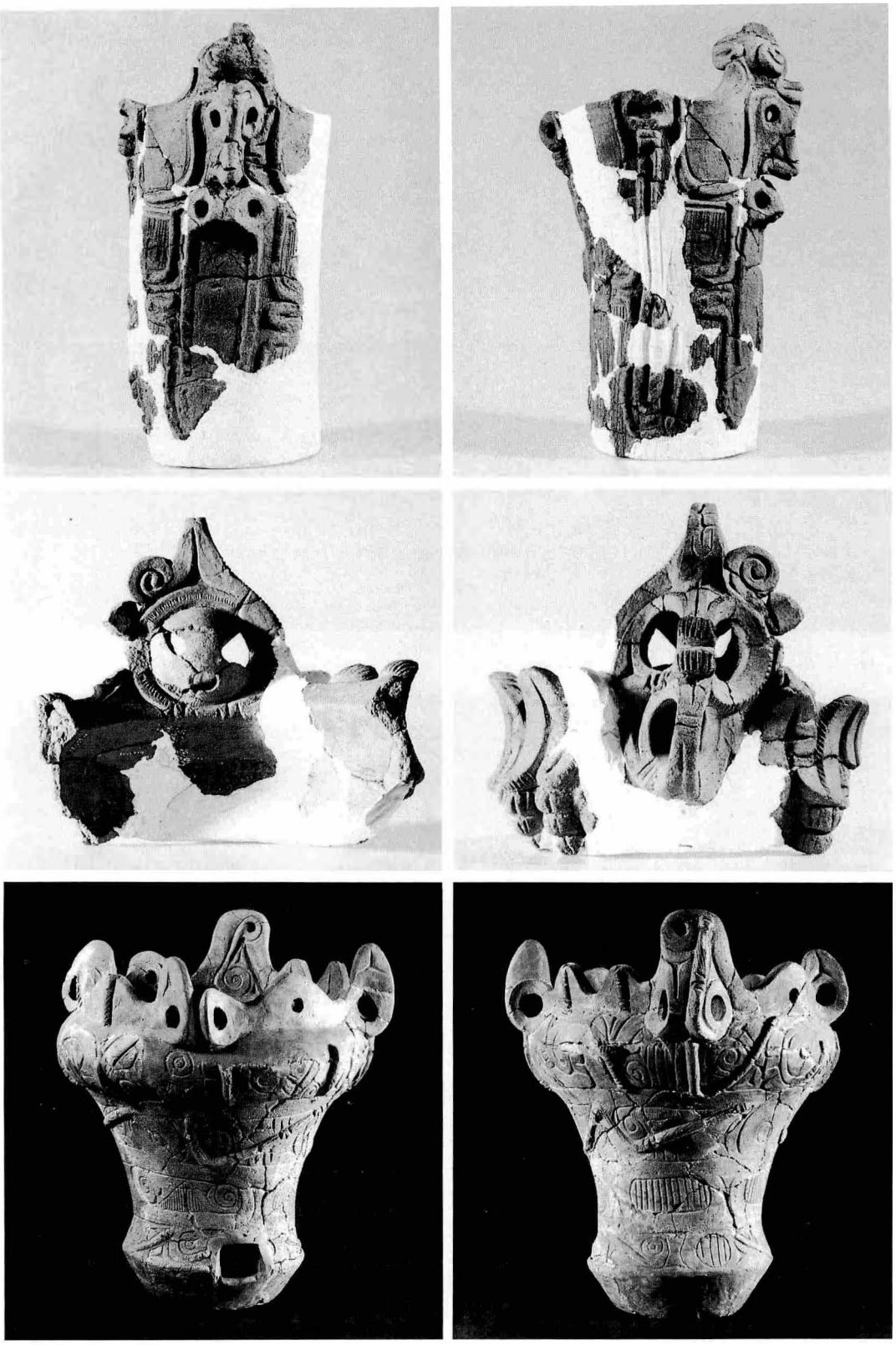
当初縄文時代の遺構が調査対象区域へ広がるものと考えたが、今回の調査では発見されなかった。付近の分布調査から遺跡は調査区より南側に展開するものと思われる。

図　　版

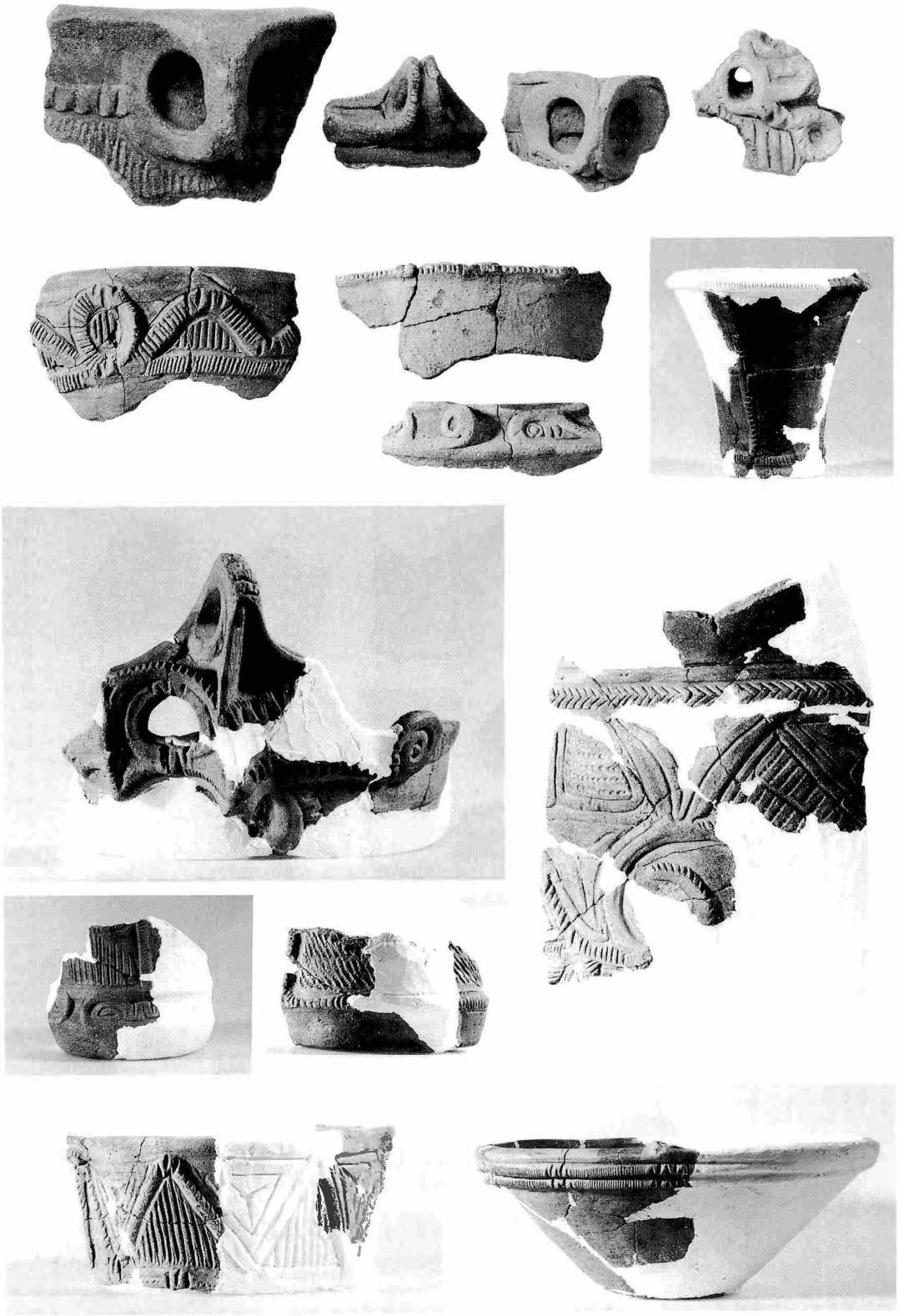


村上遺跡1号住居址

村上遺跡1号集石遺構

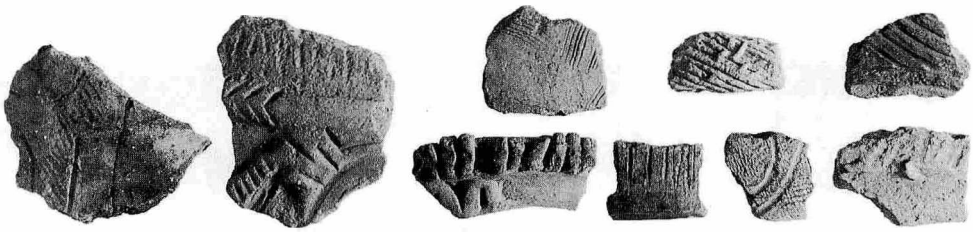


村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器

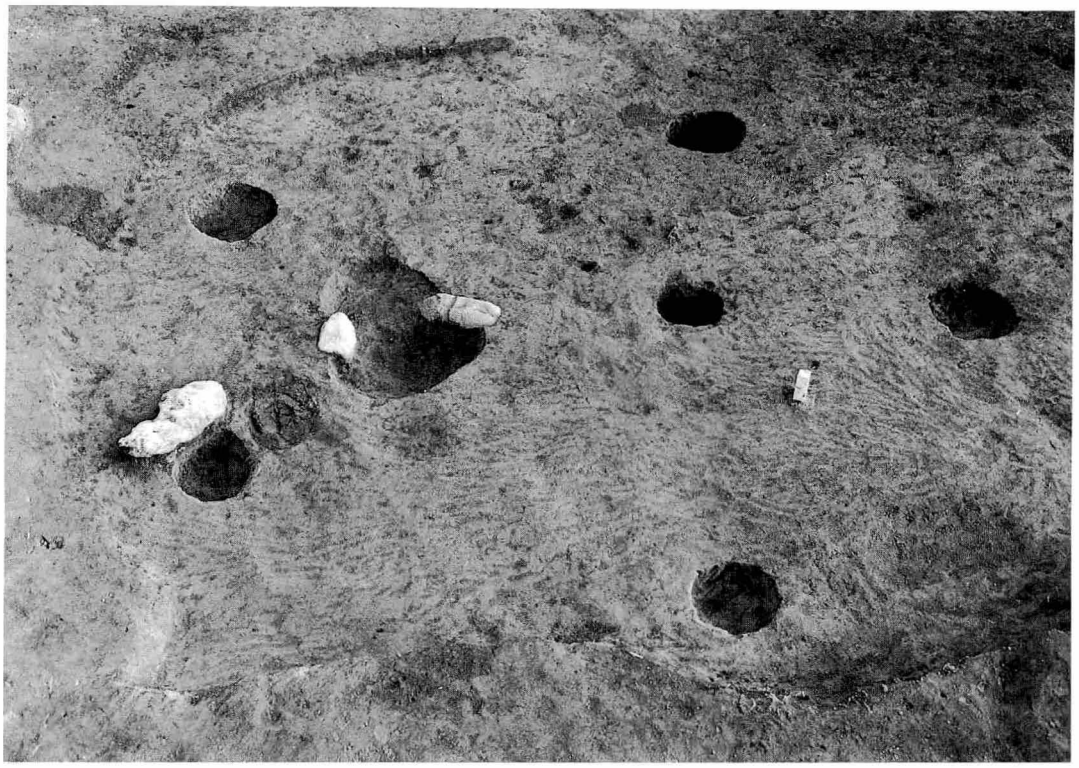


村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器

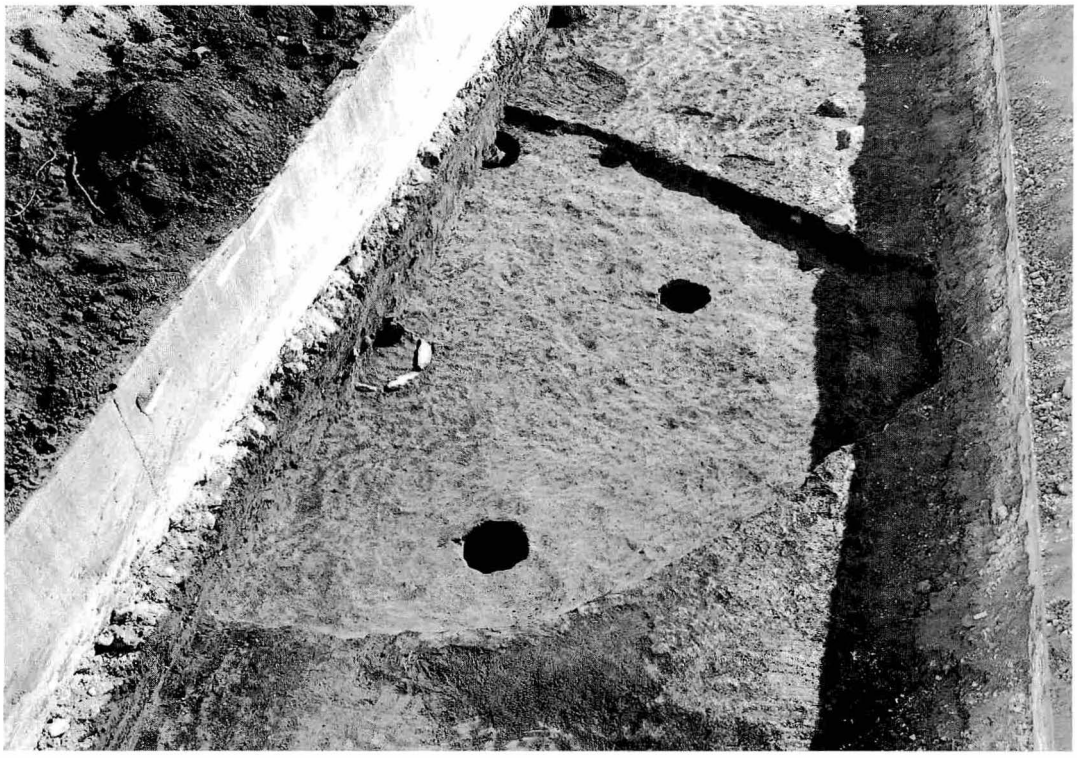
村上遺跡1号住居址及び1号集石内出土土器



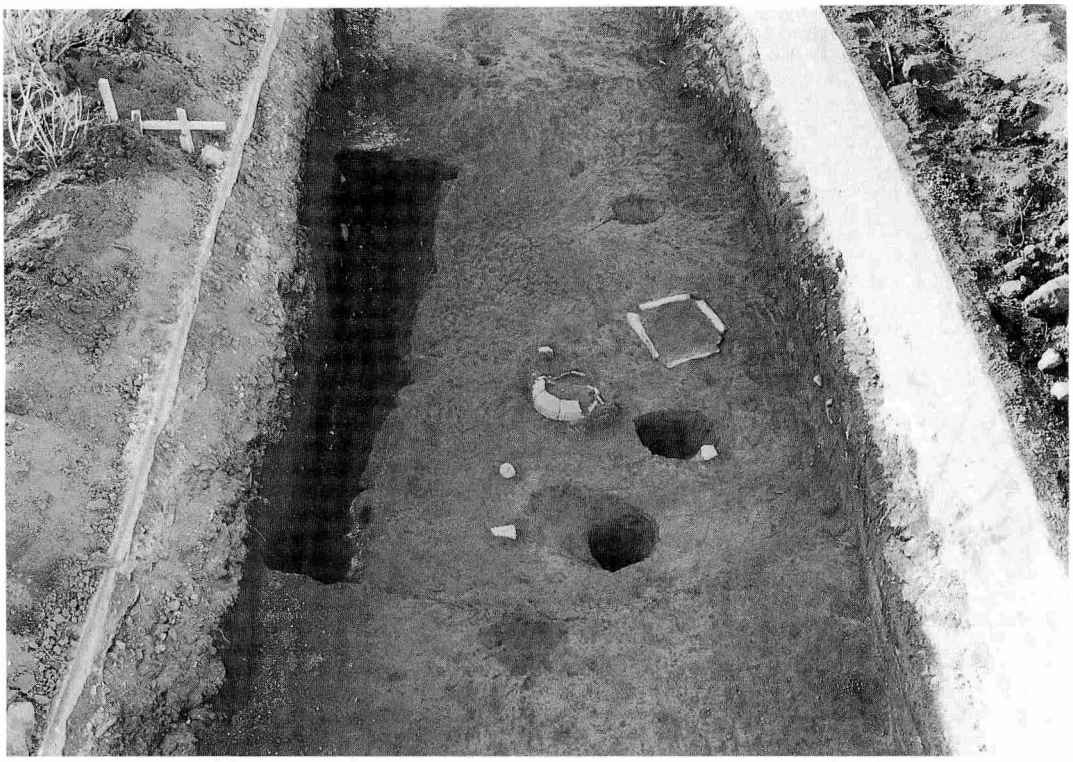
村上遺跡B地区出土土器



後呂遺跡1号住居址



後呂遺跡2号住居址

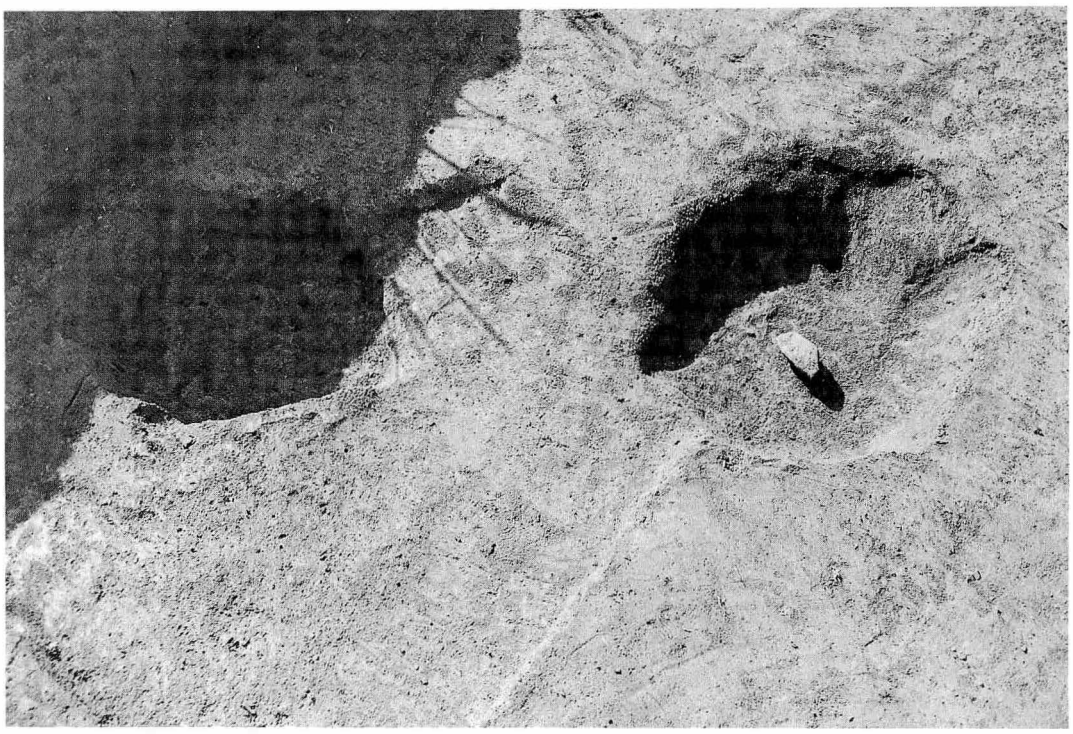


後呂遺跡3号住居址

後呂遺跡1号配石遺構

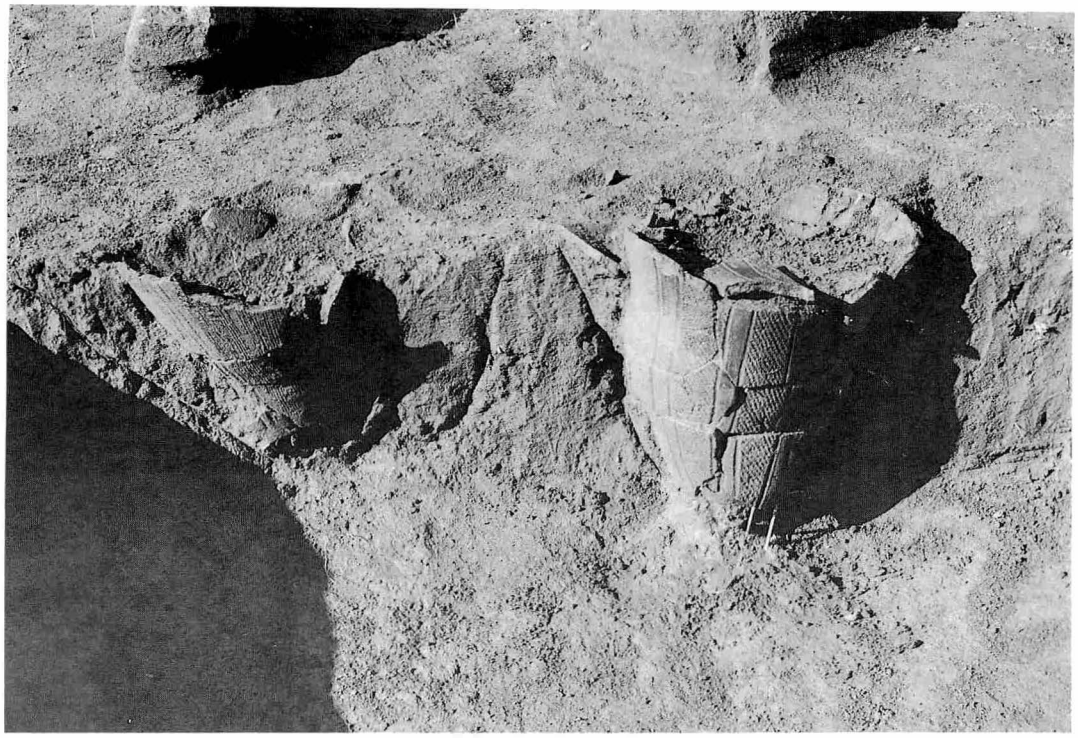
後呂遺跡1号土坑

後呂遺跡3号・4号土坑

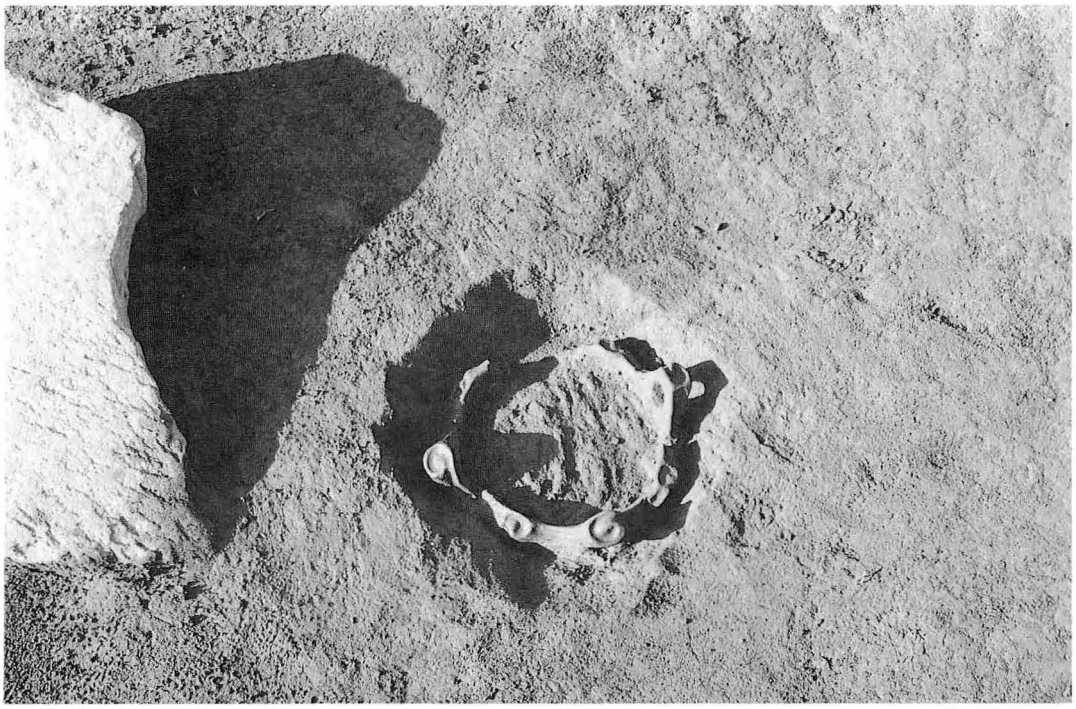


後呂遺跡5号・6号土坑

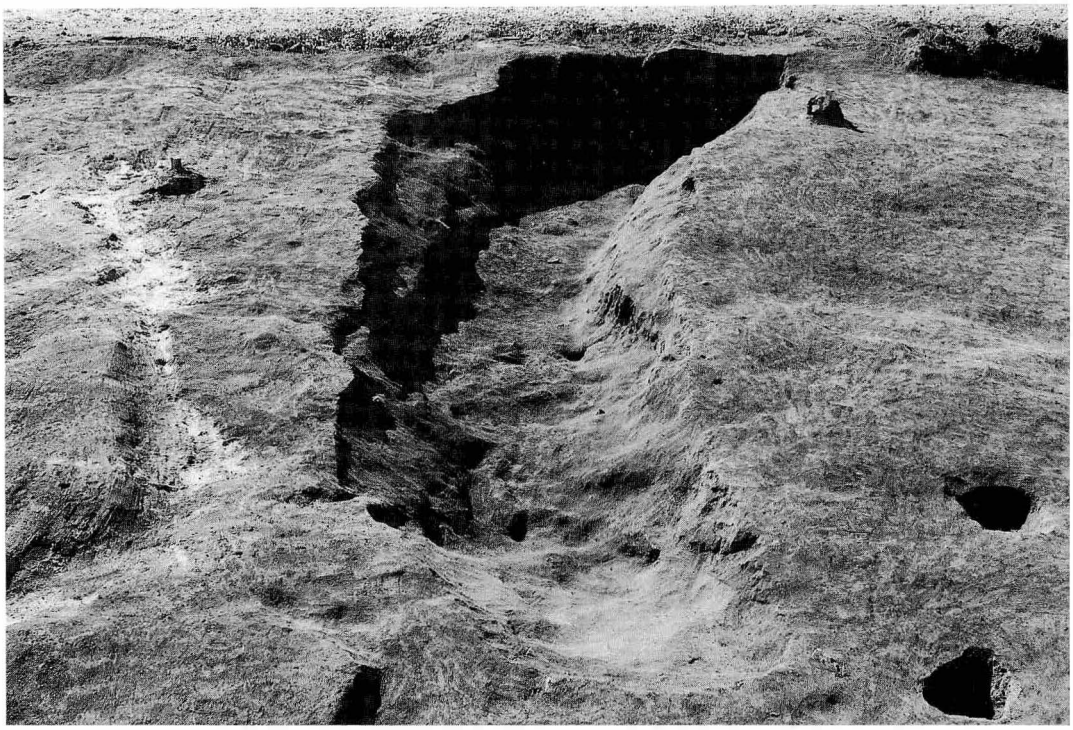
後呂遺跡7号土坑



後呂遺跡1号・2号埋甕

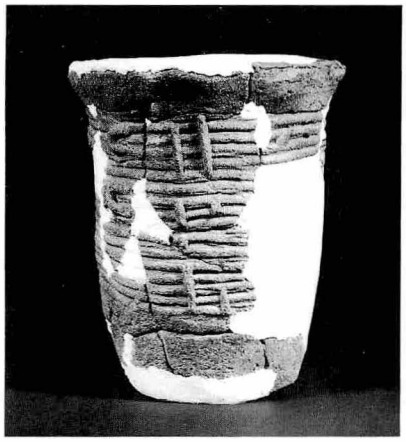


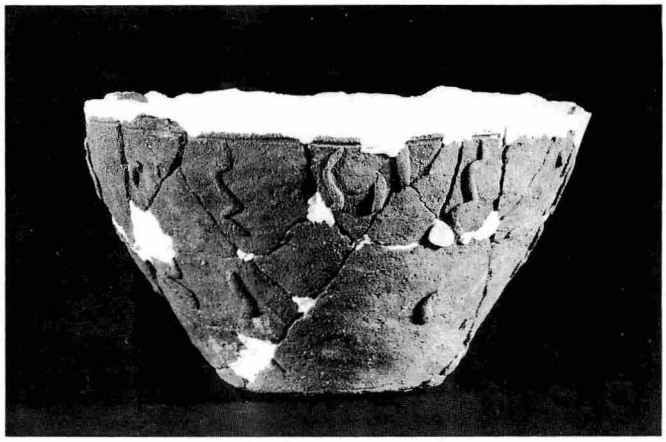
後呂遺跡3号埋甕

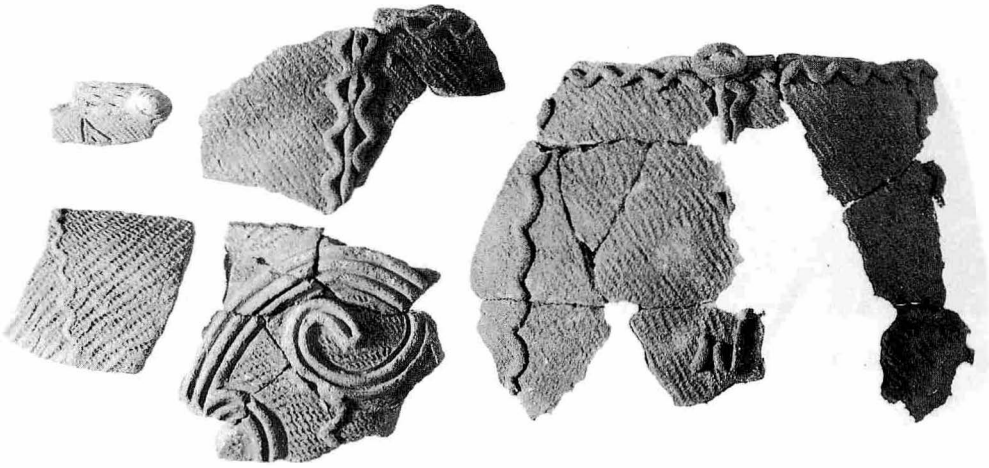


後呂遺跡1号溝状遺構

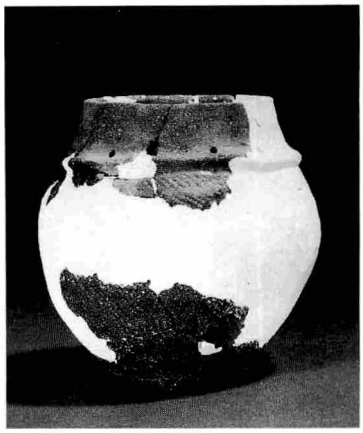
後呂遺跡2号・3号溝状遺構



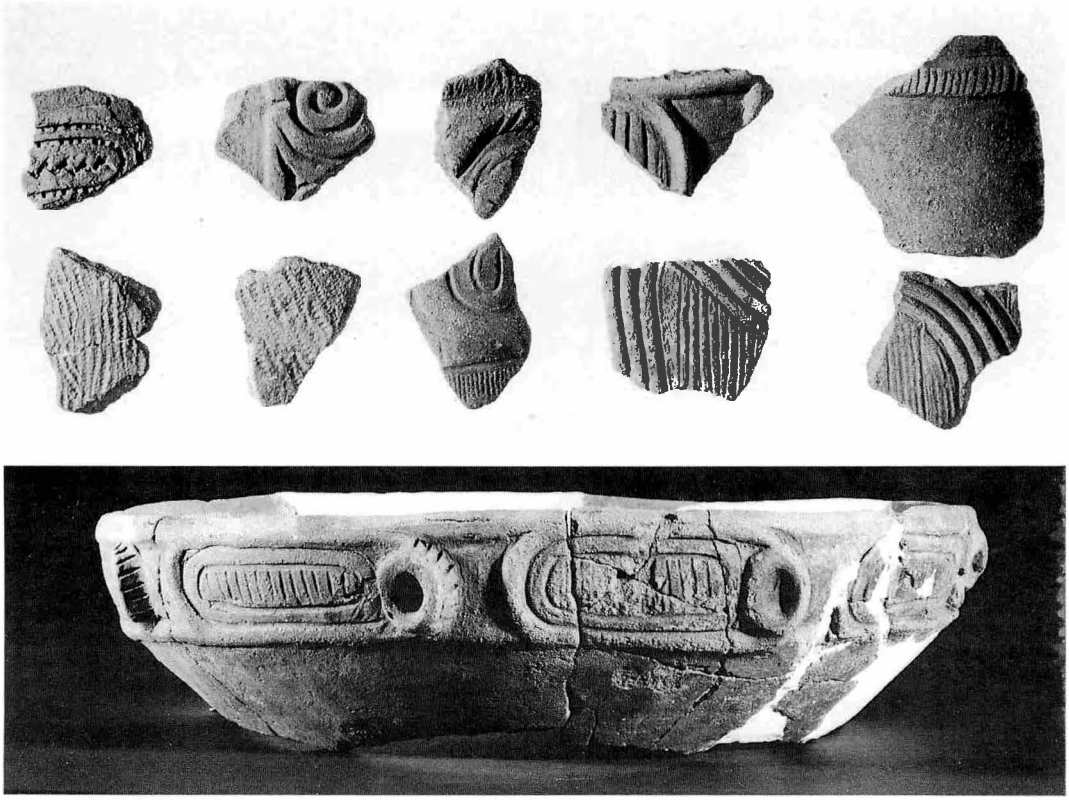




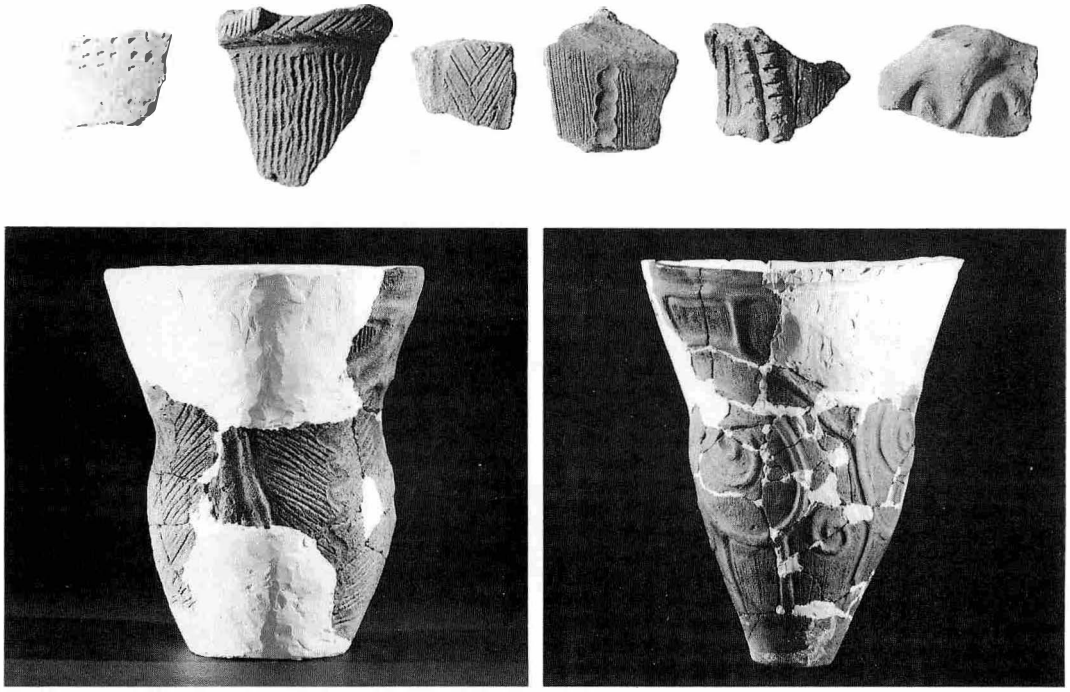
後呂遺跡1号住居址出土土器



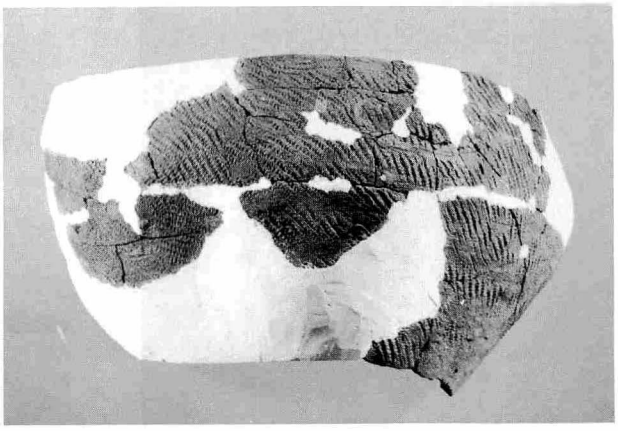
後呂遺跡2号住居址出土土器



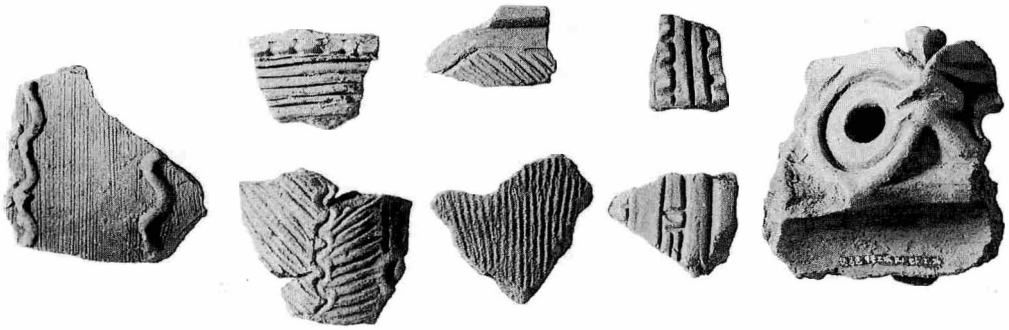
後呂遺跡3号住居址出土土器



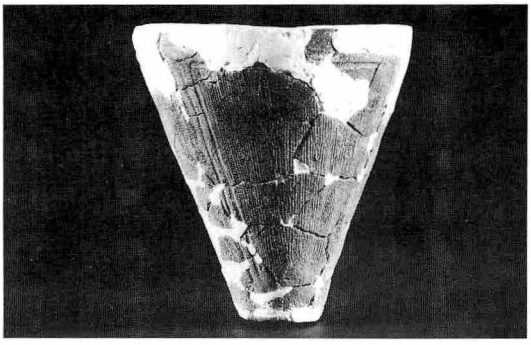
後呂遺跡1号配石出土土器

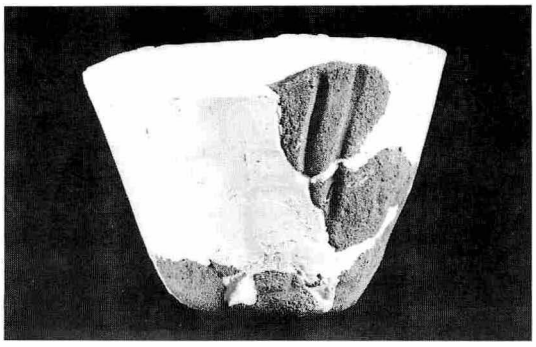


後呂遺跡
1号土坑出土土器

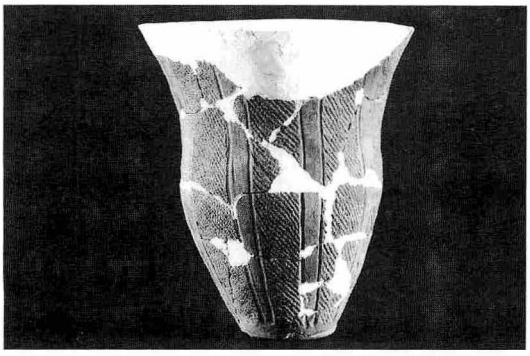


後呂遺跡9号・10号土坑出土土器

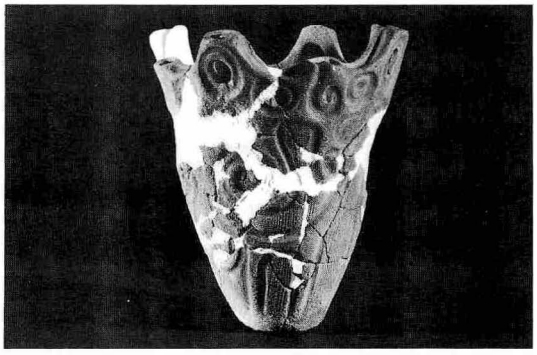




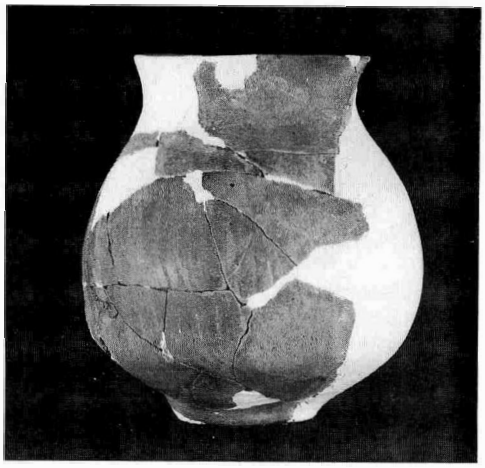
後呂遺跡1号埋甕

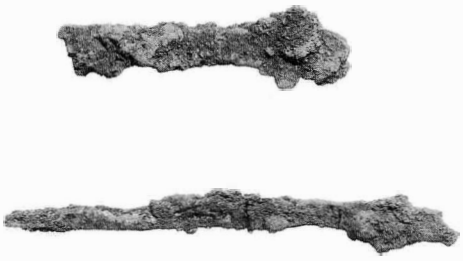


後呂遺跡2号埋甕

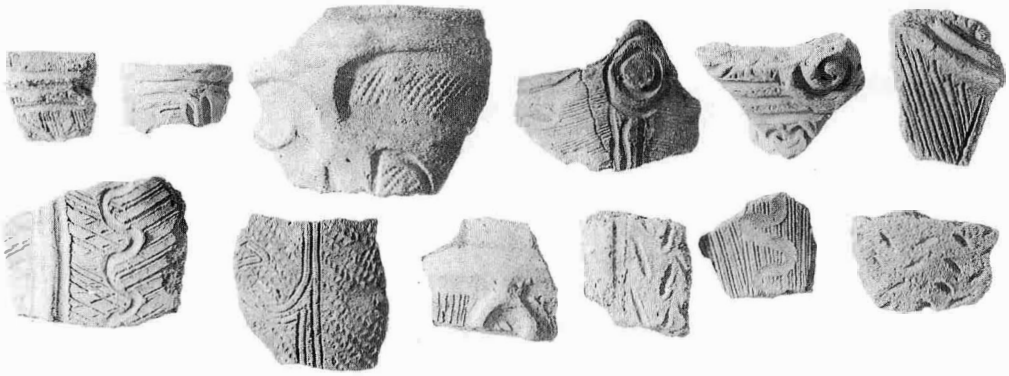


後呂遺跡3号埋甕





後呂遺跡3号溝出土遺物



後呂遺跡遺構外出土遺物

後呂遺跡出土石器

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第16集

一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

印刷日　昭和61年3月10日

発行日　昭和61年3月15日

発行所　山梨県教育委員会

印刷所　㈱ 峡南堂印刷所